

# 文学教材の解釈 2014



寺田守編著

京都教育大学 国語教育研究会

# 目次

はじめに

佐々木智美、寺田守

……

1

## 小学校編

一 かさこじぞう(岩崎京子)

寺田守

……

4

二 お手紙(アーノルド・ローベル)

吉田紘士、河南希、紺谷篤、

里見凌佑、高宮奈巳、波部真亜子

……

18

三 お手紙(アーノルド・ローベル)

大橋実華、鄧立新

……

25

四 モチモチの木(斉藤隆介)

井上智香、山本賢史、山根夕佳、吉川美那子

……

29

五 白いぼうし(あまんきみこ)

渡部彬、浅野真実、島本明日香、

池田由季乃、居林奈津実、今中祐希

……

38

六 白いぼうし(あまんきみこ)

大橋実華、宮川恵実子

……

45

七 大造じいさんとガン(椋鳩十)

濱地桃歌、森本美乃里、山里一成

……

52

八 海のいのち(立松和平)

宮坂綾乃、堂前汐里、中口喬碩、西岡笑美

……

61

中学校編

九 オツベルと象(宮沢賢治) 井上小夜、梅本航希、尾白いくみ …………… 6 8

一〇 空中ブランコ乗りのキキ(別役実) 伴太貴、白井沙也加、林禎之、吉田衣織 …………… 8 0

一一 夏を見上げて。(あさのあつこ) 伊藤直毅、小幡千尋、岡崎隆祥、表里美、梶隼一郎 …………… 9 0

一二 夏を見上げて。(あさのあつこ) 椎葉一勲、鄧立新 …………… 9 8

一三 形(菊池寛) 山内貴弘、若杉良、元川裳耶子、船越香織 …………… 1 0 2

一四 走れメロス(太宰治) 寺田守 …………… 1 0 9

一五 風の唄(あさのあつこ) 有川梨沙、石川奈緒美、亀井華、栗村隆太郎 …………… 1 3 2

一六 握手(井上ひさし) 椎葉一勲、宮川恵美子 …………… 1 4 2

高等学校編

一七 神様(川上弘美) 上田慎也、野田千鶴、初田美紀、細川智樹 …………… 1 4 9

一八 鏡(村上春樹) 田尻愛里紗、佐々木智美、村上公崇、河合遼太 …………… 1 5 7

一九 みどりのゆび(吉本ばなな) 金伽耶、松岡柊人、宮本あゆみ、吉田美優、和田睦美 …………… 1 7 2

おわりに

山里一成

.....

180



# はじめに

佐々木 智美、寺田 守

『文学教材の解釈 二〇一四』は、文学教材の研究資料集の第三集である。今回対象とするのは小学校二年から高等学校現代文Bまでの全十九編の教材である。教材の本文から、文の意味、言葉の意味をまとめ、授業作りの資料となることを目的とした。教材研究をするにあたり、次のような構成で作業を行った。

- ① 作者と作品について：作者の経歴、作品の背景について調べ、まとめた。
- ② 叙述：作品の叙述を、一文単位で引用し、読み取れる意味を記述した。
- ③ 考察：担当者が解釈する中で抱いた主題、疑問点、人物像などを考察した。

本書の作成に当たり、重点が置かれたのが、②叙述である。一文単位で本文を引用し、その一文から読み取れる意味を抽出した。叙述の意味は、担当グループの議論を経た解釈であるが、まだ議論の余地を残すものもある。

「鏡」（村上春樹）の中の一文を例にあげる。強調部分が本文の引用である。

**我々は同じようにお互いの姿を眺めていた。**

「我々」とは「僕」と「鏡の中の像」のことを指す。「同じように」とあることから、この時点では「鏡の中の像」は、身体の動きとしてはまだ何も動き出していない。

「憎しみ」を理解したということは「僕」と「鏡の中の像」に表情などの違いがあったのではないかという指摘があったが、「憎しみ」を「僕」がどのような手段で感知したのかということについての描写は何もないため、両者の間で明確に表情が違ったのかどうかはあざかり知ることが出来ないのではないかと考える。

この一文に対して、当初担当グループは「僕」と「鏡の中の像」との間に表情の違いがあるか否かを議論していなかった。しかし他のグループ

から出た意見をもとに、新たに両者の表情について着目し、再度議論を重ね、この結論に至った。

また、議論を重ねたにも関わらず、文末に「あずかり知ることが出来ない」とあるように、意見に対して明確な答えの出せないものもある。とはいえ、担当者が詳細に考察した各章は、授業を展開する上で読み落としてしまいかねない内容について熟考されている。冒頭にも述べたように、授業をつくるにあたり、本書を用いることにより、より多様な読解を児童・生徒と行っていくための足がかりとしていってほしい。言葉を指差し、そこから意味を紡ぎ出すことで解釈は豊かになっていく。そうした言葉の意味を紡ぎ出すために、四つの解釈のコツを本書では用いた。

**a. 言葉の削除による意味の変化（この言葉があるのとないのでは、意味がどのように変わりますか。）**

言葉を削除してみても、その言葉があるのとないのでは一文の意味がどのように変化するかを考える。また、その言葉を使った例文を考えてみて意味を考える。

**b. 類義語への置き換えによる意味の変化（AとBとでは意味がどのように変わりますか。）**

類義語を読者が持ち込み、言葉を置き換えて比較することで、二つの文の意味の違いを考える。文の意味が違うということは、置き換えた言葉の意味が違うということである。

**c. 動作化・映像化による意味理解（今ここでして見てもらん。どういう光景か思い浮かべてもらん。）**

登場人物の動作を想像したり、実際にやってみて分かることを考える。また、その場面の映像などを想像してみる。

**d. 自分の経験との関連づけによる意味づけ（これと似た経験はありますか。）**

描かれた状況と同じような体験をしたことがないか考えてみて、思い出したエピソードを共有する。思い出す経験は、直接体験だけでなく似たような物語を知っている、といった間接体験でもよい。

また、解釈するにあたって主に次のような言葉に注目した。

#### **A. 動作を表す言葉**

動詞やそれを修飾する言葉：「のび上がって見ました」「そっとほくそ笑んだ」など

#### **B. 話者の判断が表れた言葉**

助動詞、終助詞、副詞、副助詞：「ような」「ね」「やっと」「さえ」など

本書は、京都教育大学教育学部の平成二十五年度・二十六年度演習科目「国語科教育演習c」および滋賀大学教育学部の平成二十五年度科目「中等国語科教材内容論」、滋賀大学大学院教育学研究科の平成二十五年度科目「国語科教材開発」受講者の成果をまとめたものである。明らかな誤りは寺田が修正したが、校正上の不備や不確かな解釈も残されている。御批正を仰いで改善していきたい。本書が、国語科教育の糧となれば幸いである。

今回も執筆者にたくさんイラストを寄せてもらい、華やかな紙面となった。イラストは、井上智香さん、白井沙也加さん、濱地桃歌さんが描いた。また表紙のイラストは濱地桃歌さんが描いた。

第一集、第二集は左記のホームページでも公開している。今回もホームページで公開する予定であり、これらも参照して頂ければ幸いである。（京都教育大学のホームページから「教育支援ネットワーク（授業のたね）」アイコンをクリックすることでアクセスできる。）

#### 第一集

<http://kyoshien.kyokyo-u.ac.jp/public/terada/bungaku.pdf>

#### 第二集

<http://kyoushien.kyokyo-u.ac.jp/terada2/terada02.htm>

#### 第三集（予定）

<http://kyoushien.kyokyo-u.ac.jp/kokugo.htm>



## かさこじぞう (岩崎京子)

### 一 作者と作品について

作者の岩崎京子（一九二二〜）は、恵泉女子学園高等部を卒業後、一九四八年に「ローソク」を『少年少女』（中央公論社）に発表する。与田準一に師事し、一九五九年に「さぎ」で児童文学者協会新人賞を受賞した。その後、一九六三年に『シラサギ物語』（講談社児童文学新人賞）、一九七〇年に『鯉のいる村』（野間児童文芸賞、芸術選奨文部大臣賞）、一九七四年に『花咲か』（日本児童文学者協会賞）、二〇一〇年に『建具職人の千太郎』（赤い鳥文学賞）など多数の作品を発表し、賞を受けている。

「かさこじぞう」は民話を岩崎京子が再話して創作した作品である。大川悦生の依頼で一九六七年に絵本として刊行された。「笠地蔵」の民話は各地に見られるが、岩崎の「かさこじぞう」は、例えば「ふとかおを上げると、道ばたにじぞうさまが六人立っていました。」などの描写の表現が丁寧に描かれており、書き言葉の小説の特徴が見られる。教科書には昭和五二年度版小学校二年生用国語科教科書に初めて掲載された。現在の平成二三年度版教科書では四社（東京書籍、教育出版、三省堂、学校図書）に掲載されている。二年生の定番教材として広く扱われている。

### 寺田 守



### 二 叙述について

むかしむかし、あるところに、じいさまとばあさまがありましたと。

「むかしむかし」とあるので、はるか昔ということ。昔話の冒頭の決まった言い方なので、「かさこじぞう」は昔話として語られていることが分かる。「あるところに」とあるので、場所も特定していない。「ありました」とあり、格助詞の「と」があることで、引用や伝聞であることを表している。つまり話者の体験ではなくて、話者も伝え聞いた話をこれから語ろうとしていることが分かる。

たいそうびんぼうで、その日その日をやっとくらししておりました。

「たいそう」とあり、とてもや非常にという意味。財産や収入が乏しく、生活が苦しい状態が甚だしい。「やっと」とあるので、余裕がなくかろうじてくらししている。とくに毎日の食事は、その日の分をその日になんとか手に入れて過ごしていたのだろう。住む家はあるので、雨風はしのげていただろう。衣服はほとんどもっていなかっただろう。

ある年の大みそか、じいさまはためいきをいっていました。

「大みそか」は一年の最後の日。近世ではその年の借金を返す日でもあった。じいさまとばあさまはびんぼうではあるが、借金で苦しん

でいる様子はない。「ためいきをついて」とあり、失望して思わず大きな息をもらしたことが分かる。

「ああ、そのへんまでお正月さんがござらっしゃるといふに、もちこのようにもできんろう。」

「ああ」とあるが、強くがっかりした時にもらす言葉なので、ここのためいきをついた。「そのへんまで」とあるが、正月は暦なので近くの場合にすでに來ているわけではない。「お正月さん」とあり、正月を擬人化している。「ござらっしゃる」とあり、いるの尊敬表現でおいでになるという意味。じいさまは、翌日に正月となるということ、正月をまるで人間のように諭えており、こちらに向かつて近づいていて、すぐ近くまで來ていると言っている。「もちこ」とあるが、もちのこと。もちに親しみをこめた「こ」をつけている。「よいいも」とあるが、「も」は類似の事物が他に存在することを言外にほめかす意味があるので、かどまつやおそばやおせち料理などの様々な正月の準備はもちろん、もちこの用意でさえもできないと言っている。「のう」とあり、しみじみとばあさまに語りかけるように言っている。

「何ぞ、売るもんでもあればええがのう。」

「何ぞ」は、なにかという意味。「でも」とあるので、売るもんは軽い例示の意味となる。もちこをかうにはお金が必要で、お金があるのが一番望ましい。しかしお金がないことはじいさまも分かっているの、せめて何かを売ってお金を作ることができたら良いと考えた。

じいさまは、ざしきを見回したけど、何にもありません。

「ざしき」とあるが、畳を敷いているわけではなくて板間だろう。そこにわらやすげを渦巻状に円く平らに編んだ敷物を敷いて座った。「見回した」とあるので、一ヶ所を見たのでなくてざしき全体を見るために視線を動かした。じいさまたちはおそらくざしきにいるのだろう。ぐるっと自分の周囲を見た。「何にも」は何一つ、全くという意味。売るもんが何一つなかった。

ばあさまは土間の方を見ました。

「土間」は、床板を張らずに地面のままにしてあったり、三和土（たたき）にしてあるところ。「方」とあるので、ざしきから土間の方向を見た。じいさまが今いる場所を見回したのに対して、ばあさまはとる距離のある土間の全体を見ることができた。

すると、夏の間にかりとおいたすげがつんでありました。

「かりとおったすげ」とあり、「おいた」はあとのことを予想して前もってするという意味なので、何かに使うためにかりとったことが分かる。「すげ」はカヤツリグサ科の植物の総称。笠や蓑、縄を作る材料となる点ではわらと似ているが、わらが稲や麦の茎であり、食べるためのものの余った部分であるのに対して、すげは食べ物にはならない。

「じいさま、じいさま、かさこさえて、町さ売りに行ったら、もちこ買えんかのう。」

「じいさま、じいさま」とあり、じいさまに呼びかけている。すぐそばにいて、二人で会話をしている最中なのに、なぜばあさまは呼びかけたのだろうか。ばあさまはすげを見つけて、アイデアがひらめい

たので、発見を少し興奮してじいさまに伝えているのかもしれない。しかしたとえ興奮していたとしても会話中に目の前の人間を呼びかけるのは不自然である。ここでは呼びかけてじいさまの注意をひく必要があったのだろう。どのような必要だったのだろうか。じいさまはざしきを見直し続けていてばあさまから注意をそらしていたのかもしれない。また、ここまでの二人の会話は合わせても四回と短い、ゆっくりしゃべっていたり、発言と発言との間が長かったりして、時間が経過していたのかもしれない。いずれにせよじいさまの注意をひく必要がばあさまにはあったことがわかる。「町さ」とあるが、「さ」は格助詞「へ」と同じ意味で、町へということになる。「さ」は中世後期以降の東国の言葉で、現在でも関東以東の方言で使われる。じいさまとばあさまは関東より東に住んでおり、時代は中世後期よりも下ることが分かる。

おお おお、それがええ。

「おお おお」とあり、思わず漏れ出た言葉だと分かる。じいさまは、思ってもいなかったアイデアを聞いて、納得し、少し興奮している。「ええ」は良いということ。

そこで、じいさまとばあさまは土間に下り、ざんざらすげをそろえまして。

「じいさまとばあさまは」とあるので、二人で作業をしている。「ざんざら」は音を表すオノマトペだとすると、ざらざらとすげをかき集める音を表しているといえる。また、ざんざら笠という言葉があり、編みあげたすげの先を切りそろえないでそのまま出した笠のことであ

るので、副詞のざんざらという意味で、長さがばらばらのまま茎の部分だけをそろえたと読めなくもない。ここではオノマトペと考えて、すげをかき集める音だと考えたい。

そして、せつせとすげがさをあみました。

「せつせと」とあり、二人が休まずに一生懸命に編んだことが分かる。おしゃべりしながらのんびりかさを編むのではなく、集中して黙々と作ったのだろう。

かさが五つできると、じいさまはそれをしよって、「かえりには、もちこ買ってくるで。にんじん、ごんぼもしよってくるで。う。」と言うて、出かけました。

「五つ」とあるが、半日もかからずに笠を五つ作れたことから、二人がそれだけせつせとあんだということがわかる。また、普段から笠を編むことには慣れていて、手際よく編む技術を持っていたということが分かる。「わらぐつの中の神様」のおみつさんは一生懸命編んだが技術は心許ないもので、できあがったわらぐつも不格好だった。しかし、じいさまとばあさまの笠は、おそらく不格好なものではなく、きちんと作られていたのだろう。「しよって」とあるので、背中にのせた。「かえりには」とあり、「は」が対比の働きがあるので、いきにもちこを買うことはできないが、かえりには笠を売ってお金を作って買ってくると言っている。「くるで」の「で」は、接続助詞の「で」とすると「ので」という意味となる。そうすると、後に続く言葉を省略している言いさし表現ということになり、「ので、楽しみに待っていてくれ」というような言葉が続くことが分かる。あるいは、終助詞の方言「で」

だとすると、「ぜ」「ぞ」「よ」の意味となる。そうすると、じいさまは「買ってくるぜ」「買ってくるぞ」「買ってくるね」と言っていることになる。「ごんぼも」とあるので、もちこに加えてにんじんやごんぼを加えて買ってくると言っている。

町には大年の市が立っていて、正月買もんの人で大にぎわいでした。

「大年の市」は、大みそかに多くの人が集まって物を売買する場所のこと。京都の錦市場のようなイメージだと思われるが、現在の錦市場のような常設の店ではなく、定期的に店が並んだ。「大にぎわい」とあるので、人が大勢出てとても活気があるという意味になる。年末の錦市場のようなにぎわいだろうか。

うすやきねを売る店もあれば、山からまつを切ってきて、売っている人もいました。

「うすやきね」は、もちをつく道具なので、年が明けて正月に食べるもちこの準備のために大みそかに買う人がいるのだろう。「まつ」は、輪飾りや門松に使う材料なので、年が明けて正月に家に飾るために大みそかに買う人がいるのだろう。「店も」「人も」とあり、類似するものをいくつか並べているが、いずれも年が明けて正月の準備のためのものを売っている。

ええ、まつはいらんか。

「ええ」とあるが、いわゆる無意味語やファイラーと呼ばれる。無意識に使う口癖のような言葉だが、ことばの選択や話の組み立てを考える時間を作ったり、話の前触れとして使ったりする。また、話者から

すると、母音ではじまるファイラーは発声がしやすく、声を出す時に何を話すにせよ最初に言うことで流暢に話し始めることができるという働きもある。ここではまつを売る人が、大きな声でかけ声を出しやすくするために「ええ」という言葉をまず発したのでだろう。

じいさまも、声をはりました。

「じいさまも」とあるが、「も」が他にも似たものがあることをほめかす意味があるので、まつを売る人の声もはり上げていたことがわかる。「はり上げました」とあるので、声を強く大きく出した。大勢の人でにぎわっている市で、聞き取ってもらうために大きな強い声を出した。

ええ、かさやかさやあ。

「かさや」とあるが、「や」の意味がいくつか考えられて難しい。「かさ屋」と言っているのかもしれないが、じいさまはかさを売ることが生業にしているわけではないので、かさ屋と名乗るのは不自然であるように思われる。また、断定の「だ」「じゃ」の変化した「や」という意味で、「(これは)かさや」と言っているのかもしれないが、これは関西方言なので、じいさまが関西人でなければ考えにくい。ぶつきらぼうすぎて、じいさまの人物像とも合わない。さらに、疑問や反語の可能性もあるが、疑問や反語を言う状況でなく不自然なのでこれは考えにくい。そこで、ここでは歌謡に用いられる囃子詞のような「や」だと考えたい。意味はとくに無く、語調を整えるために「や」を間に用いているのだろう。

けれども、だれもふりむいてくれません。

「だれも」とあり、「もくません」で全面的な否定となるので、だれ一人としてふりむかなかった。あまり注目を集めなかったのではなく、一人としてふりむかず、相手にされなかった。声をはり上げたが、買物客に届かなかったのか、それとも声は届いていたがかさを買おうとする人が一人もいなかったのか、どちらともとれる。前者だとすると、じいさまは年寄りなので、声をはり上げたが、自分で思ってるほど強く大きな声が出ておらず、雑踏の騒音にかき消されたのだと考えられる。後者だとすると、正月の買物物に來ている人たちの中で、じいさまが場違いな商売をしようとしているのだということになる。「くれません」とあるので、ふりむきません、との違いを考えると、「ふりむいてくれません」は、ふりむいて欲しいと思っているじいさまの気持ちに人々が答えることなくふりむかなかった、という意味が分かる。「世界一美しいぼくの村」のヤモもバグマンのさくらんぼを売ろうとして「でも、だれもふりむいてくれません」という状況に向き合った。ヤモもがっかりして道ばたにすわりこんだが、小さな女の子が買ってきてくれたのをきっかけに売れ始めた。「わらぐつの中の神様」のおみっさんも、わらぐつが売れずにがっかりしてあきらめそうになったが、大工さんが目にとめて買ってしてくれた。しかしじいさまのかさ売りでは、呼び水となるようなお客さんも、価値を認めてくれるようなお客さんも現れない。

しかたなく、じいさまはかえることにしました。

「しかたなく」とあるので、どうにもならないので、という意味となる。かさを売りにきたが、だれもふりむいてくれないので、売る方

法がなく、どうにもならなかった。じいさまはあきらめた。「かえることにしました」とあるので、かえりました、と異なり、まだ帰っていない。帰ろうと心で決めた。すぐ帰ったわけではないが、声をはり上げることは、もうしてないだろう。しばらくぼんやりして買ってくれる人が現れるのを待っていたが、まったく売れないので、帰ろうと心に決めて、片付けをはじめた。かさを重ねて、背負った。

年こしの日に、かさこなんか買うもんはおらんじゃろ。

「なんか」とあるので、かさこを例として取り上げて、軽んじて扱っている。じいさまも年こしの日にかさをかう人はいないと判断して考えている。きつとじいさまも年こしの日にかさをかうことなどこれまで的人生でなかったのだろう。「じゃろ」は、だろう、ということ、推測の意味になる。じいさまは、かさが売れない本当の理由は分からないが、きつと日にちが悪いのだろうと想像している。

ああ、もちこももたんでかえれば、ばあさまはがっかりするじゃろう。

「ああ」とあるが、強くがっかりした時にもらす言葉。もちこの用意もできないとためいきをついた時と同じ言葉なので、ここでもためいきをついたのだろう。「も」とあるので、もちこはもちろん、にんじん、ごんぼも買えないことをがっかりしている。「がっかり」は、思い通りにいかずに元気をなくす気持ちを表すので、かさが売れてもちこをじいさまが買ってくると期待しているばあさまが、期待がはずれて元気をなくすだろうと考えている。「ああ」とじいさまもがっかりして

いるが、かさが売れないことそのことよりも、ばあさまをすっかりさせる結果になったことに、がっかりしている。

いつのまにか、日もくれかけました。

「いつのまにか」とあり、いつか知らないうちに、ということなので、日がくれかけるのをじいさまは初めて気付いた。それほど必死になつていたことがわかる。では、何に夢中になつていたのであるか。声をはり上げてかさを売ろうと必死で気付かなかつたのだろうか、それとも、かえることにしてから、ばあさまはがっかりするじゃろうかと、片付けながら考え込んでいて気付かなかつたのだろうか。声をはり上げて必死で気付かなかつたのであれば、この一文の位置は声をはり上げるのをやめた直後になればおかしい。ここでは声をはり上げるのをやめた後でも、ばあさまのことを考えこんで日を見ることがせずに気付かなかつたと考えたい。「くれかけました」とあり、くれました、との違いを考えると、「くれかけました」ではまだ日が完全にはくれていないことがわかる。少しずつ日がくれそうになり、暗くなつてきたのだろう。室内にいと、くれかけるのに気付くことは難しいが、じいさまは外でかさを売っていたので、日がくれかけていることに気づいた。暗くなる前に家に帰らなければならぬのだから。「日も」とあるが、「も」は「日は」や「日が」と異なり、他に似たものがあることを言外にほめかす意味があるので、日以外にもくれかけていることがわかる。だが、他に何と比べているのか、難しい。じいさまがかえることにしたことに合わせてちょうど日もくれかけたのか、長い時間かさを売っている間に日もくれかけたのか、それともじいさまががっかりして気持ちが暗く落ち込んだのと同じように日も

くれかけたのか。一見いずれでも良いように思われるが、最後のじいさまの気持ちと連動していると読むのは、人間の気持ちにあわせて日はくれないので、じいさまの気持ちによりそいすぎているように思われる。「くれかけているようでした」といった「ように」という言葉が入れば最後の解釈も成り立つが、ここでは自分の気持ちと同じように日もくれかけているとじいさまが判断していると考え手がかりはない。

じいさまは、とんぼりとんぼり町を出て、村の外れの野っ原まで来ました。

「とんぼりとんぼり」とあり、元気なく寂しそうに歩く様子のとぼとぼと似ている。とぼとぼと「とんぼりとんぼり」を比べると、後者は動作がゆっくりしている様子が想像できる。落ち込んで歩く速度もゆっくりになつていようだろう。「村の外れ」とあるが、「外れ」は、村の中心から離れている所や、村のすぐ外側の所を示すので、村の中とも外ともいえない境界のあたりということになる。じいさまの生活範囲の境界だろう。

風が出てきて、ひどいふぶきになりました。

「風が」とあり、「風も」と比べると、すでに雪がふついている状態で、加えて新たに風が出てきたことがわかる。おそらく大年の市でかさを売っている時から雪はふついていたのだろう。「ひどい」とあるので、強い風という意味で、横なぐりの強い雪がふきはじめた。「ふぶき」は、強い風と一緒に激しく降る雪のことなので、雪の量もふえたのだろう。

ふとかおを上げると、道はたにじぞうさまが六人立っていました。

「ふと」とあり、特に理由もなく、意識してやったわけでもないという意味なので、じいさまは偶然かおを上げた。「かおを上げると」とあるので、じいさまは下を向いていた。ふぶきは、ただ雪が横なぐりにふつて顔にあたるだけでなく、すでに積もった雪を風で舞上げて視界を悪くするので、じいさまは下を向きながら歩いていた。「道はた」は道のはしの方のこと。六体でなく、「六人」とあることから、じぞうさまを人間のように見ている。この文は地の文だが、じいさまの目を通して描かれているので、じいさまがじぞうさまを人間のように見ていると分かる。

おどろはなし、木のかげもなし、ふきつさらしの野っ原なもんで、じぞうさまはかたがわだけ雪にうもれているのでした。

「おどろ」は神仏を祭る建物のこと。「木のかげも」とあり、「も」が似たものを並べる意味があるので、おどろがないだけでなく、おどろと同じように雨風や雪をしのげる木のかげさえないとじいさまが考えていることが分かる。「ふきつさらし」は、さえぎるものがなくて、風が直接あたる場所のことなので、おどろや木がないと他に風をさえぎるものが何もない場所だと分かる。「かたがわだけ」とあるが、「だけ」とあるので、反対側はうもれておらず、ふぶきになってからかたがわがうもれたことが分かる。風がでる前から雪はふつていたが、うもれるほどの量はふつていなかった。「うもれて」とあり、雪がおおいかぶさって見えなくなることなので、じぞうさまのかたがわは雪で見えない状態となっている。「いるのです」とあり、いましたと比べてみると、「いるのです」は「のだ」文なので発見的な断定をしている。

つまり、じぞうさまの状態をじいさまが気づいて注目した。じぞうさまのいる場所は村の外れであり、じいさまはじぞうさまを初めて見たわけではないだろう。それにも関わらず、おどろがないことをまるで初めて知ったかのようにじいさまが注目している。おそらく、じいさまはこのじぞうさまがここにいることを知ってはいたが、ふぶきの中の状態を見たことがなかったたので、これまでふきつさらしの状態にあることに気をとめてこなかったのではないだろうか。

おお、お気のどくな。

「おお」とあるので、思わず漏れ出た言葉だと分かる。じいさまは、ふきつさらしのじぞうさまを見て、思わず心が動いている。「お気のどく」とあり、相手の困難な様子に同情して心を痛めることなので、じいさまはじぞうさまに同情している。「な」は、感動や詠嘆の意味の終助詞なので、気のどくだとしみじみと感じている。

さぞつめたかろうのう。

「さぞ」とあり、他人の感情を想像して、きつとこうだと思いやる意味なので、じいさまがじぞうさまがつめたいと思っていると同情していることが分かる。ここではじぞうさまに触るとじいさまがつめたく感じるだろうという意味ではない。

じいさまは、じぞうさまのおつむの雪をかきおとしました。

「おつむ」は頭の幼児語なので、じぞうさまを子どものように見ている。「かきおとし」とあり、とがったもので表面についているものをこすって落とすことなので、じいさまは指を立てて、雪をかくように

落とした。払い落とすが手の平でさっさとする動作なのと異なると、厚みのある雪に指をさして、ひっぱるように落とす動作となる。

それから、このじぞうさまはどうじゃ。

「それから」とあるので、ほおべたにしみをかきたじぞうさまを見た後で、次のじぞうさまに目を向けた。「どうじゃ」は「どうだ」といった意味だが、通常「どうだ」は、「どうだ、参ったか」のように、相手に呼びかけて、考えや様子を尋ねる時に使う。しかしここではじいさまは一人であり、独り言となっている。じぞうさまの様子は見たら分かり、原因もふぶきだと分かるのだが、まるでじぞうさまに「どうした？」と話しかけるように声をかけている。

じいさまは、ぬれてつめたいじぞうさまのかたやらせなやらをなでました。

「つめたい」とあるが、ここでつめたく感じたのはなでるじいさまとなる。「かたやらせなやら」とあり、あれこれと並べて挙げている。「やら」は本来不確実であることを意味する言葉なので、ここでもかたと背中だけでなく色々なところをなでたのだろう。「なでました」とあり、手の平を軽くすべらせる動作となるが、かきおとす動作が雪を落とす目的だったのに対して、「なでました」が何のためにじいさまが行ったのか謎めいている。雪を落とすためではないだろう。ぬれてつめたいじぞうさまを、じいさまがわざわざなでるのは、咳込んでいる人の背中をなでるように、あるいは寒くて震えている人のつめたくなつた手をなでるように、相手を思いやってやさしく接する動作なのだろう。

このかさこをかぶってください。

「このかさこ」とは、売ってもちこを買おうとばあさまと二人で編んだかさのこと。「ください」はください、という意味になる。じいさまはじぞうさまに話しかけている。じぞうさまを思いやり、なでている間にこのアイデアをひらめいたのだろう。

どうしても足りません。

「どうしても」とあり、どんな方法を使ってもという意味なので、じいさまはあれこれ考えてみた。かさを二つに分けることはできないし、石でできて重いじぞうさまを動かすわけにもいかないの、一つのかさを二人のじぞうさまで使うこともできない。じいさまがそばにずっといることもできないので、時間をおいて交互に使ってもらうわけにもいかない。

じいさまは、じぶんのつぎはぎの手ぬぐいをとると、いちばんしまいのじぞうさまにかぶせました。

「つぎはぎ」は、衣服のほころびに布をあてて繕ったものなので、じいさまの手ぬぐいは新品でなく、色々なところにほころびができるほど使い込んでいることが分かる。じいさまはびんぼうなので、手ぬぐいも新しいものを簡単に手に入れることも難しいだろう。かさとちがつて、自分たちで作ることもできないので、かさよりも大切な生活に必要なものだといえる。

「これでええ、これでええ。」



「ええ」は良いという意味なので、じいさまは6人のじぞうさま全員にかさや手ぬぐいをかぶせることができ、良いと満足している。

そこで、やつとあんしんして、うちにかえりました。

「やつと」とあり、時間が長くかかったり、いろいろな障害を乗り越えたりして苦労した後に安心したということが分かる。雪をかきおとしたり、なでたり、かさをかぶせたり、てぬぐいをかぶせるのに時間を大分費やしたのだろう。また、雪をかきおとしたり、かさの数が足りなかったり、困難を解決するのにも苦労したのだろう。「あんしん」とあるので、じいさまは心配がなくなり心が落ち着いた。

さぞつめたかったらうの。

「さぞ」とあり、他人の感情を想像して、きっとこうだと思いやる意味なので、ここもばあさまがじいさまがつめたいと思っていたと同情していることが分かる。じいさまがじぞうさまにかけた同じ言葉を、ばあさまもじいさまに対してかけていることから、じいさまのじぞうさまに対する思いやりと同じような思いを、ばあさまがじいさまに抱いていることがわかる。まずかさが売れたかどうか聞くのではなく、「つめたかったらうの」と思いやっている。

かさこは売れたのかね。

「ね」とあり、尋ねる気持ちを表す終助詞なので、やはりばあさまもかさが売れたかどうかは気になっている。「売れたのか」でなく「売れたのかね」とあるので、売れたかどうかの事実だけをぶつきらぼうに聞いたですような聞き方でなく、私も気になっているという気持ち

を出してやさしく尋ねている。

「それがさっぱり売れんどのう。」

「それが」とあるが、「それ」は直接にはかさを指すが、単にかさがさっぱり売れなかった、という意味だけでなく、ここでは、ところが、というような意味になる。「さっぱり」とあり、全くとかちつともという意味で、全否定の意味となる。あまり売れなかったのではなく、一つも売れなかったと言っている。

じいさまは、とちゅうまで来ると、じぞうさまが雪にうもれていた話をして、「それでおら、かさこかぶせてきた。」と言いました。

「とちゅうまで来ると」とあるが、とちゅうまで来るとうもれていたのか、とちゅうまで来ると話をしたのか、どちらの意味ともとれる。前者だと、じいさまは「途中まで来るとじぞうさまが雪にうもれていた」という話をしたということになり、じいさまの体験を説明していることになる。後者だと、じいさまは蓑を脱いだり、雪を払い落としたり、片付けをしたりしながら座敷のほうに歩いているとちゅうで、(じぞうさまが雪にうもれていた)という話をしたことになる。「おら」は、もともとは男性が自分のことを指すぞんざいな言い方だが、女性も使うようになる。

すると、ばあさまはいやなかおひとつしないで、「おお、それはええ」とをしなすった。じぞうさまも、この雪じゃさぞつめたかろうもん。さあさあじいさま、いろいろに来て当たってください。」

「いやなかおひとつしなない」は慣用句として、いやがらない、面倒

臭がらないという意味になる。ばあさまはかさを売ってもちを買って  
くると思っていたのだから、かさを手放したことに嫌な思いをするだ  
ろうという話者の予想がわかる。「じぞうさまも」とあり、「も」とあ  
ることで、じいさまがつめたかっただろうし、加えてじぞうさまだっ  
てつめたかっただろうと言っている。やはりじいさまのことを心配し  
ている。「いろいろに来て」とあるが、「来て」であり「行って」ではな  
いので、ばあさまはいろいろのそばに座っていることが分かる。ばあさ  
まはじいさまがじぞうさまにしたのと同じように心をくばっているが、  
じいさまのそばによってなでたりはしていない。

じいさまは、いろいろの上にかぶさるようにして、ひえたからだをあたた  
めました。

「かぶさるように」とあるので、上に覆い重なるような姿勢をとっ  
た。「ように」とあるが、ここでは喩えの「ように」の意味だろう。実  
際にいろいろの上にかぶさるとやけどをしてしまうので、まるでかぶさ  
るかのような姿勢でいろいろにあたった。つまり、いろいろのそばで背中  
を曲げて丸まったような姿勢で火にあたった。

やれ やれ、とうとうもちこなしの年こしだ。

「やれやれ」は疲れた時やがっかりした時に発する言葉なので、じ  
いさまはもちこを手に入れる目的が果たせずに疲れ、がっかりしてい  
る。「とうとう」は最終的な結果が実現したという意味だが、予想して  
いたとおり実現してしまったという話者の思いも感じられる。じいさ  
まは、年こしにせめてもちこを用意しておきたかったが、うまくいか  
ずやはりもちこのない年こしになってしまったと感じて、がっかりし

ている。

そんならひとつ、もちつきのまねごとでもしようかのう。

「ひとつ」は、副詞で思いあたって新しい試みをしようとする気持  
ちを表している。ちよつとといった意味。「まねごと」は形だけ似せて  
することなので、もちつきの動作だけをしようとしている。「でも」は、  
「お茶でもどう？」のように一例として挙げるという意味と、「彼でも  
間違える」のように極端な例を挙げて他の場合はもちろんだという意  
味がある。ここでは「ひとつ」という言葉からも前者だろう。じいさ  
まは、もちつきのまねごとでなくても年こしの雰囲気味わえるなら  
なんでもよかった。

すると、ばあさまもほほとわらって、あわの もちこ ひとうす ばっ  
たらと、あいどりのまねをしました。

「ほほと」は軽く笑う声であるが、「あはは」よりも上品な笑い方が  
連想される。唇をすぼめるような笑い方で、手を口にあてている様子  
が想像できる。「あわのもちこひとうすばったら」は先のじいさまの「米  
のもちこひとうすばったら」と呼応して、もちつきのかけ声を表して  
いるのだろう。「あいどり」は方言で餅つきの際の手を入れてこねる作  
業のこと。「あわの（あいどり）もちこ（あいどり）ひとうす（あいど  
り）ばったら（あいどり）」や「あわのもちこ（あいどり）ひとうすば  
ったら（あいどり）」といったタイミングで手を出すことも考えられる  
が、これはばあさまにしては非常に素早い動作になるので、「あわのも  
ちこひとうすばったら（あいどり）」とかけ声の後に一回手を出す動作  
になるのだろう。

それから、二人はつけなかみかみ、おゆをのんで休みました。

「つけな」は漬け物にした菜のことで、白菜、蕪などのこと。「かみかみ」とあるが、何度も噛むという動作や、噛みながらおゆをのむという動作が想像できる。いずれにしてもすぐに飲み込んでしまわずにしばらく噛みながら口の中に残していたのだろう。じいさまとばあさまにとってつけなはいくらでも食べられるものではないはずだ。だからつけなで空腹を満たすのではなくて、少量のつけなの塩味や食感とともに、おゆをたくさん飲んで、おゆで空腹をごまかしていたのではないだろうか。「休みました」は休憩したという意味ではなくて眠ったということ。おゆをのんだ後でじいさまとばあさまは寝ることにした。

すると、真夜中ごろ、雪の中を、じいやす、じいやすと、そりを引くかけ声がしてきました。

「真夜中」は夜が一番更けた深夜のこと。二人はすでに眠っていただろう。「じいやすじいやす」はかけ声であるので、うんとこしよどっこいしよのように複数人が引つ張るタイミングを合わせる声だろう。だから「じいやす（引つ張る）じいやす（引つ張る）」という動作になる。かけ声をかけなければ引けないくらいそりが荷物でいっぱい重いことが想像できる。「きました」とあるので、大きなかけ声が突然聞こえたわけではなく、だんだんと遠くからかけ声が聞こえはじめ、徐々に近づいて、大きな声になっていく様子。

耳をすまして聞いてみると、六人の じぞうさ かさこ とつて かぶ  
せた じいさまの うちば どこだ ばあさまの うちば どこだと歌っ

ているのです。

「すまして」は一つのことには気持ちを集中して注意を向けることなので、じいやすというかけ声に注意して聞いた。「みると」とあるので、意識してよく聞いた。「じぞうさ」の「さ」は格助詞「へ」と同じ意味で、じぞうへ、じぞうにといった意味になる。「いるのです」とあり「いました」との違いを考えると、「いるのです」は耳をすまして聞いたことで初めて聞き取れたということが分かる。

「じいやすじいやす」というかけ声と「六人のじぞうさどこだ」という歌は同時に聞こえたわけではないのだろう。かけ声のあと歌を歌い、またかけ声にもどるという一連の声だったのだろうと想像できる。「うちはどこだ」と言っているので歌っているじぞうはじいさまのうちの場所を知らないようだ。

そして、じいさまのうちの前で止まると、何やらおもいものを、ずっさん ずっさんと下ろしていききました。

「何やら」は実体はつきりせず断定はできないけれども判断したところという意味なので、じいさまは何が起こっているのかはつきり分かっていないけれども重いものを下ろしていることは分かった。「いきました」とあるが、下ろしてから去って行ったという複合動詞の意味と、どんどん下ろしはじめたという補助動詞の意味がある。どちらの意味でもとれるが、前者だとすぐに荷物を下ろし終えたことになる。ここではたくさんさんの荷物があるので、後者の意味だととらえたい。

じいさまとばあさまがおきていつて、雨戸をくると、かさこをかぶった  
じぞうさまと、手ぬぐいをかぶったじぞうさまが、じいやす じい

やさど、空ぞりを引いて、かえっていくところでした。

「くる」は繰ると書き、順に送り動かすこと。雨戸を横にスライドさせて開ける動作のこと。「手ぬぐいをかぶったじぞうさま」はじいさまの手ぬぐいをかぶったじぞうさまのことなので、ここでかさこをかぶせてあげたじぞうさまたちだとじいさまとばあさまは理解した。

「じいやさじいやさ」とかけ声をかけているが、荷物を下ろしているのもそれは軽はずである。歌の一部として、はやしのようにかけ声を出しているのかもしれない。

のき下には、米のもち、あわのもちのたわらがおいてありました。

「には」とあり、「に」と比べると、のき下以外のところにはないという対比の意味が読み取れる。つまりじいさまは、荷物のなくなった空ぞりとたわらのあるのき下を見比べて、何が起こったのかを理解した。「たわら」とあるのでわらなどで作った袋のこと。米のもち、あわのもちと中身が分かっているのに、密封されているのではなく、少し中も見えるのだろうか。

じいさまとばあさまは、よいお正月をむかえることができましたと。

「よいお正月」とあるが、冒頭でじいさまは「もちこのようにもできのう」とためいきをつけているので、もちやそのほかの食べ物の用意ができて正月を迎えることができたことを「よい」と判断していることがわかる。じいさまとばあさまがもらったものは、お金や財産ではなくて数週間から数ヶ月でなくなってしまうもちや食料、おかしりである。この正月はよいものとなったが、決して裕福になって生活が変わったわけではない。二人は大金持ちになりたいと望んでいたわ

けではなかった。正月の用意をしたいというつつましい願いが果たされたことで、生活が変わったわけではないが、二人は満足し幸せな時間を過ごすことができたのだろう。「と」とあるので、この話が伝え聞いたものであることを示している。

### 三 考察

以前、ある大学の先生が大学院の授業の中で「なぜじぞうさまはじいさまのうちが分かったのか？おかしいではないか」と、ひどく憤ったという話を聞いたことがある。「じぞうさまだから超能力があったのです」とある大学院生が発言し、「そんなことはどこにも書いていない」と先生が答えるやりとりがあったと聞いて、国語教育の議論は面白いものだと感じた。国語の授業でなければ、「かさこじぞう」の一部分について、鼻息を荒くしてまじめに議論することはないだろう。生活の中では起こらない類いの議論に夢中になることができることが文学教材の授業の魅力の一つなのかもしれないと考えたためである。ここではじぞうさまがなぜじいさまのうちを見つかることができたのか、改めて考えてみたい。

確かにじぞうさまは「じさまのうちはどこだ ばさまのうちはどこだ」と歌いながら来ているのに、じいさまが返事をしないにも関わらず迷うことなくじいさまのうちの前で荷物を下ろし始めている。最初からじいさまのうちの場所を知っているなら、歌とはいえ「じさまのうちはどこだ」と言う必要はなかっただろうし、表札でも出ていて見つけたのだとしても、そのような記述がなく、理由として弱い。実はかつてじいさまが返事をする本文があった。

「かさこじぞう」は一九六七年に絵本が刊行され、昭和五二年度版（一九七七年度）から教科書に掲載されたが、五五年度版、五八年度版と掲載が重ねられるにつれて、各社で作者の承諾の上書き換えが行われ、複雑な種類の本文が生まれた。東京書籍版の教科書編集に岩崎京子自身も関わっており、岩崎は会議の中で表現の矛盾が指摘され、それに応じて自らも書き換えていったと回想している。その後昭和六一年度版の掲載にあたって、作者から教科書会社各社に要請があり、統一した本文が使われることになった。現在掲載されているものや絵本として出版されているものは、すべて統一された本文が用いられている。本文変更の経緯については、廣添智子（一九八三、今林久（一九八八）、岩崎京子（一九九一）、鶴田清司（二〇〇一）、吉原英夫（二〇〇三）、武藤清吾（二〇一〇）に整理されている。

多くの変更箇所があるが、ここでの問題に関わる部分を挙げると、以前の本文にあったものの統一版の本文で削除されたのが次の一文である。

じいさまが、思わず、「ここだ。ここだ。」と大声出したら、うた声はぴったりとまりました。

鶴田（二〇〇一）は、この変更について「じいさまの無欲さをよりいっそう強めようとする」という評価を紹介した上で、「じいさまが『ここだ。ここだ』と大声を上げた部分も、『じいさまのうちはどこだ』ばさまのうちはどこだ』に自然な形で対応している」とし、「改稿前の本文の方が、庶民のたくましさ、生きる力のようなものが表れていて、話にリアリティが出てくるように思われる。」（三三三頁）と指摘してい

る。つまり、じぞうさまがどうしてじいさまのうちが分かったのかという謎は、じいさまの無欲さという人物像を強調するために、返事をする一文を削除したために生まれたものだった。現在は作者によって統一された本文が確定しているため、以前の本文に戻すことは難しいが、この一文がもともあつたと考えると、じぞうさまがどうしてじいさまのうちが分かったのかという謎は解決するように思われる。

しかしながら、たとえじいさまが「ここだ。ここだ」と返事をしていたとしても、じぞうさまの不可解な言動は残る。「ところが、そりを引くかけ声は、長じやどんのやしきの方には行かず、こつちに近づいてきました。」とあり、じいさまが返事をする前から、じぞうさまはじいさまのうちを目指して迷わず向かってきている。また「じいさまのうちはどこだ。ばさまのうちはどこだ」と、知るはずのないばさまの存在を歌っている。さらに、「米のもち、あわのもち」「みそだる、にんじん、ごんぼやだいこんのかます、おかざりのまつなど」とじいさまとばあさまが手に入れようとしたものを運んできている。これらはじいさまが返事をしたとしても説明しにくい。

このように考えると、じぞうさまはやはり「超能力」らしきものがあり、すべてを見通して知っていたと考えるしかない。じぞうさまは、じいさまが返事をするかどうかに関わらず、じいさまのうちの場所を知っていた。また「さぞ、つめたがるうのう。」とかさここと手ぬぐいをかぶせてくれたじいさまだけでなく、そんなじいさまに「さぞつめたかったろうの。」と接したやさしいばあさまにも受け取ってもらおうとたわらを運んできた。さらにじいさまとばあさまが、お金持ちになりたいというような願望ではなく、「よいお正月」を迎える準備をしたかったという願望も知っていた。

宅急便のコマーシャルに「場所に届けるんじゃない。人に届けるんだ。」というコピーがあるが、じぞうさまもじいさまとばあさまの二人の気持ちに伝えて、二人に届けるためにたわらを運んできたのだろう。

### 文献

- 今林久、「小学二年 かさこじぞう（岩崎京子）」、浜本純逸、東和男、今村久編、『作品別文学教育実践史事典 第2集・小学校編』、明治図書、一九八八年、三九〇～四八頁
- 岩崎京子、「児童文学、教科書にのる」、日本児童文学者協会『日本児童文学』、第三七卷第九号、一九九一年、一六〇～一九頁
- 鶴田清司、「まずしき」と「やさしき」の世界」、田中実、須貝千里編、『文学の力×教材の力 小学校編2年』、教育出版、二〇〇一年、二二〇～二二七頁
- 廣添智子、「小学二年 かさこじぞう（岩崎京子）」、浜本純逸、森田信義、東和男編、『作品別文学教育実践史事典』、明治図書、一九八三年、五三〇～五九頁
- 武藤清吾、「かさこじぞう」の授業実践史」、浜本純逸監修、『文学の授業づくりハンドブック 第一巻』、溪水社、二〇一〇年、一〇一～一二五頁
- 吉原英夫、『かさこじぞう』のテキストと教材文について、北海道教育大学語学文学会、『語学文学』、第四一号、二〇〇三年、二三～三一頁



## お手紙（アーノルド・ローベル）

吉田 紘士、河南 希、紺谷 篤、

里見 凌佑、高宮 奈巳、波部 真亜子

### 一 作者と作品について

作者のアーノルド・ローベルは一九三三年アメリカ、ロサンゼルスに生まれる。幼少期は病気がちであったが、高校卒業後は「プラット・インステイテュート」（四年制の私立美術学校）に入学し、そこで本のイラストレーションを学ぶ。ポーランド生まれで絵本作家となる同窓生のアニタ・ローベルと出会い結婚し、二人の子どもをもうける。お互いに影響しあいながら絵本作りを進め、一九七三年「ふたりはいつしょ」でニューベリー賞、一九八一年「どうぶつものがたり」でコールドコット賞を受賞。一九八五年にはローベルが文を、アニタが絵を担当した「The Rose in My Garden」が出版された。日本では「どろんここぶた」や「とうさんおはなしして」など数多くの絵本が翻訳されている。

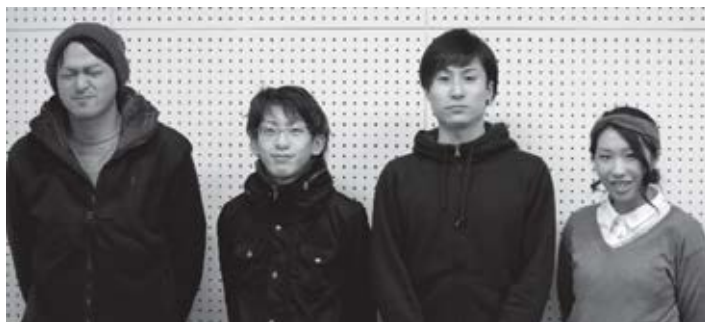
訳者の三木卓（本名、富田三樹）は、一九三五年東京に生まれるが、満州日日新聞等の新聞記者だった父に連れられて二歳から小学二年生までの六年間は大連で過ごした。かつて児童文学の編集者をしていた父に与えられた少年少女文学集など多くの本に影響を受ける。敗戦し

帰国する途中で父を亡くし、帰国後は母子家庭による貧困や小児麻痺などに苦しめられる。河出書房に就職し、詩を書きはじめ、同時にロシア文学の翻訳もするようになる。その後は小説も書きはじめ作家として大成する。

「ふたりはいつしょ」にはがまくんとかえるくんを主人公にした「はるがきた」「おはなし」「なくしたぼたん」「おてがみ」「すいせい」の五編の友情物語が収録されており、本作品はその一つである。「お手紙」は現在三社（光村、日書、大書）の教科書で小学二年生の読書教材として採用されている。「ふたりはいつしょ」に収録されている五つの物語の中でも「お手紙」はコールドコット賞を受賞し、全米図書賞児童文学部門でも最終候補に残った実力をもつ。

### 二 叙述について

「きみ、かなしそうだね」



本文の記述にはがまがえるくんの表情について一切触れられないが、やって来たかえるくんが開口一番に「かなしそうだね」と言ったことから、がまがえるくんは傍目から分かるくらいにとっても悲しそうな顔をしていたと読み取れる。

「そうになると、いつもぼく、とても ふしあわせな 気もちになるんだよ。」

「いつも」とあるので、がまがえるくんは自分が不幸せな気持ちになるとわかっていながらもお手紙を毎日待ち続けていることがわかる。ここからは、いつかはお手紙が来るのではないかがまがえるくんの期待が読み取れる。

「そりゃ、どういうわけ。」

本文を通して丁寧な言葉を使うかえるくんだが、ここでは少しくだけた言葉を使っている。ここから、かえるくんの好奇心、また、「お手紙を待つ時間が悲しいなんてどういうことだろう」という、がまがえるくんに対して感じる意外な気持ちを読み取ることができる。

「お手紙を まっているときに かなしいのはそのためなのさ。」

「そのため」とは、がまがえるくんはお手紙をもらったことがなく、毎日郵便受けに手紙が来ない事を指す。文末にある終助詞「さ」はそっけなさ、また投げやりさを表す助詞であり、ここから、お手紙が来ない事に関して投げやりになっている気持ちが読み取れる。

二人とも かなしい 気分で、 げんかんの まえに こしを 下ろし

て いました。

「ふたりとも」とは、がまがえるくんとかえるくんのことである。この時、がまがえるくんは、待てど暮らせどお手紙が来ないことから、そっけかえるくんは、そんながまがえるくんの悲しい気持ちを知らなかったことから、悲しい気分になっているのだと読み取れる。またがまがえるくんだけでなくかえるくんも腰を下ろしているのは、かえるくんもがまがえるくんに手紙が届くのを待っているからだと分かる。

かえるくんは、大いそぎで 家へ かえりました。

「大いそぎで」の部分から、かえるくんの「早く家に帰らなくては」という使命感、また、逸る気持ちが読み取れる。

えんぴつと 紙を 見つけました。紙に 何か 書きました。紙を ふうと うに 入れました。

この三つの文章でかえるくんが踏んでいる工程は、「手紙を書く」ためのものである。つまり、かえるくんは手紙を書くために、急いで家に帰って来たのだと分かる。

「がまがえるくんへ」

かえるくんが封筒にこう書いたことから、手紙はがまがえる君宛てである事がわかる。

「おねがいでけど、この お手紙を がまくんの 家へ もって いて、ゆうびんうけに 入れて きて くれなにかい。」

「おねがいでけど」は、がまくんが一度もお手紙をもらったことが



なく、それを待つて悲しんでいるという状況を自分がどうにかしてあげたいという強い気持ちから、でている言葉なのではないかと推測される。「届けてくれないかい」ではなく、「ゆうびんうけに入れてきてくれないかい」と言っていることから、よりお手紙が届いたという状況を演出するために、「ゆうびんうけに」という細かな指示までしているのではないかと考えられる。

「きみ、おきてき、お手紙が 来るのを、もう ちょっとまって みたら いいと おもうな。」

「おきてき」と、「き」を使っていることで、お手紙を待つということとの提案を促している。「もう ちょっと」から、自分が手紙を出したので、くるとわかつている自信の表れととらえることもできるのではないだろうか。

「ぼく、もう まって いるの、 あきあきしたよ。」

飽きたではなく「あきあきして」と言っていることから、お手紙を待つても待つてもこないという状況の繰り返しに、すっかり嫌になっっているさま、うんざりしているさまがみてとれる。「もう」や「したよ」などから、大きな落胆があるように読み取ることができる。

「そんな こと、 あるものかい。」

「そんな」という言葉は、現実味のないこと、否定的なことを指すときに使われる言葉。ここでは、かえるくんからの「ひよっとして、だれかが、 きみに お手紙を くれるかも しれないだろう。」ということが、ありえないことだと考えているから、この言葉を使ってい

る。「あるものか。」ではなく、「あるものかい」と「かい」を使っているのは、これも同じで現実味のないことを強く否定しているものと読み取ることができる。

かえるくんは、まどから のぞきました。

「のぞく」という表現には、「物陰やすきま、小さな穴などから見る」「ひそかに様子をうかがう」という意味があるが、本文では「窓から」と表記されているために前者の意味としてとらえることができる。かえるくんは、かたつむりくんから手紙が届かないか、窓から様子をうかがっている。

「ばからしい こと 言うなよ。」

「ばか」という今まで使っていなかった少し強めの言葉を使っていることから、それほど手紙がくるということが、がまくんにとっては現実味がないことであるということ。「言うなよ」という言葉で強い否定を表している。

「今まで、だれも お手紙 くれなかつたんだぜ。今日だって、おなじ だろうよ。」

「今まで、だれも」から、手紙がこないという自分の状況に大きな落胆を感じていることがみてとれる。「今日だって」のは、昨日だってその前だつてと振り返って落胆しているということが読み取れる。「おなじだろうよ。」という言葉から、お手紙を待つという状況に投げやりになっているということが推測される。

「でも、来やしないよ。」

「でも」は前の文(「だって、今、ぼく、お手紙をまっけているんだもの。」)に対する否定を表現しており、かえるくんがお手紙を待っていない、手紙が来るはずがない、誰も僕にお手紙なんか出してくれないと、考えるがまくんの寂しい気持ちが含まれていることが伺える。

「きつと 来るよ。」

がまくんの「でも」という否定の表現に対して「きつと」という語句を使って、かえるくんは手紙が来ることを肯定している。「きつと」は確実に行われることを期待するさま。確実に行われることとは、自分の書いた手紙が、かたつむりくんを介して、がまくんのもとへ届けられることを示す。かえるくんは、お手紙が絶対に来ることを確信しており、落胆しているがまくんを勇気づけるために発言したものだと思われる。

「だって、ぼくが、きみに お手紙 出したんだもの。」

文頭の「だって」と文末の「もの」は、呼応する場合が多い。「きつと、来るよ」という言葉に対する理由(＝手紙が来る理由)をがまくんに説明している。これ以上、がまくんが落ち込んでいる姿は見えないため、手紙を出したことを自白したのではないかと推測できる。本当は、かたつむりくんが届けてくれるのを待ちたかったが、届く前に手紙を出した事を打ち明けたことから、かえるくんの優しさが感じられる。

「きみが。」

かえるくんが僕に手紙を書いてくれたことに驚いている。

「ぼくは、こう 書いたんだ。『親愛なる がまがえるくん。 ぼくは、きみが ぼくの 親友で あることを うれしく おもって います。きみの親友、かえる。』」

かえるくんは、この手紙で、がまくんは大切な友達であるということとを、強い気持ちで伝えている。それは、手紙の中に書かれている「親愛」、「親友」という言葉から読み取れる。

「ああ。」

「ああ」という感情表現は、色々な意味の喜怒哀楽の表現に多様に使われている。文章中の「ああ」は、かえるくんの優しさに、感動していることを表現している。

「とてもいいお手紙だ」

僕(がまくん)の事を親友と思っていてくれて、かえるくんに対するがまくんの感謝の気持ちと喜びが、この一言に込められていると考えられる。

二人とも、とても しあわせな 気もちで、 そこに すわって います。

がまくんは、親友と思われることを、手紙を通して知った。この一文は、喜んでくれたがまくんと同じ気持ちを共有しているかえるくんが共に玄関で手紙が届くのを待っている場面を表している。「かなしい気分、こしをおろしていた」場面とは、真逆の気持ちで手紙を

待っていることが分かる。

お手紙を もらって、がまくんは とても ようびました。

がまくんは当初は、お手紙を受け取ることを目的としていた。しかし、途中でかえるくんががまくん宛に、お手紙を送った事と、そのお手紙の内容（がまくんを親友だと思ふ）から、がまくんはかえるくんの優しい気持ちを知った。単なるお手紙では無く、がまくんのことを思う、かえるくんの優しい気持ちがいっぱい詰まっているお手紙を受け取ることができたから、「とても」喜んでいい詰まっているお手紙を受け取る。また、はじめての手紙がかえるくんからであったことも、喜びも感じた理由の一つである。

### 三 考察

#### (一) 物語全体を通して

この物語を読むと、大きな疑問が残る。それは、「かえるくんはなぜがまくんに手紙の内容を教えたのか。」「手紙の内容を知った二人が、なぜ幸せな気持ちで手紙を待っているのか。」ということである。

前半に関しては、がまくんが手紙なんて来ないというので、かえるくんが待ちきれずに教えたと一応説明をつけることができる。しかし、後半の問いは難しい問いである。かえるくんは、悲しそうでないがまくんと一緒にいることがしあわせなのである。一方、がまくんは前述の「ああ。」の解釈によって異なってくる。つまり、「ああ。」が、「きみの親友、かえる。」を受けていると考えれば、しあわせな気持ちにさ

せているのは、手紙を待つことと、かえるくんと一緒にいることの方となる。しかし、「ああ。」を「とてもいいお手紙だ。」のつながりだと考えれば、手紙を待つこととなる。

また、かえるくんはがまくんに、「お手紙に何て書いたの。」と聞かれこう答えている。

「ぼくは、こう書いたんだ。『親愛なるがばがえるくん。ぼくは、きみがぼくの親友であることをうれしくおもっています。きみの親友、かえる。』」

内容が明らかにされた手紙を待つことの意味は、まさにがまくんとかえるくんの時間を共有するということにあるのではないか。そのために、かたつむりくんが配達人として必要とされたのである。かたつむりくんが予想外に手紙を配達するのに時間がかかったことが、結果として、がまくんとかえるくんが（来ると分かっているのに）しあわせな気持ちでお手紙を待つ時間となったのである。

次に、冒頭の玄関の場面と末尾の玄関の場面に注目して考えていこうと思う。手紙を待っている、がまくんと、かえるくんの様子が冒頭と末尾では「かなしい気分だ」が「とてもしあわせな気持ちで」に、「こしを下ろしていました」が「すわっていました」に変化している。「こしを下ろして」よりも「座って」という方が安定性があるように思う。

また、挿絵を見ると、次のような違いがある。冒頭の二人は悲しそうな表情であり、それぞれの膝のところで自分の両手を組んでおり、がまくんは左足を右足に重ねて、指は力なく伸びている。一方、末尾の二人は互いに肩を組み、楽しそうな表情であり足は上に向いていて躍動的である。

この変化は、手紙の内容を知った二人が、なおしあわせな気持ちで

手紙を待っているということによってもたらされるものではないだろうか。

## (二) かたつむりくんの存在について

この物語は、誰からも手紙をもらえずにいる「がまくん」をかわいそうに思った「かえるくん」が、がまくんあてに手紙を出してあげるという友情の物語である。メインの登場人物もがまくんとかえるくんの二人であり、そのふたりの会話を中心に物語も構成されているが、ここでは第三の登場人物である「かたつむりくん」についての考察を述べる。

まず、かたつむりくんが物語中で発したセリフは、「まかせてくれよ。」と「すぐやるぜ。」の二言だけである。この二言は、かえるくんからがまくんあての手紙を届けてくれないかと頼まれたことへの返事である。このときかえるくんは、かたつむりくんに手紙をあずけようと思っていたわけでは無く、書いた手紙をもって家を飛び出したところ、かたつむりくんに出会ったため、手紙を届けてくれないかと頼んでいる。かたつむりくんからすれば、ぼったり会ったかえるくんにも急に手紙を届けてくれないかと頼まれたわけだが、突然の頼みにも関わらず、何の躊躇もなく許諾していることから非常に気前の良い性格であると考えられる。「すぐやるぜ。」のように、「くだぜ」という口調からも、頼まれたことに対してのやる気のようなものを感じ取れる。

かたつむりくんに手紙を託してから、かえるくんはがまくんの家へと戻る。そして寝ているがまくんをわざわざ起こし、もうすこし手紙が届くのを待っているように促すも、なかなかかたつむりくんが手紙を持って来ないために、窓の外を気にする描写がある。がまくんと会

話をしながら二回も窓の外を確認していることから、かえるくんは、まだかまだかたつむりくんの到着を待ち望んでいると考えられる。おそらくかえるくんのプランとしては、もうすこし手紙が来るのを待つてみようとかまくんに促しているうちにかたつむりくんが手紙を持って登場し、がまくんが歓喜するようになっていたのではないだろうか。そう考えれば、そのつもりでがまくんと会話をしていたものの、手紙は来ないと決めつけてしまっているがまくんがやつぱりかわいそうに思えて、かたつむりくんの到着を待つことなく、自らが手紙を書いたことをがまくんに伝えたと考えることができる。ここでポイントとなるのは、かたつむりくんの予想外の到着の遅さである。かたつむりくんがかえるくんの思惑通りの時間に到着していれば、かえるくんが自身で手紙を書いたことを報告しなくてもよかったことになり、がまくんとかえるくんの会話の最中に手紙をもったかたつむりくんが到着し、てがみをもたらしたがまくんが喜んでハッピーエンドという形で物語が終わってしまう。結果的にかたつむりくんは四日後に到着したのだが、その四日間ずっとがまくんとかえるくんは手紙を幸せな気持ちで待ち続けている。がまくんは、初めて自分に手紙が届くことへの、かえるくんは、自分が書いた手紙でがまくんが喜ぶことへの高揚感をそれぞれ抱いていたからである。このかたつむりくんを二人で四日間も待つ場面が最も印象的な場面であり、ラストシーンでもあるのだが、この場面を生み出したのはまぎれもなくかたつむりくんなのである。かたつむりという生き物は非常に動きが遅いことと、手紙を届けることを快く許諾していたことから、かたつむりくんは決して悪気があつて四日もかけたのではなく、一生懸命がまくんの家を目指した結果、四日間かかったと考えられる。

本来は出した手紙が遅く届くということが良いことではないのだが、この物語の中ではそれが展開を良い方向にはこんでいる。よって、その原因であるといえる「かたつむりくん」はセリフこそ少ないものの、この物語をおもしろくしている大きな存在であるといえるだろう。



## お手紙（アーノルド・ローベル）

### 一 作者と作品について

作者のアーノルド・ローベル (Arnold Lobel) は、一九三三年ロサンゼルスに生まれ、一九八七年ニューヨークで没したアメリカの絵本作家である。一九七三年「ふたりはいっしょ」でニューベリー賞、一九八一年「どうぶつものがたり」でカルデゴット賞を受賞した、二〇世紀アメリカを代表する絵本作家の巨匠である。一部の作品は日本の国語の教科書に採用されている。ローベルのよさは、幼い読者を対象としながらも、その作品が楽天的で明るい展開のワン・パターンに陥ることなく、時には悲しみ、嫉妬、風刺、ユーモアなどを交えて人間の幸福とは何かということを追究しているところにあると評価されている。しかし、それだけで作品にはいつもローベル一流のヒューマンな感情が流れている。絵のタッチも独特で、軽く書き流しているように書いて実に細部まで計算され、しかもユーモアに溢れているのは素晴らしいの一言に尽きる。ローベルの絵本の多くが、芥川賞を受賞した詩人・作家の三木卓氏によって訳された。

訳者の三木卓（みきたく）は、一九三五年五月一三日生まれ。日本の小説家、詩人、翻訳家。日本芸術院会員。本名、富田三樹。東京市生まれ、満洲大連市、静岡県静岡市育ち。早稲田大学第一文学部露文科卒。在学中に「現代詩の会」結成に参加するなど詩人として出発。

### 大橋 実華、鄧 立新

卒業後、日本読書新聞、河出書房新社などで働くかたわら詩、創作を発表。

英米、ロシアの児童文学の翻訳は数多く、特にアーノルド・ローベルのシリーズはロングセラーとなっている。三木文学の特徴は生々しい人物や自然描写にある（「かれらが走りぬけた日」など）。異性に固執する点は谷崎潤一郎に通じるが、谷崎と違ってその視線の背後には死が滞在している。

### 二 叙述について

つまり、お手紙をまつじかんなんだ。

「つまり」は、これ以上進めない（詰まった）地点、最終的な到達点、というのが本来の意味である。「つまり…」という話を聞いたら、聞いた方はその時点で「なるほどね」と納得できて、理解が完結しなければならぬ。「つまり」は、単に前に述べた事柄を言い換えるような場合から、ある一つの論理展開を終結させる結論を導くような場合まで、広い範囲で用いられる。ここでは、前文の「一日のかないしい時」



を「お手紙をまつ時間」であると言い換えている。

「結局」や「要するに」は、ふつう、前に述べた事柄をまとめ、結論を導く際に用いられ、単に言葉を言い換える場合には用いられない。

「手紙」とは、用事などを記して、他人に送る文書のことである。

「だって、ぼく、お手紙もらったことないんだもの。」

本来なら、この一文は、「ぼくは、お手紙をもらったことがないんだ。」となるのが普通である。しかし、助詞「を」の省略や「だって」「もの」に少し幼さが残り、かえるくんが甘えているがまくんの姿が考えられる。

「だって」は、助詞「だって」が接続詞化したものである。相手の言葉に反対したり、相手の反対を予想したりして、そうなった事情を説明する時に用いる言葉である。ここでは、前の段落の「ふしあわせな気もち」になる理由を述べるために使われている。

「ぼく」とは、がまくんのことである。

「いちどもかい。」

「かい」は、「かい」という終助詞（終助詞か＋終助詞い）文末にくる種々の語に付く。（親しみをもって）疑問・反問・確かめの意を表す。ここで、かえるくんががまくんが親しい関係であることがわかる。

「だれも、ぼくにお手紙なんかくれたことがないんだ。」

「なんか」は、望ましくないもの、価値の低いものとしてあげる意味で使われることが多い。しかし、ここでは「くなどの貴重なもの」の意味として使われているだろう。がまくんは、普段そのような貴重

なものをもろう経験がなく、すねているような口調であるということが考えられる。

かえるくんは家から飛び出しました。

「飛び出す」とは、勢よく外や前へ出るの意を表す。前の段落の「大急ぎで家へ帰りました」と呼応して、かえるくんのがまくんに早く手紙を届けたいという気持ちが伝わる。また、かえるくんの動作であるということから、かえるが飛ぶ（うしろ足で蹴り上げる）ような動作も想像できる。

「きみ、おきてき、お手紙が来るのを、もうちょっとまってみたらいいと思うな。」

「さ」は、助詞であり、相手を慰める気持ちで軽く言い放つ時に使う。

「思うな」と言ったのは、今は本当のことが言えないからである。また、他人事のように言ったのは、かえるくんががまくんにお手紙を書いた送ったことがわからないようにするためだと考えられる。

「ぼく、もうまっているの、あきあきしたよ。」

「あきあき」とは、十分すぎたり、くどかったりして、すっかり嫌になること。うんざりすることである。ここで、うんざりや飽きるなどの同義語を使わず、「あきあき」を使うことにより、がまくんは、お手紙を待つことが、もうすっかり嫌になっている印象を与える。

かたつむりくんは、まだやってきません。

今までは、毎日お手紙を待っているのは、がまくんであったが、手紙を待つのが、がまくんからかえるくんに変わった。

本文中に、「かたつむりくんは、まだやってきました。」という文が三回出てくるが、その場の状況、かえるくんの気持ちは同じではない。五一頁七行目の前文では、窓から郵便受けを見ていたかえるくんが、五二頁五行目の前文では、窓からのぞくようになり、手紙を待ちわびる気持ちいだんだん強まっている。挿絵などからも、かえるくんがお手紙を待ちわびる様子がよく伝わり、かえるくんの、手紙を早く届けてほしいという気持ちが次第に募っていると考える。

「まだ」とあるが、副詞の「まだ」は（打消しの語を伴って）ある事柄がその時点までに実現していないさまを表す。

「やって来る」は、来ている途中の動作であり、だんだんと近づいてくる様子である。しかし、ここでは、「まだやってきません」とあるので、かたつむりくんが来る気配もなく、がまくんの家に着くのは時間がかりそうであることがわかる。かえるくんの待ち遠しい、焦る感じ、早く手紙が来てほしいという気持ちが感じられる。

**かえるくんは、まどからのぞきました。**

「のぞく」とは、相手に気づかれないように物陰から見たり、隙間を通して見たりする、高いところから身を乗り出して見るという意味である。「みる」は、目で見る、観察するという意味であり、「のぞく」とは少し動作が違うように思う。

ここでの、「のぞく」は、身を乗り出して見るという意味だと考えられる。お手紙を待つかえるくんが、初めは窓から郵便受けを見ているだけだったのに、窓からのぞくようになったことから、手紙が届くの

を待ちわびている気持ちがわかる。

**「ばからしいこと言うなよ。」**

「ばからしい」とあり、ばかばかしいと同じ意味で、無意味でくだらなく見えるさま。ここでは、「誰かが自分に、お手紙をくれること」が考えられないほど馬鹿らしいこと・ありえないことだと思つていると言える。普通は、手紙を待つことが絶対ばからしいこととは言えないので、ここでの用法から、がまくんの失望感やかえるくんの言葉を信じていないことがわかる。

**「でも、来やしないよ。」**

「や」とあり、「や」という接続助詞は強調表現で、来る可能性は全然ない、来ることは絶対ないという意味である。（例・赤ちゃんはリングを食べやしないよ。）がまくんは手紙が絶対来ないと確信していて、失望した気持ちがわかる。

**二人とも、とてもしあわせな気持ちで、そこにすわっていました。**

「しあわせ」とは、嬉しいよりも上で、他の人ができないことができた、運がついている時の感情である。「嬉しい」は、一瞬であるが、「幸せ」は、しみじみと感じるものである。

「二人とも」があることで、互いに幸せであるという気持ちがわかる。しかし、二人が感じている「幸せ」は同じなのか。ここでは、がまくんは、手紙を待つ喜びだけでなく、かえるくんがわざわざ手紙を書いてくれたこと、自分のことを大切に思ってくれていることに幸せを感じている。かえるくんは、がまくんが幸せな気持ちになったこと



で、自分も幸せを感じているのだと考えられる。

座って待っていることから、落ち着いている様子がわかる。

四日たって、かたつむりくんが、がまくんの家につきました。

「まかせてくれよ。」「すぐやるぜ。」と頼もしく言ったかたつむりくんだが、一生懸命がんばったのに四日もかかてしまった。しかし、このユーモラスなところは、ゆったりとした広がりを感じさせる。普通、手紙を届けるのに四日も時間がかかるのは、距離が遠いことが考えられる。しかし、かえるくんがまくんの家はそんなに遠くないので、ここでは、かたつむりくんが歩くのが遅い生き物であることがわかる。

### 三 考察

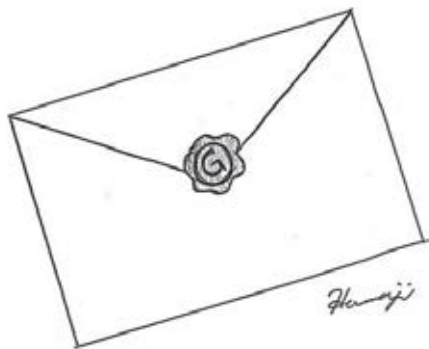
本作品は、「ふたりはともだち」という絵本のなかに収録されている物語の一つである。一連の作品は、「はるがきた」〈おはなし〉〈なくしたボタン〉〈すいえい〉〈おてがみ〉である。どの作品も、正反対の性格のかえるくんがまくんがおりなす友情の物語として、描かれている。

「お手紙」は、二人の登場人物の行動の中心に、場所や時間の移り変わりがはっきり描かれている。「○○が言いました。」を除くと、ほとんどは、会話文でつづられている。訳者の意図もあってか、かなり古風な言い回しが多い。また、語尾（終助辞）も「よ」「さ」「ぜ」などが使われ、話し手の気持ちを読みとる手がかりとなると考えられる。

また、「お手紙」は、友達の不幸せと一緒に悲しみ、幸せを共に喜ぶ、ほのぼのとした心情を描いた作品である。特別な事件が起こるわけでもなく、四日遅れの、しかも内容のわかっている「お手紙」を仲良く

待つ二人の様子が描かれている。

この物語の面白さの一つは、かたつむりくんが手紙を託した点である。「すぐやるぜ」と言っておきながら「四日たって」やっと届くという点がユーモアを生んでいる。「中心人物と対人物」の人物設定よりも、「脇役」の人物設定の方が、重要な意味を持っているかもしれない。「かたつむり」の代わりに「うさぎ」ではダメである。かたつむりくんは、歩くのが遅い生き物なので、手紙が届けられる時間が長かった。かえるくんは、かたつむりくんに頼んだことを後悔しなかったのか、かたつむりくんに頼んだら時間がかかり遅くなるということがわからなかったのか疑問である。しかし、そのおかげで、お手紙を待つ間に、がまくんとかたつむりくんが深く話すことができ、より友情が深まったのではないだろうか。また、手紙の内容を言葉で直接言ったことにより、幸せの感情が高まる効果となったのかもしれない。そして、かえるくんは、大急ぎで手紙を書いたが、かたつむりくんが手紙を託したのは、手紙をもらうがまくんの嬉しい顔を見たいから、がまくんの家と一緒に待たためだったのではないかと考える。



## モチモチの木（斎藤隆介）

井上 智香、山本 賢史、山根 夕佳、吉川 美那子

### 一 作者と作品について

#### ○作者について

一九一七年、東京都に生まれる。本名は斎藤隆勝（たかかつ）。一九三三年、第一早稲田高等学院に入学。三五年、中退。山本有三を慕って明治大学文学科に入学。在学中ゴーストの影響を受ける。卒業後、北海道新聞、秋田魁新報の記者を歴任。新聞記者のかたわら著作活動に入る。

秋田地方の方言、オノマトペをふんだんにちりばめた民話の体裁をとりながら、ほとんどは斎藤の創作童話である。当初は子ども向けではなく、地元の教員や生徒の父母に向けた作品でありながら、画家滝平二郎の独特な挿絵、絵本化によって次第に有名な児童文学作家となる。滝平とは末永い創作活動を続けることとなる。

単純で骨太な展開、生と死のはざままで揺れ動く主人公を描くことで、人間が根源的にもっている情念・情愛からほとぼしる生への尽きぬエネルギーに満ちあふれている。一方、献身、自己犠牲といった説話くさい主題、表現で、発表当初から賛否両論を巻き起こしたものの、戦後の児童文学史上、童話および絵本の新分野を開拓し、民話絵本ブームを起こし、小学校の教科書にも取り上げられ、数々の業績を残した。斎藤の作風は主に古田足日をはじめ、神宮輝夫、今江祥智、藤田のぼ

るなどに強い影響を与えた。

主な作品は、『八郎』（初出：一九五〇年 秋北中学校新聞 福音館書店）、『ペロ出しチョンマ』（一九六七年 理論社）、『花さき山』（一九六九年 岩崎書店）、『モチモチの木』（一九七一年十一月 岩崎書店）などがある。

短編童話集『ペロ出しチョンマ』で一九六八年第十七回小学館文学賞、『天の赤馬』で一九七八年第十八回日本児童文学者協会賞、『ソメコとオニ』で一九八七年第十回絵本にっぽん賞を受賞。一九八五年十月三十日没。

(Weblio 辞書 <http://www.weblio.jp> を参考にとまとめた。)

#### ○作品について

「モチモチの木」は一九七一年十一月に岩崎書店から発行された。後に一九八二年



に同じく岩崎書店からの「斎藤隆介全集」にも収録されている。この作品は小見出しのついた五つの場面から構成されている。夜中に一人では小便にも行けないほど臆病者である豆太だが、ある夜、大好きなじさまが倒れ、夜道への恐怖心を抱えながら一人で医者様を呼びに走る。

教科書には、一九七七年（昭和五十二年）度版、日本書籍「小学国語四下」に掲載されたのが初めてである。現在では、二〇一一年（平成二十三年）度版、光村図書「国語三下 あおぞら」、同じく学校図書「みんなと学ぶ 国語三下」、同じく教育出版「ひろがる言葉 小学国語三下」に掲載されている。また、学校図書では二〇〇五年版から「しりょうへん」として掲載されており、挿し絵は諸橋精光さんである。二〇一一年版では「しりょうへん」から本文で扱うことに見直されている。

## 二 叙述について

全く、豆太ほどおくびょうなやつはいない。

冒頭を「豆太ほどおくびょうなものはいない。」という言葉から始めることで、豆太が臆病ものだという前提を読者に強く認識させている。そうすることで、物語の後半部分から展開される豆太の勇氣ある行動を際立てることへとつなげている。

ところが、豆太は、せつちんは表にあるし、表には大きなモチモチの木がつつ立っていて、空いっぱいの髪の毛をバサバサとふるって、両手を「わあっ。」「とあげるからって、夜中には、じさまについていってもら

わないと、一人じゃしょうべんもできないのだ。

これはモチモチの木についての描写であるが、枝葉のことを「髪の毛」や「両手」と表現しており、擬人法が用いられていることから、豆太にとって、夜のモチモチの木は植物ではなく、おぼけや妖怪のような生き物に見えていることがわかる。

じさまは、ぐっすりねむっている真夜中に、豆太が「じさまあ。」ってどんなに小さい声でいっても、「しょんべんか。」とすぐ目をさましてくれる。

ぐっすり眠っていると人は小さな物音ではなかなか目覚めないが、じさまの場合はぐっすり眠っていても、豆太が「じさまあ。」と小さい声で言っただけで目を覚ましてくれるところから、豆太のことをいつも思い、大切にしていることがわかる。

いっしょにねている一まいしかないふとんを、ぬらされちまうよりいいからなあ。

この一文で一人でしょんべんに行けないだけではなく、一人で寝ることもできないことという読み方と、一まい「しか」ないふとんと強調している点から、布団を二枚買う余裕のないじさまと豆太の貧しい暮らしぶりを表しているという二つの読み方ができる。

それに、とうげのりょうし小屋に、自分とたった二人でくらしている豆太が、かわいそうで、かわいかったからだろう。

ここでも、「たった」二人だと強調しているところから、おとうもおかあもない豆太を不憫に思うじさまの気持ちが読み取れる。また、

後で出てくる医者様を呼びにふもとの村へ行くために二キロも走っており、物語全体を通して登場人物は三人という点からも、家に二人で住んでいることを述べているというよりは、峠の小屋の周りにも人が住んでおらず、峠に二人つきりで暮らしていることが読み取れる。

それなのに、どうして豆太だけが、こんなにおくびょうなのだろうか――豆太のおとうやじさまの勇敢な性格や肝の据わった行動を述べた後で「それなのに」と段落を変えて豆太の臆病さに対して半ばあきれたように、また、不思議そうに述べることでどれほど豆太が臆病なのかを強調している。

モチモチの木つてのはな、豆太がつけた名前だ。

「つてのはな、」と読者に語りかけるような口調で文が書かれている。これは作者である斎藤隆介の文章の特徴で、話し言葉や秋田の方言、オノマトペを用いることで堅苦しさをなくし、民話を、語りかけるような読みやすく、親近感のわきやすい文章に構成している。

「やい、木い、モチモチの木い、実い落とせえ。」

豆太は臆病だが、モチモチの木をずっと恐れているのではなく、昼はモチモチの木に対していばつている点から、夜のモチモチの木だけを怖がっていることがわかる。

「ああ、いい夜だ。星に手がとどきそうだ。おく山じゃあ、しかやくまめらが、鼻ちようちん出して、ねっこけてやがるべ。それ、シーーツ。」  
 って言ってくれなきゃ、とつても出やしない。

夜のモチモチの木を怖がる豆太に対して、じさまは「ああ、いい夜だ。星に手がとどきそうだ。」と星などの美しいものに注目させてみたり、「鼻ちようちん出して、ねっこけてやがるべ。」とおどけてみたりと夜に対して怖いイメージをなくそうとしながら、毎回豆太のトイレに付き合っただけでいることから、じさまの豆太を思う気持ちや優しさが読み取れる。

五つになって「シー」なんて、みつともないやなあ。

「みつともないやなあ。」と作者が読者に対して同意を求めるような口調で文が書かれている。こうすることで作者と読者の両方で豆太を見守るような雰囲気が出来上がる。ここまで一貫して豆太の臆病さについてあらゆる視点から説明し、いかに豆太が臆病なのかを読者に認識させることで、次の段落の「霜月二十日のばん」での豆太の勇氣ある行動の強調につなげている。

豆太はちっちゃい声で、泣きそうになった。

「小さい」よりも「ちっちゃい」の方がより小さい感じが伝わる。「泣きそうに」とあることから、豆太はまだ泣いていないことがわかる。

だって、じさまもおとうも見たんなら、自分も見たかったけど、こんな冬の真夜中に、モチモチの木を、それも、たった一人で見に出るなんて、とんでもねえ話だ。

豆太の言葉にならない気持ちを表している。だって、とあり、夜にモチモチの木を見に出られないことの言い訳や、それを正当化しようとする気持ちが読み取れる。「こんな」「たった」という部分から豆太

の恐怖心が強調されている。また、句点を短い間隔で打つことで、豆太が泣きそうになっていることが伝わる。

「昼間だったら、見てえなあ——。」

昼間のモチモチの木に対する恐怖感はないということがわかる。夜の、灯のともるモチモチの木を見ることはとてもできないと思っっている。「」で終わることから、モチモチの木を見てみたいという気持ちはあるように思われる。

豆太は、はじめっからあきらめて、ふとんにもぐりこむと、じさまのたばこくさいむねん中に鼻をおしつけて、よいの口からねてしまった。

「よいの口」というと夕方の五時〜六時の時間帯であり、とても早い時間から豆太たちが寝てしまったことがわかる。夜のモチモチの木を見ようということは少しも考えていない。

豆太は、真夜中に、ひよつと目をさました。

「ひよつと」という表現から驚く、びっくりしているような様子がわかる。「はつと」「とつぜん」などの表現では、驚くような雰囲気あまり感じられなくなってしまふ。

むちゅうでじさまにしがみつこうとしたが、じさまはいない。

豆太はくまのうなり声におびえ、じさまにしがみつこうとしたが、隣にはいなかったことがわかる。また、「むちゅうで」から豆太がじさまに甘えている様子がわかる。

まくら元で、くまみたいに体を丸めてうなっていたのは、じさまだった。

豆太がおびえていたくまのうなり声の正体は、じさまの苦しそうな声だった。じさまはまくら元にいたので、豆太の隣にはいなかった。また、くまのうなり声が頭の上から聞こえたのもそのためである。

こわくて、びくちらして、豆太はじさまにとびついた。

この部分の「こわくて」はくまのうなり声のことだろう。また、豆太がじさまにとびついたのはじさまが心配だったからだろうか。豆太が、くまのうなり声におびえてしがみつこうとしたからのように考えられる。「こわくて」からは、じさまが倒れていることに対しての恐怖心ととらえることもできる。

豆太は、小犬みたいに体を丸めて、表戸を体でふつとばして走り出した。

「小犬」という表現にすることでより体が小さな様子や、豆太の弱さや守られる存在であることがわかる。「体を丸めて」からは、「表戸を体でふつとばす」のために力をためている姿勢を取っていることがわかる。また同じ言葉から、首を引込め脇をしめて体を縮めている姿勢を取っているという、二つのことを読み取ることが出来る。前者であれば「体を丸めて」は「表戸を体でふつとばして」に係り、後者であれば「走り出した」に係っていくと考える。「ふつとばす」という勢いのある力強い言葉と「小犬」という可愛らしさも感じられる言葉が対比的である。「走り出した」という言葉から、豆太の急いでいる様子が読み取れる。

いたくて、寒くて、こわかったからなあ。

地面には霜が降りていて、豆太ははだしで走っているの、「いたい」「寒い」ということがわかる。ここでの「こわかった」の対象は夜だと考えられる。

でも、大すきなじさまの死んじまうほうが、もっとこわかったから、なきなきふもとの医者様へ走った。

「大すきな」と書くことで、じさまが死んでしまうことがどれだけ豆太にとって悲しい事なのかを読者に強く伝えようとしている。「もっとこわかった」の「もっと」とは、その前の文の「こわかったからなあ」と比較している。「こわかったからなあ」では、真夜中に一人で医者様の所まで行かなければならないのが怖かったが、それよりもじさまが死ぬ方が怖かったとすることで、さらに豆太がじさまの死を強く恐れていることがわかる。また、豆太が臆病であるという設定があるので、その臆病な豆太が一人で医者様を呼びに行くほど、じさまが死んでしまうと思ひ込んでいたことがわかる。「なきなき」という表現は、「泣きながら」という意味だが、ただ「泣きながら」と書くよりも必死な様子が伝わってくる表現である。

これも、年よりじさまの医者様は、豆太がからわけを聞くと、「おう、おう——。」と言って、ねんねこぼんでんに薬箱と豆太をおぶうと、真夜中のとうげ道を、えっちら、おっちら、じさまの小屋へ上ってきた。

医者様の「おう、おう——。」セリフは、あわててきた豆太の様子とは違いあまり焦りを見られない。「これも」というのは、じさまと比較されており、じさまと同じくらい高齢の医者様ということである。一番近くの医者が高齢と言うことから、豆太とじさまが町から離れた

所にすんでいるのではないかと推測出来る。また、「年よりじさまの医者様」という表現からは、医者様がのんびりしている感じが読み取れる。さらに、医者様が峠を登る様子も「えっちら、おっちら」と表現されており、ゆっくり進んでいるような印象を強く受ける。また、来るときは自分で走ってきた豆太が、ねんねこぼんでんにくるまれておぶってもらっている所から、豆太が非常に疲れてしまっていたのだと思われる。薬箱と一緒におぶれる点からは、豆太がまだとても小さい子なのだとわかる。

とちゆうで、月が出てるのに、雪がふり始めた。

「出てるのに」はい抜き言葉であり正しくはないが、話し言葉で語られているためここでは使用されている。月が出ているということは晴れ間があるということだが、それなのに雪が降っているという不思議な雰囲気を表している。何か起きそうな予感を感じさせる一文である。

そして、医者様のこしを、足でドンドンけとばした。

豆太が何かに焦っている様子が現れている。ねんねこぼんでんに覆われて医者様におぶさっているため、もっと急いで上ってほしいという意味を込めて腰を蹴飛ばしている。また、豆太が雪が降り始めたことよってパニックになってしまったという考えも出来る。雪が降り始めたということは、それだけ小屋を出発してから時間が経っているということであり、はやく戻らなければという思いからパニックになっていると推測される。どちらにしても、豆太のじさまに対する思いからの行動と思われる。

じさまが、なんだか死んじまいそんな気がしたからな。

豆太はじさまが死んでしまうことを恐れて、医者様の腰を蹴飛ばしていたことがここでわかる。おもわず医者様の腰を蹴飛ばしてしまうことから、豆太がどれだけじさまが死ぬことを怖がっているかがわかる。また、「なんだか」というのは、根拠はないけれども、という意味だが、晴れているのに雪が降るといふ不思議な雰囲気と、雪が降り出してしまふほど医者様がゆっくりと峠を登っていることから、豆太がそう感じたのだと思われる。

豆太は、小屋へ入るとき、もう一つふしぎなものを見た。

豆太と医者様が、じさまの小屋に到着したことがわかる。「もう一つ」とは、晴れているのに雪が降っていたこと一つと数え、さらにもう一つ不思議なことが起こるといふことである。

けれど、医者様は、「あ、ほんとだ。まるで、灯がついたようだ。だども、あれは、とちの木の後ろにちょうど月が出てきて、えだの間に星が光ってるんだ。そこに雪がふっているから、明かりがついたようにみえるんだべ。」と言って、小屋の中へ入ってしまった。

豆太が明かりのついたモチモチの木を見た場面であるが、医者様が事実を教えてくれるセリフである。「まるで」とはそのように見えるが実は違う時に使われる言葉であり、ここでもモチモチの木に明かりが灯ったわけではないことを表している。また、豆太が「モチモチの木」と呼んでいるのに対し「とちの木」と医者様が呼ぶことよって、大人の医者様は本当のことを知っていることを表している。「入ってしま

った。」という表現も、医者様がモチモチの木の事を話すと、すぐに小屋に入った様子を表しており、特にモチモチの木に感動するような様子がわからないことがわかる。

だから、豆太は、その後は知らない。

豆太も医者様に続いてすぐに小屋に入ったことがわかる。それだけじさまのことが心配だったということが読み取れる。また、モチモチの木の後を見ていないので、医者様の言ったことが本当なのかどうかを確かめることが出来ないこともわかる。

でも、次の朝、はらいたがなおって元気になったじさまは、医者様の帰った後で、こう言った。

次の朝にはじさまのは腹痛が治ってしまったことから、豆太の心配は杞憂に終わったことがわかる。もしかするとじさまの腹痛は演技で、豆太の臆病を直させるために、医者様と口裏を合わせて一芝居うったのではないかという考えもあるが、推測の範疇である。

「おまえは、山の神様の祭りを見たんだ。モチモチの木には、灯がついたんだ。おまえは、一人で、夜道を医者様をよびに行けるほど、勇気のある子どもだったんだからな。自分で自分を弱虫だなんて思うな。人間、やさしささえあれば、やらなきやならねえことは、きつとやるもんだ。それを見て、他人がびつくらするわけよ。は、は、は。」

豆太が見たのは「山の神様の祭り」「モチモチの木には、灯がついたんだ。」ということで、豆太が見たものを肯定しようとする、じさまの優しさが読み取れる。その後続く「一人で、夜道を」の部分は、ど

れだけ豆太がすごいことをやったのかを強調する役割を果たしている。「人間、やさしささえあれば、やらなきゃならねえことは、きつとやるもんだ。」というのは、この作品の主題ともいえる部分である。豆太は臆病で怖がりだったが、じさまのために医者様を呼びに行ける優しさを持っていた。それこそが本当の勇氣なのであるのだ、ということ。豆太に伝えることで、読者にも伝えようとしている。最後の「それを見て、他人がびつくらするわけよ。は、は、は。」というのはじさまのジョークであり、じさまが気分が良くなり、嬉しがつている様子がわかる。

——それでも、豆太は、じさまが元気になると、そのばんから、「じさまあ。」と、しよんべんにじさまを起こしたとき。

「」から始まるこの文は、作品のつけたしの様な扱いである。いわゆるオチの文となる。「じさまが元気になると」とは明かりが灯った次の日であり、話のすぐ後にはもとの豆太に戻っていたことを表している。

### 三 考察

#### (一) 人物関係

この物語の主な登場人物は豆太とじさまと医者様の三人とモチモチの木である。ここでそれぞれの関係について考察していく。

#### ★豆太とじさま

〈じさまから見た豆太〉

じさまにとって、豆太は可愛くて仕方のない存在である。

豆太には両親がいない。豆太の父親は猟の際に亡くなった。また、母親については書かれていないが、何らかの理由で一緒に暮らせないのでろう。そのため、豆太はじさまと二人で、猟師小屋で貧しい暮らしをしている。じさまは両親のいない豆太を不憫に思っている。しかし、真夜中に小さい声でじさまを呼び掛ける豆太の声に応じ、トイレへ一緒に連れていくことから、豆太を可愛いと思いいびやかしていることがわかる。

また、山の神様のお祭りの話をして早くから寝てしまった豆太に対して、夜遅くまで起きてモチモチの木を見に行くことを期待していなかったと思われる。

このようなことから、じさまは普段の夜は手にかかる豆太が自分のために真夜中に医者様を呼びに行ったことに対して驚き感激し、さらに愛着が湧いたことであろう。

〈豆太から見たじさま〉

豆太にとってじさまは大好きで特別な存在である。自分を恐怖から守ってくれることはもちろん、四六時中一緒に生活していることから、じさまに対して特別な気持ちが生えたと考えられる。また、豆太は幼い頃に両親からの愛情を受けなかった分、必要以上にじさまに甘えているのではないだろうか。

ここで、霜月二十日の晩、じさまに対する思いが行動となって表れた。怖いという気持ちとじさまを守りたいという気持ちとの葛藤が勇氣に変わった瞬間である。

しかし豆太は、じさまが元気になると元のおくびような豆太に戻ってしまった。やはり、大事な人を守りたいという優しい気持ちが強く



なったからこそ、勇気が生まれたのではないか。

### ★豆太とモチモチの木

豆太にとってモチモチの木の昼間の姿と夜の姿は違う。昼間のモチモチの木はおもちの元である実を落とす木であり、全く恐怖心を感じていない。むしろ、モチモチの木に対して威張っている態度を示す。しかし、夜になると、豆太の目にするモチモチの木は巨大な人間であり自分を襲う人間だという認識でいる。

しかし、山の神様のお祭りである灯が灯ったモチモチの木を見るのが出来る条件は、霜月二十日の丑三つ時、勇気のある一人の子供だけというものである。

そのため、じさまに言われたモチモチの木に灯りが灯ることを聞いても、見たいという気持ちよりも怖いという気持ち先立ち、見ることを諦めていたようだった。

しかし、霜月二十日の晩に勇気を出して医者呼びに出た際、モチモチの木に灯がついた様子を目の当たりにしたのだった。モチモチの木は豆太を認めたのだろうか。その時豆太はどのように思ったのだろうか。記述はないが、霜月二十日の晩の出来事は豆太にとって大きな出来事のはずだ。じさまとおとうと同じように山の神様のお祭りを目にする事ができたのだから。豆太が大人になった時にも思い出すような出来事であると思われる。

### ★じさまとモチモチの木

じさまやおとうも山の神様のお祭りを見たということから、モチモチの木は昔から存在しているということが分かる。猟師だったおとう

やじさまはどのような勇気のある子どもだったのだろうか。

### (二) 豆太は成長したのか

豆太は五つとあるので、幼稚園の年中組くらいの子どもにあたる。普段臆病でじさまに甘えてばかりいた豆太だった。しかし、霜月二十日に山の神様のお祭りを見たことから、一晩に限り勇気のある行動をすることが出来たと言える。果たして、これは豆太の成長と考えるべきか、それとも豆太は生来臆病のではなく、勇気のある子どもだったのかどちらであろうか。

豆太が成長したと仮定すると、何故じさまが元気になった後、もとのじさまに甘える豆太になったのだろうか。霜月二十日の夜の出来事を経て、豆太が成長し、夜中に一人でトイレに行くことが出来るようになってもおかしくない。確かに、結果としては、以前の豆太と変わっていないように記されていた。しかし、詳細は記されていないから、今後何らかの変化は見受けられるかも知れないとも考えられる。

また、豆太が生来臆病のではなく勇気のある子どもだとすると、臆病な姿は環境によって形成された姿となる。両親がいないのは何らかの理由があり、その出来事があったのは少なくとも豆太が五歳より下の年齢の時だと言える。豆太が今よりも更に幼いころ、豆太と両親の間は何があったのだろうか。また、その時豆太はどのような気持ちだったであろうか。この時の経験から豆太が臆病になってしまったということとは推測できる。ところが、霜月二十日の夜、じさまを救いたいという優しい気持ち原動力となり、豆太の奥底にあった勇気が現れた。これらを踏まえるとその時の生来の豆太の精神は、二キロもある道のりを裸足で泣きながら走るほど、彼の中ですさまじいもので

あったことが分かる。

### (三) じさまの病気は仮病？

じさまは腹痛で苦しんでいたが、あれは仮病だったのではないだろうかという疑問について考察していく。

じさまは自身を臆病だと決めつける豆太に、ひとつの成功体験を経験させることを通して自分に自信を持って欲しかったのではないか。

これは、じさまの病気がすぐ治ってしまったことと医者様の危機感のない行動の二つの点から考えられる。特に二点目に関しては、豆太が必死に訴えるのに対して、「えっちら、おっちら」と小屋の方へ上る医者様の行動は危機感のなさを覚える。このことから、医者様はじさまの仮病のことを既に知っていたのでは、ということも考え得る。

やはり、「可愛い子には旅をさせよ」という言葉にもあるように、じさまは可愛がっている臆病な豆太に成長するきっかけになって欲しいという願いを込めて、仮病を仕組んだのではないだろうか。また、霜月二十日の山の神様のお祭りの日というタイミングで仕組んだのは、豆太にやればできるという自信を、体験を通して実感させたかったからではないだろうか。



# 白いぼうし (あまんきみこ)

渡部 彬、浅野 真実、島本 明日香、

池田 由季乃、居林 奈津実、今中 祐希

## 一 作者と作品について

あまんきみこ(本名、阿萬紀美子)は、一九三一年八月一日、旧満州に生まれる。新京(現在の長春)に移り住み、敗戦時には女学校の二年生だった。帰国後大阪府立桜塚高等学校を卒業すると同時に結婚する。その後、勉学の意欲から日本女子大学児童学科の通信教育部に入学、与田準一を知る。与田準一とは、昭和当時の日本の児童文学界において指導的役割を担った児童文学者・詩人である。その与田による勧めで坪田譲治主宰の「びわの実学校」に「くましんし」を投稿し評価を得て、その後もメンバーの一人となり投稿を行う。一九六八年「びわの実学校」の発表作品を集めた「車のいろは空のいろ」を出版し、第一回日本児童文学者協会新人賞を受賞し、同時に第六回野間児童文芸推奨作品賞ともなる。

「ちいちゃんのかげおくり」「おにたのぼうし」、本作品「白いぼうし」など小学校の教科書へ掲載される作品も多く、上品なユーモアに包まれた作品は、日本の風土や文化に根付いた情緒や親しみやすさと同時に、外国児童文学のような深さとロマンチズムがある。自身が幼少から好きだったという宮沢賢治とも通じる、どこまでもやさしい

世界観が特徴的。また、その生まれ育ちから戦争そのものや、満州での「支配者階級」であった自分自身の存在そのものの罪悪感が作品の根元にある、と語った対談もあることから、この作者の作品には「戦争」の存在が根強くあるとされる。

本作品「白いぼうし」は前述「車のいろは空のいろ」という短編集の中の作品の一つ。この「車のいろは空のいろ」はタクシー運転手の「松井さん」を主人公として、松井さんが出会う様々なお客さんとそのエピソードをお話としたシリーズの短編集である。

## 二 叙述について

ほりばたで乗せたお客のしんしが、話しかけました。

「ほりばた」とあることから、お堀沿いでお客をひろったことがわかる。お堀があるということから、その場所が城下町ではないかと考えられる。「しんし」とあることから、お客はビジネスマン風の人ではなく、よそ行きの上品な服を着た人であると考えられる。また、年配



のロマンスグレーという印象も受ける。「話しかけました」とあることから、しんしはそれまで無言であったがここで初めて口を開き、しんしのほうから話しかけたことがわかる。また、思わず話しかけてしまうほど、夏みかんの匂いが車内に充満していたとも考えられる。

「ほう、夏みかんでのは、こんなににおうものですか。」

「ほう」とは、「感嘆し、または驚いたときに発する語」である。しんしは、夏みかんはこれほど強いにおいのするものだとは思っていなかったために、車内に充満するほどのおいが夏みかんのものであると知り、驚き、感心していることがわかる。「夏みかんでのは」というくだけた口調がみえるので、しんしは初対面の松井さんとも親しげに話している様子がわかる。「こんなに」とあるので、においの程度のはなはだしさを強調している。文末の「ものですか」からも、しんしが驚き、思わず松井さんに聞き返している様子がうかがえる。

「もぎたてなのです。きのう、いなかのおふくろが、速達で送ってくれました。においまでわたしにとどけたかったのですしょう。」

「もぎたてなのです」は、しんしの、夏みかんはこんなににおうものなのかという言葉に対して、もぎたてなのでにおいが強いのだと返答したものである。「いなかのおふくろ」とあるので、松井さんの母親はいなかに住んでいるが、松井さんは一緒に住んでいないということがわかる。「においも」ではなく「においまで」とあるので、夏みかんを送ってくれただけでもうれしいのに、そのにおいまでも送ってくれたという気持ちが含まれていると考えられる。「とどけたかったのですしょう」とあるので、松井さんは母親に確認はしていない。しかし、母

親の思いを想像して好意的に受け止めていることがわかる。

「ほう、ほう。」

二度も「ほう」を繰り返すことで、しんしが松井さんの話を興味深く聞き、感銘をうけながら相づちを打っていることがわかる。

（おや、車道のおんなすぐそばに、小さなぼうしが落ちていたぞ。風がもうひとふきすれば、車がひいてしまうわい。）

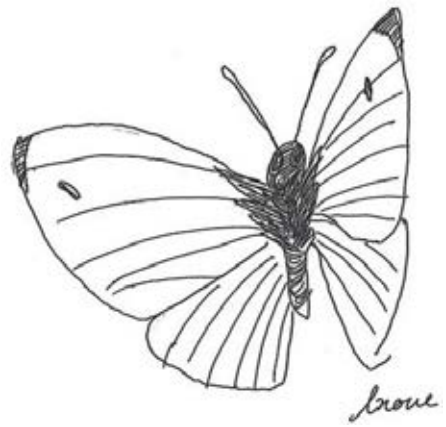
「おや」とあり、松井さんはぼうしが落ちていることに驚きと疑問を抱いている。「落ちていたぞ」と「ぞ」を使うことで、車道のおそばにぼうしが落ちていたという滅多にない今の光景を自分に言い聞かせていることがわかる。「おんなすぐそば」とあり、ぼうしが車道ぎりぎりのところに置かれていることが強調されている。「風がもうひとふきすれば、車がひいてしまうわい」という表現は、ぼうしが今にも飛んでいきそうな様子を表している。

緑がゆれているやなぎの下に、かわいい白いぼうしが、ちよんとおいであります。

やなぎがゆれているのではなく、「緑がゆれている」とすることで、柳が緑色をしているということや、柳が少量ではなく結構な量あることを表している。「ちよんとおいであ」とあり、ぼうしの今にも飛んでいきそうな軽さやぼうしの小ささが強調されている。

そんな松井さんの目の前を、ちようはひらひら高くまい上がると、なみ木の緑の向こうに見えなくなってしまうました。

「ひらひら」とあるので、松井さんがふりまわすぼうしをかわしながらちようが飛んでいることがわかる。「高くまう」ではなく「高くまい上がる」とあるので、ちようが結構な高さ（少なくとも松井さんの目線よりは高く）まで飛んだことがわかる。「なみ木の緑」とあるので、柳は車道沿いに何本か植えられている。「見えなくなってしまう」とあり、松井さんの残念な気持ちが読み取れる。



（ははあ、わびわびにこにおいたんだな。）

「ははあ」とあり、松井さんはちようを捕まえておくためにここにぼうしがおいてあったのだと合点がいったことがわかる。そして、ちようを逃がしてしまったことに対して、申し訳ないという気持ちよりも、子どもがしたであろうぼうしでちようを捕らえておくという行為に、なにか微笑ましい気持ちが入み上げてきたのであろう。

小さなぼうしをつかんで、ため息をついている松井さんの横を、太ったおまわりさんが、じろじろと見ながら通りすぎました。

松井さんは「ため息をついて」おり、ちようを逃がしてしまいどうしようか困っている様子が読み取れる。おまわりさんは、「じろじろ」見ているため、自転車ではなく比較的じっくり見れる徒歩で通りすぎたことが予想される。このおまわりさんの描写から、松井さんが車か

ら降りて白いぼうしを片手にため息をつく姿は、周囲から見ると少々不審な姿であることがわかる。

ちよつとの間、かたをすぼめて立っていた松井さんは、何を思いついたのか、急いで車にもどりました。

「ちよつとの間」とあり、ちようを逃がしてから次に車に夏みかんを取りに行くまでは、ほんの数分のことであったことがわかる。「かたをすぼめ」とは、「寒さや肩身の狭さなどのために、元気なくしよんぼりとしたようす」という意味なので、松井さんはちようを逃がしてしまいいしょんぼりしていると考えられる。

車にもどると、おかつぱのかわいい女の子が、ちよこんと後ろのシートにすわっています。

「ちよこん」とは、「小さくじつとかしこまっているさま」という意味である。女の子のかわいらしさ、幼さ、小ささといったものが強調されるように感じられる。

「道にまよったの。行っても行っても、四角いたて物ばかりだもん。」

「まよったの」とあり、少女らしい口調であると同時に、聞き手（松井さん）に対して、道に迷ったことを断定的に主張していることがわかる。「行っても行っても」とあるので、女の子はすでにしばらくの間辺りをさまよっていたことがわかる。「四角いたて物」とは、ビルのように外見に特徴のない直方体の建物であり、「ばかり」とあるので、それらの建物しかなく、とても迷いやすい地域だと想像できる。「だもん」とあり、松井さんに強く訴えている様子が読み取れる。

「ええと、どちらまで。」

「ええと」とあり、少しとまどってはいるものの、すぐに「どちらまで」とたずねていることから、いつのまにか女の子が一人で客席に座っていたという状況にも、松井さんがあまり動じていないことがわかる。

「え？ ……ええ、あの、あのね、菜の花横町ってあるかしら。」

「え？」とあるので、松井さんに行き先を聞かれて女の子がとまどっていることがわかる。「菜の花横町ってあるかしら」と、行き先を答えるのではなく、まずそのような地名があるかどうかをたずねていることと合わせて考えても、女の子は自分の行きたい場所の正確な地名を知らないということと、この車がタクシーであること、タクシーは行き先を告げてそこに連れて行ってもらおう乗り物であることを知らないということが考えられる。なので、松井さんに行き先を聞かれてとまどったが、「……」の部分で行きたい場所に連れて行ってもらえると理解すると、「あの、あのね」と勢い込んで、期待を込めて話しかけていると考えられる。

「あのぼうしの下さあ。お母ちゃん、本当だよ。本当のちょうちよが、いたんだもん。」

「あのぼうしの下さあ」と語尾を強く言っていることから、男の子が、ちょうちよはあのぼうしの下にいたのだと半信半疑のお母さんに主張しなかったのだと想像できる。「本当」という言葉を繰り返しているの

で、お母さんにちょうちよがいたことを信じてほしいという男の子の気持ちを読み取れる。「だもん」から、ちょうちよがいたことを強く訴えていることがわかる。

水色の新しい虫取りあみをかかえた男の子が、エプロンを着けたままのお母さんの手を、ぐいぐい引っぱってきます。

「新しい」とあることから、男の子が買ってもらいたての虫取りあみで、ちょうちよを絶対に捕まえたいと張り切っていることが感じられる。「エプロンを着けたまま」とあることから、男の子が家事の最中のお母さんを連れてきたことがわかる。また、男の子の家は近くにあると考えられる。「ぐいぐいと」引っぱっていることから、男の子のちょうちよを早く見せたいという意志が感じられる。それに対して、引っぱられているお母さんは、状況をよくわかっていなかったり、本当にちょうちよがいるのかと疑ったりしているのではないかと想像できる。「きます」と現在形になっていることから、男の子はまだ帽子のところまでたどり着いておらず、松井さんから見てまだ距離のあるところにいることがわかる。

客席の女の子が、後ろから乗り出して、せかせかと言いました。

「乗り出して」とあるので、体を前の方へ出し、松井さんの近くで言っていることがわかる。「せかせかと」とあり、女の子があわてており、落ち着かない様子が読み取れる。

（お母さんが虫取りあみをかまえて、あの子がぼうしをそうつと開けた時——。）と、ハンドルを回しながら、松井さんは思います。

(あの子はどんなに目を丸くしただろう。)

車が動き出した時に聞こえた男の子のセリフから、お母さんと男の子の動きを想像していると考えられる。「ぼうしをそうと開ける」という表現から、中に入っているちようが飛んで行ってしまわないように、男の子は慎重に帽子を開けるだろうと、松井さんが想像していることがわかる。「ハンドルを回しながら」と書いてあるので、カーブした道を運転していることがわかる。「開けた時——」のように「——」を書き、松井さんの想像と想像の間に運転しているという行動を書くことによって、女の子に急かされて運転しつつも、男の子が気になり続けていることがよく感じられる。

すると、ぽかっと口をOの字に開けている男の子の顔が、見えてきます。

「見えてきます」と書かれていることから、松井さんが男の子の顔を思い浮かべたということがわかる。

「ふふふっ！」

ひとりでにわらいがこみ上げてきました。

「ふ」で笑っていることから、口を開けて笑っているのではなく、微笑みながら含み笑いをしていると考えられる。ちようが夏みかんに変わってしまったことに驚いている男の子を想像して笑いがこみ上げてきたのだろう。その笑いには、驚かせたといういたずら心と満足感が入り混じっていると考えられる。

「おかしいな。」

松井さんは車を止めて、考え考え窓の外を見ました。

先ほどまで乗っていた女の子が居ない、どこへ行ったのだろうかと思議に思っている。車を止めたことから、落ち着いて考えようとしていること、冷静であることがわかる。「考え考え」と二回書かれていることから、一生懸命に考えていることがわかる。

その上を、おどるように飛んでいるちようをぼんやり見ているうち、松井さんには、こんな声が聞こえてきました。

「おどるように」と書かれていることから、松井さんにはちようたちが楽しそうに嬉しそうに飛んでいるように見えたのだろう。もしかすると、この時点で、タクシーに乗せた女の子が先ほど逃げたであろうだったと気づいていたのかもしれない。「松井さんには」とあるので、声が聞こえたのは松井さんだけであり、周りの人には聞こえていないと考えられる。

「よかったね。」「よかったよ。」「よかったね。」「よかったよ。」

「よかったね。」は、松井さんが逃げたちよう以外の他の何かが言っており、「よかったよ。」は、松井さんが助けたちようが言っているように考えられる。ちよう以外の他の何かと書いたのは、他のちようだけでなく、クローバー、たんぼぼの声かもしれないと考えたからである。また、語尾に「ね」を付けて、相手に同意を求めていることから、「よかったね」と言っているのが、松井さんが逃げたちよう以外であると考えられる。同じ言葉を二回繰り返すことで、リズムがあり、柔らかさ、温かさ、かわいらしさが伝わってくる。

車の中には、まだかすかに、夏みかんのおいがのこっています。

ここで、帽子の下に置かれて、物語からは退場したはずの「夏みかん」が再度登場している。これは、物語のキーワードである「夏みかん」を最後に登場させることで、物語に統一感を持たせるためであると考ええる。また、前文までで、「よかったね」「よかったよ。」という声が聞こえてくるという幻想的な光景を描いているので、「夏みかんのおい」という現実的に嗅覚に訴えるものを登場させることで、読者を現実に戻すという役割を担っているとも考えられる。

### 三 考察

#### (一) 女の子の正体

本作品では以下に挙げたような状況から女の子がもしろちようであると解釈できる。(◎が最も有力な根拠であると考ええる。)

- ・ 松井さんがもしろちようを逃がした後に女の子が現れる。
- ・ 女の子が疲れているのは、男の子に追いかけてまわされて捕まえられたからであると考えられる。
- ・ 女の子が「道にまよったの。行っても行っても、四角い建物ばかりだもん。」と言って迷子になり、菜の花横町に行くことを松井さんに要求している。
- ◎ 男の子が戻ってくると、女の子は後ろから乗り出して、せかせかと、「早く、おじちゃん。早く行ってちょうだい。」と言っている。
- ・ 女の子が急にいなくなる。
- ・ 女の子がいなくなった野原で松井さんはたくさんのお虫を見た。
- ・ ちようがとんでいる野原から、「よかったね」「よかったよ」というちようたちの声が松井さんに聞こえてきている。

- ・ 松井さんのほかの作品「車のいろは空のいろ」でも、動物の化身が出てくる。

このような状況を根拠とし、女の子＝もしろちようであると解釈した。

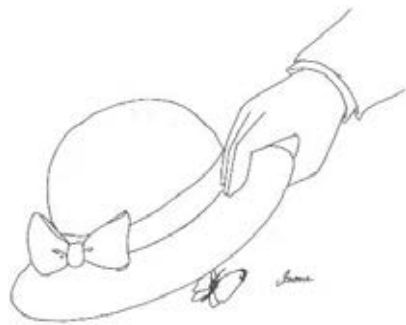
#### (二) タイトル『白いぼうし』について

この『白いぼうし』という作品では、ストーリー上、私たちの印象に残るのは

夏みかんであったり、ちようあるいはそれを思わせる不思議な女の子である。そのなかで、なぜ、あえて「白いちよう」でも「夏みかん」でもなく、「白いぼうし」がタイトルに使われたのか。

松井さんが見つけた「白いぼうし」は、たけ山ようちえんのたけのたけおくんのものである。この白いぼうしの中に松井さんは逃がしてしまったちようの代わりに夏みかんを入れておくわけであるが、その後、ぼうしのもとへ戻ってきた持ち主のたけおくんやそのぼうしがどうなったかは描かれていない。ぼうしはストーリーのクライマックスには直接の関わりがないのである。

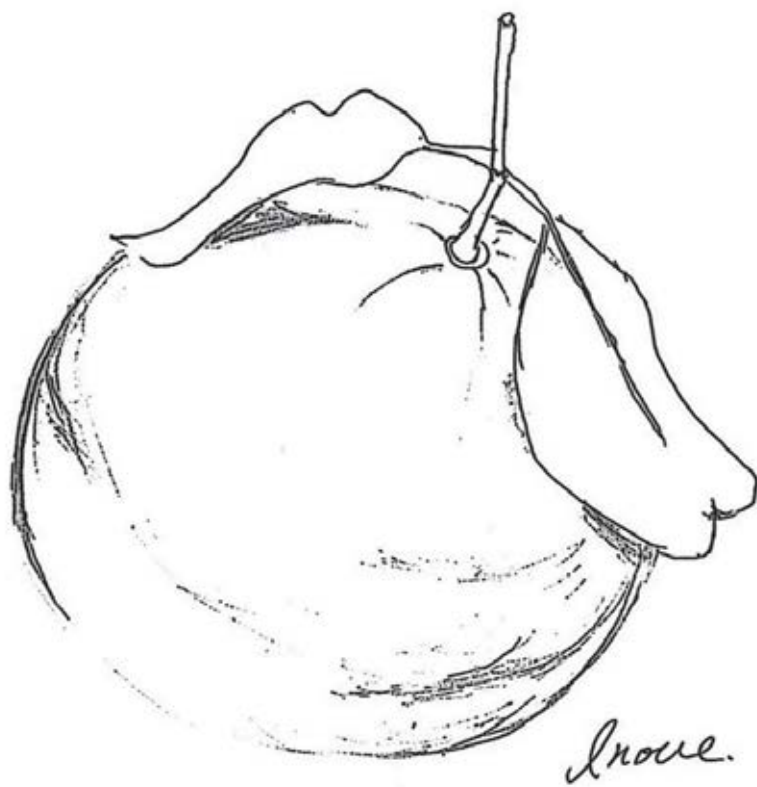
しかしながら、この白いぼうしを松井さんが見つければ、松井さんはその後の不思議な体験をすることはなかった。このストーリーで大部分を占めているのは松井さんとちようとの関わりであるが、白いぼうしは、ここで松井さんとちようを引き合わせる重要なキーとなっているのではないだろうか。道端に置いてあったのが、虫かごや虫とり網であれば、そこに何かが捕まえてあるのだと察して、松井さんは車を停めることはしなかったかもしれない。しかしそれがぼうし





であり、色も白という目立つ色であったために、松井さんの目に留まり、松井さんとちやうとの出会いに繋がった。

つまり、この「白いぼうし」はストーリーを展開させる重要なきっかけであると言える。その点で、この作品のタイトルは『白いぼうし』となったと考えられる。



# 白いぼうし (あまんきみこ)

## 一 作者と作品について

本名、阿萬紀美子。一九三二年（昭和六年）、旧満州国撫順市に生まれる。新京（現在の長春）・大連市に移り住み、敗戦を機に帰国する。帰国後、大阪府立桜塚高等学校を卒業、卒業と同時に結婚する。その後、日本女子大学児童学科通信教育部に入学、与田準一と出会い、与田の勧めで坪田譲治主宰の「びわの実学校」に「くましんし」を投稿し評価を得て、同人になる。

一九六八年、「びわの実学校」発表作品を集めた『車のいろは空のいろ』を出版し、第一回日本文学協会新人賞、および野間児童文学推奨作品賞を受賞。その後の受賞作品は、一九八一年、旺文社児童文学賞『こがねの舟』、一九八二年、小学館文学賞『ちいちゃんのかげおくり』、一九九〇年、ひろすけ童話賞『だあれもない』、二〇〇四年、日本絵本賞『きつねのかみさま』など多数。小学校教科書に『白いぼうし』、中学校教科書に『雲』など、教科書へ掲載され、教材となった作品も多い。二〇〇一年 紫綬褒章を授受。

作品の特徴は、「ちいちゃんのかげおくり」や「おはじきの木」など戦争を描いたものもあり、旧満州で育ち、帰国した経緯、幼少期の経験の影響が感じられる。自身が好きな宮沢賢治の世界とも通じ、日本的なファンタジー作品を多く生み出す。日本の風土や文化に根ざした

## 大橋 実華、宮川 恵実子

情緒と親しみやすさが感じられ、上品なユーモアにも包まれて、どこまでも優しい独特な世界観が漂う。母親的な優しさ、温もりと、どうしようもない切なさが共存し、悲劇の中にある本質を、鋭く静かに描き出す視点が、あまんな作品の特質と言えるだろう。

現在は京都府長岡京市に在住し、『新竹取物語』を構想、執筆中であり、発表が待たれている。

## 二 叙述について

「これは、レモンのにおいですか。」

「これ」は、指示語であり、話し手自身やその近くにあるものを指し示す。「これはなんですか」とたずねるとき、たずね手は、手にそれを持つか目の前にあるそれを指さして問う。問われた方は、指し示されたそれを確認しない限り答えることはできない。つまり、「これ」は、対話する複数人にとって共通のものでなければならぬ。しかし、ここでは、お客の紳士がたずねた「これ」は目で確認することができな



「いにおい」である。本来なら、「このにおいは、なんですか」と聞くべきであるが、ここではお客にとっても松井さんにとっても「これは共通理解しているものであり、車の中はそのにおいで満たされている状態であったため、お客がそのような聞き方をしたと考えられる。

「レモン」は、ミカン科の果物である。「レモン」と、あとに出てくる「夏みかん」という二つの言葉により、すっぱいにおいや黄色い色が想像でき、初夏の明るくさわやかな空気と香りに包まれる印象を与える。

きのう、いなかのおふくろが速達で送ってくれました。

「いなか」とは、都会から離れた土地のことである。つまり、松井さんが住んでいるところは都会だと考えられる。

「おふくろ」とは、母親のことであり、主に男性が母親を親しんで呼ぶ語である。松井さんと松井さんのお母さんは、別々に暮らしているもお互い気にかけている関係であることがわかる。「おふくろ」の語源として、様々な説があり、主に以下の3つのが考えられる。

①「お」は接頭語で、母親は金銭や貴重品を袋に入れ全てを管理していたところから「ふくろ（おふくろ）」と呼ぶようになった。

②胎盤や卵膜などの胎衣や子宮を「ふくろ」と呼んでいたことから、母親そのものも言うようになった。

③子どもは、母親の懐で育つため、「ふところ」が詰まって「ふくろ」となり、「おふくろ」になった。

「速達」は「速やかに届けること」という意味である。つまり、「おふくろ」が松井さんに新鮮な夏みかんを早く届けたいという思いが読み取れる。また、「速達」や前後の文中の「もぎたて」「いにおい」とい

う言葉が「夏みかん」の新鮮さを強調させる。

緑がゆれているやなぎの下に、かわいい白いぼうしが、ちよんとおいであります。

「緑がゆれている」とあるが、緑とは色の名称であるから、色が揺れるというのは、本来おかしい。緑色をした何かが揺れているのであり、ここでは柳の「葉」が揺れているのであろう。柳は枝も細い木である。風で枝がゆれることは十分考えられる。枝ではなく葉がゆれているというのは、それほど弱い風、微風の下と説明できると思う。では「葉が揺れている」と表現することと、どう違うだろうか。葉という言葉では何色かが判らない。柳の葉を緑と表現することで、読み手の描く情景に色彩的効果を生んでいる。そしてそれは、後に続く帽子の色「白」と呼応し、緑と白の色彩的コントラストが生まれ、鮮やかな初夏の情景を読み手に想像させる効果を生んでいると思う。

「かわいい白いぼうし」とあるが、かわいいとは、どの様な帽子だろうか。例えば「かっこいい帽子」なら、何となく男性紳士用の中折れつまみ型のシルクハットやテンガロンハットのような帽子を想像するのではないだろうか。かわいい帽子とは、やはり女性用を想像する。それもつばの広い大きな帽子なら、多くは婦人用、大人用のものであるから、「素敵な白い帽子」や「美しい白い帽子」という表現の方が相応しいだろうし、「かわいい」という言葉は、何となくこんもりと丸く、つばの小さな、年齢的には小学校低学年位までの女の子がかぶるような帽子が想像される。

「ちよん」とについては、後述とする。

(せつかくのえものがいなくなっていたら、この子は、どんなにがっかりするだろう。)

「せつかく」とは、「力の限り尽くすこと」「力の限り尽くさなければならぬような困難な状態」の意味で名詞である。しかし、「せつかくお誘いいただいたのに」や「せつかく来たのに」など副詞として用いられることも多い。他に、「せつかくの休みに雨が降る」など、たまにしかない機会が無駄になる事態を惜しむ気持ちを表わすこともある。「せつかくの」があることにより、子どもが一生懸命つかまえてとつたのに、松井さんが帽子を取ったことにより、ちようが逃げてしまつて残念だという気持ちが強調される。

「えもの」は、「戦いなどで奪い取つたもの」という意味であり、子どもにとつても重要なもの、つかまえるものという解釈ができる。ここでの「えもの」は「もんしろちよう」のことを指している。

「この子」とは、ちようを捕まえ、帽子を被せておいた男の子のことである。

「どんなに」は、形容動詞「どんなだ」の連用形である。はっきりしないそのものの状態・性質・程度などを想像しようとするさまである。子どもがとつてもがっかりすることを想像し、子どもがかわいそうだと思う松井さんの気持ちが伝わる。

まるで、あたたかい日の光をそのままそめつけたような、みごとに色色でした。

何色とは表現されていないが、読み手に美しい夏みかんの姿を自由に想像させることができる。「あたたかい日の光」が夏みかんの色の特徴を表現しており、色が濃く、太陽の光のようにきらきら輝いている

ことが想像できる。また、松井さんと松井さんのお母さんの優しい心と温かさが「あたたかい日の光」と表現されているとも考えられる。

「そめた」ではなく、「そめつけた」が使われているのは、薄れたり、消えたりすることのないようにしっかりと色をしみこませたという強さを感じる。

「みごと」は、際立ってすぐれていることである。

車にもどると、おかつぱのかわいい女の子が、ちよこんと後ろのシートにすわっています。

「車にもどると」とあるが、車に戻つたのは誰か、松井さんである。ここでは主語が書かれていない。この部分が、「松井さんは車にもどりました。すると、おかつぱの…」と書かれていてもよいだろう。また、車にすわるためには「ドアを開ける」や「車に乗り込む」などの一連の動作が必要であるが、それらの描写や説明も省かれ、単に「と」という接続助詞で文が繋がっている。このことよつて、時間的に短い一瞬で場面が転換していると思う。少女が急に表れた印象を呼び起こし、読み手をフアンタジックな世界へと誘う効果を生んでいると思う。

「おかつぱ」とあるが、おかつぱとは前髪を額に垂らし切り下げ、後ろ髪を襟足辺りで真つ直ぐに切りそろえた髪型の事である。主に女性の髪型のことであるが、大人の女性に使う場合は、英語でポブまたはポブカットと言うことが多い。同じ髪型であっても「ポブカットのかわいい女の子」であれば、少なくとも中学生以上位の年齢の女の子を想像するのではないだろうか。おかつぱは、少女の髪型としての言葉である。因みに、こけしの髪型は、おかつぱが多い。女の子の髪型がもし「おさげ(左右に分けて三つ編みする少女の髪型)」ならどうだ

ろうか、おさげは人の手が入った髪型であるから、おさげのかわいい女の子は何となく現実的となり、おかつばの方が異次的ではないだろうか。おかつばの女の子は日本的ファンタジーという、あまん作品のイメージを象徴する存在と言えるかもしれない。

#### ▼「ちよこんと」について

以上、二箇所に使われている「ちよこんと」という言葉を、類義語へ置き換える。

- ①ぼつんと…孤独感、周りに何もない広い場所がイメージされる。
- ②ぼんと…無造作な感じ。動作が速く、意識が薄い。
- ③ちよいと…②と同様に無造作な感じに加えて、存在が小さい感じがする。
- ④ちよこつと…③と同様に存在が小さい印象だが、③よりも動作が

丁寧で多少の意識を伴った感じがする。

⑤そつと…動作が静か、丁寧で、最も意識的。

これらの類義語への置き換えにより、意味と印象の変化を考察し、改めて「ちよこんと」の意味と印象を整理する。「ちよこんと」とは、小さなものが、丁寧な動作によって、動作主の多少の意識を伴った後に、そこそこの広さのある空間の中に、存在する、というイメージを想起させる言葉であると言えるのではないだろうか。

「緑がゆれているやなぎの下に、かわいい白いぼうしが、ちよこんとおいてあります。(二二頁二行目)」では、「柳の木の下にはある程度の空間があり、帽子は小さく、蝶を閉じ込めるとい意識を伴って置かれていた」ということであり、「車にもどると、おかつばのかわいい

女の子が、ちよこんと後ろのシートにすわっています。(一四頁二行目)」では、「女の子の両側にはある程度の空間があるということから、座った椅子は一人掛けではなく車の後部にある長椅子であり、急いで飛び乗って無造作にただ座ったのではなく、丁寧にそつと腰かけた」ということを、読み手に想像させると言えると思う。

水色の新しい虫取りあみをかかえた男の子が、エプロンを着けたままのお母さんの手を、ぐいぐい引っぱってきます。

「水色の新しい虫取りあみ」とあるが、水色なのは、持ち手なのか、網なのか、ここでは、網が水色と考えた。「新しい」とあるが、どこから新しいと判断したのだろうか。色のついた網は、色の無い網よりも、新しいことがわかりやすい。新しいという言葉からは、男の子が最近虫取りに興味を持ち、虫取り網は買ってもらったばかりだということが想像される。

「かかえた」とあるが、「かかえる」とは「腕の中に持つ、だく」という意味である。つまり、「持った」なら手で(片腕で)持っていることも考えられるが、ここでは、網が腕で持つか抱かなければならないものである、ということから、男の子にとって大きい、ということが分かる。小さな男の子が大きな網を縦にして腕で抱くように持っている様子を表している。

「エプロンをつけたままのお母さん」とあるが、普通遠くまで行く時はエプロンを外すので、ここから家が近いことが分かる。「つけたまま」とあるが、「まま」とはなりゆき任せの意味であるから、男の子に呼ばれた時に既につけていて、なりゆき任せに外す暇もなく慌てて出てきた様子が分かる。

「ぐいぐい」とあるが、これは「しきりに強く引いたり、押ししたりする様子」を表す副詞である。ここでは、男の子主導にお母さんを強く引っ張っているという意味となり、男の子はお母さんに見て欲しいとはやる気持ちであるが、お母さんは昼食の準備中で忙しく、嫌々、無理やり連れて来られているということが分かる。「引っぱってきます」は「引っぱっています」とは違い、松井さんの方に、段々と徐々に近づいてくる様子を示す。

男の子は最近虫取りを始め、大きな新しい網を買ってもらったばかりである。蝶は、男の子にとつて、もしかしたら初めて取った虫かもしれない。男の子は、それをお母さんに見て欲しくて仕方ない気持ちになり、呼びに行き、お母さんは昼食準備で忙しい中を無理やり連れて来られ、近づいてくる光景を、読み手に想像させる。描写が詳細で、臨場感あふれる一文である。

早く行ってちょうだい。

「早く」という言葉から、女の子があせっている様子がわかる。

「ちょうだい」は、(補助動詞の命令形のように使つて、)相手に何かしてもらうのを促す気持ちを、親しみの気持ちをこめて言う語である。女性が上品な印象や気取った印象を与える時に使つたり、子どもが何かおねだりする時に使つたりすることが多い。

白いちょうが、二十も三十も、いえ、もつとたくさん飛んでいました。

「いえ、もつと」とあるが、これはまるで言い直した時の話し言葉をそのまま書いたかのような文章のようである。「いえ」は「いいえ」が詰まった言い方、つまりそれまで述べた事を否定する意味を持つ。

ぱつと見た時は、二十か三十と思つた蝶の数が否定され、「もつとたくさん」だったのである。二十か三十でも、動く蝶の数を数えることはおそらく不可能である。「二十も三十も」という言葉で、蝶の数がとても多いことを十分に表現したつもりだった筆者が、わざわざ更に言い直し、たくさん蝶だったことを強調し印象づけている。蝶の数は、四十か五十か、数えきれないほど「たくさん」だったのである。

それは、シャボン玉のはじけるような小さな小さな声でした。

「それ」とは、その前の「よかつたね」「よかつたよ」という会話を指している。「はじける」とあるが、はじけるとは「中身がいつぱいになって裂けて割れる、勢いよく飛び散る」という意味である。栗の実がはじける、ポケットがはじける、などの用例がある。ここでは、シャボン玉がはじけるのであるから、中身は空気である。すなわち、中身は目には見えない、無いに等しい。空気だから、勢いよく飛び出る様子は見えないし、本来音のしないものである。

例えば、石鹸で手を洗っている時に手のひらにできた泡が割れて消えたとしても、その時に音を感じる人は少ないだろう。泡のはじける時に少なくとも無意識の状態では音は聞き取れない。よほど注意して耳を凝らさないと感じられない。「シャボン玉のはじけるような」とは、その会話が、少なくとも無意識の状態では感じられない、よほど注意を凝らさないと人間の耳では聞き取れないほど小さいということである。シャボン玉のはじける音を自分が聞いたことがあるかどうか、ない場合はどういう状態であれば聞けるのか、考えてみたい。

以前、水琴窟の音を聞こうとして、竹筒の穴で耳を澄ませた時、長い時間が過ぎると何か美しい音が聞こえたように錯覚した。後で聞く

と、実際は手水鉢に水が落ちてなかったもので、そういう時は、音はしないそうである。

ここもファンタジックな世界を想起させる、あまん作品の特徴を示す場面である。

### 三 考察

「白いぼうし」はファンタジーの要素を多くもち、現実の世界と非現実の世界との、二つの世界から成っている。ファンタジーの特徴が最も表れるものとして、表現上のしかけがある。「白いぼうし」の主なしかけは、「におい」と「色彩」が考えられる。夏みかんの「におい」といった嗅覚をイメージする言葉、「白い帽子」「もんしろちようの白」「並木の緑」などの色彩をイメージする言葉などこれらの視覚や嗅覚の五感に訴える表現は、さわやかなイメージの世界を創り出し、読み手を不思議な世界へ誘い込む。また、夏みかんのイメージが物語の中心となり、そのにおいは物語を一貫して流れている。夏みかんは自然や優しさの象徴であると考えられることもできる。

本作品には、松井さんとお母さん、松井さんとお客、男の子とおかあさん、松井さんと女の子など、初夏のさわやかな陽光の中での様々な触れ合いが描かれている。物語の中でそのような触れ合いに接し、温かさを感じることができる。松井さんの優しさを中心に、現実と非現実が交錯する不思議な世界が描かれている。物語中に出てくる白い帽子は、都会という「反自然」から自然界へと抜ける通路の役割を果たし、不思議な女の子は非現実世界への案内人の役割を果たしているのではないだろうか。

### 女の子の正体

この物語には、女の子がいつの間にかタクシーに乗っていて、いつの間にかタクシーから消えてしまった場面がある。はたして、女の子の正体は何なのか疑問に感じる。そこで、一つの解釈として、女の子はもしかして白い帽子の中にいたちようではないかと考えられる。女の子がちようだと考えられる理由として、以下のことが考えられる。

- ・松井さんがもんしろちようを逃したあとに女の子が現れている。
- ・女の子が疲れているのは、男の子に追い掛け回されて捕まえられそうになったから。
- ・菜の花横町に行くことを要求しているのは、菜の花横町がちようのすみかであり仲間のところへ行きたい。
- ・男の子が戻ってくると、女の子は「後ろから乗り出して」「せかせかと」「早く、おじちゃん。早く行ってちようだい。」と、言った。それは、ちようを捕まえた男の子から逃げたかったから。
- ・女の子が「道にまよったの。行っても行っても、四角い建物ばかりだもん。」と言っているのは、野原で育ったちようなのでこの辺りのことがわからない。
- ・女の子が急にいなくなったあと、松井さんはたくさんのちようを目撃している。
- ・「よかったね。」「よかったよ。」「よかったね。」「よかったよ。」と、繰り返されているのは、女の子(ちよう)と女の子の友達の会話で、「逃げる」ことができよかったね」「逃げる」ことができよかったよ」と言っている。

また、女の子がちようではない可能性として考えられる理由は、タクシーが走っている最中に女の子が突然消えるのは、現実的な存在と

して考えられないからである。少なくとも、女の子は非現実的な存在だと考えられる。

「実際のところ女の子がちょうかどうか判断することはできない。読み手の想像によって異なり、様々な解釈ができるのではないかと考える。」





## 大造じいさんとガン（椋鳩十）

濱地 桃歌、森本 美乃里、山里 一成

## 一 作者と作品について

椋鳩十（本名・久保田彦穂）は、一九〇五年一月二十二日に長野県に誕生。旧制飯田中学（現・長野県飯田高等学校）を卒業後、法政大学法学部（のちの文学部）国文学科へと進む。大学在学中の一九二六年に詩集『駿馬』を発表する。その後、代用教員として鹿児島県に赴任するも、三か月で解雇される。その後、姉の紹介で同県の国語教師に着任する。仕事の傍ら作家活動を続け、一九三三年に最初の小説『山窩調』を自費出版する。この時初めてペンネームとして「椋鳩十」を用いた。

一九四七年に鹿児島県立図書館館長に就任し、その後十九年間にわたって勤務。一九六〇年には読書運動である「母と子の二十分間読書」運動を推進した。一九六七年からは鹿児島女子短期大学教授を務めた。一九八七年に逝去。享年八十二。

主な作品は、『片耳の大シカ』（昭和二十七年／文部大臣奨励賞）、『大空に生きる』（昭和三十六年／小川未明文学奨励賞）、『孤島の野犬』（昭和三十九年／サンケイ児童出版文化賞・国際アンデルセン賞国内賞）、『マヤの一生』（昭和四十六年／国際アンデルセン賞国内賞・児童福祉文化奨励賞）、『椋鳩十全集』（昭和五十八年／芸術選奨文部大臣賞）など。

「大造じいさんとガン」の初出は『少年倶楽部』昭和十六年十一月

号。書籍収録の際に「まえがき」が加筆され、「です・ます」調になった。昭和五十五年には和国特許委員会最優秀賞・児童学校学習最適賞を受賞しており、現在も小学校五年生の教科書に掲載されている作品である。

## 二 叙述について

じいさんは、七十二さいだというのに、こしひとつ曲がついていない、元気な老かりゆうどでした。

まず、ここでいうじいさんとは大造じいさんことである。「だというのに」という言葉から、大造じいさんが一般的な七十二才の年寄りとは異なり、元気であるということがわかる。「こし」ではなく「こしひとつ」と書くことで、腰をはじめとして、他の部位もびんびんしていることを表現している。「でした」は過去形であり、昔の話をしていることがわかる。

血管のふくれたがんじょうな手を、いろりのたき火にかざしながら、それからそれと、愉快なかりの話をしてくれました。



「血管のふくれた」手とは、日々体が使われていて、鍛えられているためにそうなる。また力があり頑丈であることも表している。この頑丈な手をいろいろにかざしながらとあるので、寒い季節であることがわかり、また、読み手に情景を伝えている部分でもある。「それからそれ」という言葉があることによって、次々と、すらすらと話をしている感じがする。「してくれました」とあるので、年長者であるじいさんへの敬意、話上手なじいさんへの敬意が読み取れる。

わたしは、その折の話を土台として、この物語を書いてみました。

ここでいう「わたし」とは大造じいさんから話を聞いて、この物語を書いている人物を指す。「その折」とは、「わたし」がイノシシ狩りに出かけ、栗野岳のふもとの大造じいさんの家に集まった時のこと。「土台として」から、話を少し変えている、大造じいさんの話を元にして作ったことがわかる。「書いてみました」とあるので、「こんな試みしてみましたか、どうでしょう」というように、読者に投げかけている感じがする。「書きました」「書き上げました」に比べて、少し軽い印象を受ける。

左右のつばさに一か所ずつ、真っ白な交じり毛をもっていたので、かりゅうどたちからそうよばれていました。

ここでは残雪の名前の由来について書かれている。「そうよばれていました。」から、残雪がかりゅうど達の間で有名であることがわかる。

残雪は、このぬま地に集まるガンの頭領らしい、なかなかりょうなやつで、仲間がえをあさっている間も、油断なく気を配っていて、りょうじ

ゅうのとどく所まで、決して人間を寄せつけませんでした。

ここでいう「らしい」は、伝聞や推量ではなく、「ふさわしい」の意を持つ。「なかなか」という言葉には、「鳥にしては」というニュアンスが含まれており、人間が優位であることがわかる。「えをあさっている間も」から、その他の場面でも油断なく気を配っていることがわかる。「決して」は、絶対に無いこと、今までに一度も起こったことが無いことを表している。「人間を寄せつけませんでした」とあるので、人間が近づいてきた時には素早く飛び去ったことがわかる。また、ガンと人間が敵対していることが、この部分から読み取れる。

じいさんは、思わず子どものように声を上げて喜びました。

「思わず」「子どものように」から、自制が効かない様子を表している。また、「子どものように」という、一見大人の男とはミスマッチな言葉を使うことによって、意外性のある喜び方がわかる。「声を上げて」からは、つい、感極まってという感じを受ける。

しかし、大造じいさんは、たかが鳥のことだ、一晩たてば、また忘れてやってくるにちがいないと考えて、昨日よりも、もっとたくさんをつりばりをばらまいておきました。

「たかが」から、鳥をばかにしているじいさんの心情が伺える。「また忘れてやってくるに違いはない」という表現から、じいさんの自信が感じられる。「もっとたくさん」からは、次はもっとたくさん捕るぞという、意気込みとうぬぼれを読み取ることができる。「おきました」があることによって、ばらまくという行為がより準備された、意図的なものであるように感じる。

ガンとかカモとかいう鳥は、鳥類の中で、あまりりこうなほうではないといわれていますが、どうしてなかなか、あの小さい頭の中に、たいしたちえをもっているものだなということを、今さらのように感じたのであります。

「あまりりこうなほうではない」という表現は、今までのガンに対する叙述に比べて柔らかい印象を受ける。文の後半でガンを褒めているため、意図的に柔らかくしたと考えられる。「どうしてなかなか」という言葉は、前に述べた言葉を、意外だという意を込めて否定する意を表す言葉である。つまりここでは「意外だ」ということを、感嘆の意も込めて表している。「小さい頭」と「たいした」とを一緒に使うことにより、後ろの「たいした」がより大きなものとして際立つ効果がある。「だな」からは感嘆の意を読み取ることができる。「今さら」から、改めて確認したことがわかる。

りようじゅうをぐつとにぎりしめた大造じいさんは、ほおがびりびりするほど引きしまるのです。

「ぐつと」から力がこもっている様子が伺える。「びりびり」という表現はあまり使われないが、「びりびり」や「ぴんと」といった表現と比べてより緊張感を漂わせる。「大造じいさんは、ほおがびりびりするほど引きしまるのです」という表現には、意図して気を引き締めたというよりは、戦いを前にして、自然と気持ちが高揚し、緊張している大造じいさんの様子が表れている。

そして、ふと、いつものえさ場に、昨日までなかった小さな小屋をみと

めました。

「ふと」から見落としてもおかしくない程度の異変が、あまり意図せずに残雪の視界に入ってきたことがわかる。あまり意図せずという表現ではあるが、沼地全体を残雪が細心の注意で観察していたからこそ発見できたのである。「みとめ」という表現からはただ見つけただけでなく、その存在を認識して心に留めている、何かを考えている様子が感じられる。

もう少しでたまのどくきより入ってくる、というところで、またしても、残雪のためにしてやられてしまいました。

「もう少しで」という言葉は「期待と失敗」をうかがわせる。「というところで」を讀点で挟み込んで文章に挿入することで、区切って読むことを促し、語りに臨場感が出る。「またしても」と言う表現は基本的な意味は「再び」と同じであるが、よくないことに使われる。「てしまいました」という言い回しは、「してやられるつもりはなかったのに、してやられた」ことを表している。また、この場合は当てはまらないが、よくないことをした場合にも使われ、その後には何かが起こることを予測させたい場合にも使われる。

大造じいさんは、広いぬま地の向こうをじっと見つめたまま、

「ううん。」

と、うなつてしまいました。

ただの「ぬま地」という描写ではなく「広いぬま地」と描写することで、場面を思い浮かべた時に大造じいさんを小さく感じさせ、哀愁のようなものを感じさせる。「じっと」から悔しさなどよりも呆然とし

た雰囲気を感じられる。「まま」という表現からは出来事との区切りがついていない様子が伝わってくる。「てしまいました」からは、「うなるつもりはなかったのにうならされた」ことが読み取れる。

今年もまた、ぼつぼつ、例のぬま地にガンの来る季節になりました。

「今年もまた」から、これまでの繰り返しであることがわかる。大きな場面の初めを「今年も」「その翌年も」といった同系統の言葉で始めることで、物語の構成がわかりやすくなる。「ぼつぼつ」からは空間に何らかの集合体が点在していく様子が感じ取れる。この場合はガンの群れ。「ぼつぼつ」だとその集合体が小さい印象をうける。「ぼちぼち」だと出来事の進行の時間の面により焦点化されているような印象を受ける。また、「ぼつぼつ」は「ぼちぼち」とほぼ同じ表現で、「徐々に」という意味だとする考え方もできる。私たちの班では前者を取った。「例の」がつくことで、「ぬま地」でこれまでに様々なことがあったことを感じさせる。

今では、すっかりじいさんになりました。

「今では」から、捕らえた当初は全然なついていたことが予想される。「すっかり」からなつき方が並大抵ではないことが窺える。

さて、いよいよ残雪の一群が今年もやって来たと聞いて、大造じいさんは、ぬま地へ出かけていきました。

「さて」は場面、話題の転換。「いよいよ」から、長らくこの日を守っていたことが窺える。この場合は、大造じいさんがこの日を待ち望んでいたということ。「出かけ」という表現は「行く」よりも目的意

識が強い印象を受ける。「ていきました」という表現からは、「出かけてい」ったことを語りかけている感じが伝わる。

「うまくいくぞ。」

大造じいさんは、青くすんだ空を見上げながら、にっこりとしました。

この一文からは大造じいさんの落ち着きと自信が感じられる。「青くすんだ空」からは悪いことが起こるといふ予想はしづらい。また、ここまで「たまの」とどききよりの三倍もはなれている地点を、えさ場になっている」とあるにもかかわらず「にっこり」と笑っていることからも圧倒的な自信と落ち着きを感じられる。

そして、冷え冷えするじゅうしんをぎゅつとにぎりしめました。

「冷え冷え」は、銃身がただ冷たいというだけでなく、芯まで冷たく凍りつくような印象を与える。温度はその場の雰囲気と密接に関わっており、じりじりとした暑さも緊張感を感じさせるが、冷え冷えという表現から受ける冷たさは、より研ぎ澄まされた緊張感を感じさせる。「ぎゅつとにぎりしめ」という表現が繰り返されることで構成がわかりやすくなり、次におこることを予測しやすくする効果が考えられる。逆にそれを裏切ることで、より大きな意外性も生まれる。

じいさんは目を開きました。

短い一文が入ることでテンポが上がり、臨場感が出る。またこの一文からは大造じいさんの強い覚悟めいたものが感じられ、これも一文に余計な情報がなく目だけがピックアップされていることによるものである。このときに思い浮かべるであろう映像をうまく操っている。

「さあ、今日こそ、あの残雪めにひとあわふかせてやるぞ。」

「さあ」は大造じいさんの気合いの表れ。「こそ」と強調しているのもやはり気合いの表れからであろう。またこれまで失敗続きであったことも思い出され、苦々しさも感じ取れる。「あの」からは今まで残雪にしてやられた様々なことを、大造じいさんが思っていることがわかり、畏敬のような念も感じられる。「め」からは相手を忌々しく思っている様子が伺える。「ぞ」からも気合いが感じられる。総合すると、とにかく一矢報いたいという大造じいさんの強い思いが感じられる。

と、そのとき、ものすごい羽音とともに、ガンの群れが一度にバタバタと飛び立ちました。

「と」という出だしによって、直前の一文をふまえている。「口笛をふこうと、くちびるをとんがらせた」瞬間のこと。「ものすごい」という表現からは、迫力があり、数も多く、圧倒されていることがわかる。「二度にバタバタ」とは、ガンの群れが秩序なく一斉に飛び立っている様子を表している。

ガンの群れを目掛けて、白い雲の辺りから、何か一直線に落ちてきました。

「雲の辺りから」という表現から、かなり高い所であることがわかる。「何か一直線に落ちてき」たとあり、何かはわからないが、まるで銃弾のような勢いで真つ直ぐにガンの群れに向かってきたことがわかる。

もう一けりと、ハヤブサがこうげきの姿勢をとったとき、さっと、大きなかげが空を横切りました。

「もう一けり」はとどめの一撃か。「さっと、大きなかげが」とあり、何かはこの時点ではわからないが、大きなものが素早い動きで「空を横切」ったことがわかる。

残雪です。

「大きなかげ」の正体が残雪であることが判明する。一文を短くすることで、残雪の存在を際立たせている。

が、なんと思ったか、再びじゆうを下ろしてしまいました。

「が、」という出だしによって、直前の文と間を置かない感じがし、語りのような効果を生み出している。また、後に続く内容の意外性を引き立てている。「なんと思ったか」という表現は、語り手・聞き手から見ると不思議であることを示している。「しまいました」というのは、マイナスの意味を含む。「じゆうを下ろす」行為は、かりゆうどにとつてはミスといっている。「下ろしてしまいました」という表現は、「下ろすつもりはなかった」という意味と、「なぜ下ろしてしまったのか、意外だ」という意味の二つの取り方ができる。

不意を打たれて、さすがのハヤブサも、空中でふらふらとよろめきました。

「不意を打たれて」という表現から、ハヤブサが驚いていることがわかる。ガンが向かってくるという経験は今までになかったと思われる。「さすがの」から、ハヤブサが強い、絶対的な存在であることがわ

かる。「ふらふら」とは、残雪の攻撃がハヤブサに効いている様子を表現している。

しかし、第二のおそろしい敵が近づいたのを感じると、残りの力をふりしぼって、ぐっと長い首を持ち上げました。

第一の「おそろしい敵」はハヤブサ。「ぐっと」から、一生懸命力を入れていく様子がわかり、「長い首」は残雪の大きさを表している。「残りの力」とあることから、力を使い切る直前で、死が意識されることが読み取れる。

それは、鳥とはいえ、いかにも頭領らしい、堂々たる態度のようでありました。

「それ」とは、堂々と「じいさん」に対峙する残雪の様子。「とはいえ」から、鳥であるにも関わらず、人間に引けを取らない立派な態度であることがわかる。「いかにも」という表現は、頭領のような雰囲気がよく表れていることを示している。「らしい」は「ふさわしい」という意味。

それは、最期の時を感じて、せめて頭領としてのいげんをきずつけまいと努力しているようでもありました。

「最期の時」という表現から、死を覚悟している様子がわかる。また、「せめて」から、死ぬことを前提としていることがわかる。「まい」は残雪の意志を表し、「も」は「じいさんから見るとそうも思えた」という意味を含んでいる。

残雪は、あの長い首をかたむけて、突然に広がった世界におどろいたようでありました。

「あの長い首」とは、「ぐっと持ち上げ」た「長い首」のことである。「突然広がった世界」という表現から、「おりのふたをいっばいに開けたことがなかったことがわかる。「よう」とは、じいさんから見たところという意味。

らんまんときいたスモモの花が、その羽にふれて、雪のように清らかに、はらはらと散りました。

「らんまんときいた」から、スモモの花が生き生きと咲き誇っている様子がわかる。「当たって」ではなく「ふれて」とすることで、軽い感じが伝わる。「雪のように清らかに」とは美しい様子を表しており、「雪」は残雪を想起させる。「はらはらと」は、軽く不規則に、力なく落ちる様子を示している。

### 三 考察

#### (一) 大造じいさんと残雪の関係性について

この物語には、大造じいさんと残雪が主な登場人物として描かれている。そしてこの二人の関係性は、物語が進むにつれて変化している。そこで、本文に従いこの二人の関係性の変化について考察していく。しかし、残雪の心情を読み取れる部分はないため、主に大造じいさんの気持ちの変化に着目して考察することとする。

まず物語冒頭では、大造じいさんがかり場とするぬま地に残雪がやって来るようになってから、一羽のガンも捕れなくなったと書かれて

いる。そのため「いまますます思っていました。」という記述もあり、大造じいさんの残雪に対する憎しみ、うっとうしさを読み取ることができる。しかし、「生きているガンがうまく手に入ったので、じいさんはうれしく思いました」と、ガンをとることができて素直に嬉しい気持ちが表示されているので、この時点では残雪に執着しているというよりは、ガンを捕ることに對して一生懸命な印象を受ける。

それから大造じいさんは、もう一度タニシによる仕掛けをかけるが、残雪の機転によってこれをかわされてしまう。それに対して「思わず感嘆の声をもらし」、「たいしたちえをもっているものだ」と、感心している。このことから、今までガンを利口でないと馬鹿にしていたが、この出来事をきっかけにガンを、残雪を見直したことがわかる。その後、ガンのいない夏のうちから次の作戦を心がけたり、より巧妙な罠を仕掛けたりしていることから、ガンを知恵のあるものとして扱う姿勢が見受けられる。

大造じいさんはそれから毎年のように残雪と知恵比べをするが、どうしても勝つことができない。「さあ、今日こそ残雪めにひとあわふかせてやるぞ」ともあるように、この時にはガンを捕るといふよりは、残雪に一矢報いること、残雪に勝つことが目的になっている。

ここで問題となるのが、「残雪の目には、人間もハヤブサもありませんでした。ただ、救わねばならぬ仲間の姿があったのです。」という文だ。これは誰が考えた言葉なのか。ガンが言葉を話すことはないの、わたしたちの班では大造じいさんが考えたという説と、書き手である「わたし」が考えたという説が上がった。もしも前者ならば、じいさんが残雪を対等に扱う気持ち、残雪を人間のような思考を持つ存在として表現させたと考えられる。このあたりから残雪の気持ちを代弁

するような記述が多くなることも気になる。もしも後者ならば、物語を読み手にわかりやすく、かつおもしろく伝えるために残雪の気持ちを補っていると考えられる。これは冒頭の「その折の話を土台として、この物語を書いてみました。」を根拠としている。

「大造じいさんは、強く心を打たれて、ただの鳥に對しているような気がしませんでした。」とあるので、この時点で大造じいさんにとつて残雪はただの鳥ではなく、それ以上の存在であることがわかる。また、強く心を打たれているので、相手に対して感動、尊敬、またはそれらに類する感情を有していると考えられる。

そして最後には、「おうい、ガンの英雄よ。おまえみたいなえらぶつを、おれは、ひきようなやり方でやっつけたかあないぞ。なあ、おい。今年の冬も、仲間を連れてぬま地へやって来いよ。そうしておれたちは、また堂々と戦おうじゃあないか。」とある。大造じいさんが独り言ではなく、話しているのは、ここが初めてである。そのため残雪のことを対等なものとして扱い、英雄として尊敬の気持ちがあることが読み取れる。また後半では、また堂々と戦おうとあるので、二人の関係がライバル関係であると考えられる。

以上、本文に即してじいさんと残雪の関係性を見てきた。まとめると、冒頭ではじいさんにとつて残雪は、狩りを邪魔するいまましいガンの中の一羽でしかなかったが、毎年毎年繰り返される知恵比べを通して、ガンの中から残雪が知恵のあるものとしてクローズアップされ始める。そしてじいさんの目的はガンを狩るというよりは、残雪に一泡ふかすことにかわっていく。そんな中起きたハヤブサの事件がきっかけで、じいさんは残雪を堂々としていて、立派であると認め、これからも対等なライバルとして戦い続けることを宣言する。

## (二) 情景描写・場面の描写について

『大造じいさんとガン』では全体を通じて場面の描写が特徴的である。一つ一つの描写が、読み手が場面を映像化する時の事を意識して書かれているようにも感じる。これはこの物語が、大造じいさんから聞いた話を、筆者が読者に語っているという形式をとっていることが大きな要因であろう。そこでここでは『大造じいさんとガン』における情景描写・場面の描写について考察する。

まず冒頭の「さあ、大きな丸太がパチパチと燃え上がり、しようじには自在かぎとなべのかげがうつり、すがすがしい木のおいのするけむりの立ちこめている、山家のろばたを想像しながら、この物語をお読みください。」という描写は、読者自身が居る場所を想像するように投げかけており、読み手（聞き手）を強く意識していることがわかる。ただし、この部分はのちに加筆された部分であるので、始めはそれほど読み手を意識していたわけではなかったのかもしれない。

次に、「秋の日は、美しく輝いていました。」という一文である。この一文はここまでの流れを遮るかのように突然挿入されており、違和感さえ感じさせる。その違和感は、おそらくそれまでの文章と比べて語りかけるかのような言い回しがあまり感じられないことと、短く情景だけを描写していることからくるものである。しかし後に出てくる、「あかつきの光が、小屋の中にすがすがしく流れこんできました。」「東の空が真っ赤に燃えて、朝が来ました。」という二文を合わせて考えると、残雪との戦いの前に挿入されていることがわかる。そこから考えると、大造じいさんの心情を表した情景描写であると取れる。一度目の戦いであるこの部分では、美しく輝く秋の日は描かれており、

大造じいさんの心持ちも、どこか穏やかであったという事であろう。

「あかつきの光が、小屋の中にすがすがしく流れ込んできました。」と言う一文では、「あかつき」という単語が採用されていることがまず、違和感を感じさせる。ここまでの文章の流れなら「朝の日の光」などが妥当であろう。そもそも児童文学に登場させるには少し難しい言葉である。そこをあえて「あかつきの光」としたのは、読み手（聞き手）をこの部分に注目させようという狙いがあったのだろう。そのような意図も含めて、第二の戦いの前の大造じいさんの心情を考えると、確かにすがすがしさは残ってはいるものの、あかつきと言う単語の音からくる鋭さ、また純粋なオレンジ色とは違うほの暗い雰囲気も同居しており、静かに闘志を燃やしている様子が読み取れる。

「東の空が真っ赤に燃えて、朝が来ました。」はこれまでの描写よりも赤が強調されており、激しさを感じさせる。燃えるという表現からも三度目の戦いを前に大造じいさんの気持ちがいこれまでよりも高ぶっていることが伺える。

ここまで三度ある戦いの前に挿入されている一文と大造じいさんの心情の関連について考察した。ただし、これらの文は大造じいさんの心情を表しているだけではなく、三度ある戦いがどのようなものであるかを、始めに示しているとも考えられる。

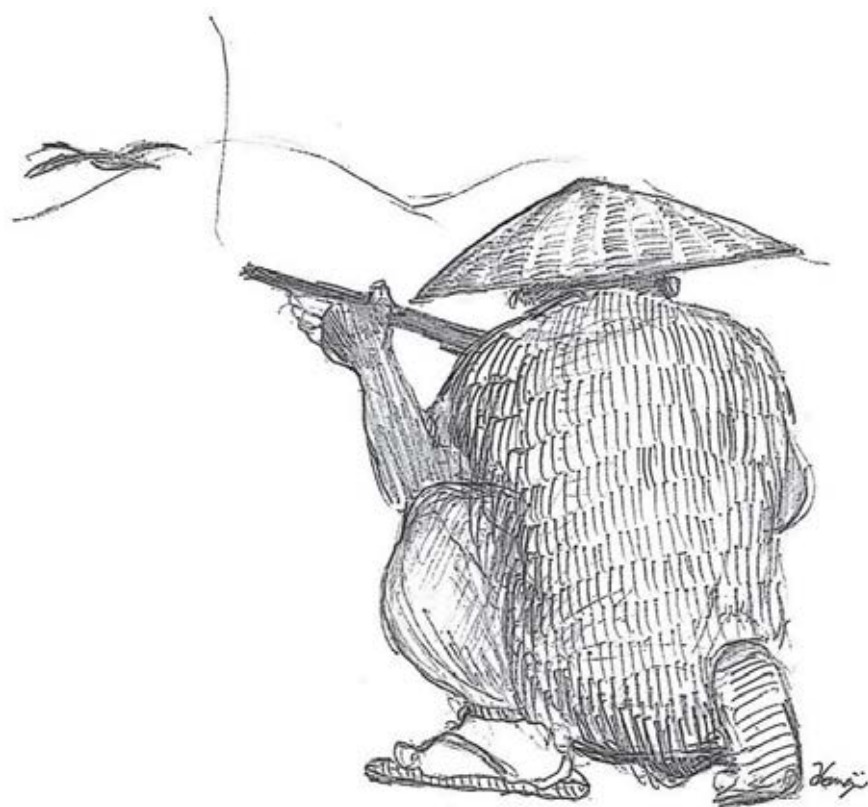
読み手（聞き手）を強く意識している大造じいさんとガンと言う作品において風景の描写は、読み手（聞き手）がその場面、雰囲気映像化するために非常に重要な役割を担っている。その点において三度の戦いの前の一文は印象深いものである。

ここまでに取り上げた部分以外にも、叙述の部分では取り上げたが、「広いぬま地」という表現は、広いぬま地をイメージさせることによ



って大造じいさんの取り残されている様子を効果的に描いている。「白い羽毛があかつきの空に光って散りました」「羽が、白い花卉のように、すんだ空に飛び散りました。」「らんまんとさいたスモモの花が、その羽にふれて、雪のように清らかに、はらはらと散りました。」といった表現はそれぞれ、白色を中心に美しく描写されている。いずれの文も動きが感じられ、映像として想像しやすい。

ここまで見てきたように『大造じいさんとガン』においては場面の描写が大切にされていることがわかる。筆者が何を意識しているかというところまで考えると、作品のより深い部分が見えてくるだろう。



## 海のいのち（立松和平）

宮坂 綾乃、堂前 汐里、中口 喬碩、西岡 笑美

### 一 作者と作品について

立松和平（本名、横松和夫）は、栃木県宇都宮市出身。栃木県立宇都宮高等学校卒業後、早稲田大学政治経済学部へ進学。早稲田キャンパス新聞会に入会するが政治的対立のため、除名。文章表現研究会に入会し、現代文学に親しむ。一九七〇年「自転車」で第一回早稲田文学新人賞を受賞。一九七九年に発表した「閉じる家」「村雨」で二度、芥川賞候補となる。翌年、『遠雷』で野間文芸新人賞を受賞し、二年後にはATGにより映画化される。一九九三年の『光の雨』で「盗作事件」を起こし、社会問題となるが、一九九七年、『毒』風聞・田中正造』で毎日出版文化賞受賞。二〇〇二年三月、歌舞伎座上演『道元の月』の台本を手がけ第三一回大谷竹次郎賞、二〇〇七年に『道元禅師』で第三五回泉鏡花文学賞を受賞した。行動派作家として知られ自然環境保護問題にも積極的に取り組み、小説のほか紀行文、絵本、戯曲、など純文学作家としては異例なほど著書が多い。

『海のいのち』は一九九六年に小学校六年生用の国語教科書に採用された。また『海のいのち』は絵本「山のいのち」「川のいのち」「田んぼのいのち」「街のいのち」などのいのちシリーズのひとつである。

### 二 叙述について

父もその父も、その先ずっと顔も知らない  
父親たちが住んでいた海に、太一もまた住  
んでいた。

この文章の前半から太一の父や祖父を  
はじめ、代々男たちは漁をしに海に出てい  
たと思われる。また「住んでいた」とある  
が、これは実際に住んでいたというわけでは  
なく、長年海に出ていたという意味であ  
ると読み取れる。「太一も」とあることか  
ら、太一も海に親しみがあつたということがわ  
かる。

子供のころから、太一はこういつてはばからなかった。

「こう」というのは前文の漁師になって、おとうといっしょに漁に出るということである。「子供のころから」とあるので、子供のころからずっとこの思いを持ち続けていたことが分かる。「言つてはばからない」というのは頑固な、強情なという意味であるので、心の中に自分の思いを抱き続けていたということが読み取れる。

空っぽの父の船が瀬で見つかり、仲間の漁師が引き潮を待ってもぐって



みると、父はロープを体に巻いたまま、水中で事切れていた。

「事切れていた」とは、息が絶える、死ぬという意味である。ゆえに父は水中で死んでいたということが分かる。この文の直後に「ロープのもう一方の先には、光る緑色の目をしたクエがいた」とあるので、クエを捕ろうとして奮闘していた時に亡くなったのだと思われる。父がロープを体に巻いたまま死んでいたのは、海に流されないようにロープを体に巻きつけていた、あるいはクエを捕まえることに奮闘している最中に巻きついてしまったのではないかと考えられる。

まるで岩のような魚だ。

「まるで」というのは「違いがわからないほどあるものやある状態に類似しているさま」である。ここでは瀬の主であるクエを何人がかりで引こうと全く動かなかったことから、魚を岩のように重いものであると感じたのだろう。

「ずいぶん魚をとってきたが、もう魚を海に自然に遊ばせてやりたくなくなるとる。」

「魚を海に自然に遊ばせてやりたくなくなるとる」とは魚をとるのをやめる、つまり漁師をやめるということになる。与吉じいさは、年をとって自分の体力が衰えたので漁師をやめると太一に言うことで、自分のでしになることをあきらめさせているのだと読み取れる。

こうして太一は、無理やり与吉じいさのでしになったのだ。

「無理やり」とあるので、与吉じいさは太一が自分のでしになることに最初は反対していたということが読み取れる。しかし、太一の漁

師になりたいという強い思いからでしになることを承諾したのではないかと考えられる。

与吉じいさは、瀬に着くや、小イワシをつり針にかけて水に投げる。

この一文は、与吉じいさが漁を行う際の行動を表している。「瀬に着くや」という言葉の後ろには「否や」という言葉が省略されている。「やいなや」という接続詞は、「くするとすぐに」という意味を表す。与吉じいさは瀬に着くとすぐに、つり針にエサとなる小イワシをかけ、漁にとりかかるのである。「小イワシ」とは、正確に言うとかタクチイワシのことである。カタクチイワシは、二シン目カタクチイワシ科に分類される魚の一種であり、成魚でも十センチメートル程にしかないために「小イワシ」と呼ばれることがある。

それから、ゆつくりと糸をたどっていくと、ぬれた金色の光をはね返して、五十センチもあるタイが上がってきた。

前文における与吉じいさの続きの行動を表すものであり、エサを仕掛けてから魚を釣り上げるまでの様子が描かれている。「ゆつくり」という言葉から、糸の動きや張り具合、水面の様子などをうかがいながら糸をたどる、与吉じいさの様子が想像できる。「ぬれた金色の光」とは、水面で反射している太陽の光であると考えられる。太陽の光を受け、きらきらと輝く水面をかき分け、タイは釣り上げられたのであろう。わずか十センチ程度のエサで、五十センチものタイを釣り上げており、このことから与吉じいさの漁師としての技量を読み取ることができ

「おかげさまでぼくも海で生きられます。」

太一は父を早くに亡くしたため、漁師としての技術を与吉じいさから教わった。今まで自分を見守り、育ててくれた与吉じいさを思い「おかげさまで」と言っている。「ぼくも」に含まれるのは、自分はもちろん、与吉じいさや自らの父、そのずっと先の顔も知らない先祖たちであると考ええる。「海で生きられる」という言葉は二つの捉え方をすることができる。一つ目は経済的な成長であり、魚などを捕まえ海からの恵みを受けて生活していくことができるぐらい、漁師としての技量を身につけたというものである。二つ目は精神的に成長をし、先代の漁師たちに恥ずかしくないほど漁師として立派になり、海と共に一生を送る覚悟ができたというものである。考察者としては、後者の意味合いが強いと考える。

ここで与吉じいさは、太一の祖父であるのかどうかについて考える。考察者は与吉じいさは、太一の祖父ではなく近所に住むおじいさんであると考ええる。本文中の記述から、三つの理由が考えられる。一つ目は「父もその父も」という言葉から、もし与吉じいさが祖父であった場合「父も与吉じいさも」と具体的な呼び名を書くのではないかということがある。二つ目は、太一の父はもぐり漁師であったのに対し、与吉じいさの漁の仕方は一本釣りであったことである。親子で漁の仕方が異なるというのは、漁を行うための技や船を引き継いでいくことから考えると、三つ目は与吉じいさが、太一とその母と一緒に住んでいないことである。「船に乗らなくなった与吉じいさの家に、太一は漁から帰ると毎日魚を届けに行った」とあり、もし与吉じいさが祖父であるならば、太一の母は父にあたる与吉じいさと一緒に家に住み、食事や身の回りの世話にあたるのではないかと考える。以上に挙げた

三つの理由から、与吉じいさは太一の祖父ではないと考える。

悲しみがふき上がってきたが、今の太一は自然な気持ちで顔の前に両手を合わせる事ができた。

「ふき上がってきた」という言葉は、「こみ上げてきた」よりもスピード感があり、与吉の死に対して、一気に胸の奥から“悲しい”という感情が強く表れてきたことが分かる。「が」という逆接が用いられており、次に続く言葉は、一般的に「悲しみがふき上がってきた」時とは異なる行動をとると考えられる。「顔の前に両手を合わせる」という表現は、合掌を表しているのだろう。「合掌を行った」とあるよりも、より太一の動作が目につかぶ。この「顔の前に手を合わせる」行為には、漁師として自分を育ててくれた与吉じいさへの感謝の気持ちと、じいさの冥福を祈る思いがあると考える。

父がそうであったように、与吉じいさも海に帰っていったのだ。

太一は与吉じいさの死を「海へ帰った」と表現している。「帰る」という表現から、太一は与吉じいさも父も、この世からいなくなったのではなく、海へ帰っていったと捉えている。「父もそうであったように」とあることから、父や与吉じいさも含め、この海で漁師として生きる者は皆、最後には海へと帰っていくと太一は捉えていると考える。

「おまえが、おとうの死んだ瀬にもぐると、いつ言いだすかと思うと、わたしはおそろしくて夜もねむれないよ。」

太一は父やじいさの死を「海に帰った」としているが、母は「おとうが死んだ」と表現している。このことから父の死に対する思いや悲

しみ、捉え方は母と太一では全く同じではないと考える。母は、太一が父の死んだ瀬にもぐることをおそれ、できればそうしてほしくないと思われ、願う一方で、いつかそのような日が来るのではないかという思いも抱えている。「おそろしく」とは、太一も父と同じように死んでしまうのではないかという、太一の死に対するおそれであると予想する。

太一は、そのたくましい背中に、母の悲しみさえも背負おうとしていたのである。

「その」という指示語は、前文中の「あらしさえも跳ね返す屈強な」という表現を指すのだろう。「たくましい背中」という言葉から、鍛えられた身体や筋肉、また漁師としての多くの経験値を今の太一は持っているという印象を受ける。長年、漁を行ってきたことにより、身体的、技術的、そして精神的にも立派に成長したことが分かる。「母の悲しみ」とは、おとうの死に対するものである。「さえも」とあることから、父を亡くした自分の悲しみに加えて、夫を亡くした母の悲しみも背負おうとしていることが分かる。また、「さえ」という言葉は、父の死を取り巻くすべての悲しみを太一が背負おうとしていることを表し、その最も極端な例として「母の悲しみ」が挙げられている。

はだに水の感しよくがこちよ。

「はだに」水を感じていることから、太一はウェットスーツを着用していないか、肌の露出の多いものを着用していることが予想される。また、「水の感しよくがこちよ」く感じるのは、水温が比較的高いときである。また、二文前に出てくるイサキは夏の魚である上に、直後の文の「海中に棒になつてさしこんだ光」の描写から南中高度が高い

ことがわかる。よってこのとき、季節は夏であったと推測する。

耳には何も聞こえなかったが、太一はそう大な音楽を聞いているような気分になった。

「耳には何も聞こえなかった」から、このとき太一の聴覚は機能していない。それにもかかわらず、太一は「そう大な音楽を聞いているような気分」になっている。これより、太一は視覚と感しよくによって得られる情報から、海の雄大さを感じ、包み込まれるような心地よさを味わっていることがわかる。

とうとう父の海にやつてきたのだ。

「父の海」とは、父が死んだ海のことである。「とうとう」とあるので、太一がこの海に至るまでに、いろいろな過程を経たことがわかる。また、「きた」ではなく「やつてきた」と表現することで、その場所に特別な思いを抱き、到達することを待ち焦がれていたことが読み取れる。「だ」には、事実を断定するはたらきがある。

はげしい潮の流れに守られるようにして生きている二十キロぐらいのクエも見かけた。

「はげしい潮の流れ」にも関わらずそれに「守られるように」生きているという表現に違和感を覚えるが、クエにとつての敵は自分を捕らえようとする人間であり、はげしい潮の流れはむしろ味方であるのだろう。「クエも」とあることから、太一はクエの他にも海の生物に出会っている。「見かけた」からは、太一が見ようとして見たわけではなく、たまたま目に入った程度であることが伝わってくる。

海底の砂にもりをさして場所を見失わないようにしてから、太一は銀色にゆれる水面にうかんでいった。

「海底の砂にもりをさして場所を見失わないように」する行為から、海底の景色は一樣であり、目印がなければ同じ場所へ戻ることが困難であることが予想される。「銀色にゆれる水面」とは、波の立つ海面が太陽に照らされ、反射して輝いている様子を描写したものである。その水面に向かって「うかんでい」という表現をしていることから、太一は水中にいることによって生じる浮力に身を任せて、海面へ向かったと考えられる。

息を吸つてもどると、同じ所に同じ青い目がある。

「同じ所に同じ青い目がある」という表現から、クエは太一が息継ぎをして戻ってくる間、微動だにしなければならなかったことが読み取れる。目は口ほどに物を言うという慣用句があるように、青い「目」の描写を入れることによって、クエの落ち着き払っている様子を暗に匂わせているのではないかと考えた。

魚がえらを動かすたび、水が動くのが分かった。

「魚がえらを動かす」のは、呼吸するために口から取り入れた水を体外に放出するときである。クエのえらから放出された水の量、勢いが凄まじかったために、「水が動くのが分かった」のだと推測する。また、「えらを動かすたび」に水が動くのであるから、その呼吸は常であり、クエは相当な大きさであることがわかる。

興奮しながら、太一は冷静だった。

「興奮しながら」から、父が死んだ海で父と出会っていたであろうクエを発見したことに、胸が高鳴っていることがわかる。また、「冷静だった」とあるので、クエに出会って興奮はしているが、その状況をしっかりと把握できていることがわかる。なお、読点を挟んで対照的な太一の様子が描写されているが、日本語の特性として後から述べた内容に重きが置かれることを考えると、太一の心情としては後者の「冷静さ」の方が勝っていると考えられる。

これが自分の追い求めてきたまぼろしの魚、村一番のもぐり漁師だった父を破った瀬の主なのかもしれない。

「これが」とは、太一が見た百五十キロは優にこえているであろうと思われる魚のことを指している。文末が「なのかもしれない」とあることから、自分が見た魚が父を破った瀬の主であるということに確信があるわけではないということが分かる。

水の中で太一はふっとほほえみ、口から銀のあぶくを出した。

「ふっと」という言葉には、「瞬間的に」ということを表す時間的な意味と、「フツツと笑う」「くすつと微笑む」などの笑い方を表す意味との二つのとらえ方ができる。「ほほえみ」から、くしゃつとした笑顔を見せたのではなく、軽く口角をあげる程度に笑ったことが予想される。「あぶくを出した」とあるので、あぶくが自然に出たのではなく、意図的に出したと読み取れる。「銀の」という言葉は、あぶくにかかる修飾語であり、太陽の光が水に反射し、キラキラ輝いている様子がわかる。

もりの刃先を足のほうにだけ、クエに向かつてもう一度笑顔を作った。

「もりの刃先を足のほうにだけ」から、もりはクエには刺さっておらず、クエに向けていた刃先を自分の足元へおろしたということが分かる。クエに刃先を向けていたのはクエを脅かすためであり、戦意喪失していたと考えられる。「もう一度笑顔をつくった」とあるが、一回目は前文の「ふっとほほえみ」の笑顔である。これは自分の中で消化する笑顔であり、だれかに見せるための笑顔ではない。これに対して「もう一度作った笑顔」は、「クエに向かつて」とあるので、クエに見せようとして作った笑顔だと考えられる。また、この笑顔は意図的につくったものであり、瀬の主がおとうだと分かったということを示すためにつくった笑顔なのではないかとも考えられる。

こう思うことによつて、太一は瀬の主を殺さないですんだのだ。

「こう」とはクエがおとうであることである。「よつて」は前の文に述べたことを理由や根拠とする意を表す語である。太一が「瀬の主を殺さな」かったのは、目の前のクエを父親と重ねたためであることがわかる。また、殺さないで「すんだ」としていることから、太一は目の前のクエを殺さなければならぬという義務感から解放され、気持ちの上で満足することができたことが読み取れる。

千びきに一びきしかとらないのだから、海のいのちは全く変わらない。

「千びきに一びきしかとらない」のは、与吉じいさの教えである。与吉じいさは、こうすることですつとこの海で生きていけると言った。海で生きる太一は、この教えに従い、海のいのちを大事に守っている

ことがわかる。「だから」は前件が後件の原因・理由になることを表す接続語である。ここでは、「海のいのちは全く変わらない」理由が「千びきに一びきしかとらない」であることを示している。「海のいのちは全く変わらない」とは、太一の行為が海のなかの生命の循環に、何ら影響を与えていないということである。

### 三 考察

#### (一) なぜクエという魚が取り上げられたのか？

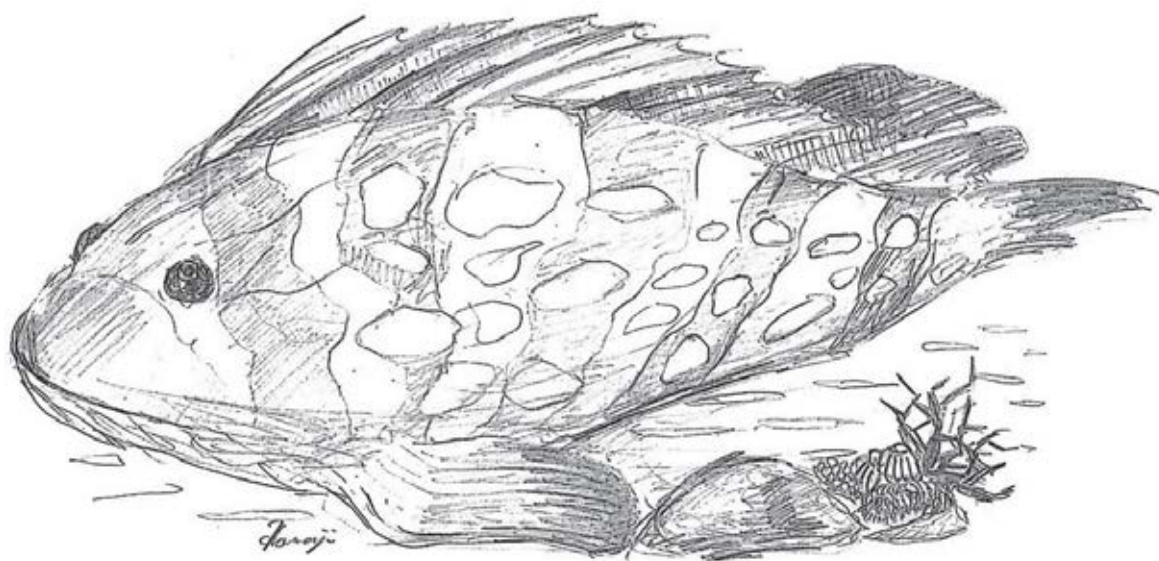
これは、主にクエの生態に関係していると考えた。クエは外洋に面した浅い、岩礁やサンゴ礁に生息し、群れをつくらずいつも単独で行動する。また、体長は一メートルを優に超えるものもいる大型の魚である。クエは自分の住処からはほとんど離れず、遠出をすることもないという。私はここが、この物語で太一の探し求める魚がクエでなければならなかったポイントであると考ええる。太一が、父の亡くなった浅瀬に潜る場面がある。そこで太一が海底に潜む巨大なクエに出会い、「おとう、ここにおられたのですか。…」という発言をしたことによつて、私たちは、そのクエ(太一が父親だと思う)が、長い年月の間、浅瀬でじつと太一を見守っていたことに気付く。ここで、もし、マグロやスズキなどの回遊魚が取り上げられていたのであれば、私たちはこの考えにたどり着くことはできない。

#### (二) この物語がなぜ小学校の教材になっているか？

この問題は、海のいのちで一番何を伝えたいのかということに関係している。正直なところ、小学校の頃この物語を初めて読んだ時

たい何が言いたいかさっぱりわからなかった。テーマがはっきりしている他の教材と比べると、曖昧な印象を受ける作品である。しかし、今回改めてこの物語について考えたとき、作者がこの作品に込めた思いを感じることもあった。それは「自然と人間の共生」である。物語の中では、父親の死、与吉じいさの死が太一にふりかかる。特に太一の父親の命は、海(自然)との闘いの中で失われる。しかし、太一は海(自然)を恨むことはしない。二人は海に帰っていったのだと捉え、死を「自然」の中で起こる当たり前のことであると考える。そして、自分自身も海とともに生きていこうと決意する。人間の力の及ばないもの(自然)と太一(人間)がお互いに受け入れつつともに存在していくことを、この物語は描いているのではないか。

また、小学校学習指導要領解説の最後に、「道徳の内容」の学年段階の一覧表がある。小学校第五学年及び第六学年の目標の中に、「生命のかけがえのなさを知る」「自然の偉大さを知る」「人間の力を超えたものに対する畏敬の念を持つ」などがあり、この物語の主題と通じているものが多いと考えられる。





## オツベルと象（宮沢賢治）

### 一 作者と作品について

作者の宮沢賢治は一八九六（明治二九）年に生まれた詩人・童話作家である。岩手県の質屋に五人兄弟の長男として生まれ、幼い頃から童話と鉱物蒐集を好んだ。一九〇九年旧制盛岡中学校に入学、同校の先輩にあたる石川啄木らとの出会いにより、文学への深い関心を広げる。また同校を卒業してすぐ妙法蓮華経に出会った賢治はこれに強い感銘を受け、のちの彼の思想や信仰に大きな影響を与えるきっかけとなった。卒業後は上京し執筆活動にいそしんだが、妹トシの病状悪化を受け岩手に帰還、看病をしながら花巻農学校にて教師を勤めた。しかし一九二二年妹トシは病死、賢治の良き理解者であった妹の死は、以降の彼の作品に特有の陰影を落とすようになった。

一九二四年には詩集『春と修羅』、イーハトーブ童話『注文の多い料理店』を出版。賢治が生前に刊行した作品は以上の二点のみである。

一九二四年後半から患い始めた急性肺炎が小康を得た一九三一年、賢治は手帳に「雨ニモ負ケズ」を書き留め始める。一九三三年悪化した肺炎により死去。享年三七歳。

「オツベルと象」は、一九二六年一月に雑誌『月曜』創刊号に発表された。宮沢賢治に短編童話としては珍しく、生前に発表された作品である。作品自体は『「ある牛飼い」が物語をする』という形式をとつ

井上 小夜、梅本 航希、尾白 いくみ

ており、その物語とは、地主オツベルの下に迷い込んだ白象についての話である。重労働を課された白象は、初めこそ労働を楽しんでいたものの、日に日に与えられる食べ物を減らされていったため、衰弱してしまふ。そんなある日、白象は月の助言により仲間たちへ手紙を書く。その手紙を読んだ仲間の象たちが、白象を解放すべくオツベルの下につめかけ、助け出すことに成功する、というストーリーとなっている。

教科書には、昭和二八年に教育出版『中学国語（総合）一の上』や東陽書籍『ことばの生活（文学の本）二年』に初めて掲載された。以来、昭和三七年の教育出版『標準中学国語Ⅰ』から昭和四七年の『標準中学国語Ⅰ』までの一〇年間は同じ宮沢賢治の『よだかの星』が収録されたものの、現在平成二四年『伝え合う言葉 中学国語』では一年生の教材として再び採用されている。戦後から現在に至るまで長期間採用されている点、一度教材から外れたものの再び採用された点などから見ても、高い評価を得た作品であるといえる。

教材としては、「なぜ『牛飼い』が語るという形式をとっているのか」「最後の場面で『白象が寂しく笑って』いたのはなぜか」「最後の一行『おや、川へはいっちゃいけないいたら』とあるのはどういう意味か」という議論が多くなされている。

## 二 叙述について

……ある牛飼いが物語る。

物語の語り手として「牛飼い」が登場する。話の始まりを示す役割を果たす。

## 第一日曜

稲こき機械の六台も据えつけて、のんのんのんのんと、おおそろしない音をたててやっている。

「六台も」とあることから、予想より多い台数をオツベルが所持していることがわかる。その様子を「のんのんのんのんのん」という擬音語で表現している。「おおそろしない音」は脚注では「ひどくおおきな音」の意であると説明している。

十六人の百姓どもが、顔をまるつきり真つ赤にして足で踏んで機械を回し、小山のように積まれた稲をかたづけしからこいていく。

「百姓ども」の表現は、「百姓たち」に比べると百姓を見下している叙述だといえる。「まるつきり真つ赤に」という描写からは、必死で労働をこなす「百姓ども」の様子が想像できる。「小山のように」積まれた稲からは、オツベルの収穫量、ひいては経済力・財力を想像することもできる。

その薄暗い仕事を、オツベルは、大きな琥珀のパイプをくわえ、吹き殻をわらに落とさないよう、目を細くして気をつけながら、両手を背中に組み合わせて、ぶらぶら行ったり来たりする。

「薄暗い仕事場」から、労働の過酷さをイメージすることができる。「大きな琥珀のパイプをくわえ」たオツベルは、財力のある人物であることがわかる。「目を細くして」という表現からは、「嬉しそうな様子を表す」という慣用句の意味と、「疑りぶかくしながらよく見る」という様子を叙述したものと、どちらも解釈が可能である。「ぶらぶら行ったり来たりする」という表現では、何をするわけでもなく、手持ち無沙汰でうろろろする様子が描写されている。

小屋はずいぶん頑丈で、学校ぐらいもあるのだが、なにせ新式稲こき機械が、六台もそろって回ってるから、のんのんのんふるうのだ。

「ずいぶん頑丈」「学校ぐらいも」とあることから小屋がかなり大それた造りをしていることがわかる。それでも、「新式稲こき六台」が回っているために、「のんのんのん」ふるっているのだというので、稲こき作業の規模の大きさがわかる。それに併せて、「新式」とあることから、オツベルの経済力が読み取れる。

とにかく、そうして、のんのんのんやっていた。

「とにかく」は、先述の内容（オツベルの食事）の話は一旦置いておく、の意。「のんのんのん」には擬態語と擬音語の両方の意味がある。

白い象だぜ、ペンキを塗ったのでないぜ。

文末「くぜ」は牛飼いが語りかける表現が使われている。「ペンキを塗ったのでない」とあるが、白象という存在はペンキを塗って偽装したと疑うほど珍しい存在であるのだとわかる。

そいつが小屋の入り口に、ゆっくり顔を出した時、百姓どもはぎよっとした。

「そいつ」は白象のことを指す。「ぎよっと」という表現からは、百姓どもが非常に驚いた様子を表している。

ところがその時オツベルは、並んだ機械の後ろの方で、ポケットに手を入れながら、ちらっと鋭く象を見た。

オツベルは象を「ポケットに手を入れながら」「ちらっと」見ただけである。よっぽど冷静で落ち着いた様子であることがわかる。「鋭く見た」というのは、労働力として扱えることを見抜いていたのかもしれない。

それからいかにも退屈そうに、わざと大きなあくびをして、両手を頭の後ろに組んで、行ったり来たりやっていた。

「いかにも」は「どう見ても、どう考えても」という意味があり、露骨に退屈そうな様子を表していたのだと読み取れる。「わざと大きなあくびをし」た後は、依然冷静に「両手を頭の後ろに組んで、行ったり来たりやっていた」のである。

そしたらどうとう、象がこのこの上がってきた。

「どうとう」には、時間がたったが最終的に、という意味がある。「このこ」という様子からは、「どしどし」や「ずんずん」に比べると比較的ゆっくり歩み寄ってくるイメージを受ける。

象はいかにもうるさいらしく、小さなその目を細めていたが、またよく見ると、確かに少し笑っていた。

先述の「いかにも」と同様の表現であり、どう考えてもみながら邪魔であるという様子がわかる。「小さなその目を細めて」というのは、慣用的な意味ではなく、その様子にいらいらしているのだから。しかし、「またよく見ると、確かに少しわらっていた」のであるから、その違和感ある表現が読者に読みを深めることを要求していく。

オツベルはやっと覚悟を決めて、稲こき機械の前に出て、象に話をしようとしたが、その時象が、とてもきれいな、うぐいすみたいない声で、こんな文句を言ったのだ。

「やっと」という表現から、時間の経過が読み取れる。「とてもきれいな、うぐいすみたいない声」という、象の声を他の動物の鳴き声に例えた表現がなされている。

象が体を斜めにして、目を細くして返事した。

「体を斜めにして」というのは、何かの感情の現れか、はたまた象の目が体の横についているためか。頻繁に「目を細くして」と登場するが、ここでの意味は「嬉しそうな様子を表す」ものである。

オツベルが顔をくしゃくしゃにして、真っ赤になって喜びながらそう言った。

「顔をくしゃくしゃに」「真っ赤になって」とあるように、よっぽど象を労働力として得られたことが嬉しかったのであろう。

どうだ、そうしてこの象は、もうオツベルの財産だ。

「どうだ」という呼びかけは、「牛飼い」のセリフであろう。「もう」という叙述からは、事態がすっかり完了してしまった様子が現れている。

## 第二日曜

けれどもそんなに稼ぐのも、やっぱり主人が偉いのだ。

象の見かけの美しさや力強さを賞賛しながらも、結局はオツベルの手腕を褒め称えている。

丸太で建てたその象小屋の前に来て、オツベルは琥珀のパイプをくわえ、顔をしかめてこうきいた。

時計はカモフラージュで、本当の狙いは象に鎖をつけることである。自分の狙いが表情からばれないよう顔に力を入れていたため、オツベルは顔をしかめているのか。また象を捕まえてから一週間で「丸太で建てた象小屋」を作り上げているところからも、オツベルの象を決して逃がさないという意思が見える。

象が笑って返事した。

本来野生の動物に時計は無用の長物である。

オツベルは顔をしかめながら、赤い張り子の大きな靴を、象の後ろのかかにはめた。

前述とは違い、一度思惑が成功しているオツベルが緊張していると考えにくい。自分の狙い通りに進みほくそ笑みそうになる表情を抑

えているため、しかめつらしい顔になったのではないか。

次の日、ブリキの大きな時計と、やくざな紙の靴とは破け、象は鎖と分銅だけで、大喜びで歩いておった。

やくざな、とは役に立たないこと。赤い張り子靴が靴の役目を果たさないことをオツベルは最初から分かっていた。この描写からは、まんまとオツベルの思惑に嵌ったことに気付いていない白象を揶揄するような目線が感じられる。

オツベルは両手を後ろで組んで、顔をしかめて象に言う。

「両手を後ろで組んで」とあるが、腰のあたりで組むのか、肩の上からまわして首のあたりで組むのかで動作が異なってくる。後者だとすると両手を頭上にあげるのはお手上げのときのポーズである。またどうしようもなく困ったときに頭を抱えることもある。オツベルは頭に手を置き、顔をしかめてみせることで、象に力仕事を頼むことを申し訳なく思っているように見せている。

象は目を細くして喜んで、その昼過ぎに五十だけ、川から水をくんできた。

象は働くことに喜びを感じている。オツベルの思惑と、象の喜びようが対照的である。また五十だけ、とあることから象にとって今回の仕事はたいした負担ではなかったことが伺える。象の力強さと同時に、利用価値の高さも読み取れ、これから更に仕事が重くなるだろうことが暗示されているように思える。

夕方象は小屋にいて、十把のわらを食べながら、西の三日の月を見て、「ああ、稼ぐのは愉快だねえ。さっぱりするねえ。」と言っていた。

象が仕事の報酬として初めてわらを与えられ、稼ぐ（仕事をする）

ことを痛快に感じてわらを食べていることがわかる。わらの量は十把。

『把』は『束』と同義。空には三日月がかかっている。仕事初日。

オツベルは房のついた赤い帽子をかぶり、両手をかくしに突っ込んで、次の日象にそう言った。

房のついた赤い帽子は、肉体労働の場では不釣合いに派手な代物である。税金云々は真つ赤な嘘で、オツベルは贅沢で派手な生活を送っている。

オツベルは少しぎよつとして、パイプを手から危なく落としそうにしたが、もうその時は、象がいかにも愉快なふうで、ゆっくり歩きだしたので、また安心してパイプをくわえ、小さなせきを一つして、百姓どもの仕事のほうを見に行った。

象が「森に行くのが好き」だと言ったことを受けて、象が森へ帰りがたがるかと思つてぎよつとした。象が本気で帰りがたがったら、今はまだ象を引き止める力がこちらにないことを分かっているので恐れた。しかし象はそんな素振りを見せなかったため安心し、緊張を緩められためにひとつ咳をして一息ついた。

晩方象は小屋にいて、八把のわらを食べながら、西の四日の月を見て、「ああ、せいせいいした。サンタマリア。」と、こう独り言したそうだ。

わらの量は八把。少し減っているが、象は気にする様子もなく、仕

事に対して満足感を感じている様子がわかる。月の描写から仕事を始めてまだ二日目。

「ああ、吹いてやろう。本気でやったら、ぼく、もう、息で、石も投げ飛ばせるよ。」

不自然に読点が多く打たれている。子どもが声を弾ませているような無邪気なリズム感とともに、幼さゆえの論理性の崩壊が感じられる。

その晩、象は象小屋で、七把のわらを食べながら、空の五日の月を見て、

「ああ、疲れたな、うれしいな、サンタマリア。」とこう言った。

わらの量は七把。また少しオツベルによって減らされていることが、具体的な数値から読み取れる。ここでの象は「疲れた」と言っているものの、働きがいを感じ、心地よい疲労感を味わっている様子がわかる。月の描写から仕事を始めて三日目。

どうだ、そうして次の日から、象は朝から稼ぐのだ。わらも昨日はただ五把だ。

わらの量は五把。大きな変化ではないものの、毎日着実にわらの量が減っている。「ただ五把」の表現は、五把のわらは、さらなる重労働を課されたこと、象が働くために食べる量にしては少ないことを表す。

#### 第五日曜

オツベルかね、そのオツベルは、俺も言おうとしていたんだが、いなくなつたよ。

オツベルは「死んでしまった」とは言わずに、「いなくなつた」と表

現する。オツベルが象に潰されて死んでしまう場面でも、「死ぬ」という言葉は使われていない。「死」という表現を意図的に避けたと考えられる。

仕方がだんだんひどくなったから、象がなかなか笑わなくなった。

オツベルは象に、だんだんと重くなる労働を課していったにも関わらず、えさとなるわらの量を日々減らして弱らせたということ。「なかなか笑わなくなった」の表現は、初めの象は嬉しそうに、笑顔で仕事をしていたことが推測できる。

ときには赤い竜の目をして、じつとこんなにオツベルを見下ろすようになってきた。

オツベルに対しての感情の変化。オツベルを嫌い、恨み始める。「赤い竜の目」という記述は、これまでにでてくる「赤」とも関連する強さ、強い意志を象徴する色ではないか。また、象の純粹さの喪失とも考えられる。素直にオツベルの言うことに従っていたが、オツベルにも仕事にも嫌気がさし始め、純粹に「稼ぐのは愉快」だとは思えなくなっている。

ある晩、象は象小屋で、三把のわらを食べながら、十日の月を仰ぎ見て、「苦しいです。サンタマリア。」

これまで働くことに意義を感じていた象が初めて「苦しいです。」と弱音を吐いた日。わらの量は三把。五把でも少ないと表現されていたが、さらにわらを減らされ、仕事を十分にできる状態でなくなっている。仕事を始めて八日目。

ある晩、象は象小屋で、ふらふら倒れて地べたに座り、わらも食べずに、十一日の月を見て、

「もう、さようなら、サンタマリア。」とこう言った。

とうとう仕事をする気力も体力もなくなり、死を予期した象が「もう、さようなら」と月に別れを告げる。「わらも食べずに」の表現は、『わらを与えてもらえず、食べられない』『多少のわらはあるが、もう食べる気力もない』のどちらの解釈もできる。仕事を始めて九日目。

こいつを聞いたオツベルは、象にことごとつらくした。

「ことごと」は「事毎」。事の大小を問わず、どんな場合でも同じ状態にすることの意。何事につけても。なんやかんや。どんな場面でも。「こいつを聞いても」であれば、「ことごと」は「ことごとく（徹底的に）」の意ととれる。しかし最初は「すまないが」と優しい言葉かけをしていたオツベルであったことから、象がだんだん弱ってくるのを見ても、オツベルが象に優しく接することはなかったととることができ

る。

月がにわかに象にきく。  
「にわかに」は状態が一転する様子を表す。それまでの月の対応（静観）とは一変し、急に象に話しかけ象を助ける手伝いをする。

「お筆も紙ありませんよう。」象は細ういきれいな声で、しくしくしくしく泣きだした。

前述にもあるように、象はまだ幼く、あまり物事がわかっていない。

「ありませんよう」や「しくしくしく泣きだした」の表現から、自分ではどうすることもできない子どもの象であることがわかる。

赤衣着物の童子が立って、すずりと紙をささげていた。

「赤衣着物の童子」は菩薩の従者であるとの脚注があるが、オツベルを恨みはじめる白象の「赤い竜の目」の象徴とも考えられる。

林のような象だろう。

「林」という表現が、まとまったもの、かたまりというイメージ。森ほど大きいわけではなく、木ほど小さいわけではない。「…だろう。」は語り手の推測。「林のような象たちだったろう。」ではなく、百姓と一体化して語り手も同じものを見ている。

何ができるもんか。わざと力を減らしてあるんだ。

仲間の象が白象を助けに来ることを予想して、白象が自力では逃げ出す力をなくさせておいたことがわかる。一度手に入れた貴重な労働力を手放すまいとするオツベルの周到な狡猾さをうかがい知ることができる。

オツベルはもう支度ができて、ラツパみたいないい声で、百姓どもを励ました。

前述に同じく、オツベルの冷静沈着な性格、的確な指示を出す頭の良さをうかがい知ることができる。

こんな主人に巻き添えなんか食いたくないから、みんなタオルやハンケ

チや、汚れたような白いようなものを、ぐるぐる腕に巻きつける。降参をする印なのだ。

百姓どもはオツベルに雇われ、これまではオツベルの言うとおりに動いてきたが、ここで初めて「こんな主人」には従えないと、勝手に降参する。

オツベルはいよいよ躍起となつて、そこら辺りを駆け回る。

百姓どもが降参し、仲間のいなくなつた冷静なオツベルが「いよいよ」冷静でなくなり始めたことが読み取れる。

オツベルの犬も気がたつて、火のつくようにほえながら、屋敷の中をはせ回る。

「はせ」は「走つて」の意。オツベルの犬もつられて興奮しはじめ、行きつく場所もなく走り回る。

塀の中にはオツベルが、たった一人で叫んでいる。

普段から指示を出す百姓どもはどうにいたなくなつたため、誰に指示をするでもなく、「たった一人で」叫んでいる。恐怖のために気が触れてしまわないように大声を出していると考えられる。

オツベルの犬は気絶した。

オツベルの最後の味方であった犬までも、恐怖のため気絶してしまふ。これでオツベルは本当にひとりぼっちとなる。

さあ、オツベルは撃ちだした。

これまで防御のみであったが、ここからオツベルの象たちへの攻撃が始まる。「さあ」というかけ声は、まだオツベルが勢いをなくしていないことがわかる。

「なかなかこいつはうるさいねえ。パチパチ顔へ当たるんだ。」

白象がオツベルの仕事場へ現れた時、もみながら顔に当たることを「砂が私の歯に当たる」と表現していたものと同様。ここではピストルの弾であるが、象には全く通用していない。象という大きな存在を、オツベルは自分のものとし思い通りに動かしていたかのように見えた。しかしそれはオツベルの傲りであり、オツベルの小ささが際立つ描写となっている。

オツベルはケースを握ったまま、もうくしゃくしゃに潰れていた。

六連発のピストルを一度撃ち終わり、弾を入れ替えた途端、五匹の象に潰されてしまうオツベル。第五日曜の初めの「オツベルはいなくなつた」理由になる部分。

みんなは小屋に押し寄せる。丸太なんぞは、マッチのようにへし折られ、あの白象は大変痩せて小屋を出た。

丸太があたかもマッチのように容易くへし折られた様子から、象たちの威力を推し量ることができる。対照的に最初は元気に働いていた「あの白象」は、自分で小屋を出ることもできないくらいに痩せ細つた様子であることがわかる。

白象は寂しく笑ってそう言った。

助かったが寂しく笑う白象。助かった喜びではなく、自分の愚かさを笑うよりほかないことを表す。または、一時は世話になったオツベルの死を悼む気持ちともとらえることができる。

おや、川へはいっちゃいけないったら。

「……ある牛飼いが物語る。」という冒頭部分に呼応する唯一の部分。話の終わりを告げる役割を果たすと考える。

### 三 考察

#### (一) オツベルと牛飼い

原子朗の『宮沢賢治語彙辞典』によると、オツベルは「悪らつな搾取者、資本家の典型」とされている。対して白象は「資本家に搾取される労働者階級の象徴」のように描かれている。しかし、この物語の語り手である牛飼いは終始オツベルを絶賛し、オツベルを決して「悪らつな搾取者、資本家の典型」という見方はしていない。物語の語り手である牛飼いの存在を無視することはできない以上、オツベルを単なる悪者として片付けることもできない。牛飼いがオツベルを客観的な視点で称賛する場面・セリフから考察していく。

まず、第一日曜、第二日曜の場面はどちらも「オツベルときたらたいたもんだ」で始まり、物語中にこの表現は合計三回登場する。また、第二日曜の場面では「頭がよくて偉い」、第五日曜のオツベルが白象を酷使し、仲間の象が白象を助けにくる場面でも「オツベルはやっぱり偉い」と、オツベルを直接的に称賛する表現がある。

次に、主人公オツベルを紹介する表現を見ていく。オツベルは「大



きな琥珀のパイプ」をくわえ、「ずいぶん頑丈で、学校ぐらいもある」小屋を所有している金持ちである。しかも単なる金持ちではなく、「なにせ新式稲こき機械が、六台もそろって回っている」小屋の、大成功した経営者である。「昼飯時には、六寸ぐらいのピフテキだの、雑巾ほどあるオムレツの、ほくほくしたのを食べる」ことができる。ここまでの表現からは、オツベルに対しての嫌味な表現は一切なく、明らかにオツベルの手腕がすばらしいものであることがわかる表現しかなされてはいない。

オツベルの行動描写からも、オツベルが度胸があつて頭がよく、冷静沈着な判断のできる人物であることがわかる。第一日曜、白象が初めてオツベルの小屋へやってきたとき、オツベルは「ポケットに手を入れながら、ちらつと鋭く象を見て」、「なんでもないというふうで、今までどおり行ったり来たりしていた」。その後も、「いかにも退屈そうに、わざと大きなあくびをして、両手を頭のうしろに組んで、行ったり来たりやっていた」。それに対し、百姓どもは初めから「ぎよつとした」様子で、「息を殺して象を見」ることしかできない。オツベルは最後まで「知らないふうで、ゆつくりそこらにあるいていた」。結果、白象は「オツベルの財産」になった。オツベルが手に入れた白象は、力が「二十馬力」もあり、労働力として大いに期待できる。また「見かけが真っ白で、牙は全体きれいな象牙でできている。皮も全体、立派でじょうぶな象皮」である。このことから「いまに見たまえ、オツベルは、あの白象を、働かせるか、サーカス団に売りとばすか、どっちにしても万円以上もうけるぜ。」と、オツベルのさらなる成功を予期している。

第五日曜の仲間の象が白象を助けにくる場面では、昼寝中だったに

もかわならず、「眼をぱちちりとあいたときは、もうなにもかもわかつていた」とあり、「ラツパみたくない声で、百姓どもを励ま」す。それ以外にも前もって白象を弱らせておいたり、ピストルを用いて一人で応戦するなど、「やっぱり偉い」と称賛されるにふさわしい英雄のような行動が見られる。

これらの表現からは、オツベルが、白象をだまして少ない賃金で働かせた結果、仲間の象に報復される『悪者』には到底見えないのである。

ではなぜ牛飼いは、オツベルをここまで称賛する立場に立つて物語をするのか。単なる悪者が成敗される物語として読まないときに、牛飼いが何者かを考える必要がある。オツベルを狡猾な金持ちと設定し、より悪い役を倒す話にすると、話は大いに盛り上がる。しかしそれは物語としての見方である。また牛飼いが単にオツベルを尊敬しているとは考えられない。オツベルの称賛に対して、牛飼いは白象の牙や皮をほめる以外、特に良くも悪くも評価していない。ここからオツベルが資本家であることを考えるとき、オツベルをほめることで資本主義を暗に肯定していると考えられることはできないだろうか。オツベルら資本家がいなければ、世の中は回らない。現在の日本を見れば、資本主義が正しい選択だったということを否定できないのではないか。資本家の崩壊を切り取った「オツベルと象」の、オツベルへの賞賛は、牛飼いの言葉を借りた資本主義への賞賛だと考える。

## (二) 「オツベルと象」にみる経済観

「オツベルと象」において、結末で描かれているのは地主オツベルの死と解放された白象である。この結末から、「搾取する資本家の死」

「資本主義からの解放」を考えていきたい。

前述のように、語り手の牛飼いは、オツベルを「オツベルときたら大したもんだ」と評価する。また押しかけた象にひるむ百姓を鼓舞したオツベルに対し、「オツベルはやっぱりえらい」と、依然褒め称えた表現をしている。これらは、オツベルの経営手腕や攻めてくる象にひるまない勇敢さを誉めているのである。一方、第二日曜では労働の後、「せいせいした」「疲れたな、うれしいな」と働きがいを口にしていた白象であるが、第五日曜では「ときには赤い竜の目をして、じっとこんなにオツベルを見下ろすようになって」いる。資本家オツベルへの態度が、第二日曜と第五日曜で真逆のものになっているのである。

その後、そのオツベルに死が訪れる。過酷な労働を強いられ、搾取され続けていた白象の仲間たちによる報復をうけるのである。ここでの白象は、「労働者」のメタファーだ、とすることもできよう。白象の要請で呼ばれた仲間の象のおかげで、オツベルは死に白象は解放される。牛飼いから賞賛されていた資本家オツベルは、労働者の白象の手で殺されるのである。ここでのオツベルの死は「資本家の地位の崩壊」、白象の解放は「資本主義からの解放」と重ね合わせることができる。

しかし、ここで一つの疑問が浮かび上がる。資本主義を打破した結果、「労働者」はどこへ向かうのであろうか、ということである。宮沢賢治が、このような「資本主義からの解放」を作品の背景に潜ませた後、果たしてどうすればよいか、を明記していないのである。解放された白象が、その後どうなったか描かれずに物語が締めくくられたように。

ところで、先に述べた白象の「赤い竜の目」という描写について再度考えてみたい。資本家オツベルを見下ろす白象は、「赤い竜の目」を

している。この目は、資本主義に対する宮沢賢治自身の批判の目とも考えることができるだろうか。資本主義と対比する考え方として社会主義がある。労働者である白象の目を借りて、宮沢賢治は資本主義に疑問を抱いたのではないだろうか。

だが、対比する考え方である「社会主義」に対しても、宮沢賢治は同様に疑問を抱いていたのではないだろうか。この作品が描かれたのは一九二六年、社会主義国家の代表ともいえるソビエト連邦が成立したのは一九二二年である。結果論にすぎないのかもしれないが、ソビエト連邦は一九九二年に崩壊し、社会主義は理想的な経済の考え方はなかった、と結論づけられる。

仲間の象に解放された白い象は、「ほんとにぼくは助かったよ」と、「寂しそうに」笑うのである。資本主義を打破し解放された象だが、心から喜びを表現しているわけではない。また、最後の「牛飼いのセリフも印象的である。「おや、川へはいっちゃいけないたら」というセリフである。

川には、彼岸と此岸がある。それぞれ「社会主義」と「資本主義」のメタファーだと捉えるならば、資本主義から解放されても社会主義に向かわないように、というメッセージを投げかけているようにも読み取れるのである。

「赤い目」を持ち資本主義を批判する一方、その打破には「寂しい笑い」を浮かべ、社会主義に対しては「いっちゃいけない（はいっちゃいけない）」と述べる。宮沢賢治は、「経済」というシステムに疑問を抱き、「オツベルと象」にその思いを反映させたのではなからうか。宮沢賢治の言葉に「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」というものがある。これは、経済という考え方に限界

を感じた賢治の、心からの叫びであったのかもしれない。

### (三) 牛飼いの視点

作中、牛飼いは終始オツベルを賞賛する立場にいる。オツベルを考察(二)の通り「資本家」「資本主義」のメタファーと捉えるならば、牛飼いは資本主義に好意的な目を向けている人物と言ふことになる。

ところでそもそも何故「牛飼い」はこの作品に登場したのか。ストーリーはオツベルと象によって進められ、牛飼いに触れる部分は作品の最初と最後のたった二行きりである。ストーリーには全く関与していない牛飼いの口から、何故この作品は語られなければならないのだらうか。

関与していないと言っても、牛飼いのオツベル賞賛という側面は、作中において非常に重要な役割を担っている。簡単なあらずじを述べれば、冷酷非道なオツベルに虐げられた白象が仲間の象たちに助けを求め、オツベルは象たちによって踏み潰されてしまうという一見悪人退治物語である「オツベルと象」の中において、牛飼いは終始オツベルを賞賛し続けることによって読み手に新たな視点を提示しているのだ。これは牛飼いかから、更に言えば賢治からの「オツベルは本当に悪なのか？」という読み手への問いかけではないだらうか。この問いはオツベルにとどまらず、我々が日常表面的に「悪」と判断しがちなものへの、つまり我々の価値観へ疑問を投げかけているのである。ここで賢治は、牛飼いの口を通して固定観念からの脱却を図ろうとしたのではないかと考える。

では何故それが牛飼いの口から語られなければならないのかという最初の問いに戻ろう。物事に善悪の判断をつけるのは常に第三者

の目である。オツベルは決して「悪い雇い主」になろうとしたのではない。オツベルに「冷酷非道」というレッテルを貼り付けたのはあくまで当人以外の目である。つまりこの作品の善悪を語る為には、ストーリーに関与していない第三者の存在が必要だった。これが牛飼いの持つひとつの重要な役割である。

牛飼いが第三者としてストーリーと読み手との間に介在することによって生まれたもうひとつの側面は、言葉通り「オツベルは悪なのか？」という疑問である。よくよく読んでみると、オツベルの白象に対しての態度には非があるものの(重労働低賃金、ここでは食事)、有能な経営者なら誰しもが持つ非情さであり計算高さであり、オツベルを特別な悪者と捉える事の出来る表現がないことに気付く。従来特に労働者からは、資本家とは強欲で非道な人間と見られがちだが、そんな彼らの手腕なくして労働者は自らの働き口、つまり稼ぎを得ることが出来ないのもまた事実なのだ。労働農民党の有力献金者であった賢治は、労働者の叫びを聞きつつもその矛盾に気付き、牛飼いの口を以て「資本家は必ずしも悪ではない」と語りかけているのではないだらうか。

ここまで牛飼いによるふたつの側面を提示してきたが、いずれも牛飼いの口を借りた賢治自身の主張であることがわかってもらえるとと思う。つまり牛飼いと、賢治の代弁者なのだ。

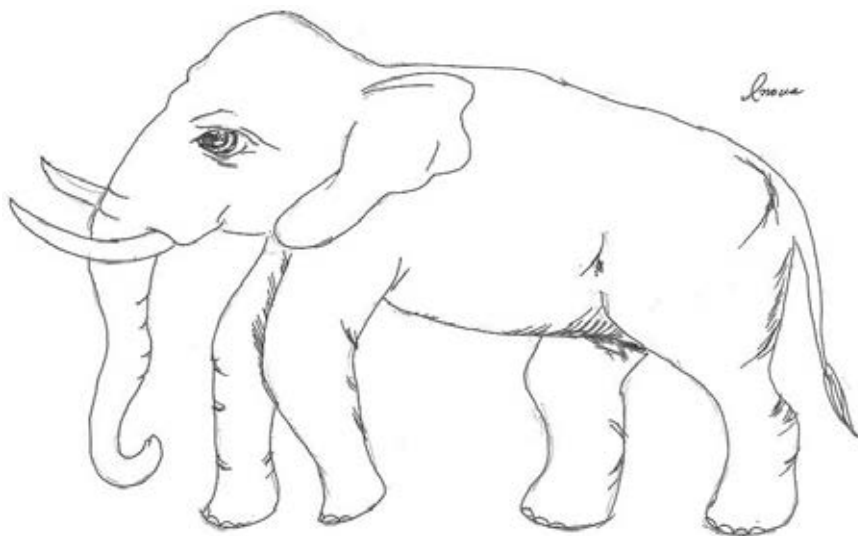
少し視点を変えて、賢治自身に目を向ける。賢治作品を語る上で忘れてはならないのが「イーハトーブ」の存在である。イーハトーブとは、賢治が故郷岩手をモチーフとして創り上げた理想郷のことであり、ほとんどの賢治作品はイーハトーブ内で進行している。勿論本作品も例外ではない。イーハトーブ内においては、全てのルール、価値観が賢治の創造あるいは理想に則っている。しかしそれらは単なる架空や

虚構ではなく、「心の深部に於いて万人に共通する」世界であり帰着点なのだ。賢治は「注文の多い料理店 広告文」の中で述べている。イーハトーブとは、目には見えないが確かに存在するものとして賢治は捉えていた。そうした「既に完成された世界」を語る中で、例えば本作品における牛飼いのように、賢治が自身を潜り込ませた作品というのは他にも存在する。例えば「グスコープドリの伝記」の主人公ブドリの生き方などは、賢治が尊んだ自己犠牲の精神を如実に体現したものであるし、「虔十公園林」の主人公虔十に至っては、イーハトーブ内であり得るべき賢治自身の姿を描いたものだといわれている。(諸説あり)

『日本文学学研研究資料業書 宮沢賢治』(有精社)の中で、賢治は「現実からの離脱と飛翔をはかり続けた理想家」と述べられている。資本主義と社会主義、善と悪、現実と理想など、賢治は一生をかけて本質的に対立するふたつの物事の調和と一致を模索した。その探究の原点であり軌跡であり、また終着点こそが「イーハトーブ」、理想郷なのだろう。つまりイーハトーブとは単に物語を生み出すための土台ではなく、宮沢賢治という人物を支えた内面世界であったといえる。しからば、イーハトーブから私たちに語りかけた牛飼いは、童話という幻想世界とこの現実世界の融和点を模索し続けた賢治自身の現し身といえるだろう。

### 【参考図書】

- ・大塚常樹『作家の随想 8 宮沢賢治』(発行年を記載、日本図書センター)



- ・『日本文学学研研究資料業書 宮沢賢治』(発行年を記載、有精社)
- ・中野登志美「宮沢賢治「オツベルと象」の教材性の検討―言葉の二重性という観点から―」(『広島大学大学院教育学研究紀要』、平成二十四年十月、広島大学大学院、p. 153-161)
- ・原子朗『宮沢賢治語彙辞典』(平成元年十月、東京書籍)

## 空中ブランコ乗りのキキ（別役実）

伴 太貴、白井 沙也加、林 禎之、吉田 衣織

### 一 作者と作品について

別役実は、一九三七年に旧満州（現中国東北部）に生まれる。終戦と同時に日本に引き揚げてくる。長野北高校を卒業し、早稲田大学政治経済学部に入學。ベケットらの不条理劇に影響を受け、鈴木忠志らと劇団早稲田小劇場を創設。在学中に『AとBと一人の女』など数々の戯曲を発表する。大学中退後は土建一般労働組合の書記としてサラリーマン生活を送りつつ、喫茶店で演劇の作品を書き続ける生活を送る。戯曲『象』（一九六六年）で注目され、『マッチ売りの少女』（一九六六年）『赤い鳥の居る風景』（一九六七年）で第十三回（新劇）岸和田國土戯曲賞を受賞。一九七一年、『街と飛行船』『不思議の国のアリス』で紀伊國屋演劇賞受賞。同年『そよそよ族の叛乱』で芸術選奨新人賞、一九八七年に戯曲集『諸国を遍歴する二人の騎士の物語』で読売文学賞、一九八八年、『ジヨバンニの父への旅』で芸術選奨文部大臣賞を受賞。二〇〇七年、劇作百三十本を達成する。戯曲や童話の他に、生物学の常識を覆す奇書のふりをしたジヨークエッセイ『虫づくし』をはじめ、日本古来、および現代の妖怪の生態を解説した『もののけづくし』や、『けものづくし』『鳥づくし』『魚づくし』など「〜づくし」シリーズは、ナンセンス作家としての著者を一躍有名にした。また衝撃的な事件の闇に包まれたメカニズムを鋭敏な目で分析した犯罪エッセイ、「犯

罪症候群」などの独創的な論考も発表する。二〇〇三年から二〇〇九年までは兵庫県にあるピッコロシアターに併設された兵庫県立ピッコロ劇団の代表を務めていた。二〇一三年には芸術院会員に選ばれる。

『空中ブランコ乗りのキキ』は、三省堂の『現代の国語1』にて取り扱われている教材だ。原本は一九七五年の『黒い郵便船―別役実童話集』（三一書房）に収録された「空中ブランコの子のキキ」である。元々はNHKの子供向け番組「おはなしこんにちは」のために書かれた話で、一九七四年日本放送出版協会によって「NHKおはなしシリーズ1 空中ブランコの子のキキ」という絵本が出版された。翌年にはこの絵本を大村はまが作文指導の教材として用いたという実践報告を出し、そ



の後一九七八年にはじめて教科書に掲載された。

## 二 叙述について

そのサーカスでいちばん人気があったのは、なんといっても、空中ブランコ乗りのキキでした。

「その」から物語を始めることにより、読者に如何様なサーカスであったか興味を持たせるとともに、素早く物語に引き込む効果を發揮している。また、「なんといつても」は「特に」と同様の意味である。当該表現独特の効果としては、直後の名詞へと読者の目を引く働きがある。聴覚的視点においても、一呼吸おくことで、次の言葉への注意が促される仕組みになっている。最後の「でした」は、完結した物語を今から紡いでいくのだという予感を読者に促す。

まるで鳥みたいじゃないか。

キキの空中ブランコを見て、観客の一人がした発言。「まるで」と「みたい」が綺麗に呼応することで、キキが本当に鳥であるかのように感じたその感情が読み取れる。また、「か」で文を締めくくることにより、感嘆を漏らす観客の姿が想像できる。

人々はみんな、キキの三回宙返りを見るために、そのサーカスにやってきました。

「人々は」の直後に「みんな」と挿入することにより、実に多くの人々であったことが窺い知れる。人々は、「キキ」をではなく、あくまで「三回宙返り」を見る為にサーカスへやってきていることが分かる。

「なあ、キキ……。」

「なあ」と呼びかけることにより、何か話を切り出そうとしている印象が与えられる。突然結論から話し出している訳ではないので、緊急的な連絡ではないことが分かる。また、「……」は、発言の躊躇いか、或いは話者の感慨に耽った様子かのいずれかを表す。この場合、直後の会話文の脈絡を見ると、肯定的なそれであることから、後者の判断となる。つまり、キキのサーカスに対する貢献について、感慨深く思う団長の気持ちが表されている、ということである。

「だってどこのサーカスのブランコ乗りも、二回宙返りしかできないんだからね。」

この前文においてキキを「世界一」と評しているのは、ただのおだてや励ましとしての発言ではなく、あくまで根拠を持って話していることが、「だって」という表現から読みとれる。ここでの根拠とは、「どこのサーカスのブランコ乗りも、二回宙返りしかできない」ことである。すなわち、団長がキキの存在意義を肯定する材料としては、専ら宙返りの回数であり、読者も、無意識のうちに、キキのアイデンティティは三回宙返りをすることであると刷り込まれる仕組みとなっている。

「心配しなくてもいい。誰にも三回宙返りなんてできやしないさ。それに、もし、誰かがやり始めたら、おまえさんは四回宙返りをしてみせればいいじゃないか。」

団長がキキを励ますために言った言葉である。団長は、キキの実力

を認めており、キキに信頼をおいているのだが、キキの抱える悩みには鈍感であり、キキの本心を理解していない。「三回宙返りなんて」という所で、他のサーカスのブランコ乗りが二回宙返りしかできないのに、三回宙返りをするキキを高く評価するとともに、「四回宙返りをして見ればいいじゃないか。」と言うところから、キキへの期待がとても大きいことが分かる。しかし、団長の期待しているのは、キキのブランコの演技への期待というよりは、三回転、四回転宙返りへの期待であるということがこの文で読み取れる。

「四回宙返りを？できませんよ。練習してみました、三回半がやっとなんです。本当に、鳥でもないかぎり四回宙返りなんて無理なんです。」

「四回宙返りを？」というところから、まだ三回宙返りも自分以外にできる人がいないのに、四回宙返りを求められていることに対して、一度耳を疑っている。「できませんよ。」というのは、自分の現時点での実力ではできないという意味があるとともに、四回宙返りを求められていることに対しての驚きから反射的に否定したという様子も窺える。「本当に」というところで、四回宙返りができないことを念を押して否定している。「鳥でもないかぎり」から、四回宙返りがいかに難しいものであるのかということとを比喩を使って表現している。「無理なんです。」と断定していることから四回宙返りを求められたことにたいする強い反発が窺える。

キキは、人々の評判の中で、いつも幸福でしたが、誰か他の人が三回宙返りを始めたらと、考えると、そのときだけ少し心配になるのです。「いつも幸福でした。」から、キキは普段三回宙返りをして人々から

歓喜されることを幸せに思っていることが分かる。しかし、「人々の評判」というものを意識するあまり、ただ一人だけ三回宙返りができるということにこだわり、三回宙返りをできる人が現れると自分の評価が失われるのではないかと危惧している。「そのときだけ少し心配」から、いつもは三回宙返りをする事によって安心した状態を得ていることがわかる。

「そのときは、団長さんの言うとおり、四回宙返りをしなければいけないのだろうか・・・。」

キキは、四回宙返りは不可能であると考えているが、求められた時には人々の期待に答えてやらなければいけないだろうと考えている。ただ文末に余韻を残すことから、人々の期待に本当に答えるべきであるのか疑問が感じられる。それは、人々の評価が「四回宙返り」という行為に対して向いているのであって、キキの演技自体の評価でないとすれば、実際に不可能である四回宙返りに挑戦する必要があるのかという疑問であると推測する。しかし、ここではやはり答えるべきであるという意味が続くのではないか。

「四回宙返りなんて無理さ。人間にできることじゃないよ。」

この文は、練習を見に来たピエロの口ロがキキに言ったものである。前述に「およしよ」とあることから、キキのことを不安に思っていることが分かり、「なんて」から四回宙返りが到底できないことを示唆している。語尾に「さ」をつけることにより、言葉を和らげ、キキを諭すような働きかけをしている。「人間にできることじゃないよ」から、口ロが四回宙返りを不可能であると捉えていることがわかる。

「でも、誰かが、三回宙返りを始めたら、私の人気は落ちてしまうよ。」

「誰かが」の後に句読点を打つことにより、その言葉を強調させている。キキは、自分の人気は自分しかできない三回宙返りができるとにあり、三回宙返りを誰かがやってしまうと自分の人気は落ちてしまふと思っっている。この文から、キキは自分の人気が「三回宙返り」ができることにあると思っっていることが分かる。

「いいじゃないか。人気なんて落ちたって死にやしない。ブランコから落ちたら死ぬんだよ。いっそ、ピエロにおなり。ピエロなら、どこからも落ちやしない。」

この文は、ロロがキキに言った言葉である。「人気なんて落ちたって死にやしない。」という言葉から、ロロは、キキの人気はただ一人「三回宙返り」をできることであることを認めている。「ブランコに落ちたら死ぬんだよ」というのは、同じくブランコ乗りであったキキの父がブランコから落ちて死んだことから、キキにブランコの危険を訴えている。

「人気落ちるといふことは、きつと寂しいことだと思ふよ。お客さんに拍手してもらえないくらいなら、私は死んだほうがいい……。」

「きつと……だと思ふ。」というところから、人気落ちるといふ未経験の体験を何となく想像している。また、断定していないことから、ロロがキキの人气が落ちると認めたことに対して、どこか認めたくないといった思いがある。「お客さんに拍手してもらえなかったら私は死んだほうがいい……。」から、キキの人々からの評価に対する執着が感

じられる。文末に余韻を残していることから、様々なことが考えられる。行き過ぎた言動に対しての少々の沈黙、この余韻で何かを決意している、本当にそうなのかという自問自答などが考えられる。

「そうですか。惜しいことをしましたね。今夜は、特にうまくいったんです。飛びながら自分でもまるで鳥みたいだっと思えたくらいなんですからね。」

「惜しいことをしましたね。」から、どこかやせたおばあさんに対して少し見下した様子が窺える。「今夜は、特にうまくいったんです。」とキキは我ながら絶賛している。鳥を比喻に使い、おばあさんにすごい飛びであったことを自慢している。

おばあさんは、あいかわらずシャボン玉を吹きながら、遠くカーニバルのテントの建ち並ぶ辺りですいたり消えたりしている赤や青の電気を見ておりましたが、急にキキの方に振り向いて言いました。

最後の「急にキキの方に振り向いて言いました。」から、キキの言っていることを上の空で聞いていたように見せかけて、しっかり聞いていたことがわかる。わざわざ振り向いて言うということから、おばあさんはこれから言うことに対して、キキに伝えたい内容であることが分かる。

お前さんは知っているかね？

何を知っているのかがこの段階ではまだ明らかにされていない。後の「今夜、この先の町に……」という部分と呼応して、倒置法的な文章の置かれ方がされている。先にこのセリフを置くことで、その内容に



読者を引き込む効果があるのではないか。

本当ですか。

この時キキはまだ金星サーカスのピピが三回宙返りに成功したことを知らない。この言葉の裏に、真偽を問う気持ちと、驚きや衝撃的な気持ちを読み取れる。どちらかといえば、前者よりも後者の意味合いの方が強いように感じる。驚きと衝撃とにより条件反射的に出た言葉か。

また、この日が来るのが以前からわかっていたと捉えれば、「どうとうその時がきたか」という気持ちの表れとも読める。

どうとう成功したのさ。みごとな三回宙返りだったそうだよ。

「どうとう」から、今まで失敗を重ねてきたがついに、というニュアンスが生じる。失敗してきた期間が長いことを示唆するような書き方。「そうだよ」とは伝聞の表現。ここから、このおばあさんが直接ピピの三回宙返りの成功を見たわけではなく、誰かほかの人からその情報聞いたということがわかる。

そうですか……。

「……」の後に、隠れたキキの気持ちを読み取れる。文脈から判断すると、ここには「どうしよう」「ついにやったか」といった焦りの気持ちが表示されていると考えられる。

おまえさんの三回宙返りの人気も、今夜限りさ……。

「も」は事柄が並立しているときに使う助詞。ここでは「三回宙返

りの人気」と「キキの所属するサーカスの人気」が並立している。キキの所属するサーカスでは、空中ブランコ乗りのキキの三回宙返りが人気だったと物語の冒頭で述べられている。ここから、キキの人气がサーカス全体の人気につながっていると考えられる。よってキキの人气が落ちれば、サーカス自体の人气や評判が落ちることになる。これを助詞「も」によって表現していると考えられる。

また、「も」については、キキの他にも今まで人気を失ってきたブランコ乗りがいたことを連想させ、キキもその一人となる、という意味合いで使われている「も」であるとも捉えられる。

そうですね……。

「そう」は直前のおばあさんのセリフの内容を受ける。自分以外の人が三回宙返りに成功すれば、自分の人气が落ちるということを理解しており認めている。「……」の後には、焦りと困惑が隠されている。

キキは黙ってぼんやりと海の方を見ました。

「黙って」から、これまで頭では分かっていたながらも、事実を認めるのを避けておばあさんに反論していたキキが、事実を認めたことを示唆する。「ぼんやりと海の方を見」たことから、意図的に海を見たというのではなく、何か考え事をしながら視線が海の方向いたということを表している。視線が何かに注がれているわけではない。

しかしまもなく振り返ってほんのちよつとほほえんでみせると、そのままゆつくり歩き始めました。

「まもなく」は基準となる時点からあまり時間が経たないうちに、

という意味。ここで言う基準とは前文の「ぼんやりと海を見」たとき。「ほんのちよつと」から、はつきりとは見えないほどの笑みであることがわかる。さらに「みせる」とあるので、挨拶や会釈の際にするような口角を少し上げる程度の作り笑いか。少なくとも喜びや嬉しさがあつたわけではなく、意図的にほほえんだことがわかる。「そのまま」とあるので、ほほえむという動作と歩く動作が一連の流れになつていくことがわかる。おばあさんからの何かしらの反応を求めているわけではない。「ゆつくり」からは、急いで立ち去るというわけではなく、不動の決心が読み取れる。ここでの決心とは四回宙返りをするということ。

いいんです、死んでも。

通常の文章ならば「死んでもいいんです。」となるところを、敢えて倒置法を用いて逆にすることで、言葉に重みを与えている。キキの並々ならない決心が表れている。キキにとつて人気が落ちることは死ぬことよりもつらいことだということがわかる。

**おまえさんは、お客さんから大きな拍手をもらいたいという、ただそれだけのために死ぬのかね。**

「ただそれだけ」から、おばあさんがお客さんから大きな拍手をもらうということを軽視していることがわかる。おばあさんにとつては大きな拍手をもらうことは死ぬことよりもずっとつまらないことだということがわかる。大きな拍手をもらうことより、生きていることの方が大事だと思つている。

そうです。

キキにとつては、大きな拍手をもらえなくなることは死に値することであることがわかる。拍手をもらうことは生きていることよりも価値があることだと捉えているようにとれる。

いいよ。それほどまで考えてるんだつたら、おまえさんに四回宙返りをやらせてあげよう。おいで……

ここに出てくる「いいよ。」は許可ではなく理解を示すことば。「わかつたよ」と同等。「やらせてあげよう。」からこのおばあさんにはなにかしらの能力があることがわかる。おばあさんが魔法使いなのかという疑問を読者に与える効果がある。「……」からあやしいな雰囲気がついてくる。そのような効果を狙っているのか。

**おばあさんは、かたわらの小さなテントの中に入り、やがて、澄んだ青い水の入った小瓶を持って現れました。**

「かたわら」は、側の・すぐ近くの意味。キキたちが話していた港の一角に小さなテントがもたらあつたことがここで明らかになる。「やがて」はまもなく・じきにという意味。テントに入つてすぐに出てきたと思われる。魔法使いの小屋のようだ。おばあさんが持つてきた小瓶の中身が、キキに四回宙返りをするための能力を与える薬であることがわかる。「現れる」とは、今までなかったものが姿を見せるといふ意味がある。したがつて「現れた」という表現からは、おばあさんが急に姿を見せたような表現がなされており、彼女が人間ではないかのような雰囲気を感じ出す効果がある。

町の人々は一斉に口をつぐんでしまいました。

「一斉に」とあるので、意図せずとも皆その瞬間に黙ったということがわかる。皆が一気に黙ってしまうほど、四回宙返りは人間離れしたすごい技だということがわかる。また、皆が人間にできるはずがないと思っっているということもわかる。

音楽が高らかに鳴って、キキは白鳥のように飛び出してゆきました。

「白鳥のように」という表現から、キキが美しく優雅に飛び出していったことを読者に連想させる。「飛び出していく」から、キキは勢いよくテントの陰から出て行ったことがわかる。ここでキキが白鳥のようだと例えるのは、この物語の結末への伏線になっていると考えられる。

テントの高い所にあるブランコまで、綱ぼしごをしようと登ってゆくと、お客さんにはそれが、天に昇ってゆく白い魂のように見えました。

「するすると」という表現があることで、キキが簡単に、かつ素早く、身軽に高い位置にあるブランコまで登って行ったことがわかる。

「天に昇ってゆく白い魂のように見え」と書かれているのは、物語の結末への伏線となっているように思われる。キキが死を覚悟しておばあさんからもらった薬を手に、四回宙返りに挑戦するということを一切知らないお客さんに、キキが「天に昇ってゆく白い魂のように」見えたということは、それほどキキが人間離れした身軽な動きをしていたということであろう。また、キキの四回宙返りに対する執着心や成功への強い気持ちが外に表れていたことを表す一文とも取れる。

見ててください。四回宙返りは、この一回しかできないのです。

一見、観客へ向けた言葉のように思えるが、この前文に「心の中でつぶやきました。」とあるため、これはキキの心内語であることがわかる。すると、この言葉は、観客に向けての言葉でもあり、キキが自分に言い聞かせている言葉としても捉えられる。特に「この一回しかできないのです。」という部分からは、一回成功させれば、自分の命も終わりであるということ自分を言い聞かせているようである。そして、最後の覚悟を決めていると捉えられる。「見ててください」からは、四回宙返りを必ず成功させるという強い意志が表れている。

ブランコが揺れるたびに、キキは、世界全体がゆっくり揺れているように思えました。

「思える」というのは自然とそう思うことができる、自発の意味がある。一回きりの四回宙返りをするという意志は固まっているものの、無意識のうちにキキの心が揺れ動いている様子や、キキの最後の躊躇を揺れるブランコと重ねることができている。

しかし、次の瞬間、キキは、大きくブランコを振って、真っ暗な天井の奥へ向かって飛び出していきました。

「しかし、次の瞬間、キキは、」と読点で細かく区切ることで、直前の「ぼんやりと」と対照的な印象を受け、一気に事が展開していく様子を表す働きがある。また、この文を境に、キキの心情を表す表現はなくなる。「大きく振って」から、ブランコだけではなく、おばあさんやお客さんなど、この世の全てのものを振り切ることを表現していると考えられる。「真っ暗な」は、即物的に会場の明るさを表現すると同

時に、一度きりしかできない、今までに成功したことの無い技に命がけで挑戦する、キキの心情を表している。

ひどくゆっくりと、大きな白い鳥が滑らかに空を滑るように、キキは手足を伸ばしました。

「ひどく」という程度がはなはだしい様を表す副詞を用いることによつて、キキの一举一動に対して、読者に緊張感を持たせている。また、冒頭部分で観客がキキを喩えた「鳥」を、ここでの比喩に用いることによつて、読者の視点を観客からの視点に置き換える効果がある。「白い大きな鳥」は結末部分で再び現れるが、その鳥がキキであることを連想させるための布石であるとも捉えられる。

人々のどよめきが、潮鳴りのように町中を揺るがして、その古い港町を久しぶりに活気づけました。

「どよめき」は、大勢の人が思わず上げる声で、辺りがざわめく様子である。「潮鳴り」は、遠くから響きわたってくる潮の音である。「港町」という設定の中で、「ざわめき」を「潮鳴り」という関連のある言葉にたとえることで、より効果的な比喩表現となっている。また、それまで「ある港町」「その港町」としか表現されていなかったにも関わらず、「古い」と修飾されている。「活気」と対照に近い「古い」と、「久しぶり」という表現を用いることで、港町の活気づけられた振れ幅がより大きく感じられる。

でもその時、誰も気づかなかつたのですが、キキはもうどこにもいなかったのです。

「でも」は前文を受け、逆説的な展開になることを示す役割を果たしている。「その時」は直前の観客が感動している時を指すのであるうが、具体的に四回宙返りを終えてからどこで消えたのかが明記されていない。これは、「誰も気づかなかつたのですが」の「誰も」のうちに読者も含ませ、読者を観客たちと同様、キキがどこに行ってしまったのか、分からない状況に陥らせる効果がある。また、「のです」より、作者が強く表現したかつた部分だとも考えられる。

翌朝、サーカスの大テントのてっぺんに白い大きな鳥が止まっついて、それが悲しそうに鳴きながら、海の方へと飛んでいったといひます。

「白い大きな鳥」は、キキを表現する言葉の一つ。「悲しそうに鳴きながら」というのは、実際にその鳥が「悲しい」と思つて鳴いたのではなく、その鳥の鳴き声を聞いた者の主観的な印象である。「といひます」は伝聞調の表現であり、それを見たのは作者でも読者でもない。直後の文に、「それがキキだったのかもしれない」と書かれていることから、ある街の人が白い鳥を見てキキを連想し、その鳴く姿を「悲しい」と捉えた可能性もある。直後に「町の人々はうわさして」いたことから、キキが失踪したことは、町の人々に伝わっていることが分かる。しかしながら、「白い大きな鳥」からキキを連想した人が、なぜ「悲しそう」に鳴いていると捉えたかは大きな疑問である。単純に四回宙返りを成功させた人間が、失踪したとはいへ「悲しい」という感情を持つていると町の人々が考えるのは不自然だ。ではおばあさんとのやり取りを町の人々が知っていればどうか。おばあさんとのやり取りを聞いていた町の人がいるとは考えにくい。聞いていたのはほかでもない読者である。この文から、作者は読者に、キキは薬によつて四回宙返り

を成功させた代償に鳥になり、悲しい感情を持っているという印象を植え付けたかったのではないかと考えられる。それがなぜ「悲しい」のかは、読者の想像に委ねられる。

### 三 考察

#### ▼先行論

五十嵐淳「境界の物語」として「空中ブランコ乗りのキキ」を読む」（科学的「読み」の授業研究会、『研究紀要』七、二〇〇五年、三五―四一頁）より

「キキ」を読み解くキーワードの一つは「境界」である。それはある世界と他の世界のいさかいのことである。したがって、そこには、あるひとつの世界の限界や究極があったり、互いに接するふたつの世界の特徴が混在したりする。そしてそれは、際立った相反する特徴の混在であったり、逆にどちらの特徴とも言えない曖昧さであったりする。

「キキ」は境界の物語にふさわしい条件を備えている。（中略）

神業とも言える四回宙返りを目の当たりにした驚きや感動とともに、死の不安や「負い目」から解放された安堵感も感じられる。

しかし、この強い感動・感激のベクトルはキキに向いていない。「辺りにいる人々と、肩をたたき合いました」と書かれているばかりである。彼らは港町の人々同士で、神業を目にすることができた感動を共有しあい、死の不安からの解放感を共有しあい、ともにこの場にいることの連帯感や一体感を味わっているのである。

#### (一) 境界人の孤独

五十嵐の先行論にもある通り、キキと波止場のおばあさんは、生と死や、現実世界と異界といった境界にたたずむ人物たちである。両者とも、作中を見ればわかる通り、理解者がいない孤独な存在として分かる。キキの周りには、団長さん、ロロ、お客さんと言った人物たちが登場する。しかし、誰一人として、キキと感情を共有し合えるような者はいない。団長さんはキキに、簡単に四回宙返りを勧めている。

ロロは、キキと全く逆の生き方であり、共感等到底不可能である。さらに、親身になって、キキを制止しようとしているのであれば、少々強引にでも引き留めることはできたはずだ。そして、お客さんに関しては、五十嵐の主張にもあるが、感動の対象はあくまで四回宙返りの成功に立ち会えたことなのである。それは、ピピの三回宙返り成功の知らせを聞いた時に、港町の人々が湧いたことを考えれば実に容易く理解できる。お客さんにとってキキは、交代可能な存在だったのだ。

波止場に現れたおばあさんは、「やせた」と表現されている。また、「かたわらの小さなテント」を所有していることから、テント暮らしであることが分かる。つまり、非常に貧しく、他の人たちとは住む場所が違うのである。また、決定的な論拠は原作にある。元々、原作において、このおばあさんは、「乞食のおばあさん」と表現されていたのである。つまり、両者は互いに孤独な存在として共感をし、最後の四回宙返りの際には、キキをして『あのおばあさんも、このテントのどこかで見ているのかな……。』と思わせしめたほどの影響力であった。

#### (二) 閉鎖空間に生きたキキの心的成長

キキは、幼いころからサーカス団内という、非常に限られた空間での生活であった。その為、一般的に常識とされるような考え方や身についておらず、逸脱したそれを手にするに至っている。また、キキは、作中に具体的な年齢が書かれている訳ではないが、描写を見ると、中世的な若い青年といった印象を受ける(そもそも女性が男性か、という議論はここでは割愛させていただく)。

閉鎖空間の中で育つ少女を描いた作品として、太宰治の『魚服記』がある。当該作品内では、スワは小さな村のはずれに父と二人きりで生活をする様子が描かれている。ある日、一人の学生が、その近くを流れる滝に転落し、死んでしまったことから物語は始まっていく。ここに描かれるスワという少女は、社会性に乏しく、外的刺激がほとんど無いと言ってよい。その為、他二人の登場人物から受ける影響力は、スワにとって非常に比重の高きものとなっているのである。つまり、閉鎖空間内では、限られた周囲の人物の言動によって、当該人物の心的変化及び成長は起こるのである。

キキにおいても、団長さんやロロ、そして波止場のおばあさんといった、たった数人の言動による影響は凄まじい。特にロロは、「いいじゃないか。人気なんて落ちたって死にやしない。ブランコから落ちたら死ぬんだよ。いっそ、ピエロにおなり。ピエロなら、どこからも落ちやしない。」という、ピエロになる選択肢など持ち合わせていないキキに対する、全く心無い言動によって、キキに四回宙返りの実行を決断させてしまっている。しかし、実際は、キキ自身の気付きを促進したまのであると言える。当初、キキは、潜在的に、人の評価を自分のアイデンティティとして持ち合わせていたが、それを自覚まではしていなかった。それを、各人物たちとの対話によって顕在化させ

ているのである。そうして、最後にはその気持ちを自覚している。前項を踏まえるなら、波止場のおばあさんは、キキの気持ちをより理解できる立場として、最後に彼(女)の後押しをするに最適な存在であったと言えるのである。



## 夏を見上げて。(あさのあつこ)

伊藤 直毅、小幡 千尋、岡崎 隆祥、表 里美、梶 隼一郎

## 一 作者と作品について

あさのあつこ(本名、浅野敦子)は『バッテリー』『The MAN ZAI』『弥勒の月』などの著作がある。岡山県英田郡美作町湯郷(現・美作市)出身。父は税務署員、母は高校教師。幼児から小学生まで、母方の祖母に姉弟3人ともに世話される。祖母の影響で漫画ファンとなり、漫画家を志望するも、十二歳で絵の才能が無くあきらめる。その後、中学二・三年のころから、作家を志す。

作家としてのきっかけをつかむため東京の文学部に進学。卒業後、岡山市で小学校の臨時教諭を二年間務める。学校教員ならまとまった休暇を執筆に当てられると思つてのことでもあった。

三十六歳で、大学時代に指導を受けた作家で主宰の後藤竜二に誘われ、日本同人協会「季節風」同人となる。「季節風」に連載した『ほたる館物語』が認められ出版され三十七歳で作家デビュー。一九九七年『バッテリー』で野間児童文芸賞を受賞。幅広い世代の支持を得て児童文学としては異例の一〇〇〇万部のベストセラーになる。一九九九年『バッテリー2』で日本児童文学者協会賞を受賞。二〇〇五年『バッテリー』全巻で小学館児童出版文化賞を受賞。

二〇一〇年七月「季節風」代表の後藤竜二の急逝に伴い、後継の代表に選任と総会で承認される。二年間の任期後再任され、継続中。

「夏を見上げて。」は、単行本『十二

歳の文学』からの出典。この『十二歳の文学』は、第一回十二歳の文学大賞の上位受賞者の作品と当代を代表するクリエイターによる作品がコラボレーションするという企画で出版されたもの。『夏を見上げて。』は、そのための書き下ろし作品である。

## 二 叙述について

道に水たまりができていた。

この文の情景から回想が始まり、「怖いから震えちゃうんだ。それつてしようがないだろう。」に再び現在の時間に戻り描写が続いていく。「水たまりができていた」ということは、今は雨は降っていない。雨が止んでいるということから、話の転換が示唆されている。また、雷の場面は時系列的には少し前の回想の場面だということが分かる。

夜の雷なんて身震いするほどに恐ろしい。

「なんて」は、雷が苦手という表現を受けて、雷の中でも夜の雷が



一番恐ろしいというニュアンスを加えている。「身震い」とは、恐ろしいことに対して、体が自然と震える、ということである。一は雷に対して、条件反射的に震えてしまうということが読み取れる。

家も、庭も、町も、神社の森も、一自身もこなごなに砕けてしまうんじゃないかと、足が震える。

「…じゃないか」という言い方から、実際にそのことが起こる恐怖を感じているのではなく、雷という恐怖のイメージから自分の周りや自分自身が砕けるという比喩が使われている。「こなごなに」という言葉からも、雷に対する恐怖をより強く感じることができるといえる。

給食の時間ぐらまではからりと晴れて、真っ青な空だったのに、西の方から濃い灰色の雲が押し寄せて、あつというまに青空を覆ってしまった。

「ぐらいまで」とあり、からりと晴れていた空を見た最後の記憶が給食の時間で、そのあといつまでからりと晴れていたのか定かではないことがわかる。また、この文の直前に「六時間目が始まった頃から急に空が黒くなり始めた。」とあるので、青が印象的だった空の色が急に激に変化した様子が分かる。「からりと」は、空気に湿気がなく、雨を予想させない天気であったことを表している。「真っ青な空」「濃い灰色の雲」と、色が対比させてあり、後に続く「押し寄せて」から、青い空が灰色の雲に浸食されていく様子がうかがえる。「覆ってしまった」とあり、空が曇ったことを良く思わない気持ちを感じられる。

耳をつんざく雷鳴がして、明かりが消えた。

明かりが消えると、光までも見えてしまい、夜と似た環境ができてしまうということになる。それは一にとつて、「身震いするほど恐ろしい」ことであり、「つんざく」（勢いよく突き破る）といった表現からも一の体験している恐怖が伝わってくる。

お調子者の直人が両手を上げて、踊るまねをする。

勇平は小さいころから柔道を習っていて、体も声も性格もどつしりとしている。

直人は、一文前で雷が鳴り、女の子たちが怖がっているのを見て、はやしたて、おもしろがる。勇平は「体も声も性格もどつしりとしている」というところからも分かるように、落ち着いていて、雷には動じていない。周りに対して、おもしろがる直人と、雷に動じない勇平は、対照的であるが、どちらも雷のことを怖がっていないという点では共通している。

一は肩をすくめ、勇平に向かって、しょうがないよなというふうには笑ってみせた。

「肩をすくめ」という表現は、一が雷に怯えていることもあり、勇平に対して大きな態度を取れないことを示している。「しょうがないよな」という表現は、雷で大騒ぎしているクラスメイトに対してのものである。ただしここでは、勇平に調子を合わせただけであるとも考えられる。「笑った」ではなく、「笑ってみせた」とあり無理矢理笑っている。

直人や勇平たちの前でみつももなく、騒ぐことも、しゃがみ込むことも



できない。

「みつともない」はここでは雷を怖がるのが「格好悪い」ということを表しており、女子のように悲鳴をあげたい気持ちも、家で布団にくるまる代わりにしゃがみ込みたい気持ちもあるが、その両方が「みつともない」ことだと思っっている。

だからと言って、威張っているわけでもないし、自慢をするわけでもない。

勉強もスポーツも得意な自分のことについて言っている文であるので、「だからといって」は、自分がすごいと認めたくなくて、「そういう人はよく威張るし、自慢したがるものだ」という考えがあることが見て取れる。よって、自分はあえて威張っていないことや自慢しないことを主張し「自分はそんなことをしない人間だ」と、結果的に自分をほめていることが分かる。

一なりにがんばってもきた。

「も」がついていることから、いつも一番の一も才能だけで認められてきたわけではなく、一自身が努力し、勝ち得たものだという主張が強く表現されている。そのため、一が自分の「努力」を認めてほしいという心情が読み取れる。

その一が、雷が苦手で、雷鳴を聞くたびに泣きそうになるなんて、絶対に知られてはならない。

「なんて」はマイナスイメージの表現であり、一にとって「泣きそうになる」ということがありえないこと、考えたくもないことである

ということが読み取れる。また、「なんて」は、プラスイメージの「その」と対応しており、さらに「そんな」ではなく、「その」と表現していることから、一は『自分はこういう人間だ。こうあるべき人間だ』という強い意識を持っていることがわかる。このことは文末の「ならない」という表現からも読み取ることができる。「絶対に」はこれを強調している。

「たびに」から、「雷が苦手で」という表現を補足する意味合いを読み取ることができる。

一は唇をかみ、心の中で、一秒でも早く雷が遠ざかりますようにと祈っていた。

「唇をかむ」の辞書的な意味は、怒りやくやしさをこらえる、という時に使用する言葉である。ここでは、恐れ・それからくる震えをこらえていえる。また、「思う」ではなく、「祈る」という言葉を使っていることから、一の切実な思いが読み取れる。

すごく親しいってわけではないけれど一は恵介のことがわりに好きだった。

恵介のことは好きであるが「すごく親しいってわけではない」と、あえて「すごく」を使ったうえで否定しているので、一は恵介のことを比較的親しいと思っっている。

「わりに」は、「普通より少し」というような意味で、割合的には六割くらいではないだろうか。

ちよっと胸がわくわくするような物語を聞くのが楽しみでたまらな

った頃があった。

「胸がわくわくする」に「ちよっと」をつけ、「楽しみ」を「楽しみでたまらなかつた」として、恵介が語る物語の小さな「わくわく」を、本当に楽しみにしていたことが分かる。また、「頃があった」が「たまらなかつた」とともに過去の記述であるので、過去の自分はいつも「楽しみ」にしていたことと、今はそうではないというニュアンスが読み取れる。

そんなわくわくを、すっかり忘れていた。

「そんなわくわく」とは、恵介の作る物語を聞いた時に感じるものである。「忘れていた」だけではなく、「すっかり」という副詞がついていることによって、完全に忘れていたという意味が強くなっている。

「あ……うん、そうだな、かつこ悪いな。」

「あ……うん」という表現から、恵介と自分を重ね合わせて物思いにふけっている様子が読み取れる。二つの「な」から、勇平の言葉に対する同意を示しているようだが、自分の中でまだ考えているような雰囲気伝わってくる。つまり、勇平の言葉におうむ返しをしただけで一の意味はない。

「そうかなあ。おれ、雷が大の苦手なんだ。まじで怖いもの。怖いから、どうしても震えちやうんだ、それってしょうがないだろ。」

「しょうがない」という言葉から、自分の苦手の一つと認識し、自分をありのままに受け入れている。また、「かつこ悪い」と言われたのに対して、「そうかなあ」と返していることから、苦手があることが、

周りからばかにされることに対し、疑問を感じている。一は、この言葉が「さらり」と言えないために、周りの目を気にして、苦しんでいる。

恵介の顔がゆがんだ。

「ゆがんだ」という表現から、泣きそうになるのを堪えようとしている様子がわかる。

恵介のようにさらりと言えたら、みんなの前で堂々と震えることができたら、どんなにせいせいするだろう。

「恵介のように」の「ように」は願望の「ように」だと考えられる。「さらり」や「堂々」などとプラスイメージの言葉を使っていることから恵介を良い意味で見ている。「せいせい」「清々」だと考えられる）とあることから、一は、雷が苦手だと、知られてはいけないと思っていることに関して、自分自身がかなりのストレスを感じており、認めてしまえば、気持ちがすっきりすると考えている。

でも、今日は、恵介の言葉が耳にこびりついていて。

「でも」という接続詞は、前文の「いつもなら、そのまま通り過ぎたであろう」という一文を受けてのものである。「恵介の言葉」とは、「怖いから、どうしても震えちやうんだ。それってしょうがないだろ」というものである。「残っていた」ではなく、「こびりついていて」となっていることから、まったく離れないというニュアンスが含まれている。また、忘れようとしてもそれができないということから、少しの不快感を感じることができている。

のんびりした返事が頭上から降ってきた。

返事が「降ってきた」ことから、一には予想外の方向から返事があつたということが読み取れる。また、同級生にからかわれた後にも関わらず恵介が「のんびりした」調子で返したことから、一に対して身構えていないことが見てとれる。

「そうさ。一ちゃんも来いよ」

「ちゃん」付けで呼んでいることから、恵介は昔から変わらず一のことを親しい友人だと思っていることがわかる。

夕立に洗われた家も田畑も山々もみずみずしく輝き、美しかった。

この叙述があることから、夕立によつてもたらされた町の美しさに一が気付いていることがわかる。また、この表現が一の心情を暗示しているのではないかと考える。「夕立にあらわれて」という表現から、夕立による一連の出来事を受けて、一の価値観に変化が現れたこと、さらに、「みずみずしく」という表現から、一の心が満たされている様子が見えてくる。

「ここ、最高の場所なんだ。嫌なことがあると、ここに来てこの風景を見るとすつとするんだよな。」

「するんだ」に「よ」と「な」がついていることから、すつとすることを一に対して呼びかけていることと、それを自分へも再度確認していることがわかる。

「ほんとに？」

恵介の素直な性格を考慮すると、恵介を褒める一の言葉を疑っているというよりは、期待の気持ちをごまかすための発言であると思う。つまり、一なら自分の作文をわかってくれるのではないかという心情である。恵介が一へ寄せる信頼の大きさがわかる。

自分のことを笑われたようで、つらくて逃げただけだ。

「笑われたようで」とあるので、実際に笑われているのではない。「だけ」という表現から恵介が思っているような意図はないということが読み取れる。「だ」と断定しているところからも、一の思いが伝わってくる。

楽しい物語に出会ったときみたいだった。

「楽しい物語に出会ったようだった」としないことから、物語に出会ったのではなく、「楽しい物語を読んだ」その瞬間に出会えたということと言いたいのだろう。

「うん、ほんとにそう思う。あの……俺さ、また恵介の作った話、聞きたいって思うこと……あるし。」

「……」が多いことから、一は言葉をなめらかに繋いでいないことがわかる。プライドの高い一であるので、普段はあまり話をしない恵介を褒めることに抵抗があるのではないだろうか。

「苦手がいっぱい。でも、得意もちょっぴり。」

どちらも七音でリズムがいい。この言葉を一が何度も繰り返し返していることから、一がこの言葉を気に入ったことが読み取れる。このよう

な個所からも、恵介の文章や言葉をうまく表現する才能というものが見て取れる。

「なんだか、おかしかった。」

「なんだか」から、一自身もなぜそれがおかしいと思うかの理由が明確でないことがわかる。

一は、自分が少し大きくなったような気がした。

「大きくなった」とあるが、実際に大きくなったわけではない。今まで他人の評価を気にして小さくなっていった自分と対比して、大きくなったと表現されているのではないだろうか。また、「気がした」は「思った」よりもそれが感覚的なものであることから、その成長を自分で感じる事ができていると読み取ることができる。「少し」とあることから、その成長を自分の中では、小さなものであると感じていることが読み取れる。

### 三 考察

#### (一) 一 の心情の移り変わりについて

##### 1. 周囲の評価を過剰に意識

【場面】六時間目の授業

○苦手な雷↓じっと我慢

- ・そんなことをしたら、藤城一のイメージが台無しになってしまう。
- ・神谷小学校六年生の誰よりも、目立つ存在なのだ。

##### 2. 今までの自分に疑いを持つ（しんどさを覚える）

【場面】恵介とのやりとり

- 友人にからかわれている恵介↓自分のことを言われているよう
- ・弱虫、弱虫と自分のことをからかわれているような気がしたのだ。

##### 3. 恵介への憧れ・葛藤

【場面】塾への道

- 恵介の言葉を思い出す↓自分もあんな風に言いたい。
- ・恵介のようにさらりと言えたら、みんなの前で堂々と震えることが出来たら、どんなにせいせいするだろう。
- ・どんなにせいせいするだろう。でも……やっぱり、言えない。

##### 4. 新しい自分との出会い

【場面】神社

- 自分の町の知らない景色↓新しい自分との出会いの暗示
- ・「苦手がいっぱい。でも、得意もちょっぴり。」
- ・一は、自分が少し大きくなったような気がした。

以上でまとめたように、この『夏を見上げて』のテーマは、雷とそれに対する恵介の言動によって、一が今まで受け入れられなかった価値観が、もたらされるといえるものである。このことで、一も少しだけ肩の力を抜いて生活ができるようになったと考える。ただ、この出来事以来、一の行動が大きく変わったとは考えにくく、あくまでも、藤城一のイメージはしっかりと守るといえることは継続されていくと考える。

## (二) 恵介の得意なことについて

この物語はひとことで言うところ、一の成長の物語である。その成長に大きく関わってくるのが、幼馴染の恵介の存在だろう。彼はクラス（もはや小学校）においてもっとも目立つ一対極の位置にいる少年であり、その外見からあだ名はマツチ棒、同級生にからかわれても反撃をしない、おとなしい性格である。本文中の仕草や口調からも、素直で温厚な性格が見て取れる。また、恵介の発言に「苦手がいつばい、でも、得意もちよっぴり」とあることから、彼は一のように得意なことが多いとは言えないこともわかる。本文中で書かれている彼の得意なことと言えば、「作文」「物語をつくる」ことであり、現実離れたファンタジックな内容の物語や、自分の街の美しさを題材にした作文を書くことから、恵介のやわらかな感性や美意識がうかがえる。しかし、それを示すだけならば、彼の得意なことが「作文」「物語をつくる」ことである必要性は低い。例えば、写真を撮ることであったり、音楽が得意であったりでもいいだろう。なぜ作者はわざわざ恵介の「得意なこと」を作文や作話にしたのか。

作文や作話は、先ほど例に出した写真や音楽と同じ、芸術だと言える。芸術の一要素として、自らの内面を表現するものであることが挙げられる。ただ、他の芸術との明確な違いとして、その表現に言語を使うことができる。作文や作話が得意だということは、物事について一度熟考し、その自らの考えを人に伝わるかたちにして言語によって表現ができることをあらわす。

本文中に、『怖いから震えちゃうんだ。それってしょうがないだろ。』という表現がある。これは、恵介の素直な性格によって出てきた直感

的・感想的な発言だと取ることもできる。しかし、ここで恵介の「得意なこと」が作文・作話である一面も考慮すると、この発言は雷が怖いことに対して一度きちんと考えてからのものだと取れるだろう。ここから、恵介がただ素直にものをいうだけの人物ではなく、一度熟考してから発言することができる人物であるということが読み取れる。このように、作者が彼の「得意なこと」を作文・作話にしたのは、本文に書かれた仕草や発言だけでは見えてこない、恵介のもう一面を提示するためではないかと考えた。

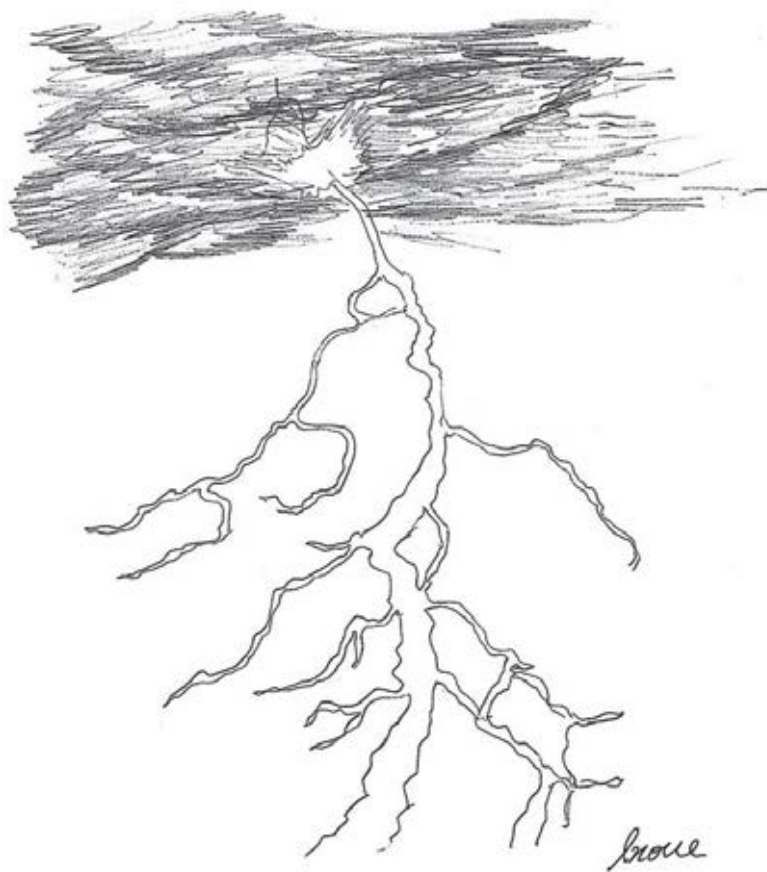
## (三) 教材として考える「夏を見上げて。」

この教材の特徴的な点は、「会話文以外も語り手は主人公の藤城一である」ことだと考える。本文の特に中盤からは、「今、塾への道をゆっくり歩きながら、考えていた。」や、「眼下に町の風景が広がる。」など、一が主語である文のほとんどに「一は」という記述がなく、結果的に読者は、自分のことを非常に客観視した見方をする主人公の像を感じ取る。「夏を見上げて」は、中学二年生の教材であるが、にもかかわらず、主人公は小学六年生である。よって、一が小学生にしては少し大人びた少年であり、思春期にさしかかろうとしているという設定が考えられる。

さて、授業の教材として扱うにあたっての授業展開について提案、考察する。

第一次の活動は本文を通しての一の心境の変化を考察することであるだろう。本文を読み進めながら、雷が怖いことを隠して自分のイメージを守ろうとしていた一の気持ちや、雷が怖くて震えていたことをからかわれた恵介の「それってしょうがないだろ」という言葉によつ

て変わっていったことについて、一通りの流れを読み解く。そうして第二次だが、今回この教材内容論で行ってきた、本文の部分の詳細な読み取りを行いたい。一が語り手として描いてあるこの本文には、会話文以外の文にも一の心情が影響している記述が多い。叙述でいくつか述べたように「ちよっと胸がわくわくするような物語を聞くのが楽しみでたまらなかつた頃があつた。」などにあるような、一が自分で自分の気持ちについて述べつつ、言葉を曖昧にしているような箇所がいくつもある。本文全体を通しての一の心境の変化だけを追っているは見過ごししてしまう心情が、文ひとつひとつを考察することによって鮮明に見え、より深くこの教材を読み解くことができる。この活動は、本文を二つに分け、二回に分けて前半と後半にしぼって班ごとで一文を抜き出し考察し、発表する。発表と意見交換の後もう一度班で見直す活動を展開すると、より文に対しての深まりが得られると考える。その後第三次に、一時間目に行った全体の考察と二次で行った細かい考察をふまえ、一の人物像の整理と改めての考察をおこない、まとめとする授業が考えられる。



## 夏を見上げて。(あさのあつこ)

## 一 作者と作品について

あさのあつこ（一九五四年～）女性、日本の小説家、児童文学作家。青山学院大学文学部卒、小学校教師を経て一九九一年作家デビューした。本名は浅野敦子、あさのあつことはペンネームで、本名の平仮名書きを取ったものとされる。岡山県英田郡美作町湯郷（現美作市）出身。小説『バッテリー』（教育画劇）にて野間児童文芸賞を受賞。『バッテリー2』にて日本児童文学者協会賞を受賞した。『バッテリー』シリーズにて小学館児童出版文化賞を受賞した。現在は日本児童文学者協会会員である。主な作品は『バッテリー』（全六巻、角川文庫）、『ほたる館物語』（全三巻、新日本出版社）、『テレパシー少女「蘭」事件ノート』（講談社）、『NO.6』（講談社）などがある。作品は漫画化、映画化、ドラマ化されており、また教育分野にも情熱を持っている作者である。「夏を見上げて。」は小学館により出版されたあさのあつこの短編小説であり、中学国語教科書に掲載されている。小学生の一、勇平、恵介の三人の考え方を巡って、主人公の一の心理変化を詳しく描写した文章である。

## 二 叙述について

## 椎葉 一勲、鄧 立新

家も、庭も、町も、神社の森も、一自身もこなごなに砕けてしまいうんじやないかと足が震える。

想像しただけで足が震えるほど、一は、雷に対しての恐怖心を抱いているのが見て取れる。

「も」が連続して使われている。この一文が仮に「家や、庭や、町や、神社の森」だと、ただ事実を並列しているだけにすぎないが、「家も、庭も、町も、神社の森も」と、「も」を使うことで、この町が、一にとって親しみのある町だという印象を与える。たとえば、「A君やB君やC君が来ていたよ。」だと、並列的で事実の列挙という印象を与えるのと、「A君も、B君も、C君も来ていたよ。」と、特別で親しみを感じさせると同様である。

作品の冒頭から、一の雷に対する恐怖心が様々な表現によって書かれている。このことで、読者に、一を臆病な少年だと思わせて、のちの、一の自尊心ゆえの悩みを映えさせている。

一は肩をすくめ、勇平に向かって、しょうがないよなというふうには笑っ



てみせた。

「笑ってみせた」ということは、単に「笑った」というよりも、意識して笑ったということがわかる。つまり、一はここでは、本心では笑っていないということがわかる。心の中では、一は雷をとても怖がっているが、その気持ちを隠すため、笑っているように、余裕があるように、勇平にふるまいたかった。「肩をすくめ」という部分もまた、自分の本心を周りに悟られないようにした演技である。

一は唇をかみ、心の中で、一秒でも早く雷が遠ざかりますようにと祈っていた。

一が、自分の無力さを自覚している一文。「雷が早く遠ざかりますようにと祈っていた」という部分が、「雷が早く遠ざかりますようにと言った」と表現するのではなく、また「雷が早く遠ざかりますように」と思った」と表現するのでもなく、「祈っていた。」とすることから、人間の力を超越した存在にすぎることしかできない、祈ることしかできない一の姿が映し出されていると解釈できる。一の少年らしい一面。

「唇をかみ」「一秒でも早く」という部分からも、一の、落ち着かない様子がわかる。そして、一は「心の中で」とあるように、このことを決して口に出さないのである。彼の自尊心の強さがうかがえる。

痩せた恵介は、よたよたと倒れそうになる。

ここで恵介が「倒れそうになる」だけで、実際には倒れないという描写は、恵介がみんなの前で堂々と、「自分の弱さ」を言うことができ心の強さ、芯の強さを持っていることを示している。心が折れそうになり、よたよたとなりながらも自分にうち勝つ強さ。「痩せた恵介」

という表現が、見た目の弱さと、心の強さのギャップを引き立てる。

一は、靴をひっかけると、そのまま外に走り出た。

恵介が勇平たちにバカにされていることが、まるで自分に対して言われているようで、その場にいられなくなつた。「ひっかける」「走り出る」という言葉が、あわててその場を立ち去る様子、耐えられなかつた一の様子を表している。

自分の住んでいる町がこんなに美しいとは思ってもいなかった。

「こんなに美しいとは思ってもいなかった」の、「とは」は、「格助詞と十副助詞は」を組み合わせて、強調を表している。その中の「副助詞は」は比較の用法であり、一は今まで見てきたこの町の様子と比較していると考えられる。比較の結果、「自分の住んでいる町はこんなに美しいとは思ってもいなかった」という感情を抱いた。また、「接続助詞で十係助詞も」の用法もあり、ここで「係助詞も」があるので、「一度も考えたことはない」、「全く思っではいなかった」というような、一の驚きがよくわかる。

このように、一は、当たり前だった日常を改めて見てみることで、「こんなにも美しいとは思ってもいなかった」という新しい気づきがあることを知る。「こんなに美しいとは思ってもいなかった」という言葉には、単に「美しいと思っではいなかった」というよりも、もっと強い語感があり、「今までは全くもって想像してなかった世界との出会い」を思わせる。

この描写は、『夏を見上げて』の主題とも関わる。具体的にいうと、それまで一は、恵介を弱々しく、おとなしいやつぐらいにしか考えて



いなかったが、雷の一件で、自分の弱い部分を人に話すことができ惠介の強さに気づく。またそれに伴い、それまで、当たり前前すぎて見向きもしなかった惠介の豊かな作文の才能を再確認し、一は惠介という景色の美しさに改めて感動したのである。

「一は、自分が少し大きくなったような気がした。」

一も人間としての成長をうつつらと感じている。これは、確信したのではなく、「少し」「気がした」とあるように、かすかな自信である。惠介の存在によって、一の心の変化、成長が見られる一文。一のこれからの成長が想像される。

「大声で思いつき笑いなくなる。」

笑いたくなるというのは、一のすつきりとした心のあらわれ。またそれと共に、小さなプライドに固執していた自分を客観的に見て、そんな自分を笑い飛ばしたくなるというようにも取れる。「大声で」「思いつきり」というのは、心の爽快感と、その気持ちの大きさを表しているのだろう。

「それから惠介と顔を見合わせ、声に出して笑った。」

前に出てきた「笑いたくなる」に呼応している。ほほえんだりするのはなく、声に出して笑うということから、一のすつきりした心情が見てとれる。溜飲が下がったような、そんなイメージが湧く。自分に対して素直になれた瞬間であろう。

夕立に洗われた家も田畑も山々もみずみずしく輝き、美しかった。

夕立は、突発的なものであり、雷を伴い激しい雨が降るが、それは短時間で、その後は晴天が広がる。夕立は、一の心情の移り変わりをあらわし、この小説の主題と強く結びついている。

普段は何気なく感じる日常の風景も、見方を変えれば、美しくも見える。

重なり合った笑い声は風になり、どこまでも、どこまでも響きわたっていくようだった。

これまで話し言葉で書かれていた文体が、最後のこの一文では「風になり」という少しかしこまった書き言葉で書かれている。これにより、最後、小説の全体に締めを与えている。また、カメラワークとして、彼らを写していたカメラが、スーッとズームアウトしていくような印象を読者に与える役割もある。

「重なり合った笑い声」ということから、彼らの心がひとつになったことをあらわしている。ここでは、「惠介のようにさりとて言えたら、みんなの前で堂々と震えることができたら、どんなにせいせいするだろう。」という悩みがすつきりとした一の心情と、「ここ最高の場所なんだ。嫌なことがあると、ここに来てこの風景を見るとすっとするんだよな。」という惠介の心情の、この互いの爽快感をあらわしている。

「響き渡る」ということは、広い場所をあらわし、また「響き渡っていく」ためには、何にも妨害、邪魔されていない必要があり、何かに遮られることのないことをあらわす。この描写では「声」が響き渡るとともに、この時の一の気持ちも響き渡っていくとも考えられる。

「どこまでも、どこまでも」という強調した表現が、その気持ちの永遠性をあらわしている。

以上のことから、一がこの時抱いていた気持ち「この気持ち、何にも邪魔されることなく、この先の人生ですっと続いていくのではないか」と解釈でき、高ぶった感情だったという風に解釈できる。

### 三 考察

恵介という存在を通して、一が成長していく姿を描いたこの小説は、思春期を迎える中学生を対象とした教材として適しているだろう。

私たちは、人には知られたくない、悟られたくない部分を、みなそれぞれ持っている。ましてや、それを自分から打ち明けることは、とても勇気のいることで、簡単にできることではない。それをどう振る舞い、どう自分の心に抱えて生きていくべきなのか、この小説は、そんなことをわれわれ読者に語りかけてくるようである。

夕立の描写は、大きく捉えると、人生の浮き沈みをあらわしているようでもあり、具体的にみると、一の心情の変化が重ねられているようにも思える。風や雨などの自然物を、人の心情や人生になぞらえて描写する、あさのあつこらしい表現である。

#### 「苦手がいっぱい。でも、得意もちよっぴり」について

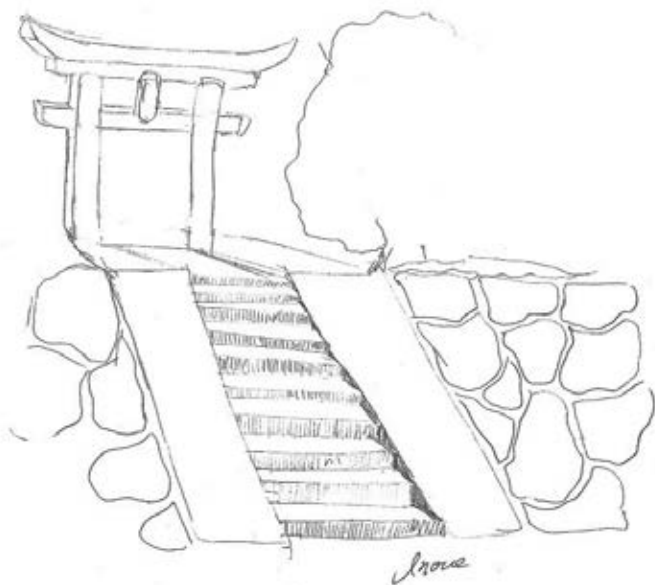
本文章には三回に「苦手がいっぱい。でも、得意もちよっぴり」がある。初めて出たのは恵介が笑い顔まま、妙なリズムをつけて「苦手がいっぱい。でも、得意もちよっぴり」と言ったところである。ここで、恵介の性格が実は明るくてひょうきんな子、また自分の強いところ、弱いところをよく理解していることがわかる。

また、二つ目のところは、一もまねをして繰り返してみたところで

ある。恵介は苦手がいっぱいなのに、みんなの前で苦手なことも堂々とと言える。反対に、一は得意のことがいっぱいなのに、苦手のこと一つも言えない。一は、そんな自分を嘲笑している感じがする。

最後の「苦手がいっぱい。でも、得意もちよっぴり」は、一がようやく今までの完璧な自分であろうとする自分から、踏み出そうとする第一歩である。自分でも、欠点があることを知り、欠点がみんなの前で言い出すことは恥ずかしくない、これからは堂々として生きていたという決意も見られる。

三つ目の「苦手がいっぱい。でも、得意もちよっぴり」は同じセリフでありながら、一の心の変化、過程が描かれている。



## 形（菊池寛）

山内 貴弘、若杉 良、元川 袈耶子、船越 香織

## 一 作者と作品について

菊池寛は、一八八八年に香川県高松市に生まれた。東京高等師範学校に入学するも、厳格な校風に反対し除名。その後も明治大学、早稲田大学などに籍を置いていた期間もあった。一九一〇年、第一高等学校に入学。同期に芥川龍之介、久米正雄らがいた。しかし卒業直前に友人の窃盗の濡れ衣を着せられて退学。改めて京都大学文学部英文文学科に入学し、上田敏に師事した。一九一四年、芥川・久米らが第三次「新思潮」に同人として参加。一九一六年の第五次「新思潮」にも参加し、戯曲『屋上の狂人』、『暴徒の子』らを発表。大学卒業後も『無名作家の日記』、『青木の京』、『恩讐の彼方に』などを続々発表、作家としての地位を確立した。一九一九年、芥川龍之介と共に大阪毎日新聞社の客員となり、『藤十郎の恋』、『友と友の間』などを発表。その後も執筆活動の傍ら、一九二三年に私費で雑誌、『文藝春秋』を創刊、一大出版社へと成長させた。また後進の育成のために芥川賞、直木賞を創設した。一九四八年、満五九歳で死去。

『形』は「大阪毎日新聞」で大正九年一月二日附紙上に発表された。のち、『極楽』、春陽堂版『菊池寛全集』第三卷、平凡社版『菊池寛全集』第二卷、改造社版『菊池寛全集』第三卷、中央公論社版『菊池寛全集』第二卷に収められた。

教科書には、一九六六年に大阪書籍『中学国語二年』で初めて採用された。その後も様々な教科書会社で採用され、二〇〇六年には三社（東京書籍、三省堂、教育出版）が採用していた。しかし、二〇一二年では教育出版のみの採用となった。

## 二 叙述について

摂津半国の主であった松山新介の侍大将中村新兵衛は、五畿内中国に聞こえた大豪の士であった。

「摂津」は今の大阪府の一部と兵庫県の一部。「侍大将」は、兵を統括する役職である。「五畿内」は近畿地方中央部の古称。山城・大和・河内・和泉・摂津の五国。「中国」は中国地方をさす。「聞こえた」とあることから、この地方にいれば、知ろうと思っていなくても誰でもその名を知っていたほど、有名な人物であることがわかる。「大豪」は、極めて強い大豪傑ということ。

そのころ、畿内を分領していた筒井、松永、荒木、和田、別所など大名小名の手の者で、「槍中村」を知らぬ者は、おそらく一人もなかっただろう。

「槍中村」は、それほど有名であったことがわかる。

それほど、新兵衛はそのしごき出す三間柄の自身の槍の矛先で、先駆けしんがりの功名を重ねていた。

「それほど」とは、槍中村と言われるほど。「三間柄」は長さ三間(約五・四メートル)の柄。「先駆けしんがり」は、戦場において真っ先に戦いに身を投じ、戦いの終わりには最後まで残って敵兵を倒すと言いうことを示している。つまりここでは新兵衛が戦場においていかに活躍をしていたかを示している部分である。

そのうえ、彼の武者姿は戦場において、水際立った華やかさを示していた。

「水際立った」は、ひときわ目立つという意味。「水際立った華やかさを示していた」ということから、新兵衛の武者姿は戦場において、ひときわ目立った華やかさで、周りとは別格であることがわかる。

火のような猩々緋の羽織を着て、唐冠纒金のかぶとをかぶった彼の姿は、敵味方の間に、輝くばかりの鮮やかさを持っていた。

「猩々緋の羽織」は、猩々(中国の想像上の動物)の毛に似て、黒みを帯びた鮮やかな深紅の陣羽織。「唐冠」は、古代中国の冠に形をまねたかぶと。「纒金」は、唐冠の左右に突き出た金色の装飾具。「輝くばかり」の「ばかり」は程度(〜ほど)を表す。「輝かんばかりの鮮やかさ」だと輝いていないが、「輝くばかりの鮮やかさ」であると実際に輝いている様子が見える。

「ああ猩々緋よ唐冠よ。」と敵の雑兵は、新兵衛の槍先を避けた。

新兵衛を象徴する格好に対して、敵の雑兵が恐れを抱いている様子がわかる。

味方が崩れたたつき、激浪の中に立っいわおのように敵勢を支えている猩々緋の姿は、どれほど味方にとって頼もしいものであったか分からなかった。

「激浪」は、激しい波の意味。「味方が崩れ」るような困難に直面しているとき、新兵衛を、荒波にも負けない「崩れ」ない「いわお」のような頼もしい存在として表現している。また「崩れたつ」の「たつ」とはすっかりや何かをしかけているという意味があるので、ここではすっかり崩れている様子、または崩れかけている様子を表している。

また嵐のように敵陣に殺到するとき、その先登に輝いている唐冠のかぶとは、敵にとってどれほどの脅威であるか分からなかった。

「唐冠のかぶとは、どれほどの脅威であるか分からなかった」という表現から、唐冠のかぶとの脅威の程度が甚だしいことがわかる。また、前文の「猩々緋の姿は、どれほど味方にとって頼もしいものであったか分からなかった。」という表現も同様であり、呼応している。

こうして槍中村の猩々緋と唐冠のかぶとは、戦場の華であり敵に対する脅威であり味方にとっては信頼の的であった。

新兵衛を象徴する格好が、「戦場・敵・味方」にとってどういうものであるのかが、端的にまとめられている。

「新兵衛殿、折り入ってお願いがある。」と元服してからまだ間もない

らしい美男の侍は、新兵衛の前に手をついた。

元服とは男子の成人を示す儀式である。十二〜十六歳くらいで行われることが多かった。「元服してからまだ間もないらしい」とあるので、十二〜十六歳の若い侍であることが分かる。「手をついた」は、敬意を表すため、地面や床に両手をつけること。

「何事じゃ、そなたと我らの間に、さような辞儀はいらぬぞ。望みというを、はよう言ってみい。」と育むような慈顔をもって、新兵衛は相手をを見た。

「我ら」は複数ではなく、私という意味。「さような辞儀はいらぬぞ」とあることから、かしこまったあいさつをするような関係ではないとわかる。「育むような」から若い侍を親のように、我が子を見るように見ていることが分かり、「慈顔」は、慈愛に満ちた優しい顔つきである。新兵衛は若い侍を、我が子のように大変可愛がっていることがわかる。

その若い侍は、新兵衛の主君松山新介の側腹の子であった。

「側腹の子」とは、側室(正妻でない女性)の産んだ子のこと。

そして、幼少のころから、新兵衛が守役として、我が子のように慈しみて育ててきたのであった。

新兵衛と若い侍とは、付き合いが長く、辞儀のいらぬ関係であることがわかる。

「他のことでもおられない。明日は我らの初陣じゃほどに、なんぞ華々しい手柄をしてみたい。ついでには御身様の猩々緋と唐冠のかぶとを貸して

たもらぬか。あの羽織とかぶとを着て、敵の目を驚かしてみとうござる。」

「他のことでもおられない。」は、他のことでもありませんという意味。若い侍にとつて、明日は初めて戦いだから、新兵衛の猩々緋と唐冠のかぶとを着て、華々しい手柄をあげたいと考えている。「敵の目を驚かしてみとうござる。」からは、侍の若さ故の好奇心や大胆さがうかがえる。

「ハハハハ。念もないことじゃ。」新兵衛は高らかに笑った。

「念もない」とは、思慮がないこと。つまり、新兵衛にとつて、若い侍の申し出は、考えるまでもないほど、たやすいことだとわかる。「高らかに笑う」から、声を高く響かせて笑っている様子がわかる。

新兵衛は、相手の子どもらしい無邪気な功名心を快く受け入れることができた。

主君である松山新介の子どもであり、幼い頃からの関係であることから、「快く受け入れることができた」のだと考えられる。

「が、申しておく、あの羽織やかぶとは、申さば中村新兵衛の形じゃわ。そなたが、あの品々を身に着けるうえからは、我らほどの肝魂を持たいではかなわぬことぞ。」と言いながら、新兵衛はまた高らかに笑った。

「かなわぬこと」は、望みどおりにならないこと。新兵衛は若い侍に對して、羽織やかぶとはあくまで形であり、「肝魂」を持つことが必要であると忠告している。この時点で、新兵衛は、自分の功名に對する自負を持ちながらも、形よりもこれまで培われてきた気持ちが大切だ

と考えていることがわかる。

戦いが始まる前、いつものように猩々緋の武者が唐冠のかぶとを朝日に輝かしながら、敵勢を尻目にかけて、大きく輪乗りをしたかと思うと、駒の頭を立て直して、一気に敵陣に乗り入った。

後に出てくる p.3014 の「その日に限って、黒革緋の鎧を着て、南蛮鉄のかぶとをかぶっていた」の一文との比較。猩々緋の武者の恰好がいつもと変わらないことをあえて書く事で、いつもと違う中村新兵衛を際立たせている。

その日に限って、黒革緋の鎧を着て、南蛮鉄のかぶとをかぶっていた中村新兵衛は、会心の微笑を含みながら、猩々緋の武者の華々しい武者ぶりを眺めていた。

「会心の笑み」というのは心から満足している様子を表している。「微笑」もにっこり笑っているという意味を含んでいるので、ここでは戦場で活躍する猩々緋の武者の姿に満足していることが分かる。

そして自分の形だけすらこれほどの力を持っているということに、かなり大きい誇りを感じていた。

「自分の形だけすら」は「自分の形だけですら」といつていることが予想される。つまり自分の形である猩々緋の姿だけでもこれほど敵兵に影響を与えるのであるから、自分の実力はもつとすごいものであるという新兵衛の自信が窺える。

彼は、二番槍は、自分が合わそうと思ったので、駒を乗り出すと、一文

字に敵陣に殺到した。

一文字という言葉から、新兵衛の覇気や意気込みが感じられる。また殺到という言葉は多数の人が押し寄せるといふ表現である。ここでは新兵衛の兵たちが大勢で進撃したと考えられる。しかし主語は「彼」なのに「殺到した」という表現はおかしい。なので新兵衛が多数の兵に匹敵する力を持っていることを表していると考えられる。

猩々緋の武者の前には、戦わずして浮き足立った敵陣が、中村新兵衛の前には、びくともしなかった。

「浮き足立った」と「びくともしなかった」と対比させることで、猩々緋の武者と黒革緋の武者の姿が違う事での敵兵の様子の違いを強調している。

いつもは虎に向かっている羊のようなおじけが、敵にあった。

「羊のようなおじけ」から、戦意が無く、逃げ惑うしかない敵兵の様子がうかがえる。

今日は、彼ら是对等の戦いをする時のように、勇み立っていた。

敵兵が黒革緋の武者を見て、「羊のような」ではなく、「対等の戦い」をしたことから、これまでは新兵衛の形におびえていたことが分かる。

どの雑兵もどの雑兵も十二分の力を新兵衛に対し発揮した。

「どの雑兵もどの雑兵も」から敵兵の誰もが新兵衛と気付いていないことが分かる。

新兵衛は必死の力を振った。

普段の新兵衛ならば全力を出さずとも敵兵を倒すことができた。

手軽に兜や猩々緋を借したことを、後悔するような感じが頭の中をかすめた時であった、敵の突き出した槍が、緋の裏をかいて彼の脾腹を貫いていた。

「後悔した」ではなく「後悔するような感じ」から、新兵衛は後悔しているとはっきりとは思っていないことがわかる。そこから新兵衛の普段の時とは違う必死さを窺うことができる。

### 三 考察

#### ○色が象徴するもの

本作品において、何度も登場するのが「猩々緋の羽織」と「唐冠纓金のかぶと」である。また、これらと対照的に登場するのが、「黒革緋の鎧」と「南蛮鉄のかぶと」である。猩々とは、中国の伝説上の生き物であり、明の『本草綱目』によると、猩々は人面人足で髪が長く、鮮やかな赤い体毛を持ち、犬のように吠え、人語を解し、酒を好むとされている。また、その血の色がとても赤いことから、猩々緋という色名が生まれたとされている。このことから、本文中に出てくる「猩々緋の羽織」は真つ赤な羽織ということになる。この猩々緋という色が象徴しているのは、華やかさ、敵への脅威、味方への信頼であった。この猩々緋と同様に扱われているのが、「唐冠纓金のかぶと」である。しかし、本文中で「唐冠纓金のかぶと」と書かれているのは一度だけで、それ以外は「唐冠のかぶと」や「唐冠」と書かれている。同様に

「猩々緋の羽織」という表現も、本文中では一度しか登場せず、それ以外は「猩々緋の武者」あるいは「猩々緋」と書かれている。これらことから、華やかさ、敵への脅威、味方への信頼を象徴しているものは、「唐冠」と「猩々緋」であると言える。また、この二つは誰が身につけていても、同じものを象徴することが文中から読み取れる。つまり、「猩々緋の羽織」を身につけた武者は敵に恐れられ、「黒革緋の鎧」を身につけた武者は脅威の対象にならなかった。それは、「黒革緋の鎧」の武者が多くいる中で、脅威の象徴である「猩々緋の羽織」の武者は、その羽織の色だけで、他とは違った存在であることを強調しているからであろう。

ここで注目したいのは、「猩々緋」という色についてである。なぜ、「赤い羽織」や「深紅の羽織」などの表現ではなく、「猩々緋の羽織」という表現を使っているのか、また、それが文中でどのような働きをしているのかについて考えていきたい。まず、猩々緋の羽織と言われて、猩々緋の具体的な色を想像できる人は多くないだろう。しかし、猩々緋の羽織という表現の前に、「火のような」と書かれていることから、赤色に近い色であるということは想像できる。しかし、あえて「猩々緋」と表現することで、この色が、戦の場面において珍しい色であることが強調されるのではないだろうか。文中でもあったように、猩々緋の羽織の武者は戦場で目立っており、敵には恐れられ、味方には頼りにされていたとわかる。また、前に述べたように、猩々とは中国の伝説上の生き物であり、その色が由来となっている猩々緋という色もまた、戦において伝説に残るような強さの象徴としての意味があるのではないだろうか。

## ○古典作品「松山新介の勇将中村新兵衛が事」との比較

菊池寛の小説「形」は、古典作品の「松山新介の勇将中村新兵衛が事」という話をもとにして書かれたとされる。ここでは、古典作品と比較することによって、小説「形」の表現の特徴について考える。

## 松山新介の勇将中村新兵衛が事

摂津半国の主松山新介が勇将中村新兵衛、たびたびの手柄を顕しければ、時の人これを槍中村と号して武者の棟梁とす。羽織は猩々緋、かぶとは唐冠金纓なり。敵これを見て、「すはや例の猩々緋よ、唐冠よ。」とて、いまだ戦はざる先に敗して、あへて向かひ近づく者なし。ある人強ひて所望して、中村これを与ふ。その後、戦場に臨み、敵中村が羽織とかぶとを見ざるゆゑに、競ひかかりて切り崩す。中村矛を振つて敵を殺すことそこばくなれども、中村を知らざれば敵恐れず。中村つひに戦没す。これによつて曰はく、「敵を殺すの多きをもつて勝つにあらず。威を輝かして気を奪ひ、勢を撓すことわりを曉るべし。」と。

出典 「常山紀談」

「松山新介の勇将中村新兵衛が事」は、「常山紀談」に収められた話である。「常山紀談」は、随筆とも説話集ともいわれるもので、戦国時代から江戸初期までの武人の逸話を収めている。著者は、岡山藩士・儒学者の湯浅常山。原形は一七三九年に成立し、完成は一七七〇年とされる。基本的には史実を題材としているが、人名や地名などが史実と異なるものもある。

それでは、古典作品との違いを見ていく。まず、古典作品では「ある人」としか書かれていない人物が、「形」では「若い侍(美男の侍)」として、その言動が詳しく描かれている。彼が羽織とかぶとを借りる場面でのやりとりは、会話文によって描かれており、ここから新兵衛と若い侍の人物像を読み取ることができる。新兵衛の言葉からは、力強く自信に満ちた人柄を、若い侍の言葉からは、若さ故の好奇心や大胆さを感じ取れる。また、「育むような慈顔」という新兵衛の表情から、二人の関係も読み取ることができる。古典作品は淡々と事実を説明しているのに対して、「形」は人物像が想像できるような表現が加えられているのが特徴である。

次に、「形」には、新兵衛の心情描写があるという点である。例えば、「自分の形だけですらこれほどの力を持っているということに、かなり大きい誇りを感じていた。」や、「手軽にかぶとや猩々緋を貸したことを、後悔するような感じが頭の中をかすめた」である。新兵衛の心情が描写されることで、新兵衛の人物像がより鮮明になっている。また、心情の変化も捉えやすい。そして、このような描写があることで、新兵衛が「形」(猩々緋やかぶと)の持つ影響力に気づくという、主題も明らかになっている。

一方、古典作品の最後の一文には、一つの教訓が述べられている。「敵を殺すの多きをもつて勝つにあらず。威を輝かして気を奪ひ、勢をみだすことわりを曉るべし。」の部分である。この教訓は、「形」にはない。また、古典作品では「戦没す」と新兵衛の死がはっきりと書かれているが、「形」では、「槍が、緘の裏をかいいて彼の脾腹を貫いていた」としか書かれていない。「形」は、はっきりと結末を描かないことで、物語に余韻を残す書き方になっている。



以上のことから、会話文や表情の描写によって人物像が鮮明に描かれていること、新兵衛の心情描写によって主題が捉えやすくなっていること、作品の最後に一つの教訓を示すことなく解釈を読み手に委ねていることがわかる。

### ○戦国時代の合戦の仕方から見る表現分析と矛盾

「形」において合戦の表現がたくさん見ることができるといえる。例えば「嵐のように敵陣に殺到するとき、その先登に輝いている唐冠のかぶとは、敵にとってどれほどの脅威であるか分からなかった」、「猩々緋の武者は槍をつけたかと思うと、早くも三、四人の端武者を、突き伏せて、また悠々と味方の陣へ引き返した。」など、様々ある。ここで少し当時の合戦の仕方について触れていきたいと思う。

「形」の舞台となっているのは、登場人物の出没年から大体「1570」だと予測される。つまり戦国時代である。この頃の合戦の仕方は、個人で戦っていた平安、室町と違い「備」と呼ばれる軍団を編成して戦を行っていた。そのときに重要となっていたのが槍部隊である。戦いにおいてリーチが長く集団で有利であった槍が戦いの多くを占めていた。そこから出てきたのが「一番槍」という言葉である。本文中でも「二番槍」という言葉が出てくるが、一番槍というのは合戦において、一番最初に敵と槍を合わせる事をいい、合戦での勝敗は関係なくその勇気を賞賛される役割である。二番槍はその次に賞賛される役割である。つまり一番槍というのは戦場において一番死ぬ確率が高いと言うことである。ここで若い武者の会話と行動に注目したい。若い武者は中村との会話で「明日は我らの初陣じゃほどに、なんぞ華々しい手柄をしてみたい。」と述べ、次の日の戦において一番槍になっている。

ここから考察するに、若さ故の好奇心に加え、初陣での生存率を上げるために中村に『形』を借りたとも考えられるのではないだろうか。また「形」における矛盾点についても考察していきたいと思う。先ほど述べたようにこの時代は集団戦で行われている。「先登」はいちばん先に行くこと。また、いちばん先に到着することである。つまり単騎で敵陣に突っ込んで入ることが分かる。これは戦略的に考えると自殺行為である。先ほどと同じように原典と比較してみると、このような描写は全くない。加えて言うなら侍大将という肩書きも加えられている。つまりより形と内容を強調した文章となっている。



## 走れメロス（太宰治）

寺田 守

### 一 作者と作品について

太宰治（一九〇九〜一九四八年）は、青森県北津軽郡金木村（現在の青森県五所川原市金木町）に生まれた。本名は津島修治。一九三六年に『晩年』を刊行してから、一九四八年に「グッド・バイ」の執筆途中で入水自殺を行うまで、戦時中も執筆を続けた作家である。『津軽』『斜陽』『人間失格』など多くの代表作がある。

「走れメロス」は、一九四〇年五月に雑誌『新潮』に発表され、同年六月に単行本『女の決闘』に収められた。さらに三年後の一九四三年一月に単行本『富嶽百景』に再録された。

教科書には一九五六年度版中学校二年生教科書に掲載されてから途切れることなく採用され続けている。平成二四年度版中学校国語教科書では全五社に掲載される共通教材となっている。しかし、漢字、仮名づかい、句読点の表記の変更にとどまらない差異が、各社の本文に見られる。出典の異なり、教育的配慮による異なり、漢字の読みの異なりの三点から各社の違いを整理する。

### 出典の違いによる異なり

光村図書と学校図書で「おまえなどには、わしの孤独の心がわからぬ。」となっている文が、教育出版、三省堂、東京書籍では「おまえに

は、わしの孤独がわからぬ。」となっている。また、光村図書と学校図書で「どうか、わしも仲間に入れてくれまいか。」となっている文が、他三社では「どうか、わしをも仲間に入れてくれまいか。」となっている。これらの違いは、出典の違いによるものである。

各社の出典はいずれも筑摩書房の『太宰治全集』となっている。しかし、三種類の全集が筑摩書房から出ており、いずれの全集に依っているかで本文の差が生じている。学校図書、光村図書は、一九五五年に刊行された『太宰治全集3』が出典であり、教育出版、三省堂、東京書籍は、一九八八年の文庫版『太宰治全集3』が出典である。どちらの全集も初版本『女の決闘』（一九四〇年、河出書房）を底本としていると記載されているが、実際には、一九五五年の『太宰治全集3』では、再録本『富嶽百景』（一九四三年、新潮社）が底本となっている。一九八八年の文庫版『太宰治全集3』は、初版本『女の決闘』（一九四〇年、河出書房）が底本となっている。

初出雑誌、初版本、再録本といずれも本文に変更が見られる。太宰が生存中の刊行であるため、太宰の手による書き換えだと考えられる。いずれの本文をとるか判断が求められる状況である。しかしながら、各社で本文が異なるのは、実践を共有する上で混乱を招くことになる。各社で共通した本文を掲載することが望ましい。一九九八年に刊行さ



れた『決定版 太宰治全集4』では、初版本『女の決闘』（一九四〇年、河出書房）が底本となっている。各社とも全集を出典とするならば、最新の全集が同じ出版社から出ているので、『決定版 太宰治全集4』に出典を変更するべきであろう。

学校図書（二四版） 出典『太宰治全集3』

おまえなどには、わしの孤独の心がわからぬ。

教育出版（二四版） 出典『太宰治全集3』

おまえには、わしの孤独がわからぬ。

三省堂（二四版） 出典『太宰治全集3』

おまえには、わしの孤独がわからぬ。

東京書籍（二四版） 出典『太宰治全集』

おまえには、わしの孤独がわからぬ。

光村図書（二四版） 出典『太宰治全集3』

おまえなどには、わしの孤独の心がわからぬ。

太宰治全集4（一九九八年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、河出書

房）ただし再録本校訂

おまえへには、わしの孤独がわからぬ。

太宰治全集3文庫版（一九八八年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、

河出書房）ただし初出雑誌校合、再録本参照

おまえには、わしの孤独がわからぬ。

太宰治全集3（一九五五年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、河出書

房）ただし初出雑誌・再録本を参照。

おまえなどには、わしの孤独の心がわからぬ。

初版本『女の決闘』（一九四〇年、河出書房） 太宰治全集4（一九九

八年）付録の校異より

おまえへには、わしの孤独がわからぬ。 太宰治全集4（一九九八

年）付録の校異より

おまえなどには、わしの孤独の心がわからぬ。

学校図書（二四版） 出典『太宰治全集3』

どうか、わしも仲間に入れてくれまいか。

教育出版（二四版） 出典『太宰治全集3』

どうか、わしをも仲間に入れてくれまいか。

三省堂（二四版） 出典『太宰治全集3』

どうか、わしをも仲間に入れてくれまいか。

東京書籍（二四版） 出典『太宰治全集』

どうか、わしをも仲間に入れてくれまいか。

光村図書（二四版） 出典『太宰治全集3』

どうか、わしをも仲間に入れてくれまいか。

太宰治全集4（一九九八年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、河出書

房）ただし再録本校訂

どうか、わしをも仲間に入れてくれまいか。

太宰治全集3文庫版（一九八八年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、

河出書房）ただし初出雑誌校合、再録本参照

どうか、わしをも仲間に入れてくれまいか。

太宰治全集3（一九五五年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、河出書房）ただし初出雑誌・再録本を参照。

どうか、**「わしも仲間に入れてくれまいか。」**

初版本『女の決闘』（一九四〇年、河出書房） 太宰治全集4（一九九八年）付録の校異より

どうか、**「わしも仲間に入れてくれまいか。」**

再録本『富嶽百景』（一九四三年、新潮社）

年）付録の校異より 太宰治全集4（一九九八年）付録の校異より

どうか、**「わしも仲間に入れてくれまいか。」**

どうか、**「わしも仲間に入れてくれまいか。」**

#### 教育的配慮と思われる異なり

出典の異なりに関わらず、教科書会社によって手を加えているために異なっている箇所がある。学校図書と教育出版は変更がなく、三省堂、東京書籍、光村図書は、「下賤の者」という言葉を削除している。こうした差は、原文尊重の原則を優先するか、教科書に掲載する言葉の適不適の判断を優先するかによって生じたのだと思われる。これも各社で歩調を合わせて本文をそろえるのが望ましい。

学校図書（二四版） 出典『太宰治全集3』

「黙れ、**「下賤の者。」**

教育出版（二四版） 出典『太宰治全集3』

「黙れ、**「下賤の者。」**

三省堂（二四版） 出典『太宰治全集3』

「黙れ。」

東京書籍（二四版） 出典『太宰治全集』

「黙れ。」

光村図書（二四版） 出典『太宰治全集3』

「黙れ。」

太宰治全集4（一九九八年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、河出書房）ただし再録本校訂

「だまれ、**「下賤の者。」**

太宰治全集3文庫版（一九八八年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、河出書房）ただし初出雑誌校合、再録本参照

「だまれ、**「下賤の者。」**

「だまれ、**「下賤の者。」**

太宰治全集3（一九五五年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、河出書房）ただし初出雑誌・再録本を参照。

「だまれ、**「下賤の者。」**

「だまれ、**「下賤の者。」**

#### 漢字の読みの異なり

漢字を仮名にひらく際に、異なりが生まれた箇所もある。「嘎れた」という言葉を各社とも仮名に変更しているが、光村図書は「しゃがれた」とし、他四社は「しわがれた」としている。どちらも誤りではないが、あえて異なる本文にする理由もない。四社は文庫版『太宰治全集』に合わせたと思われる。また「呼吸」の振り仮名を、学校図書、教育出版、光村図書は「いき」としている。三省堂、東京書籍は振り仮名を振っていない。また、学校図書と光村図書は、後半に「呼吸」という言葉が出てくるが、そちらには「いき」と振っていない。なぜ

「いき」という読み方が出てきたのか、今回の調査では明らかにできなかった。

学校図書（二四版） 出典『太宰治全集3』

「ばかな。」と暴君は、しわがれた声で低く笑った。

教育出版（二四版） 出典『太宰治全集3』

「ばかな。」と暴君は、しわがれた声で低く笑った。

三省堂（二四版） 出典『太宰治全集3』

「ばかな。」と暴君は、しわがれた声で低く笑った。

東京書籍（二四版） 出典『太宰治全集』

「ばかな。」と暴君は、しわがれた声で低く笑った。

光村図書（二四版） 出典『太宰治全集3』

「ばかな。」と暴君は、しやがれた声で低く笑った。

太宰治全集4（一九九八年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、河出書

房）ただし再録本校訂

「ばかな。」と暴君は、嘎れた声で低く笑った。

太宰治全集3文庫版（一九八八年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、

河出書房）ただし初出雑誌校合、再録本参照

「ばかな。」と暴君は、嘎（しわが）れた声で低く笑った。

太宰治全集3（一九五五年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、河出書

房）ただし初出雑誌・再録本を参照。

「ばかな。」と暴君は、嘎れた声で低く笑った。

学校図書（二四版） 出典『太宰治全集3』

メロスは、また、よろよろと歩きだし、家へ帰って神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸（いき）もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。

教育出版（二四版） 出典『太宰治全集3』

メロスは、また、よろよろと歩きだし、家へ帰って神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸（いき）もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。

三省堂（二四版） 出典『太宰治全集3』

メロスは、また、よろよろと歩きだし、家へ帰って神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。

東京書籍（二四版） 出典『太宰治全集』

メロスは、また、よろよろと歩きだし、家へ帰って神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。

光村図書（二四版） 出典『太宰治全集3』

メロスは、また、よろよろと歩き出し、家へ帰って神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。

太宰治全集4（一九九八年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、河出書

房）ただし再録本校訂

メロスは、また、よろよろと歩き出し、家へ帰って神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。

太宰治全集3文庫版（一九八八年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、

河出書房）ただし初出雑誌校合、再録本参照

メロスは、また、よろよろと歩き出し、家へ帰って神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸（いき）もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。

太宰治全集3（一九五五年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、河出書

房）ただし初出雑誌・再録本を参照。

メロスは、また、よろよろと歩き出し、家へ帰って神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。

学校図書（二四版） 出典『太宰治全集3』

りに落ちてしまった。

太宰治全集3 文庫版（一九八八年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、

河出書房）ただし初出雑誌校合、再録本参照

メロスは、また、よろよると歩き出し、家へ帰って神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。

太宰治全集3（一九五五年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、河出書

房）ただし初出雑誌・再録本を参照。

メロスは、また、よろよると歩き出し、家へ帰って神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。

学校図書（二四版） 出典『太宰治全集3』

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが帰ってきた。約束のとおり、今、帰ってきた。」と大声で刑場の群衆に向かって叫んだつもりであったが、喉が潰れてしわがれた声がかすかに出たばかり、群衆は、一人として彼の到着に気がつかない。

教育出版（二四版） 出典『太宰治全集3』

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが帰ってきた。約束のとおり、今、帰ってきた。」と、大声で刑場の群衆に向かって叫んだつもりであったが、喉が潰れてしわがれた声がかすかに出たばかり、群衆は、一人として彼の到着に気がつかない。

三省堂（二四版） 出典『太宰治全集3』

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが帰ってきた。約束のとおり、

り、今、帰ってきた。」と大声で刑場の群衆に向かって叫んだつもりであったが、喉がつぶれてしわがれた声がかすかに出たばかり、群衆は、一人として彼の到着に気がつかない。

東京書籍（二四版） 出典『太宰治全集』

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが帰ってきた。約束のとおり、今、帰ってきた。」と大声で刑場の群衆に向かって叫んだつもりであったが、喉がつぶれてしわがれた声がかすかに出たばかり、群衆は、一人として彼の到着に気がつかない。

光村図書（二四版） 出典『太宰治全集3』

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが帰ってきた。約束のとおり、今、帰ってきた。」と、大声で刑場の群衆に向かって叫んだつもりであったが、喉がつぶれてしわがれた声がかすかに出たばかり、群衆は、一人として彼の到着に気がつかない。

太宰治全集4（一九九八年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、河出書

房）ただし再録本校訂

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが帰って来た。約束のとおり、いま、帰って来た。」と大声で刑場の群衆にむかって叫んだつもりであったが、喉がつぶれて覆れた声が幽かに出たばかり、群衆は、ひとりとして彼の到着に気がつかない。

太宰治全集3 文庫版（一九八八年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、

河出書房）ただし初出雑誌校合、再録本参照

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが帰って来た。約束のとおり、いま、帰って来た。」と大声で刑場の群衆にむかって叫んだつもり

であったが、喉がつぶれて「**嘎**(しわが)れた声」が幽かに出たばかり、群衆は、ひとりとして彼の到着に気がつかない。

太宰治全集3(一九五五年) 底本『女の決闘』(一九四〇年、河出書房)ただし初出雑誌・再録本を参照。

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが歸つて来た。約束のとほり、いま、歸つて来た。」と大声で刑場の群衆にむかつて叫んだつもりであったが、喉がつぶれて「**嘎**れた声」が幽かに出たばかり、群衆は、ひとりとして彼の到着に気がつかない。

## 二 叙述について

メロスは激怒した。

「メロスが」でなく「メロスは」とあるので、メロスが既に読者の知っている人物として登場する。「メロスが」だと、「昔々おじいさんとおばあさんがいました。」のように、新たに登場する人物ということになる。老爺に話を聞いてメロスが激怒する場面(聞いて、メロスは激怒した。(一八一頁一七行))を、時間を前後させて冒頭に持ってきているので、「メロスは」という描写になつたのだろう。「激怒した」とあるので、ただ怒つたのでなく、激しく爆発するように怒つた。

のんきなメロスも、だんだん不安になつてきた。

「のんき」とあるので、メロスは、のんびりしていて、あまり物事にこだわらない無頓着な性格である。「だんだん」とあり、一気に不安になつたのではなく、少しずつ不安になつた。また、「なつた」ではなく「なつてきた」とあるので、同様に少しずつ不安になつたことが分かる。

る。

道で会つた若い衆を捕まえて、何かあつたのか、二年前にこの町に来たときは、夜でも皆が歌を歌つて、町はにぎやかであつたはずだが、と質問した。

「何が」でなく「何か」とあるので、メロスは何かがあつたと確信しているわけではない。たまたま寂しいのかもしれないし、二年前の賑やかさのほうに特別だつたのかもしれない、という可能性の中で、原因となる何かがあつたのではないかと不確かながらも疑い、尋ねている。「二年前」とあるので、メロスがシラクスの町に来るのは二年前である。頻繁に来ているわけではない。「夜でも」とあり、二年前には昼はもちろん夜も皆が歌を歌い、にぎやかだつたことが分かる。「はず」とあるので、二年前ににぎやかであつたことをメロスは確かに覚えており、確認している。

メロスは単純な男であつた。

「単純な」とあるので、メロスは考えが面的であり、こうしたら次はどうなるか、どんな影響があるか、など他のことを考えることもない男だと、語り手が評価している。「であつた」と「だつた」とを比べると、難しいのだが、「である」が客観的、「だ」が主観的という傾向がみられることから、メロスを語り手が客観的に評価しているということができる。

買ひ物を背負つたままで、のそのそ王城に入つていった。

「のそのそ」とあり、動作がゆっくりしている様子が分かる。「ま

「とあるので、先ほどと同じ買い物を背負った状態で王城に入った。激怒した状態のまま、他のことは何も考えずに、準備もせずに向かったのだろう。」

**暴君ディオニスは静かに、けれども威厳をもって問い詰めた。**

「静かに」とあるので、大声を出したり、声を荒げたりせず、ゆっくりと言葉を發した。「もって」とあるが、所有するという意味の威厳を持つて、なのか、手段を意味する威厳を以てなのか。どちらともとれるが、『太宰治全集』ではいずれのものも「以て」となっている。ここでは、威厳の力によって問い詰めたという意味となる。言葉をあれこれ投げかけて白状させようとしたのではなく、王の迫力によって白状させようとした。「問い詰めた」とあり、メロスが真実を言うまで厳しく問い続けようとした。

**その王の顔は蒼白で、眉間のしわは刻み込まれたように深かった。**

「その王」とは、威厳を以て問い詰めようとした王。この文で威厳の理由を説明している。「蒼白」とあり、血の気のない青白い顔であることが分かる。「刻み込まれたように」とあるので、比喩であり、まるで彫刻で彫られたかのような眉間のしわだった。いつも眉間にしわをよせるような難しい顔をしていたのだろう。悩みの多い王だということが分かる。

**おまえなどには、わしの孤独の心がわからぬ。**

「など」とあり、王はメロスを特に取り立てて軽んじている。王はメロスのような人間に自分の孤独は分かるはずがない、と考えている。

「には」の「は」からは、他の人間ならば分かるかもしれないが、メロスだけは特に分らないと王が判断していることが分かる。他者から、自分の弱った心を、あたかもすべて理解しているかのように責められる時に、簡単にわかってたまるか、というようなはがゆい思いをするものである。メロスは「町を暴君の手から救うのだ。」としか言っていないにもかかわらず、王は「孤独の心」の話をしている。人を信じていることができないために多くの人間を殺していることがメロスがやってきた理由だと思いがたっている。

**人の心を疑うのは、最も恥ずべき悪徳だ。**

メロスは町の老爺の言葉を信じている。王の言い分を聞こうとはしていない。「最も」とあり、数ある悪徳の中で一番の悪徳だとメロスは考えている。「恥ずべき」とあり、人間性や道徳性に反していて、恥じて当然のものだ、と言っている。「悪徳」とは、道徳に反する行為や精神のこと。

**疑うのが正当の心構えなのだ、わしに教えてくれたのは、おまえたちだ。**

「正当の心構え」とは、道理になかった心の準備ということ。「なのだ」とあるので、強い断定。「おまえたち」とあるので、メロスを始めとする民衆。王は人を疑う心が正しいということを民衆に強く説得されたと主張している。二年前から現在までの間に、ディオニスは人を疑ってしまうような何かが民との間にあり、今のような邪知暴虐の王となってしまうた。



人間は、もともと私欲の塊さ。

「もともと」とあるが、副詞の「もともと」には、最初からといった意味や、元からといった意味など、以前の状態にさかのぼって説明しようとする意味がある。王も私欲に流されない人間の姿を、かつては信じていたのだろう。だが今では信じておらず、今になって考えると、人間は以前から私欲の塊だったと考えていることが分かる。

また、「塊さ」とあり、「塊だ」と比べてみると、終助詞の「さ」が軽く言い放つ時に使う言葉だと分かる。「だ」では力強く断定するのに対して、「塊さ」では、熱心に主張する気にもなれない投げやりな王の態度が分かる。

「わしだって、平和を望んでいるのだが。」

「だって」とあり、他の人たちと同じように、自分もやはり、と王が考えていることが分かる。また「だって」には、例えば「私だって遊びたい。」という発話のように、相手が思っていることに反対する意味もある。ここでは「だって」から、メロスが、王は平和を望んでいないと思っただろうと考えて、そうではない、と否定しようとする王の考えが分かる。わしでさえ。「だが」とあり、言い差し表現になっている。逆接なので、平和を望んでいる王を邪魔するものを説明しようとする言葉が続くことが予想される。

何のための平和だ。

「だ」とあり、平和の目的を強く尋ねている。

「ああ、王はりこうだ。うぬぼれているがよい。私は、ちゃんと死ぬる

覚悟でいるのに。命ごいなど決してしない。ただ、——」と言いかけて、メロスは足元に視線を落とし、瞬時ためらい、「ただ、私に情けをかけたいつもりなら、処刑までに三日間の日限を与えてください。たった一人の妹に、亭主をもたせてやりたいのです。三日のうちに、私は村で結婚式を挙げさせ、必ず、ここへ帰ってきます。」

「ああ」とあるが、感嘆の声でなく、そうだという肯定の意味。「りこう」とあるが、メロスがはりつけになつてから泣いてわびると勝手に予想していることに対して、利口だと評価している。皮肉であり、本当はメロスは王が利口だとは思っていない。「うぬぼれて」とあり、メロスは王が自分が優れていると思つて得意になつていていると思つている。「いるがよい」とあり、王はうぬぼれている状態がふさわしいとメロスが判断し、勧めている。「ちゃんと」とあるが、「いるのに」を修飾するならば、迷いなどもなく、まちがいに覚悟しているという意味。「死ぬる」を修飾するならば、泣いてわびたりなどせず、きちんと死ぬという意味になる。ここでは、後者だと考えたい。「のに」とあり、終助詞の「のに」は、恨みや不服から相手を責める気持ちを表すことから、ここでは、王がメロスの覚悟を信じてくれないことをメロスが不満に思つていることが分かる。「など」とあるので、メロスは命ごいをするを軽蔑していることが分かる。「ただ」とあり、命ごいを軽んじた直後に、その発言に条件をつけようとしている。命ごいしようとしている。「言いかけて」とあり、ただ、と言った後、すぐに発言を続けずに、言葉を止めた。「足元に」とあり、地面と足の接する部分のあたりに視線を落とした。「瞬時」とあるのでわずかな時間。数秒もたつていないだろう。「ためらい」とあり、続きを言おうか言うまいか迷つている。メロスは自分でも自分の発言の矛盾が分かつていて、

続きを言うことに思い切りがつかないのだろう。「情け」は、ここでは思いやりや哀れみといった心遣いのこと。「かけたい」とあり、王が情けをかけることを希望しているということ。「つもり」とあり、前もってそうしようと考えているということ。つまり、王がメロスに情けをかけたかったと前もって思っていたならば、という意味になる。情けをかけたほしいと頼むのではなく、王がそのように思っていたならば、という言い方となっている。頼むと命ごいになってしまうので、交渉するという形を作ろうとしてメロスはこのような言い方をしたのである。

「ください」とあり、口調がそれまでの常体から敬体に突然変化した。「たった」とあり、一人ということをわずかだと強調するメロスの判断が分かる。同情してもらい、情けをかけてもらおうとしていることが分かる。「必ず」とあり、まちがいはなく、きつと帰ってくると言っている。自分の先の行動を自分で必ずと言う時は、信用できないものである。メロスは情けをかけてもらおうと必死になっている。

**あれを人質としてここに置いていこう。**

「あれ」とあり、セリヌンティウスをあれ呼ばわりしている。人間をあれ、と言う時は、その人物に敬意を持っていない時である。「置いて」とあり、「残して」と比べると、セリヌンティウスを物扱いしていることが分かる。セリヌンティウスのことを軽視しているともとれる表現だが、ここではそれほど深い信頼関係であり、敬意も一切不要な間柄だとメロスが考えていると捉えたい。「いこう」とあるので、メロスの決意が分かる。

それを聞いて王は、残虐な気持ちで、そつとほくそ笑んだ。

「そつと」とあるが、副詞の「そつと」には、こつそりと相手に知られないように少しだけ動作をする意味がある。また、「ほくそ笑んだ」とあるが、動詞の「ほくそ笑む」には、事が思い通りに進み、にやにやと一人で笑うという意味がある。つまり、人を信じる人間が言い出すようなことを、まんまとメロスが必死で言い張るので、王は思惑通りだったのでおかしく感じた。そして、メロスに気づかれない程度にこつそりと、にやにやと少しだけ笑ったという事が分かる。

**メロスは悔しく、じだんだ踏んだ。**

「悔しく」とあるが、何が悔しかったのだろうか。願いを聞いた王は、メロスを信じておらず、助かりたいための方便を言ったと思っっている。メロスの心を勝手に見透かしたような言葉に、本当に帰ってくるつもりであるメロスは恥辱を感じたのだろう。ここでは、失敗をあらかじめきれなかつたり、後悔をしていたりするわけではない。「じだんだ」とあり、腹が立ち、悔しくて、足をばたばたと激しく何度も踏みつけた。

**ものも言いたくなくなった。**

「も」とあり、「を」と比べると、「も」からは、他のことはもちろんものを言うことすら言いたくなくなったという意味であることが分かる。「なくなつた」とあり、王に対してまだ何か働きかけをしようと思っていたが、心をみすかしたような言葉を受けて、働きかけを行う意思を失った。

セリヌンティウスは無言でうなずき、メロスをひしと抱きしめた。

「うなずき」とあるので、首をたてにふって承諾の合図を送った。「無言で」とあるので、何も言わず、ただ動作だけで意思をメロスに伝えた。「ひしと」とあり、密着するようにしっかりと抱きしめた。

**友と友の間は、それでよかった。**

「間」とは関係のこと。「それ」とは、うなずき、抱きしめたセリヌンティウスの行動のこと。言葉にせず、行動で承諾の意思を示すだけで、二人は分かり合える関係だった。

**初夏、満天の星である。**

「満天」とは、空一面ということ。雲がなく、よく晴れていることが分かる。日が落ちてからずっと王城にいたので、外に出ると、満天の星が印象深くメロスの目に映った。うつむいておらず、空を見上げのような視線であることから、メロスが前向きで、活力のある状態だということが分かる。メロスの心も、満天の星のように、曇りなく澄んだ状態なのだろう。

**「なんでもない。」メロスは無理に笑おうと努めた。**

「無理に」とあり、筋道が通らずに難しいことをあえて行った。メロスは笑える心境でなかったが、メロスの様子を心配して質問を浴びせる妹を安心させようとした。「笑おうと」とあるので、意識して笑いを作ろうとした。「努めた」とあり、メロスは努力しなければ笑えないような状態だった。

**メロスも満面に喜色をたたえ、しばらくは、王とのあの約束をさえ忘れ**

**ていた。**

「も」とあるので、他の人たちと同じようにメロスもまた喜んだ。「満面に」とあり、顔全体に喜びの表情が表れていた。口元は笑っているが目が笑っていない、ということとはなかった。「たたえ」とあるので、表情を浮かべた。自然と喜びが表情に出てくるような心境だった。「しばらく」とあるので、数時間、約束を忘れていた。「は」とあり、時間が経つとやがて約束が思い出されたことが分かる。「あの約束」とは、三日目の日暮れまでに城に戻る約束のこと。「さえ」とあるので、たとえ他のことを忘れたとしても、最も大切なあの約束だけは忘れてはいけないにもかかわらず、と話者が判断していることが分かる。

**このよい人たちと生涯暮らしていきたいと願ったが、今は、自分の体で、自分のものではない。**

「このよい人たち」とは、妹や花婿だけでなく、祝宴に列席した村人たちのこと。突然の結婚式であつたり外は豪雨であつたりするにもかかわらず、陽気に祝ってくれる人たちを、メロスはよい人だと感じている。「今は」とあるので、以前と違っていることが分かる。王との約束の前までは自分の体は自分のものだった。

**明日の日没までには、まだ十分の時間がある。**

「まだ」とあるので、明日の日没までに、いまなお残りの時間があると考えている。計算するまでは、時間があまり残っていないと考えていた。「十分の」とあり、不足することのない時間が残されていて、余裕があることがわかった。

少しでも長くこの家にぐずぐずとどまっていたかった。

「でも」とあり、せめて少しだけであつてもどまりたいとメロスが考えていることが分かる。「ぐずぐず」とあるので、はっきりさせずに、曖昧なまま、のろのろとしてどまっていたと考えている。

今宵呆然、歓喜に酔っているらしい花嫁に近寄り、

「今宵呆然」とあるが、今夜は気が抜けたようにぼんやりしている、という意味。「らしい」とあり、呆然としているのは歓喜に酔っていると思われる、と話者は推測している。

おまえの兄のいちばん嫌いなものは、人を疑うことと、それから、うそをつくことだ。

「いちばん」と言いながら、一見「人を疑うこと」と「うそをつくこと」と二つのことを言っている。しかし、これらは別のことを言っているのではなくて、表裏の関係であり、一つのことを言っているのだと思われる。

おまえの兄は、たぶん偉い男なのだから、おまえもその誇りをもっている。

「たぶん」とあり、不確かで断定はできないがおそらく、とメロスは考えている。メロスは自分のことを偉い男だと思っているが、誰からもそのように言われていない。独りよがりの評価だという可能性もある。「たぶん」と判断している。「なのだ」とあるので、メロスは自分が偉い男だと強い確信をもっていて、妹に言い聞かせている。「も」とあり、メロスと同じように、という意味。「ている」とあるの

で、継続的に誇りを持ち続けるように命令している。

花嫁は、夢見心地でうなずいた。

「夢見心地」とあり、夢を見ているよううなずくと、ぼんやりした状態でうなずいた。「うなずいた」とあるので、首をたてにふって承諾の合図を送った。

メロスは笑って村人たちにも会釈して、宴席から立ち去り、羊小屋にもぐり込んで、死んだように深く眠った。

「笑って」とあるので、メロスは愛想をふっている。「にも」とあり、妹と花婿に対して語りかけたのに加えて、村人たちに対しても会釈した。「もぐり込んで」とあるので、羊小屋は狭く、天井も低いのだろう。「ように」とあり、寝返りをうったり、寝付きが悪かったりということもなく、まるで死んだかのようにびくりともせず寝たことがわかる。

私は、今宵、殺される。

「私は」とあるので、メロスの心の中の言葉だと分かる。「今宵」とあり、今晚という意味の雅語であるが、村の牧人のメロスが使う言葉としては似つかわしくない。メロスは少し気取ったところがある。

殺されるために走るのだ。

「ために」とあるので、殺される目的で走ろうとしている。不合理であるようにも思われるが、続く文で「身代わりの友を救うため」「王の奸佞邪知を打ち破るため」とあり、ただ殺されるのではなく、こうし

た目的のために走ろうとしているのだということが分かる。「のだ」とあり、殺される目的で走ることを強く断定している。自分で自分に言い聞かせているのだろう。

**若いときから名譽を守れ。**

「から」とあり、メロスは名譽を年をとってから守ろうとするのが一般的だと考えていることが分かる。「名譽」は、才能や能力への良い評判、地位や職といった称号を指すが、ここでは人格に対して価値があると認められることを意味している。体面と言い換えることもできる。

**若いメロスは、つらかった。**

「若いメロスは」とあるので、もし若くなければつらくなかっただろうと話者が判断していることが分かる。名譽を守るために殺されるということは、若い人間にとつてはつらいことだと話者は考えている。「つらかった」とあり、苦痛を感じて、耐えられなかった。妹や村の人々、故郷への思いが、殺されるために走ることをつらいと感じさせたのだろう。最初の困難は故郷への思いだと言いうことができる。

**ぜいぜい荒い呼吸をしながら峠を登り、登り切ってほっとしたとき、突然、目の前に一隊の山賊が躍り出た。**

「ぜいぜい」とあり、苦しげな呼吸の様子が分かる。走り、川を泳ぎ、峠を登ることで、息が切れている。二つ目の困難は自然だった。「登り切って」とあるので、登り終えて、という意味。あとは下り道しかない。「突然」とあるので、何の前触れもなく躍り出た。メロスも予想

もしていなかった。「躍り出た」とあり、いきなり勢いよく飛び出したことが分かる。山賊はメロスが来るまで見つからないように隠れていた。

**「さては、王の命令で、ここで私を待ち伏せしていたのだな。」**

「さては」とあり、思いあたることがあった。会話の成り立たない盗賊の言葉に、メロスはおかしいと感じた。しかし、人を疑うことが一番嫌いだというメロスが、おかしいと思いつつも、すぐに王の命令だと判断しているのも奇妙である。すでにメロスは人を疑いかけている。「のだな」とあるので、メロスは自分の判断を強く確信し、相手に念をおしている。

**山賊たちは、ものも言わず一斉に棍棒を振り上げた。**

「ものも」とあり、「ものを」との違いを考えると、ただ黙って振り上げたのではなく、メロスの言葉に、何一つ返事をする事すらなかった、ということが分かる。「一斉に」とあるので、山賊たちがみんなそろって振り上げた。メロスの言葉を合図のように振り上げたことが分かる。本当に王の命令だったため、「ばれたか」というメッセージであるかもしれない。また、本当は王の命令などなく、メロスが何を言っているのか理解できなかったため何も言うことが無かっただけなのかもしれない。真相は不明である。「振り上げた」とあり、手に持っている棍棒を勢いよく上げた。メロスを攻撃しようとする体勢をとった。三つ目の困難は、人間が力尽くで邪魔をしようとするものだった。

**「気の毒だが、正義のためだ！」**

「気の毒」とあり、山賊に苦痛を与えることに同情している。「正義」とは正しい道理のことで、ここでは王との約束を守ること。「ため」とあるので、約束を守る目的で障害となる山賊を殴り倒そうとしている。

**愛と信実の血液だけで動いているこの心臓を見せてやりたい。**

「愛」とは、見返りを求めず相手をいづくしむ心である。「信実」とは、偽りがなく正直であることである。メロスはこれまで信実のためには走ってきたが、愛という言葉はここで初めて唐突に出てくる。「血液だけで」とあるが、比喩でありメロスが愛と信実とのみを大切な行動原理としていることが分かる。「やりたい」とあるが、ここで見せたい相手は、メロスを不信の徒だと疑う人々に対してだろう。

**友と友の間の信実は、この世でいちばん誇るべき宝なのだからな。**

「いちばん」とあり、メロスは財産や名誉や地位や家族といった他の宝よりも友の信実が価値があると考えている。「から」とあり、前の文の「たまらない」理由を述べている。メロスは最も誇るべき価値のある友と友の間の信実に応えられない状況に対して耐えられない気持ちになっている。「な」とあるので、メロスは念をおし、同意を求めている。ここではメロスが一人で心の中でセリヌンティウスを思い浮かべ、セリヌンティウスに心の中で語りかけている。

**私だからできたのだよ。**

「だから」とあるので、濁流や山賊を乗り切り、ここまでできたのは、信実を大切に私だったということが理由だと考えている。「よ」とあり、メロスだからここまでできたということを、心の中でセリヌ

ンティウスに念を押しして確認している。

**そうになったら、私は、死ぬよりつらい。**

「そう」とは、王がメロスを放免するということ。「死ぬより」とあるので、処刑されるよりも放免されることのほうがつらいと考えている。

**ああ、もういつそ、悪徳者として生き延びてやろうか。**

「ああ」とあり、悲しみでため息をつく様子を表している。「もう」は、「もう最高だ」のように感情が高まったときに使う感動詞と、「もはや」「今となつては」という話者の基準を超えていることを表す副詞と、どちらの意味ともとれる。「いつそ」とあり、思い切つてある方法を決断しようとする気持ちの意味している。「やろう」とは、相手に対して動作を行う意味ではなく、「頑張つてやる」のような強い意思をもっている様子を表している。メロスが王のような生き方を選ぶうとしている。四つ目の困難は、自分の心の弱さだった。

**正義だの、信実だの、愛だの、考えてみればくだらない。**

「だの」とあり、正義や信実や愛を並べて価値の低いものと判断していることが分かる。「みれば」とあるので、試みに考えたところ、メロスにはくだらないと感じられた。「くだらない」とあり、取り上げて検討する価値のないつまらないものだと考えている。悪徳者として生き延びる可能性を考えてみたところ、そうした生き方では正義などは価値のないものだと思われた。

それが人間世界の定法ではなかったか。

「それ」とは、人を殺して自分が生きるということ。「定法」とは、きまりやしきたりのこと。「なかったか」とあり、反語によって定法であると主張している。

私は醜い裏切り者だ。

「醜い」とあり、見苦しい、みつともないという意味。「裏切り者」とあるが、ここでは、王との約束を破り、セリヌンティウスを殺して自分が生きるような人間だという意味。

やんぬるかな。

どうしようもない、もうおしまいだ、という意味。

ふと耳に、せんせん、水の流れる音が聞こえた。

「ふと」とあるので、思いがけなく突然聞こえた。まどろみでからどれほどの時間が経ったのだろうか。ちよつとの間眠っていたのだから、数分から数十分ほどだろうか。私たちが短い仮眠をとると元気になるように、メロスもまどろんだ時間のおかげで頭と体が回復した。疲れ切った先ほどは音を聞き取れなかったことから少し元気になったことが分かる。「せんせん」とは、浅い水がさらさらとよどみなく流れる音のこと。漢字にすると潺潺。

よろよろ起き上がって、見ると、岩の裂け目からこんこんと、何か小さくささやきながら清水がわき出ているのである。

「よろよろ」とあり、足どりがしつかりせずによろめきながら起き

上がった。「見ると」とあるので、補助動詞の起き上がってみる、でなく、起き上がってから、見た。「こんこん」とあり、水が尽きることなくわき出る様子を表している。「せんせん」が音だったのに対して、ここでは視覚的な様子を指している。漢字にすると滾滾、または渾渾。「何か」とあるが、ここでは何かを、ということ。「ささやきながら」は、小声でひそひそと言うことだが、ここは擬人法である。まるで何かをささやいているようにせんせんと音を発しながら水がわき出ている様子を表している。「のである」とあり、水の流れる音の原因を強く断定している。

ほうと長いため息が出て、夢から覚めたような気がした。

「ほうと」とあり、息をはく様子。「長い」とあるので、一、二秒の息でなく、四、五秒かかるような、深い呼吸だった。「ため息」とあるが、ここでは失望や感動でなく、大きく深く息をはき出す呼吸を意味している。水を飲み、息をはくことで、メロスは意識がはっきりとした。「ような」とあり、どうやら夢から覚めたような気がした、という不確かな判断を意味する場合と、まるで夢からさめたかのような気がした、という比喻を意味する場合とが考えられる。前者ととれなくもないが、ここでは後者のほうが自然である。先ほどのメロスの迷いを「悪い夢だ」と判断するのは、この後のことである。

我が身を殺して、名誉を守る希望である。

「名誉」とあり、ここでは人格に対して価値があると認められること。人を殺して自分が生きるという考えの逆の論理になっている。

私を待っている人があるのだ。

「ある」とあり、人がいるという意味。「のだ」とあり、強く断定しているが、他者に向かって語っているわけではない。メロスが自分に向かって心の中で語っている。

死んでおわびなどと、気のいいことは言っておられぬ。

「などと」とあり、大体このようなことをという意味。「気のいい」とは、人が良い、気立が良いという意味。死んでおわびをするといったようなお人好しなことは、今回は言っていられない、ということ。間に合わなかった時のことを考えている場合ではないとメロスは判断している。

私は信頼に報いなければならぬ。

「信頼」とは人を信用してすべてを任せること。ここでは、メロスを信じて待っているということ。走り出した当初のメロスの強い信念が蘇っている。メロスがまどろんだ時には、セリヌンティウスの名前を挙げて葛藤していたが、メロスが元気を取り戻した時にはセリヌンティウスの名前は出てこず、「人」と抽象化して思考している。

走れ！メロス。

題名の言葉がここで出てくる。メロスが自分に向かって激励する言葉である。

やはり、おまえは真の勇者だ。

「やはり」とあり、色々あったが、結局は最初から判断していた通

りの結論だったと再確認していることが分かる。メロスは初めから自分のことを勇者だと思っていた。「真の」とあり、本物のという意味。正直な男のままにして死なせてください。

「ままだ」とあり、元の通りに変わりなく、という意味。生まれたときから正直な男であったので、正直な男である状態の通りに変わりなく死なせて欲しいとメロスは望んでいる。「ください」とあり、常体から敬体に変化している。王との対話の場面の時と同じように、メロスの意思だけではどうにもならず、他者の判断に委ねるときに、メロスは敬体を用いるようだ。

道行く人を押しつけ、はね飛ばし、メロスは黒い風のように走った。

「押しつけ」とあるので、人を押しつけて無理にどかせた。「はね飛ばし」とあり、勢いよくはじき飛ばした。自分がよけるのではなく、相手を動かして走っていった。「黒い風のように」とあるが、本来風の色はなく、また「黒」という色は悪や闇をイメージさせ、悪魔のささやきを振りきったメロスに似つかわしくない。ここでは、日中駆け続け、日焼けし、汗をかき、汚れたメロスが体中真っ黒だったということだろう。メロスが素早く走っていく様子が「黒い風」のようだった。

愛と誠の力を、今こそ知らせてやるがよい。

「愛」は、見返りを求めず相手をいづくしむ心のこと。「誠」は、嘘やいつわりがない本当の心ということ。以前に「愛と信実」という言葉が出てきており、ここでも同様の意味だと思われる。「今こそ」とあり、過去や未来でなく今まさに、という今を強く主張する意味がある。



「知らせてやる」とあるが、見せてやるとの違いを考えてみる。見せてやるだと、証明してやるという意味になるが、「知らせてやる」だと相手に理解させてやるという意味になる。「よい」とあり、知らせてやるのが適当である、と判断し許可する意味がある。ここから知らせてやりなさい、と促す意味になる。

**呼吸もできず、二度、三度と、口から血が噴き出た。**

「も」とあり、話者が目立たぬもの、予想外で思ってもみなかったものを意識したということが分かる。呼吸は普段は意識することもない程自然なものだが、呼吸ができなくなったことで、はじめてその存在に気づいた。全く呼吸ができなくなったのでなく、うまく呼吸ができず、呼吸を意識するようになった。風体を気にすることもできず、呼吸すらままならないのであるから、深く思考したり、他者と長い会話をしたりすることはもちろんできない。「噴き出た」とあるので勢いよく出た。しかし、喀血や吐血のように、本場に大量の血が出たとすると、走ることができるような状態ではない。血圧が上がったり、荒く深い呼吸をしたりしたために毛細血管が傷つき、唾液に血が混じったのだろう。長距離を走ると、口の中で血の味がするようになる。

**塔楼は、夕日を受けてきらきら光っている。**

「塔楼」は、高くそびえる塔状の建物のこと。ランドマーク。「きらきら」とあり、光を反射して美しく輝く様子が分かる。高い建物であるということと、きらきら光っているということから、メロスは遠くからでも確認できた。

もう、だめでございます。

「もう」とあり、時間が経過して、もはやある状態になっていると判断している。予測ではなくて、フィロストラトスは、すでにだめだと判断している。「だめ」とは、行っても甲斐がないという意味。フィロストラトスは、走っているメロスを理屈で止めようとしている。五つ目の困難は、走る意味を失わせようとする論理だと言うことができる。「ございます」とあり、フィロストラトスはメロスに丁寧語を使っている。

「いや、まだ日は沈まぬ。」メロスは胸の張り裂ける思いで、赤く大きい夕日ばかりを見つめていた。

「いや」とあり、フィロストラトスの言葉に対してメロスが否定的であることが分かる。「まだ」とあるので、日が沈むまでに、いまなお時間が残されているとメロスは考えている。どれほどの時間が残っているかはメロスにも分からないが、少なくとも今は日が沈んでいない。メロスが同じセリフを二回繰り返しているのはなぜだろうか。それだけ日はまだ沈まぬと強い確信があるから、と考えることができる。また、メロスは走りながらフィロストラトスと話しており、立ち止まって話しているわけではない、という状況もある。つまり、理屈で止めようとするフィロストラトスに対して、冷静に思考して答えたり議論したりすることのできないメロスは、同じセリフを二回繰り返すことで、「だから私を走らせろ」というメッセージをフィロストラトスに送っているのだということができる。

「胸の張り裂ける思いで」とあるので、悲しみや苦痛で胸が裂けるような気持ちを持っている。間に合わないかもしれないと考えると、

メロスは悲しく、辛かった。「ばかり」とあり、フィロストラトスの方  
は見ておらず、夕日だけをずっと見ていることが分かる。

信じられているから走るのだ。

「信じられている」とあり、フィロストラトスの「強い信念を持ち  
続けている様子」という言葉尻を根拠にして、走る理由を述べている。  
「のだ」とあるので、メロスが強く確信していることが分かる。

間に合う、間に合わぬは問題でないのだ。

「は」とあり、対比的に判断していることが分かる。「間に合う、間  
に合わぬ」は問題でなく、対比的に信じられていることが問題なのだ、  
とメロスは考えている。そもそもメロスは、三日目の日暮れまでに帰  
ってくるために走っているはずである。だから、ここで「間に合う、  
間に合わぬは問題でない」と言うことは矛盾する。メロスは来ますと  
信じられているから走っているという前の文ともつじつまが合わない。  
「もう、だめでございます。」と間に合わないから走るのをやめさせよ  
うとするフィロストラトスの理屈に対して、メロスは間に合うかどうかど  
うかは問題ではない、と乱暴に否定している。

人の命も問題でないのだ。

「も」とあり、「間に合う、間に合わぬ」に加えて、「人の命」でき  
え信じられていることに比べると問題でない、と考えていることが分  
かる。メロスは身代わりとなったセリヌンティウスが処刑されないた  
めに走っているはずである。「もう、あの方をお助けになることはでき  
ません。」と命を救えないから走るのをやめさせようとするフィロスト

ラトスの理屈に対して、メロスは人の命もまた問題ではない、と乱暴  
に否定している。

私は、なんだか、もつと恐ろしく大きいもののために走っているのだ。

「なんだか」とあるので、メロスにもはっきりとした理由はわかっ  
ていない。「もつと」とあり、間に合うかどうかや人の命以上のものだ  
とメロスは考えている。「恐ろしく大きい」とあるが、恐ろしいものだ  
なおかつ大きいものなのか、それとも恐ろしいくらい大きなものな  
か。前者ならばメロスが走る理由は恐ろしいものだということになる。  
後者ならば間に合うかどうかや人の命などよりもはるかに大きなもの  
ということになる。ここでは後者だと考えたい。なぜメロスは自分に  
もはつきりとわかっていないことを「のだ」を繰り返して、強く確信し  
ているように自信たっぷり語っているのだろうか。ここでのメロスは  
走りたいたのであって、フィロストラトスと議論をしたいのではない。  
つまりメロスは、フィロストラトスの理屈を否定し、一方でメロス自  
身にも分かっていない概念を出すことで、論理的に説得しようとする  
フィロストラトスを、詭弁によって煙に巻こうとしている。

ついてこい！フィロストラトス。

「ついてこい」とあり、置いていくのでなくて、一緒に走らせよう  
としている。傍観者であるフィロストラトスを巻き込もうとしている。  
メロスの理屈は筋が通らないので、理解されたいだろうと予想してい  
るのかもしれない。だから理解できなくてもついてくれば分かる、と  
考えてフィロストラトスを一緒に走らせようとしたのだろう。「フィロ  
ストラトス」と名前を呼んでいる。フィロストラトスという名前はフ

イロソフイー (philosophy 哲学) を連想させる。

ただ、わけのわからぬ大きな力に引きずられて走った。

「ただ」とあり、何一つ考えていないのだが、しかし、という意味。「わけのわからぬ」とあるので、メロスには理由が分からない。「引きずられて」とあるので、まるで地面をこするように無理に引つ張られた。つまりメロスの意思ではなく、「大きな力」によって走っている。

メロスはそれを目撃して最後の勇、先刻、濁流を泳いだように群衆をかき分けかき分け、「私だ、刑吏！殺されるのは、私だ。メロスだ。彼を人質にした私は、ここにいる！」と、かすれた声で精いっぱい叫びながら、ついにはりつけ台に上り、つり上げられてゆく友の両足にかじりついた。

「それ」とは、縄を打たれたセリヌンティウスが徐々につり上げられてゆく様子のこと。「勇」は、物事に恐れない強い心を持っている様子、勇ましいこと。「ように」とあり、濁流を泳いだのと同じ様子で群衆をかき分けた。「かすれた」とあるので、声が喉で響かずに、はっきりした音でなく、聞こえにくい様子。「精いっぱい」とあり、できる限りに、力のある限りにという意味。かすれて、大きな声が出せない中で、できる限りの大きな声を力一杯に出した。「ついに」とあり、とうとうや最後にといった意味で、時間が経過して、期待した結果に到達した、と話者が感じていることが分かる。「かじりついた」とあるので、しっかりとしがみついて、離れないようにする様子が分かる。メロスはつり上げられようとするセリヌンティウスの足にしがみつき、これ以上上げないようにしようとした。

許せ、と口々にわめいた。

「口々に」とあり、めいめいという意味で、大勢の人がそれぞれに言いたいことを言った。あつぱれ、許せといったことを、声をそろえるのでなく、群衆がそれぞれ勝手に言い出した。「わめいた」とあり、大声で叫び、騒いだ。群衆にメロスが到着したことを気づいてもらえた。

私を殴れ。

メロスは自分の心に負けて、くじけそうになったことを、罰してもらおうとしている。

君がもし私を殴ってくれなかったら、私は君と抱擁する資格さえないのだ。

「さえ」とあり、メロスがセリヌンティウスと喜びを分かち合った、彼に無理な要求をしたことを謝罪したりといった他の行為の可能性の中で、抱擁する資格がまず前提となると考えていることが分かる。そして今は、その資格すらもないと考えている。

セリヌンティウスは、すべてを察した様子でうなずき、刑場いっぱいに鳴り響くほど音高くメロスの右頬を殴った。

「右頬」とはどちらの頬なのだろうか。メロスにとつての右頬ならば、セリヌンティウスは左手で殴ったことになり、左利きだということになる。逆に、セリヌンティウスから見てメロスの右頬を殴ったのなら、そこはメロスにとっては左頬である。一般的には、右手、右

足、右目といった体の左右を表す言葉は、本人にとつての右を差すことが多いように思われる。したがって、ここでは「右頬」を、メロスにとつての右頬と考え、セリヌンティウスは左利きだと考えたい。

また、「音高く」とあることから、大きな音で、あるいはパシンといったような高い音で殴ったことがわかる。セリヌンティウスはグーで殴ったのだろうか、それともパーで殴ったのだろうか。「音高く」を音程の高さだと考えると、パーでしばくような殴り方だと思われる。一方、「殴った」という言葉からは、私たちはグーの映像を想像しやすい。グーで大きな音が出るように殴ると、メロスは大げがをするだろう。ここでは、パーで殴ったのだと考えたい。

私はこの三日の間、たった一度だけ、ちらと君を疑った。

「たった」とあり、回数がわずかであったということ強く主張して、セリヌンティウスが自分でも驚いている様子が分かる。「だけ」とあるので、一度という回数に限定して、それ以上はなかったとはつきり断言するセリヌンティウスの判断が分かる。「ちらと」とあり、一瞬、ちよつとの間、ごくわずかな時間、メロスが帰って来ないのではないかと考えて、疑った。

メロスは腕にうなりをつけてセリヌンティウスの頬を殴った。

「うなりをつけて」とあり、力をためて、大きく腕を上げ、そして勢いよく腕を振ったことが分かる。セリヌンティウスはうなずいた後で殴ったが、メロスはいきなり殴っている。

「ありがたい、友よ。」二人同時に言い、ひしと抱き合い、それからう

れし泣きにおいおい声を放って泣いた。

「同時に」とあるので、同じタイミングで同じ言葉を発した。殴ってくれて許してくれてありがたい、という意味であるだろうし、あるいはまた信頼に伝えてくれてありがたいという意味でもあるだろう。「ひしと」とあり、離れないようにしっかりと密着した。出発の前にも二人はひしと抱き合っている。「うれし泣き」とあるので、うれしさのあまり泣いた。信頼に伝えられたことが二人ともうれしかった。「おいおい」とあり、声をあげて泣きわめく様子。ただ涙を流すのでなくて、声をあげて泣いた。

群衆の中からも、歎歎の音が聞こえた。

「も」とあり、メロスとセリヌンティウスに加えて、群衆の一部も泣いたということが分かる。群衆の全員が泣いたわけではない。「歎歎」とは、すすり泣くこと。メロスとセリヌンティウスがおいおい泣いたのに対して、群衆の一部は、息を鼻から吸い込むようにして声に出さないうで泣いた。

暴君ディオニスは、群衆の背後から二人のさまをまじまじと見つめていたが、やがて静かに二人に近づき、顔を赤らめて、こう言った。

「背後から」とあり、処刑の場所に王はいなかった。距離を置いて眺めていた。「さま」とあるので、二人のやりとりの様子。「まじまじ」とあり、じつと見つめて、見きわめようとしている様子が分かる。王は目をそらしたり、退屈したりすることなく、メロスとセリヌンティウスのやりとりを一部始終注目していた。「やがて」とあり、そのうちに、という意味。「静かに」とあるので、音を立てたり、声を出した

りせず、周りの注目を集めることなく近づいた。「赤らめて」とあり、顔色を赤くした。怒りや恥ずかしさで顔は赤くなるが、ここでの王は、自らを恥じて赤らめたのだろう。

**おまえらの望みはかなったぞ。**

「ら」とあるが、王はメロス以外に誰の望みだと考えているのだろうか。一つにはメロスとセリヌンティウスの二人を指していると考えられる。他方で、この二人だけでなく、群衆・民衆の望みだと王が考えているともいえる。その場合、ここでの王のセリフは直接にはメロスに向けられたものだが、間接的に群衆・民衆に向かって語っているのだということもできる。「望み」とあるが、最初の王との対話では、間に合わなかったらセリヌンティウスを処刑し、間に合えばメロスを処刑するという約束だった。しかし、ここではセリヌンティウスを助け、メロスを処刑する望みという意味ではないのだろう。信実が存在するということ、口だけでなく実際に示すということが、おまえらの望みだということだろう。「かなった」とあるので、望みが実現した。「ぞ」とあり、望みが実現したということ、王が判断し、強く言い切っている。

**おまえらは、わしの心に勝ったのだ。**

「ら」とあり、ここもメロスの他に誰を指しているのが問題となる。「心」とあり、ここでは人を疑う心のこと。メロスが約束を守ったことで、王の人を疑う心が間違っていたことが明らかになった。「のだ」とあり、王は自分で勝ち負けを判断し、強く断言している。

**信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。**

「とは」とあり、信実というテーマについて語っている。「決して」とあるので、打ち消しの判断（ここでは「妄想ではなかった」が間違いないと強く確信する気持ちを表している。「空虚な」とあり、内容がなく、価値がなく、むなししいこと。「妄想」とあるので、根拠がなかったり、ありえなかったりする主観的な想像や信念のこと。王は信実を中身がなく、価値もない主観的な信念だと考えていた。しかしメロスの行動で、信実が中身があり、価値もある根拠のはっきりとした考えだと納得した。

**どうか、わしも仲間に入れてくれまいか。**

「どうか」とあるので、王がメロスに丁寧に頼んでいることが分かる。「も」とあり、メロスとセリヌンティウスに加えて、王を入れて欲しいと考えている。「仲間」とあり、ここでは一緒になって信実を示す間柄のこと。王は、人の心を疑わない人間になりたいと頼んでいる。「くれまいか」は、くれないか、という意味であり、メロスに頼んでいる。

**どうか、わしの願いを聞き入れて、おまえらの仲間の一人にしてほしい。**

「どうか」とあり、前の文に続いて重ねて丁寧に頼んでいる。「ら」とあり、メロスとセリヌンティウスを指している。さらに二人だけでなく、信実を信じる人々全体を指しているともとれる。「してほしい」とあるが、王はメロスと友達になってほしいとお願いしているわけではなく、人の心を疑わない人間になると宣言しているのだと言える。王の依頼にメロスは返事をしていない。信実を信じる仲間に入ること、王のこれからの努力によって認められるものであり、メロス

が許可するようなものではない。

どっと群衆の間に、歓声が起こった。

「どっと」とあり、大勢の人間が一度に声をあげたことが分かる。「歓声」とあるので、喜びで声をあげた。群衆は喜んだ。

「万歳、王様万歳。」

「万歳」とは、めでたい時や嬉しい時に唱える言葉であり、両手を振り上げて言う。群衆は、王が信実を認め、信念を変えたことに喜び、めでたいと感じている。メロス万歳でなく、王様万歳と言っていることから、群衆は王の変化こそ価値があると考えていることが分かる。

このかわいい娘さんは、メロスの裸体を皆に見られるのが、たまたまなく悔しいのだ。

「かわいい」とあるが、容姿が良いという意味でなく、セリヌンテイウスたちに比べて年が若く子どものような存在であるという意味と、マントを持ってきた行動がほほえましいという意味とで用いられている。「たまたまなく」とあり、我慢できないほど、耐えられないほどという意味。「悔しい」とあるので、腹立たしく思っている。少女の意図をメロスが理解していないので、セリヌンテイウスが少女の気持ちを代弁している。

勇者は、ひどく赤面した。

冒頭の「メロスは激怒した。」と呼応している。「走れメロス」は、メロスが勇者になる話であり、激怒した状態からひどく赤面した状態

になる話である。「ひどく」とあり、非常に、とてもという意味で、かすかに赤くなったのでなく、真っ赤になったことが分かる。「赤面」とあるので、恥ずかしさで顔が赤くなった。メロスは裸体を皆に見られていることに初めて気がついた。ここまでは格好を気にしないほど夢中だった。

### 三 考察

「私は、なんだか、もつと恐ろしく大きいもののために走っているのだ。」というメロスのセリフは、多くの読者の疑問が集中する一文である。「恐ろしく大きいもの」とは何か、疑問に感じ、また重要だと考え、多くの読者がこの一文に注目する。

メロスは王との約束を守るために、殺されるために走っていた。またセリヌンテイウスの処刑に間に合うために走っていた。ところが、フィロストラトスへの言葉で、メロスは突然「間に合う、間に合わぬは問題でないのだ。人の命も問題でないのだ。」と言い出す。そこで多くの読者は、「いや、今までそのために走っていたのではないか」と疑問を感じる。そこでメロスが「恐ろしく大きいもののため」と言うものだから、読者も「では、それは何か？」と考えてしまう。しかし、前後の文を見てもよく分からないし、最後まで読み終えてもよく分からないために、多くの読者は未解決の問題として、「恐ろしく大きいもの」に〈ひっかかり〉を感じるようになる。

「私は、なんだか、もつと恐ろしく大きいもののために走っているのだ。」という一文に〈ひっかかり〉を覚える私たち読者は、しかしながら「恐ろしく大きいもの」とは何かを考えようとして、すぐに他の文に目を移してしまいがちである。だが〈ひっかかり〉を覚えたので

あれば、この一文から分かることを立ち止まって考える必要がある。例えばこの文から次のような意味が分かる。

「なんだか」という言葉があるのとないのとを比べてみると、「なんだか」という言葉があることにより、メロスにもはつきりとした理由がわかっているということがある。また「もつと」とあり、間に合うかどうかや人の命と比べて、それ以上のものだともメロスは考えている。「恐ろしく大きい」とあるが、恐ろしいものでなかつ大きいものなのか、それとも恐ろしいくらい大きなものなのか。前者ならばメロスが走る理由は恐ろしいものだということになる。後者ならば間に合うかどうかや人の命などよりも、はるかに大きなものということになる。後の文で「わけのわからぬ大きな力」とあるので、ここでは後者のはるかにという意味の「恐ろしく」だろう。そして「のだ」とあるので、強い確信をもって断定している。つまり、間に合うかどうかや人の命と比べてはるかに大きなもののために走っていると強く確信しているながら、それが何なのか、メロス自身もよく分かっていない、という意味がこの一文から分かる。

実のところ「恐ろしく大きいもの」とは何か、と考えてしまう読者の反応は、メロスがフィロストラトスに期待した反応だった。フィロストラトスも、「恐ろしく大きいもの」とは何か、考え込んでしまっただろう。そしてメロスは、フィロストラトスを黙らせたかったのだ。この時のメロスは、呼吸すらままならず、まして深く思考したり、長い会話をしたりすることはできない状態だった。そこに登場したのがフィロストラトスである。フィロストラトスは、すでに時間が経過していて、もはやだめだと判断し、走っているメロスを理屈で止めようとした。メロスの最後の困難は、走る意味を失わせようとする論理

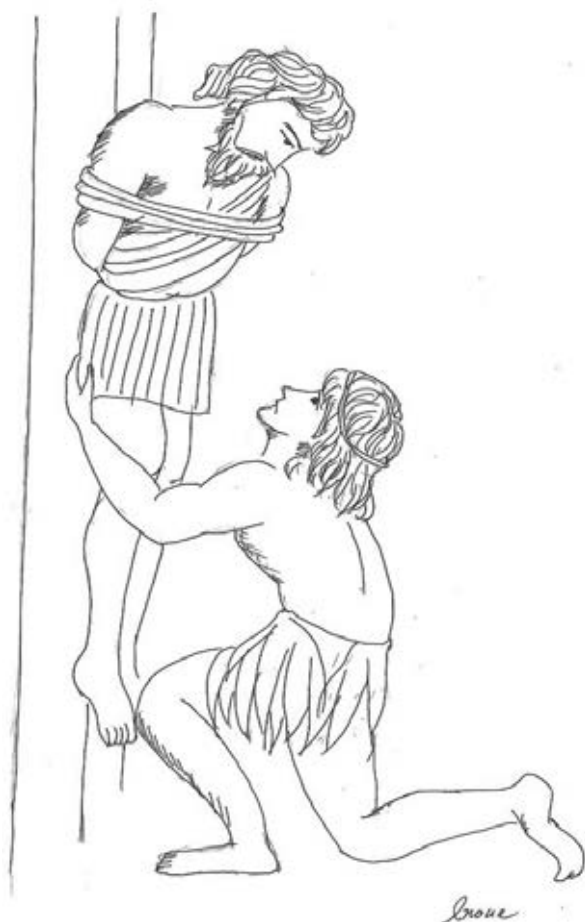
だったのだと言ってよい。フィロストラトスという名前からはフィロソフィー (Philosophy 哲学) を連想させる。

それに対してメロスは、フィロストラトスの方は見ておらず、夕日だけをずっと見ていた。メロスは走りながらフィロストラトスと話しており、立ち止まって話しているわけではない。つまり、理屈で止めようとするフィロストラトスに対して、冷静に思考して答えたり議論したりすることのできないメロスは、「いや、まだ日は沈まぬ。」と同じセリフを二回繰り返すことで、「だから私を走らせてくれ」というメッセージをフィロストラトスに送ったのだ。

それでも引き下がらないフィロストラトスに対してメロスが発したのが「私は、なんだか、もつと恐ろしく大きいもののために走っているのだ。」というセリフである。なぜメロスは自分にもはつきりとわかっていないことを、「のだ」を繰り返して、自信たっぷりに語っているのだろうか。ここでのメロスは走りたいたのであって、フィロストラトスと議論をしたのではない。つまりメロスは、フィロストラトスの理屈を否定し、一方でメロス自身にも分かっていない概念を出すことで、論理的に説得しようとするフィロストラトスを、詭弁によって煙に巻こうとしているのだ。メロスの理屈は「なんだか」とあるように、メロス自身にもよく分かっていない。メロス自身もフィロストラトスには理解されないと考えたのだろうし、まさにそれこそがメロスの狙いだった。だから、「ついてこい」と、傍観者であるフィロストラトスを巻き込み、ついてくれば分かるとばかりに一緒に走らせようとしたのだろう。

つまり、「私は、なんだか、もつと恐ろしく大きいもののために走っているのだ。」という一文によって、メロスは、間に合うかどうかより

も大切なもの、人の命よりも大切なものを説明しようとしているのではなく、「だから私を走らせてくれ」という言外の意味をフィロストラトスに伝えようとしているのだ。最終的に約束を果たしたメロスは、言葉の上だけの信実でなく、その存在を実証できた。しかしそれは後の結果であり、この時のメロスは、ただ一心に走り続けようとする思いだけだった。





## 風の唄（あさのあつこ）

有川 梨沙、石川 奈緒美、亀井 華、栗村 隆太郎

## 一 作者と作品について

あさのあつこは、一九五四年に岡山県に生まれた小説家・児童文学作家である。青山学院大学文学部を卒業後、小学校の臨時教師を2年間務め、その後歯科医と結婚する。子育てが一段落した頃、大学時代に指導を受けた作家の後藤竜二に誘われて同人誌『季節風』に原稿を寄せ、その時に連載した『ほたる館物語』が認められ、一九九一年、新日本出版社から出版され作家デビューをした。一九九七年『バッテリー』（一九九六年、教育画劇）で幅広い世代の支持を得て、児童文学としては異例の一〇〇〇万部のベストセラーになり、野間児童文芸賞を受賞する。その後、一九九九年『バッテリーII』（一九九八年、教育画劇）で日本児童文学者協会賞を受賞、二〇〇五年『バッテリー』全六巻（一九九六～二〇〇五年、教育画劇）で小学館児童出版文化賞を受賞、二〇一一年『たまゆら』（二〇一一年、新潮社）で島清恋愛文学賞を受賞している。

作品のメディアミックスも多く、『バッテリー』は漫画、テレビアニメ、映画、テレビドラマなど多くの媒体で知られている。また他にも『ほたる館物語』が漫画化されたり、『NO.6』がテレビアニメ化されたりしている。

「風の唄」は、二〇〇八年五月三十一日に小学館から出版された『金

色の野辺に唄う』に収録されている。『金色の野辺に唄う』は、九十二歳の松恵の臨終に際して、松恵に救われた、娘、孫の嫁、曾孫、近所の花屋の店員のそれぞれの思い出と想いを描いた、あさのあつこ初の連作短編集である。「風の唄」はその中で曾孫である東真についての話で、絵と同級生の映子との関係の中での東真の心情を、色彩豊かに書き出した作品である。

教科書には、二〇一二（平成二四年）度版、東京書籍「新しい国語3」から掲載されている。生徒の感性を磨き、広い視野と想像力を養うため、現代の書き手による新鮮な作品、心にひびく作品として取り上げられた作品で、学習するのは東真と同じ一五歳、中学三年生の生徒たちであるということから、作品を通して自分の生き方についても考えて欲しいという狙いがある。同様に生徒の感性を磨くための作品として、「風の五線譜」（高階杞一）、「楼蘭の夜」（平山郁夫）が取り上げられている。

教科書で「風の唄」を学ぶ生徒たちは、他に以下の作品を学習する。他の教材と比べ、「風の唄」が新しい作品である事が分かる。

一年 さんちき（吉橋通夫）、少年の日の思い出（ヘルマン・ヘッセ）、トロッコ（芥川龍之介）

二年 字のない葉書（向田邦子）、卒業ホームラン（重松清）、走れメ

ロス（太宰治）、坊っちゃん（夏目漱石）  
三年 形（菊池寛）、故郷（魯迅）、最後の一句（森鷗外）

## 二 叙述について

雪が降ってきた。

雪の情景が浮かび、白いイメージを連想させる。しかし、読み進めるとまだ秋であることが分かる。「降ってきた」と表現していることから、雪が降りはじめたと、この時に東真が認識したことが分かる。

顔を上げ、ふと見やった窓の外を白いものがふわりとよぎったのだ。

東真が、雪が降って来たと思った理由が「白いものがふわりとよぎったのだ」と、説明されている。しかし、降ってきたものが、「白いもの」と漠然と表現されており、また、それが「よぎった」としつかりとは捉えられていない様子が描かれている。このことから、その理由の不確かさが良くわかる一文である。

耳障りなようでどこか哀しげな声だ。

「耳障り」のやかましくうつとうしいイメージと、「哀しげ」の静かで頼りないイメージの相反する言葉を並べている。実際に「哀しげな声」で鳴いているのか、東真の今の心情から普段であれば「耳障りな」泣き声が、「哀しげ」に聞こえたのか、と考えることができる。

大ばあちゃんを迎えに来ているんだろうか。

「の」が撥音便化し、「ん」になっている。これにより、「の」とす

るよりもよりリズミカルで親近感のある表現になっている。また、この文は、唐突に物語の中で「大ばあちゃん」の死をつきつけてくる。より親近感のある表現にしたのは、それをより読者にも近しく受け取らせる効果を狙ってか。

東真の皮膚にびたりとくつついて、どんどん体温を奪っていくような冷たさだった。

「びったり」ではなく「びたり」となっていることで冷たい印象を受ける。加えて「体温を奪っていくような」から自らに危機迫る、また、それがどうしようもない力であることを想像させる。死に直面している大ばあちゃんに、触れることで、死を自身にとつてはいつか危機となり得るものとして認識するとともに、それがどうしようもない物であることを客観的に捉えていることが分かる。

そうか、人ってあんなふうに死んでいくものなんだ。

死ぬということがどういうことか現象としては理解しているが、曾祖母の死からよりリアルに実感している様子が「ものなんだ」から、うかがえる。

確かに生きていたものが、消えていく。

前文の「徐々に」からも分かるように、ただ「消える」のではなく、だんだんとまた少しずつ消えることが、「消えていく」という表現からより強く読み取れる。また、漠然と認識していた死を、「確かに生きていたもの」（＝曾祖母）が、「消えていく」（＝死）から身近なものとして実感している。

曾祖母の体を通し、死んでいくことはぼんやりと感じ取れても、百年近くを生き続けるなんて、まるで実感できない。

曾祖母の死に関しては実感できた東真であるが、それに向かうために積み上げてきた時間の大きさに対して逆に驚き、戸惑っていることが分かる。(戸惑いに関しては前の三文からよくわかる。)また、今、死にゆこうとしている曾祖母の身体には、百近い積み重ねがもう欠片も感じ取れなかったと読むこともできるか。

熟した柿の実は秋の陽光に照り映えて、燃え上がる焔そのものに見えた。前半部分の描写から熟した実の様子が鮮明に浮かび、「焔」という例えも柿の実の熟れていて美しい様子を更に強調している。また、固い言い回しで表現されていることで、より強烈に柿の様子を表現している。

曾祖母が自分に遺そうとした言葉を聞きたくなかったのだ。

「聞きたくなかった」とあることから、物理的にはなく自らの意志で聞くことを拒んだことが分かる。また、「耳を塞ぎたくなくなった。」本当の理由がこの一文に集約されている。

決して燃え広がらない美しい焔が枝の先にともったようじゃないか。

普通の火のように燃え広がることはなく、変わらず同じ大きさで、小さいがしっかりと燃え続けている様子に美しさを感じている。これは、文末の「じゃないか」と問いかけるような表現から東真の感動具合が読み取れる。

陽光の当たり方で、たった一つの果実が朱にも紅にも茜にも色を変えていく様子に東真は、いつも見ほれてしまう。

「朱」「紅」「茜」と三つの言葉を重ねることで実の赤さの多様性とその美しさをさらに強調している。「朱」は黄色みを帯びた赤色、「紅」は鮮やかな赤、「茜」は沈んだ黄赤色・暗赤色であり、それぞれが微妙に異なる色彩を表している。このように同じ赤色でも東真には、三つの色がそれぞれ異なって見えていることから、東真の繊細な感性を感じさせる。

「ルンパ」は父の充と母の美代子がやっているレストランで、祖母は自分の作った野菜を定期的に届けに来る。

東真の家族のことと、祖母・曾祖母との人間関係が分かる一文である。

がきの絵なんかを額に入れて飾ったりして、何か……ばかみてえだ。

自分の絵を仰々しく額に飾っていたことに対する照れと、画家でもない自分の描いた絵を飾っていたことに対する恥ずかしさと、自分の描いた絵をそれほど大事にしてくれていたことに対する嬉しさが込められ得ることが、この段階までの読みでは読み取れる。しかし、後半の映子とのやり取りを読み振り返ると読み取り方が変わる。自身のことを「がき」と表現していることや、「ばかみてえだ。」と吐き捨てていることから、東真は、平凡な才能でしかない自身の能力を過度に評価し、額にまで入れて鑑賞している曾祖母に対して、嫌気を感じていることが分かる。一方で、「何か……」と、言葉に詰まっていることか

ら若干の罪悪感や心底嫌っている訳ではないことが分かる。

光に満ちていた風景がすばむように色彩を暗くする。

「すばむように」と表現することで、ただ暗くなるのではなく、周りから次第に明るさが小さくなっていくイメージを与えている。「色彩」という表現から東真が、普段の風景もキャンパスに描かれた絵のように捉えていることが分かる。

東真がこの家にいたとき寝起きしていた部屋は、今でも当時のままで、祖母が入ってきたドアにはクレヨンで描きなぐった線が、あるものは曲がり、あるものは波打ち、あるものはまっすぐなまま、残っている。

読点を打つことで描きなぐった線のそれぞれの様子が強調されている。また、色彩がなくなっただ後であるため、敢えて色に関する言葉を使わずに「あるもの」と無機質な表現を使っている。これにより、東真が見ている世界が非常に冷たい印象であることが実感できる。

この家の、この木の、この実を見るたびに思う。

家から実へと読者の視点を動かし、東真の柿の実へのこだわりを感じさせる。また「この」を、全てにつけることで、「一つ一つのものが他の代用品では意味がないのだ。」という東真の強いこだわりが読み取れる。

熟せば熟すほど、色彩は深みを増し、光は更に内へと籠もっていく。

光が「内へと籠もっていく」という表現から外見だけではなく、内側の実の芯まで赤く熟していることが読み取れる。また、色の深みを

「光」が「籠もっていく。」と表現することでより美しく表現している。

だけど、大ばあちゃん、俺、もう……。

「……」の部分には、描くことができない、描くことをしない、という曾祖母の想いに応えることができないう東真の気持ちが入るのだろう。読点で単語が区切られていることから、言葉に出来ない東真の想いが感じられる。

胸の上を拳でたたき、鼓動を抑える。

手で押さえるのではなく拳でたたいていることから、激しく込み上げる想いである鼓動を、無理やり鎮めようとしていると読み取れる。

目の前をふっと白いものが横切る。

最初は「よぎった。」と漠然と捉えた表現に留まっていたが、「白いもの」の動きを「横切る」と、以前より明確に捉えていることが分かる。

あるかなしかの風に流されて、東真の視界から消えていった。

「あるかなしか」と表現することで、非常に弱い風が吹いていることが分かる。一方で、そんな風にすら羽毛は流されてしまうという弱弱しさも分かる。

鼓動に合わせ速まろうとする呼吸を何とか抑え、東真はそっけない口調を使おうと、努力していた。

「努力」をしなければ、「速まろうとする呼吸」を隠すことができない

いほどの状況である。また、「何とか抑え」てまでも「そっけない口調」を使おうとしていることから、二人の關係に何かよくないことが起きたのではないかと推測させる。

無邪気に陽気に、屈託なくしゃべり合い、筆を動かしていた時期があったのだ。

「時期があつたのだ。」とあることから、今は、良好な關係でないことが分かる。「屈託」は一つのが気にかかり、他のことが手につかない様であり、「屈託なく」とはわだかまりや心配事が無く、すっきりとした印象を与えている。また、二人の仲の良さを表す表現を重ねることで、今とは全く異なる幸せな二人の姿がさらに強調されている。

おまえに言葉なんていらなんだ。

「なんて」という言葉より、東真は映子を使う言葉を軽視していることがわかる。映子の絵は言葉以上に自分の気持ちを表現できるものであると東真は思っている。

東真は唇を強くかみしめる。

「唇をかむ」という行為より、東真が悔しい気持ちを抱いていることがわかる。映子の才能を認め、感嘆できる度量が自分に無いことに強い悔しさを感じ、それが表面に現れている。

自分がどのくらい見当外れの愚か者だったか思い知ったのは、二年生の秋、映子の部屋で偶然、油絵のキャンバスを見つけたときだった。

「思い知る」は身に染みてわかるという意味である。東真は自分が

映子に対して抱いていた、守ってあげたいというイメージが自分勝手での外れであつたということ、嫌という程、身に染みたのだ。一方で、自分の才能がいかに平凡なものか思い知ったようにも捉えられる。また、現在はおそらく三年生の秋であるので、それを知ったのは約一年前であるという事も分かる。

東真はバラの、映子は東真の横顔の絵を持ったまま目を合わせた。

映子がバラの絵を取っておらず、そのことを気にとめていない様子であることから、絵を見られるのが嫌だった訳ではなく、東真の横顔を描いていたのを知られるのが嫌だったのだということが分かる。

ちよつと肩をすくめて、笑いかけてやれよ。

「肩をすくめる」という動作は、やれやれしようがないという気持ちを表す行動であり、東真は気にせず許してやりたいという気持ちを持っていることがわかる。しかし、自分に対して笑いかけてやれよと言っていることより、実際はしたいと思ってもできないと分かっているため、皮肉となっている。また、笑いかけてやれよという表現は自分への鼓舞というようにも捉えられる。

笑ってみるよ、東真。

「〜してみる」は試しに行うというときに使われる。しかし、ここでは試すというよりは故意に行うという意味で使われているように思う。よつて無理やりにも自分にさせようとしているように思う。前文までの「笑ってやれ」に引き続いた強調の役割も果たしている。また、自分自身を名前で呼んでいることから、実際に行動をする自分

とは違う少し離れた視点から見ている自分が語りかけるように感じている。

見とがめられるのが嫌で、近くの川原まで運んで火をつけた。

「見とがめられる」とは、「非難する、問い責める」の意味である。

「見とがめられる」と思っていることから、罪悪感を持つている。火を使って燃やすという行為に対してと自分の絵を自ら燃やして処分していることに対しての二つの捉え方ができる。

焰は柿の色と重なり、しかし、果実の静謐とは無縁の猛々しさで何もかも灰にしてしまう。

「何もかも」という部分に絵だけではなく、自分自身の今までの絵や映子に対する思いも含まれているように思う。この部分で自分の中で気持ちを消してしまおうと決心したように推測される。また、柿と焰の二つを対比させることで、柿の絵を描いていた時の東真と絵を燃やして、激しく燃えさかる火を見る今の東真の心情も対比している。

退くことで東真は、曖昧にぼやけていた自分の心の、想いの一端をはっきり捉えることができた。

「ぼやける」と「はっきり」と対の語句を使用していることにより後の文が強調されているように思う。また「想いの一端」とあることから、東真が自分の心すべてを捉えてはいないということがわかる。

傍らにいて自分の凡庸さを突きつけられるより、映子と離れるほうがまだ、ましだった。

まだの後に読点があることより、ためらいの気持ちが含まれていることがわかる。「まだ」には、「どちらもよくはないけれど」の意味が含まれているため、このことから両方嫌であったと思っっていることがわかる。

雲が広がり始めていた。

これまでは空は晴れて日が差していたが、ここで天気が悪くなっていったという事が読み取れる。この時点では東真の考え方や気持ちに変化はほとんどないが、これから東真の気持ちに変化が起こることを暗示しているように思う。

まばたきしていた。

映子の突然の依頼に、東真が動揺していることが読み取れる。また、どこか客観的に書くことで、東真が映子の言葉に実感を持っていないということが分かる。

映子はまっすぐに東真のまばたく目を見つめてくる。

前文の「まばたきをしていた」東真の目を、映子が見つめていたという事である。この二つを対比させることで、映子の決意を表現している。また、「見つめてくる」より、東真は映子に一方的に見られているという風を感じていることがわかる。

空に線を引くように、滑らかにまっすぐによぎっていった。

この部分で場面の変化が表現されているように感じた。表現は、キャンバスに絵を描くときの様子を連想させる。また、空の色と赤とん

ぼとの色が対比され、色彩豊かに感じた。

雲の切れ間から降りてくる光の中に、柿の木が立っていた。

曇っていた空の一部が切れて光が差し込み、舞台のような演出を見せている。雲は東真の心を表現しており、切れ間から光という部分より、東真の気持ちに変化がみえてきたことが推測できる。

ほろりと言葉が口をついた。

「ほろり」とはモノがもろく散り落ちるさまを表しており、「ポロリ」に近いように感じた。このため、東真は言おうとおもっていたわけではなく、気付いたら言ってしまったというように感じられる。また、口をつくという表現もすらすらと言葉がでるという意味があるため、今までは自分の気持ちをいえなかった状態との対比を表している。

この木は、いつからあの場所にいたのだろう。

「いた」というように擬人法を使うことから、柿の木を特別なものと思っているように感じる。またここでは急な話の転換が見られるが、東真の心が絵を描く、ということを意識したことで、祖母の言葉を思い出し、ふと生と死について思い至ったのだろうか。

映子とは思えない、断ち切るような口調だった。

断ち切るとは今までのつながりをなくす、切り落とすといった意味をもつ。これより、東真の言葉の後に間を与えずという意味のほかにも、今までの東真の中の映子のイメージを変えるという意味にも捉えることができる。映子が普段は優柔不断な言葉遣いであることと対比させ

て、絵に関する事への映子の態度が普段とは異なっているということを強調している。

髪がパサリと音を立てた。

髪が音を立てるほど、映子のはつきりと首を振って答えたという事が読み取れる。この表現があることにより、映子のかぶりを振っている動作が創造しやすくなる。

重く響く痛みに必死に耐えていた。

「痛みに必死に堪えている」とあることから、映子が東真の願いを切実に聞いてあげたいと感じていることが読み取れる。また「重く響く」の部分より、東真の言葉に心が揺れ動かされていることがわかる。だが、それでも描けないことを通そうとしていることから、ここでも映子の絵に対する意識が感じられる。

東真は、両手をだらりと下げて、小さくなる映子の後ろ姿を見つめていた。

「だらりと」より、東の体に力が入っていないということが表現されており、映子の言葉に呆然としている東真の様子が想像できる。だが意識まで呆然としている訳では無く、映子の姿はしっかりと目に入っている。

「私のために描いてくれるんやろ、東真。」

死んでしまったはずの曾祖母の声を東真は感じ取っている。これはおそらく東真自身の思いの表れであり、東真が曾祖母に理解されてい

たと感じていたことが分かる。自分の為にしか描けないといった映子の言葉と対比されることで、この言葉が強調される。

それは……できる。

「それは」とあることで、映子のように素晴らしい絵を描けなくても、他人のために描くことはできるのだということを表している。「……」の部分に東真の絵を描くことに対する決意があるように感じる。映子に出会って、描くことを諦めたが、映子とはまた違う絵との関わり合いを見つけて、新たに絵を描き始めることを決意したのである。

きれいだけど、ごく普通の少女の笑顔だった。

映子のことを自分とは違う才能がある人と思い、距離を感じていた東真が、「ごく普通の少女」というように感じたことより、ここではじめて東真は映子のことを自分と同じ立場であるということ、特別視することをやめたということが推測される。

東真は涙の跡と笑みに彩られた白い顔を見つめる。

涙と笑みという言葉が同時に使われており、対比されている。また、この表現より表情の豊かさも感じられる。「彩られた」は絵でよく使われる表現であり、作者のこだわりが感じられる。そのことを考えると、「白い顔」という表現も、今までの暗い気持ちとの対比だけではなく、真っ白なキャンバスというような捉え方もあると考えられる。

しゅうとめの奈緒子が声を掛けてきた。

序盤に記されていた「祖母の奈緒子」と同一人物であり、称しかた

を変えることにより、視点が変更されているという事を表している。東真でも映子でも曾祖母でもない「母」の視点からの東真の変化を見ようとしている。

制服を持って、裏庭に回る。

制服を置いていくこともないまま、息子の様子を見に行っていることが分かる。喪服(制服)を着ているわけではないのにふさわしい姿である東真の様子につながってくるように感じる。

その姿が、葬送の場には何よりふさわしいように思えた。

「何よりも」とはどんなものよりも一番という際に使われる。真剣にスケッチブックに向かう東真の背には神聖なものがあり、その姿は誰もが喪服を着て悲しむ葬送の場の中で、一番曾祖母が望んでいたものに思えたのではないだろうか。

それから、無言のまま家の中へと足を向けた。

「無言のまま」ということより、美代子は東真に一言も声をかけないまま家の中へ戻ったのである。ひとつ成長したように見える息子の姿を見て、美代子は声をかける必要が無いと感じ、声をかけて制服に着替えさせることよりも、東真なりの曾祖母への送りをさせようと思っただのかもしれない。

### 三 考察

#### (一) 東真における「赤」





『風の唄』では、赤を連想させる言葉が多く書かれている。その中でも特に印象に残るものは「焰」と「炎」の表現である。『漢字源 第五版改訂』によれば、「焰」は「めらめらと燃える火」を表し、「炎」は「盛んに燃える」ことを表している。「炎」は、一概に火そのものを表現しているのではなく、燃えている様子そのものをも表すようだ。では、この作品の中では意図的にこれらを使い分けているのだろうか。また、使い分けしているとすれば、どのように使い分けられており、さらにそれらが何を表現しているのだろうか。

まずは「焰」について考える。「焰」は、「熟した柿の実が秋の陽光に照り映えて、燃え上がる焰そのものに見えた。」「決して燃え広がらない美しい焰が枝の先にとまったようじゃないか。」「焰は柿の色と重なり……（中略）……何もかも灰にしてしまう。」の三文で使われている。これら三文の共通点は柿の実である。前二文は柿の木の比喩として、最後の一文は火そのものを言っているが、三行前に「めらめらと炎が上がる。」と火を「炎」と表現していることから、火としての意味よりも柿の実に対応して使われた表現であるといえる。このことから、東真は柿の実に対して焰のイメージを深く結び付けていることが分かる。そして、「焰」＝「柿の実」とすれば、その火は「灯る」が最もしっくり当てはまる表現である。

次に、「炎」についてである。「炎」は、「めらめらと炎が上がる。」「炎だ。」「全てを食らい、全てを灰にしてしまう炎」の三文で使われている。これら三文の共通点は、実際に他を飲み込む動きがあることである。この「炎」は、先が「灯る」であったのに対し、『漢字源 第五版改訂』からも分かるように、「燃える」が最もしっくりと当てはまる。実際に見ていくと、一文目は東真が自分の絵を燃やしている場面

である。二、三文目は、映子の意志、情熱の強さに東真が飲み込まれている場面である。事実、この場面で東真は言い返すこともできず、また反応したとしても言葉を濁している。また、教科書の『風の唄』は省略されたものであるため、記述はないが、映子が東真にモデルになってほしいと必死で頼む場面で、東真は映子の様子を「映子が炎に包まれる」「映子、燃えてるぞ、燃えてる。」と表現している。これらのことを踏まえると、「炎」は映子に関係することに集中的に使われている。一文目もよくよく考えれば、その行動の発端は映子の絵である。

そして、東真は敢えて、破るでも、切り裂くでも、捨てるでもなく燃やした。「炎」に自身の内にあった「焰」が飲み込まれていく様は何とも象徴的とは言えないだろうか。であるならば、「炎」という言葉は映子に対して東真が抱いているイメージ、つまり映子を象徴していることが分かる。

さて、これらのことから「焰」と「炎」が使い分けられており、それぞれが「柿の実」と「映子」を表現していることが分かった。では、これらのことを踏まえ、東真にとっての赤とはどういったものであったのだろうか。

柿の実と映子は両者とも東真にとって美しいものである。確かにベクトルは違うが、柿の実の「焰」、映子の「炎」に東真は惹かれている。ならば、東真にとって赤とは美しいものの象徴であるのではないだろうか。そして、美術部の人間としては、その美しさの評価指標は自身の中で大きなアイデンティティを占める。実際に東真は、赤で描かれた映子の真紅のバラを見て彼女との画力の違いを痛感する。赤を美しきものと評価しているのは、紛れもなく東真であり、美術におけるその美しさの指標は、東真にとって重要であったことは想像に易い。故

に、赤という評価指針で描かれたバラは、同じ赤を使った柿の実を大きく飲み込み東真の自信を喪失させた。つまり、東真における赤とは美しきものであり、その根底では自己のアイデンティティの一翼を担っている価値観であったのではないだろうか。

## (二) 風景描写と東真の心情変化に着目して

本文全体を通して、光、風、雲など自然に関する描写がいくつも見られる。本考察では本文を、順を追ってみていくこととする。まず、「祖母が入ってきたと同時に日が陰る。光に満ちていた風景がすぼむように色彩を暗くする。」という場面の後の回想場面から急に色彩のトーンが下がり、まるで東真が曾祖母の死の知らせを予想していたような印象を与えている。そして、その後、実際に祖母から曾祖母が亡くなったことが告げられる。また、「視線を上げ、空を仰ぐ。雲が広がり始めていた。」と描写されている場面は、映子と距離を置くことになった一件を思い出し、様々な思いを巡らせた後の締めくくりの一文である。映子の才能に気付いた衝撃や、それを認めるだけの度量が自分に無かったことに対するふがいなさ、また映子への本当の気持ちなど、東真の中で消化出来ない心情部分が「雲が広がり始めていた」という部分に、晴れることのないもやもやしている様子としてよく表れている。

次に、東真が映子との関係や絵を描くことに対して変化を見せる後半部分「日が陰る。風が強くなる。刈り入れ間近の稲がシヤラシヤラと軽い音を立てる。」「風が田の上を走る。土と稲穂の匂いが鼻腔に流れこんできた。」という二カ所の描写に着目する。

まず、東真と映子、二人の関係が崩れて初めて、映子から絵に対す

るまた東真に対する気持ちを打ち明けた場面である。それでも東真はそれに応えることが出来ず、関係が崩れたあの時と同じことを繰り返そうとしていた、その時に、「日が陰る。風が強くなる。刈り入れ間近の稲がシヤラシヤラと軽い音を立てる。」と描写されている。その後、「東真は両手をだらりと下げて、小さくなる映子の後ろ姿を見つめていた。」とあるように、映子をただ目で追いかけることしかできない無気力感や去っていく映子に対する切なさが表れている。また、この直後に曾祖母の声が聞こえ、やりとりが始まることから、日や風の変化がそれらを東真に予感させているとも取ることが出来る。

その後、曾祖母の言葉を受け「誰かのために、描くことはできる」と、柿の絵を描くことを決め、さらに映子という存在に向き合うことを決めた。その時の東真の心情の変化を描いた直後、「風が田の上を走る。土と稲穂の匂いが鼻腔に流れ込んできた。」とある。今日までどうすることもできなかった自分の中の葛藤を吹っ切り踏み出せた、前進した自分に対する晴れやかな気持ち「風が田の上を走る。」という部分に感じられる。また、今までは手の届かない存在に思っていた映子に対して、「ごく普通の少女の笑顔だった。」とする表現が、映子が傍らにいた頃のように隣に並んでいるように感じた瞬間を表している。その変化から、「映子の顔が輝く。」「彩られた白い顔」などの表記のように、さつきまでは陰りがあつた情景に、東真の心に呼応するように陰りが晴れていく様子が感じられる。さらにここでは、これまでの光や風といった視覚、触覚に加えて「土と稲穂の匂い」として嗅覚が働く。新たな感性が働いたことから、未来が開けた瞬間であり、東真自身成長したことを感じさせる。

## 握手（井上ひさし）

## 一 作者と作品について

本名、井上 廈（いのうえ ひさし）。一九六一年から一九八六年までの本名は（うちやま ひさし）。遅筆堂（ちひつどう）とも名乗った。小説家。劇作家。

一九三四年十一月一七日、山形県東置賜郡小松町（現川西町）に生まれる。父は、井上靖と競った文学青年の井上修吉。ひさしとその兄弟は、戸籍上は非嫡出子（婚外子）として生まれ、五歳で父と死別。義父からの虐待を受け、母と東北地方を移り住むなど、幼少期の家庭環境は複雑である。その後、カトリック修道会ラ・サールの孤児院（現在の児童養護施設）である宮城県仙台市の「光が丘天使園」に預けられる。そこではカナダ人修道士たちが児童に対して献身的な態度で接していたようだ。

上智大学外国語学部フランス語学科を卒業。卒業前から執筆の仕事を始め、卒業後は放送作家として活動する。山元護久と共に、NHKテレビで放映された人形劇『ひよっこりひよっくたん島』（一九六四年～一九九年放送）を手がけ、それが国民的人気番組となり一躍有名になる。一九七二年『モッキンポット師の後始末』（現講談社文庫）で小説界にデビューし、同年『手鎖心中』で直木賞を受賞。さらにテアトルエコーで上演された戯曲の中から『道元の冒険』で岸田國士戯曲賞を受賞。

## 椎葉 一勲、宮川 恵美子

小説家、戯曲家としての地位を確立した。以後も、戯曲、小説、エッセイに数々の話題作を生み、一九八一年『吉里吉里人』（新潮社）で日本SF大賞、読売文学賞、星雲賞を受賞。一九九一年『シャンハイムーン』で谷崎潤一郎賞を受賞。様々な分野で数々の受賞歴を持つ。また、てんぶくトリオのコント台本や、テレビ、ラジオ、アニメ、などまで手掛け、活動の幅は広く、多才ぶりを発揮した。八三年より直木賞選考委員を務め、日本劇作家協会理事、社団法人日本文芸家協会理事、社団法人日本ペンクラブ会長、仙台文学館初代館長、なども歴任。二〇〇四年文化功労者顕彰、二〇〇九年日本芸術院賞・恩賜賞受賞。

作家としてのモットーは「難しいことを易しく、易しいことを深く、深いことを面白く」とあり、文体は軽妙であり、言語感覚に鋭い。膨大な資料を収集して作品を書くことも有名で、蔵書は「遅筆堂文庫」として故郷に寄贈された。二〇一〇年四月九日没。

## 二 叙述について



桜の花はもうとうに散って、葉桜にはまだ間があつて、そのうえ動物園はお休みで、店の中は気の毒になるぐらいすいている。

冒頭、場面設定を説明する段落で、季節、時を示す一文である。「とうに」は、「疾うに」と書き、文語形容詞「疾し」の連用形「疾く」のウ音便で、「とうに帰った」「とうの昔」などと使われ、「ずっと以前」「とつくに」という意味である。葉桜とは、桜の花が散りだし、若葉が芽吹き始めた頃から新緑で覆われる時期までの桜のことである。「桜の花はもうとうに散って、葉桜にはまだ間があつて」とは、「桜の花はとつくに散り、それから少なくとも数日が過ぎ、若葉の緑を楽しむまでは何日かはかかるという時期である」と説明できる。

「そのうえ」とは、「さらに」「それに加えて」という意味である。この語の前は自然景物の寂寥感を述べ、この語の後には人出の少なさ、人間世界の寂寥感を描写している。自然が淋しい、それに加えて、さらに、人間もいなくて淋しいと、寂寥感が強調される。

「気の毒」とは、他人の不幸や不運に心が痛むという意味の言葉であるから、「気の毒なぐらいすいている」との表現からは「わたしは、店の中には客が居なくてすいていることに、同情している」と解釈できる。他人のことでありながら、現状を詳細に観察し、同情している様子から、私が、繊細で優しい人であることが分かる。

この一文により、ルロイ修道士と私の二人があつたのは、桜の後、新緑までの季節、すなわち四月の下旬頃と推測できる。また、桜は、花が咲いてないばかりか若葉の美しさもまだ感じられない時期であるから、美しい風景とは言いがたい。しかも動物園が休園であることが重なる、人出がなく、決して賑やかではない。殺伐とした、閑散とし

た、上野の街の情景が想像される。二人の別れ、この世での最後の場面に相応しい、静かで淋しいイメージを、読み手に想起させていると言えらると思う。

小説の最後の段落で、ルロイ修道士が亡くなった季節が「葉桜が終わる頃」と表現されていることにも着目したい。いずれも何月何日という具体的な日時は書かれていない。時期の設定を自然景物の描写によつて表現し、日付は曖昧にしている。これは、具体的な日付の記録よりも、淋しい別れのイメージが大切であり、その寂寥感を読み手に想起させるための手法、作者の意図と言えるのではないだろうか。

その手を見て思わず顔をしかめたのは、光が丘天使園の子供たちの間でささやかれていた「天使の十戒」を頭に浮かべたせいである。

「思わず」ということから、わたしが、ルロイの手を見て、反射的に顔をしかめたことが分かる。「その手を見て顔をしかめた」と表現するよりも、「その手を見て思わず顔をしかめた」の方が、わたしが、ルロイの手に対して、潜在的になにかトラウマのようなものを抱えているということが伝わる。

「子供たちの間でささやかれていた」ということは、大きな声では言えない、先生に聞かれてはまずい話、ということである。もしこれが、「光が丘天使園で知られていた」だと、そこにいるすべての人が認識していることになるが、「子供たちの間でささやかれていた」とあるので、これは、天使園の子供たちの中だけが認識している暗黙の話だということになる。

「天使の十戒」が、さらにわたしの記憶の底から、天使園に収容された

ときの光景を引つ張りだした。

「記憶の底」ということは、自分にとって忘れかけていた記憶、意識しなければ呼び起こすことのなかった記憶ということだろう。

ルロイ修道士の「手」をきつかけに、「天使の十戒」を思い出し、さらにそれをきつかけにして、「天使園収容時の記憶」が思い出されたのである。この連鎖して徐々に古い記憶が呼び起こされていく様子を「引つ張りだす」という言葉で表しているのである。

ルロイ修道士は、病人の手でも握るようにそつと握手をした。

後の話で、ルロイ修道士がこの時すでに全身にがんを患っていることがわかるが、ここでの描写は、「病人が手でも握るように」ではなく、「病人の手でも握るように」と表現されており、病人の対象がルロイ修道士ではなく、わたしになっている。

かつてのルロイ修道士は、相手の手がしびれるぐらいに力いっぱい握手をしていたのだが、ここでは穏やかな握手をした。このことから、まずルロイ修道士の様子がいつもとは違うということを読者に印象づけている。

そして、「病人の手を握るようにそつと握手をする」という行為から、弱っている相手を気遣う心、配慮、優しさが伝わる。つまり、この表現から、ルロイの子どもを包み込むような「慈悲深さ」「優しさ」「ぬくもり」といった人間性が伝わる。

そのために、彼の手はいつも汚れており、てのひらはかしの板でもはっ



たように固かった。

「そのため」とは、その前の文の「園長でありながら会見やデスクワークを避け、畑や鶏舎にいて子供たちの食糧を作っていたこと」を指す。てのひらとは、たなごころ(掌)、手の内側を指す言葉。かし(樫)とは、ブナ科の常緑高木の名称、どんぐりの木のことであり、材は堅く弾力がある。「てのひらはかしの板でもはつたように固かった」とは、当時握手したルロイ修道士の手は、弾力はあるが表皮の部分が厚く固くなっていて、まるでどんぐりの木の板のようであった、と説明できる。ルロイ先生が、園長という園の中で一番上の立場にありながら、手の皮が固くなるまで畑仕事に精を出していたことが分かり、偉そうにせず、陰での地味な作業にも努力する、修道士らしく謙虚な人柄を示す一文である。

この一文及び前後の文章で、ルロイ修道士の昔の手の固さを叙述することは、この日の「穏やかな握手」との表現と対比され、より強調していると思う。

ルロイ修道士は、「こら。」とか、「よく聞きなさい。」とか言う代わりに、右の人差し指をぴんと立てるのが癖だった。

「こら」とは、怒っている時に使う言葉である。「よく聞きなさい」も命令調で、聞いていない人に聞けと少し怒った状態で発する言葉である。「とか」とあるので、怒っている時に発する言葉はこの二つ以外にもあることを類推させる。「代わりに」とは、あるものに相当する他のもの、交替する、という意味である。ここでは、怒る言葉を言う代わりに指を立てるのであるから、ルロイ修道士は、この右の人差し指をぴんと立てる行為をした時、黙っていることが分かる。「癖」とは偏

って多いほどの（普通でない）仕方を繰り返してついた習慣、仕事という意味の語である。当時の修道院では、ルロイ修道士が怒る状況や、子どもたちが話を聞かない状況が頻繁に起こっていて、ルロイ修道士は、その度にこの仕事をしているうちに習慣化し、癖になってしまったことが分かる。

ルロイ修道士は、直接に言葉で怒ったり命令したりすることはせず、右の人差し指を立てた状態で、何も言わない一瞬の「間」を作り、怒る言葉を飲み込んでから、子どもたちを諭すように話をしていった様子が想像できる。ルロイ修道士の、辛抱強く、いつも冷静で、感情を表に出さない性格と、良き指導者であったことが読み取れる。

この指の動きでルロイ修道士は、「おまえは悪い子だ。」とどなっているのだ。

「この指の動き」とは、その前の行の「両手の人差し指をせわしく交差させ、打ちつけている」という動作のことである。「で」は手段・材料・理由などを表す格助詞である。従って「この指の動きで」は「両手の人差し指をせわしく交差させ、打ちつける動作によって」という意味になる。

「どなる」とは「大声で叫ぶ、しかる」という意味であるから、「この指の動きで」の語がなければ、ルロイ修道士は「おまえは悪い子だ。」と「大声でしかっている」という意味になる。しかしここでは、実際にルロイ修道士は言葉を発していない。にもかかわらず、わたしは指の動きによって、悪い子と怒鳴りたいほど怒っているルロイ修道士の心を理解している。「おまえは悪い子だ」は、実際には発せられていないにもかかわらず、指の動きによって「わたし」が感じ取った、ルロ

イ修道士が心の中で大声で怒っている言葉である。しかも「のだ」とあるので、断定が示され、わたしはそのことを強く確信していると言える。指言葉という語を導き出し、説明している一文だと思う。

きつと平手打ちが飛ぶ。

「平手打ちされる」と表現するのではなく、「飛ぶ」と表現することによって、「突然」「すごい勢いで」というニュアンスが伝わる。

元園長は何らかの病にかかり、この世のいとまごいに、こうやって、かつての園児を訪ねて歩いているのではないか。

「元園長」とはルロイ修道士のことである。

「何らかの」とあるが「ら」は複数を表わす接尾語であるから考えられる病はいくつかあって、この段階ではわたしはルロイ修道士の病が何か、はっきりと分かっていないと言える。

「いとまごい（暇乞い）」とあるが、「いとま」は、ここでは単なる暇（ひま）という意味ではなく「別れ」という意味である。「おいとまいたします」などの用例と同じ意味である。前に「この世の」との語があることから、ここでの「いとまごい」の意味は、「休暇を願い出る」や「故郷に帰り休みたい」という意味ではない。「この世に別れを告げること」と解釈すべきであろう。読み手に、この世界からの永遠の別れである「死」を連想させる語となっている。

「こうやって」とは、「ルロイ修道士がわたしを上野に呼び出し逢いに来た」ことを指す。

「かつての」とあるが、「かつて」は、現在からかなり前のある時期に、経験してきたことや感じたことなどをいう場合に用いる語である。

「これまでの」「以前の」などの語に置き換えが可能であるが、「かつての」の方が、遠い過去という語感がある。ここでの「かつての」は、置き換えを試みるならば、「昔の」に近いのではないだろうか。

「園児」とはわたしを含めた、かつての「光が丘天使園」の教え子たちのことである。

「のではないか」とあるので、疑問・反語の文形である。「ないか」の後に「きつとそうに違いない」などの語を補うと分かりやすい。

ルロイ修道士のことを、他の個所ではほとんど「ルロイ修道士」と書き、会話文では「先生」と呼んでいるのに、ここでは「元園長」と表現されている。「わたし」も「園児」となっている。ルロイという固有名詞や「わたし」を使わずに、役職名や肩がき、立場の名称で書かれていることに注目したい。これは、わたしの中にもう一人のわたしを設定され、第三者的立場でわたしがわたしを客観視している表現と云えるのではないか。わたしの心中語でありながら、それを客観的な視点で、突き放すように書いた表現である。「ルロイ先生は何らかの：(中略)：こうやって、わたしたちを訪ねて：(後略)」と表現されるよりも、強く、突き刺す様に、読み手の心に響く。

ここは、わたしが、「ルロイ修道士の死期が近いこと、だから自分に逢いに来たこと、これが二人の最後の時間であること」などに気づく場面で、この一文は、わたしの心中語である。この段落の初めでは、「冗談じゃないぞ、と思った。」と、同じ心中語に対して「と思った」と、心中語であることを説明しているが、この段落の最後の文では、それが省かれ、文章は次の会話文へと流れていく。この場面には他にもいくつかのわたしの心中語があるが、この段落の中で「と思った」と説明する語は、読者すら気づかないうちに消されていく。このことは、

読み手に、わたしの心の衝動の高まりや臨場感を感じさせる効果を生んでいるのではないだろうか。作者の劇作家的一面を表し、読み手を引き込むような文章表現の上手さを感じる部分である。

**ルロイ修道士は顔をしかめてみせた。**

「顔をしかめた」ではなく、「しかめてみせた」のである。「てみせる」ということは、相手に分からせるために故意に何かをするということである。つまり、この場面では、ルロイ修道士が、わたしに、死期が近づいていることを悟られたため、それを誤魔化すために、わざとしかめたふうに見せて、あたかもそんなおどけた真似をする余裕があるという素振りを見せつけたかったのではないだろうか。

かつて、わたしたちがいたずらを見つかったときにしたように、ルロイ修道士は少し赤くなって頭をかいた。

ルロイ修道士は、死期が近づいていることをわたしに悟られてしまい、まるでいたずらがばれてしまった子どものように、顔を赤らめて頭をかいたのである。つまり、わたしたちがいたずらを見つかった時に赤くなって頭をかいたのと同じように、ルロイも赤くなり頭をかいたのである。

かつての教え子たちに、病気で死期が近づいているを知られたくないが、最期にみんなと会っておきたいと思うルロイの親心と、「少し赤くなって頭をかいた」というルロイの子どものような一面が、この一文で見とれる。「少し赤くなって」というところから、嘘が見つかって動揺した様子がわかる。

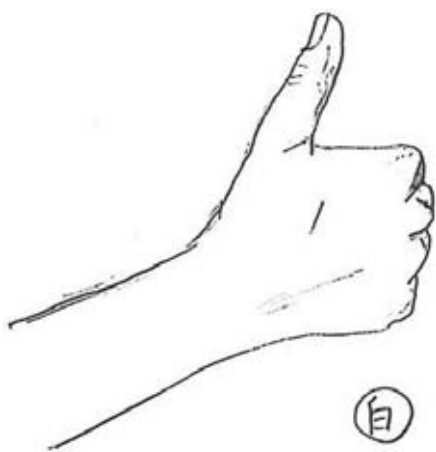
葬式でそのことを聞いたとき、わたしは知らぬ間に、両手の人差し指を交差させ、せわしく打ちつけていた。

「わたしは知らぬ間に」ということから、「わたし」が無意識のうち起こした行動であったことが読み取れる。無意識のうちということとは、一種の放心状態ともとれる。

「両手の人差し指を交差させ、せわしく打ちつけ」ることは、前に出てきたルロイ修道士の癖で、「おまえは悪い子だ。とどなっている」意味をあらわす。さらに、これを「せわしく」行っていることから、わたしの心中が決しておだやかではないことが強調される。

ルロイ修道士が、自身の死期を悟って、天使園のかつての教え子たちに、最期の挨拶をしてまわっていたということに対して、「わたし」は、病気という目に見えない敵への悔しさと、ルロイが最後の最後まで「わたし」たちに病気がったことを打ち明けなかった、親心に対してのいらだたしさゆえに、指を打ちつけていたのではないだろうか。

「わたし」は、ルロイとのレストランでの食事の時点で、うすうす、その死期が近づいていることに勘付きはしていたが、心のどこかそれを信じたくないと思い、それからの日々を過ごしていたのだろう。そのかすかな希望が、ルロイの葬式で崩れ去ってしまったときの、感情の爆発が、「知らぬ間に」「せわしく」「指を打ちつける」という行動に反映されているのであろう。



### 三 考察—作品に一貫性を持たせている『握手』という行為

『握手』という題からもわかるとおり、作品の中で何度も描かれている「握手」は、作品全体に一貫性を持たせ、また読み手を主題へ導く役割をもっている。

#### (一) 回想シーンへのきっかけとしての「握手」

「ルロイ修道士は大きな手を差し出してきた。その手を見て思わず顔をしかめたのは、光ヶ丘天使園の子供たちの間でささやかれていた「天使の十戒」を頭に浮かべたせいである。」

まず、最初の「握手」をきっかけとして、わたしの過去、そしてルロイ修道士の過去の回想がはじまる。この回想シーンにより、わたしの生い立ち、ルロイのかつての力強い握手を描き、そのあとに起こるルロイの”変化“への伏線となっている。

#### (二) ルロイ修道士の変化を印象付ける「握手」

「だが、顔をしかめる必要はなかった。それは実に穏やかな握手だった。」

この一文により、万力よりも力強かったルロイの握手に、変化が起きたことに読者は気付く。それは、かつて「彼の握手は万力よりも強」かったルロイの様子とは真逆で、「穏やかな握手」へと変化しているのである。ここでは「握手」を通して、ルロイの変化が描きだされているのである。



## (三) わたしの心情をあらわす「握手」

この作品に出てくる最後の「握手」は、わたしがルロイと別れを告げるときに、かつてルロイにされたように「握手」をするシーンである。このシーンと、わたしが真似たルロイの握手を並べてみると、

「わかりましたと答える代りに、わたしは右の親指を立て、それからルロイ修道士の手をとって、しっかりと握った。それでも足りずに、腕を上下に激しく振った。」



「風呂敷包みを抱えて園長室に入っていったわたしを、ルロイ修道士は机越しに握手で迎えて、「ただいまから、ここがあなたの家です。もう、なんの心配もいりませんよ。」と言ってくれたが、彼の握手は万力よりも強く、しかも腕を勢いよく上下させるものだから、こっちの肘が机の上に立ててあつた聖人伝にぶつかって、腕がしびれた。」

この二つの握手は、同じ行動をとった握手であるが、それぞれ、ここに込められた心情は正反対のものであるように感じる。

この作品では、一年前の上野公園でルロイと会ったという回想シーンの中で、さらに天使園の出来事を回想するといったように、時制が複雑に入り混じり、そのことにより、作品に立体感のようなものを持たせている。また、いたるところに伏線が隠されていて、繰り返し読むたびに読者は新たな気付きを得られる。その複雑な回想、伏線を束ねる役割を、「握手」が果たしていると考えられる。



## 神様（川上弘美）

上田 慎也、野田 千鶴、初田 美紀、細川 智樹

### 一 作者と作品について

川上弘美は一九五八年四月一日に東京都に生まれる。五歳から七歳までは日本を離れアメリカで過ごす。日本に帰国後の小学三年生のときに病気で学校を一学期間欠席し、このときに家で児童文学を読み始めたことがきっかけで読書家になることを決意する。雙葉中学校、雙葉高等学校を卒業後、お茶の水女子大学理学部生物学科に入学する。お茶の水女子大学ではS F研究会に所属し、大学在学中よりS F雑誌に短編を寄稿、編集を積極的に行う。大学卒業後は高等学校の生物科教員などを経て、一九九四年には「蛇を踏む」で芥川賞受賞。新人賞を受賞。一九九六年には「蛇を踏む」で芥川賞受賞。

川上弘美の作品は高等学校における現代文の教材に多く取り上げられており、「神様」に関しては筑摩書房の『精選国語総合』、明治書院の『新精選国語総合』に二〇〇三年から採録されている。「神様」の他にも小説では「春野」（東京書籍『精選国語総合』二〇〇七年以降）、「離さない」（大修館『現代文2改訂版』二〇〇五年以降）、「水かまきり」（東京書籍『新編現代文』二〇〇八年以降）、随想では「境目」（筑摩書房『精選国語総合改訂版現代文編』二〇〇三年以降）、「春の憂鬱」（数研出版『国語総合』二〇〇七年以降）が採録されている。

### 二 叙述について

くまにさそわれて散歩に出る。

「熊」ではなく「くま」という表記にしたのは、書き手がくまに対して、獣というよりも人間に接するに近い感覚を持っていることを示している。この物語に出てこない「熊」と登場する「くま」で区別する意図があると想像できる。

散歩というよりハイキングにといたほうがいいかもしれない。

散歩とは、「気晴らしや健康などのために、ぶらぶら歩くこと」である。一方、ハイキングは「自然を楽しみながら野山などを歩くこと」である。わたしがハイキングといったのは、普通の人よりも自然に親しみのあるくまと一緒に、弁当まで持って出掛けることが「散歩」とは言いづらいからだと推測できる。

くまであるから、やはりいろいろとまわりに対する配慮が必要なのだろう。



「やはり」という表現から、わたしは、くまが身の回りに気を配っているのだろう、とかねてから察していたことがわかる。

どうやら助役はわたしの父のまたいとこにあたるらしいのである。

「どうやら」とあることから、わたし自身は助役のことをよく知らず、繋がりが薄いことがわかる。よく知った人が助役であれば、「なんと」といった表現を使うはずである。

どうも引越しの挨拶の仕方といい、この喋り方といい、昔気質のくまらしいのであった。

「引越しの挨拶の仕方」とは、引越し蕎麦を同じ階の住人に振り舞い、葉書を渡して挨拶したことを示し、「喋り方」とは、「縁」などと言って人との付き合いを大事にする昔風の考えを表した話し方のことである。これらのことから、わたしはくまが昔気質だという印象をもった。

そのくまと、散歩のようなハイキングのようなことをしている。

先程は「ハイキングと言ったほうがいいかもしれない」としていたが、今はどちらとも言えないことから、現在の状況がハイキングの条件である「自然を楽しむ」ことをあまり満たせていないことがわかる。つまり、現在は自然の多いところを歩いていないのだ。

面と向かって尋ねるのも失礼である気がする。

わたしはくまに対して昔気質で真面目という印象を持っているため、安易に失礼な行動はとらない方がいいと思っっている。

「今のところ名はありませんし、僕しかくまがないのなら今後名を名乗る必要がないわけですね。呼びかけの言葉としては、貴方、が好きですが、ええ、漢字の貴方です」

わたしとの距離感を縮めようとするなら、名を名乗り、名前で呼んでもらうのが妥当である。しかしそうしなかったのは、普通、人間相手にしか使わない「貴方」という呼び方をくまが好んだからである。名前で呼ばれると、ペットや動物園の動物と変わりなく、「貴方」と呼ばれることで、くまは人間に近い存在であろうと推測できる。

どうもやはり大時代なくまである。

「大時代」とは、大仰で古めかしく、現代離れしている様のこと。「昔気質」から「大時代」と表現を変えたことで、より一層、くまが現代では珍しい性格の持ち主であることが表現されている。

どの車もわたしたちの手前でスピードを落とし、徐行しながら大きくよけていく。

運転手がくまに驚き、恐れているため、ぶつからないように慎重に運転している。

くまの足がアスファルトを踏む、かすかなしやりしやりという音だけが規則正しく響く。

音だけが際立って響いているため、ふたりの間に会話がないことが読み取れる。

「暑くないけれど長くアスファルトの道を歩くと少し疲れます。」

「アスファルトの道を」の部分強調する話し方のため、くまにとつてアスファルト以外の道なら長く歩くことは苦ではないと推測できる。

遠くに聞こえはじめた水の音がやがて高くなり、わたしたちは川原に到着した。

段々川原に近づいていったことを水の音の高さが変わることで表している。

「そうだ、よくわかったな。」

誰が見てもすぐに熊だとわかるのに「よくわかったな」と言っている。さつさと早くこの場から離れたいと思いつながら適当に返事をしていく。そのあとに急いで逃げたりしないのは、わたしと並んで歩いているから安易に人を襲わないだろうというわずかな安心感もあるからだと思われる。

「いやはや。」「しばらくしてからくまが言った。「小さい人は邪気がないですなあ。」

「いやはや」は落胆したときに発する言葉だが、この場面では、どうしていいかわからないくまの困惑の気持ちも読み取れる。また、「小さい人は」とあることから大人の態度を皮肉し言っていることがわかる。さらに、「しばらくしてから」とあるのでくまなりに言い方を考えたのだと思う。

くまの目にも水の中は人間と同じに見えるのであろうか。

「くまの目にも」とあるので人間とくまを区別していることが分かる。だが、くまから見た景色のことまで考えていることから、くまのことを意識し、知ろうとしている様子がうかがえる。

魚のひれが陽をうけてきらきら光る。

魚のひれに太陽の光が反射してきらきら光っている様子をそのまま描写している。しかしそれだけではなく、くまがくれたその魚に対してわたしが良いイメージを持ったことを暗に示している。

釣りをしている人たちがこちらを指して何か話している。くまはかなり得意そうだ。

「こちらを指して話している」とあるのでくまも釣りをしている人たちには気づいているはずである。くまが得意そうにしていることから、彼らの話している内容はくまにとって悪いことではないようだ。また、くまが獲った魚の様子から、彼らはくまに感心しており、そのような内容のことを話しているのだと予想できる。

取り出した布の包みの中からは、小さなナイフとまな板が出てきた。くまは器用にナイフを使って魚を開くと、これもかねて用意してあったらしい粗塩をぱっぱと振りかけ、広げた葉の上に魚を置いた。

小さなナイフとまな板、粗塩が予め用意されていたことから、くまは初めから川原で魚を獲り料理することを決めていたことが分かる。また、「器用に」ナイフを使って魚を開いているので料理は慣れている様子。

「もしよろしければオレンジの皮をいただけますか。」といい、受け取ると、私に背を向けて、急いで食べた。

一般的に熊は植物食に偏った雑食の動物である。そのため、普通、人が生で食べるのではないオレンジの皮を食べてもおかしくはない。「わたしに背を向けて」とあるのは、礼儀正しいくまが、オレンジの皮を食べるといふあまり行儀のいいとは思えない行為を見せるのを嫌がったため。

真面目に聞く。

なくても文脈が成り立つのにわざわざ書いているということは、くまが尋ねたことがそれだけ筆者にとって印象的だったのだと思われる。

目を覚ますと、木の影が長くなっており、横にくまが寝ていた。タオルはかけていない。

「影が長くなって」ということは陽が沈みかけ、そろそろ夕方になる頃。くまはタオルをかけていないのは持つてきたタオルは一枚で、その一枚はわたしに貸したからだと思える。

「いい散歩でした。」くまは305号室の前で、袋から鍵を取り出しながら言った。

簡潔に答えているが、くまの率直な感想であり、わたしと散歩に行けたことを心の底から嬉しく思っている。また、「鍵を取り出しながら」とあるため、帰る直前にふと心で思ったことが声に出たのだと考えられる。

「またこのような機会を持ちたいものですな。」

「このような機会」とは、わたしと共に行った散歩・ハイキングの様なものの実現を指す。「また」とあることから、それだけくまが楽しめたという思いを持っており、再度実現を望んでいることが分かる。「くですな」といった言い回しには大時代なくまらしさがにじみ出ている。

わたしも頷いた。

「も」とあることから、わたし自身くまと同じように、再び散歩のようなものが出来ることを望んでいることが分かる。そして、あえて「そうですね。」などの言葉で返答しなかったのは、わたしが心の底からくまの言葉に賛同していることを表していると考えられる。

それから、干し魚やそのほかの礼を言うと、くまは大きく手を振って、「とんでもない。」

と答えるのだった。

「大きく手を振って」とあるのは、礼を言われたことに対しての表現であり、あくまで自分（くま）が誘った散歩に来てもらったのだという、くまの相手に対する配慮が感じられる。

「とんでもない」とは

1. 思いもかけない
2. もつてのほかである
3. 滅相もない

ここでは、3の意味で使われており、相手からの礼に謙遜している。

「では。」

ここだけわたしの言葉に「」が付けられている。これは、冒頭から今まではくまとの心の距離があったため、「」なしで語り手メインの表現しかなされていなかった。しかし、散歩を終えて、わたしがくまに対して少なからず親しみを持ったという心情変化の表れに伴い、くまと面と向かって発した言葉が「」付きで書かれたのだろう。つまり、この「」を用いることで、小説内の空気を換える役目を果たしている。

次の言葉を待つてくまを見上げるが、もじもじして黙っている。ほんとうに大きなくまである。

次に出てくるお願いに対する遠慮や恥ずかしさのためにはつきりした態度がとれないでいる。「見上げる」や「本当に大きなくまある」との言葉から、初めに感じた印象に引き続き、くまと向き合うことで改めてくまのサイズを確認し強調している。

「こうして言葉にならない声を出すときや笑うときは、やはり本来の発声なのである。」

長い時間「人間らしい」くまと接していたため、くまが動物の「熊」という認識が薄れかけていたものの、「熊」の一面を備えていることを実感している。

「やはり」とあるのは、さまざまに考えてみてくまは「熊」だという結果は変わらなかったである。

「抱擁を交わしていただけですか。」

くまは言った。

「親しい人と別れるときの故郷の習慣なのです。もしお嫌ならもちろんいいのですが。」

先程くまが「もじもじ」することになった原因ともなる「頼みごと」である。くまは、一日ほどこそ一緒に過ごしてないわたしを「親しい人」と認識している。だからこそ、その別れを惜しみ故郷の習慣を用いることで、わたしの存在と一日の散歩の記憶をくまの心の一部として残しておきたいと思っている。しかし、「もしお嫌なら」とあるように、相手に自分の気持ち押し付けないように気遣う素振りもみせている。

わたしは承知した。

何の躊躇いもなくくまの頼みごとを受け入れたのは、くまの真摯な気持ちわたしに伝わってきたからであろう。そして、くまがわたしを「親しい人」と認識したように、わたしもくまを「親しいもの」として認識したといえる。

思ったよりもくまの体は冷たかった。

「思ったよりも」というのは、予想していたよりもということ。恒温動物で毛皮があるくまの体は、実際には冷たくはない。しかし、主人公の「私」は、もう少し熊の体が温かいものだと思っていたために出た言葉であるといえる。

「今日はほんとうに楽しかったです。遠くへ旅行して帰ってきたよう

な気持ちです。熊の神様のお恵みがあなたの上にも降り注ぎますように……」

「ほんとうに」は心底の意。「遠くへ旅行して帰ってきたかのような」は比喩表現であり、旅行してきたくらいワクワクして私との時間が満足いくものであったことを暗示している。また、ここでの「熊の神様のお恵み」とは、本文では明記されていないが、「この世界にはいろんな神様がいて、自然のなかで人間と共存して、恵みをあたえてくれる」という認識は古来より、日本書紀にもみられる。そのことから、くまは自分にとって「親しき人」である「私」にそのような恵みが降り注いでほしいと心から祈り、別れの言葉としたのであろう

熊の神とはどのようなものか、想像してみたが、見当がつかなかった。

「考えてみた」ではなく、「想像してみた」とあるのは、非現実であったために心の中で思い描く必要があった。「見当がつかない」とあるので、想像をめぐらしてみても全く分からなかったのである。

悪くない一日だった。

あえて、「良い一日」と言わないのは、最初にくまとの散歩に期待していなかったが、予想以上に良い散歩ができた感情からきている。

### 三 考察

#### (一) くまとわたしの距離感について

この作品を読むにあたり、くまとわたしの距離感の変化は大変重要である。

くまは最初、わたしに対して引越し蕎麦を振舞うなどしていたが、同じ階の住人にも振舞っていたため、わたしに対して特別な行為をしたわけではない。つまり、このときの二人の関係はただの同じ階に住む住人である。

蕎麦を受け渡す場面で、くまがわたしの遠縁の知り合いだとわかる。このとき、くまはわたしとのつながりを認識し、親近感を抱く。わたしは、遠縁のことも含めて、くまについて知らないことばかりだが、「昔気質のくまらしいのであった。」とあることから、くまの喋り方などから性格を知ろうとしていることがわかる。

その後、散歩中にわたしはくまの呼び方に困り、何と呼んだらいいか問う。するとくまは、「貴方」がいいと言う。普通、「貴方」という呼び名は人間相手にしか使わないことを考えると、くまはわたしに人間に近い存在として見てもらいたかったのではないかと思われる。つまり、くまはいち人間同士としてわたしと付き合うことを望んでいる。

他愛のない会話をしながら川原まで歩いていると、わたしとくまは男性二人子供一人の三人組と出会う。このとき、ふたりの男性はくまと顔を合わせようとしなかったり、立ち尽くすだけである。

一方でわたしはくまと二人で散歩のようなハイキングのようなことをしており、会話もしている。男性二人のくまに対する描写は、一般的な人がくまと出会ったらどうなるかを表現し、わたしの置かれている状況が特異であること、さらには二人の親密さを表している。

くまが魚を獲る場面で、わたしは「くまの目にも水の中は人間と同じに見えているのであろうか。」と考える。わたしがくまの目線に立って物事を考えていることから、わたし自身、くまに関心を持っていることがわかる。

くまが魚を獲り終えた後、持参のナイフやまな板を使って手際よく調理する。このとき、調理道具があらかじめ準備されていたことを考えると、くまはわたしに喜んでもらい、少しでも距離感を縮めていきたいと考えていたのではないかと推測できる。

別れの場面で初めて、わたしの台詞に「」が使われる。この表記の変化は、二人の間に明確な会話の成立があったことを示していると思われる。この時点で二人は会話を成立させるほど仲良くなっており、くまが最後に申し出た「親しい人と別れるときに行う抱擁」についてもわたしは了承している。最終的にわたしは、くまに「親しい人」と認識されても苦ではないほど親密になっている。

以上より、わたしとくまの関係は、この散歩のようなハイキングのようなことを通して親密になっていくことがわかる。

### (二) くまの表記について

物語の中で、「くま」の表現は平仮名の「くま」と漢字の「熊」の二種類がある。

「くま」はわたしと散歩に出掛けたくまのことであり、作品の中で、「くま」は、くまの名前のような役割を果たしている。

一方、「熊」は一般的な動物の熊を指しており、「熊の神」という表現は、「数多く存在する熊が崇める神様」という解釈になるため、「熊」という表記が妥当なのである。

また、子供が「お父さん、くまだよ。」「くまだよ。」「ねえねえくまだよ。」と「くま」の表記で発言していることから、作品中の表記上の区別として「くま」「熊」の使い分けがされているのだろうと推測できる。

### (三) 「神様」というタイトルについて

この作品のタイトルは「神様」であるが、「神様」という単語が出てくるのは物語の終盤、「熊の神様の恩恵が…」と「熊の神様とはどのようなものか」の二か所だけである。さらに、わたしは熊の神様について想像を巡らす「見当がつかなかった」としている。つまり、作品の中で熊の神様について詳細を語っておらず、読者に想像の余地をふんだんに残したまま完結しているのだ。

アイヌ民族の中で古くから伝わる儀式に、熊を祭るものがある。また、北欧神話にも熊が登場するなど、熊は神に近い聖なる動物であるという見方は根強い。

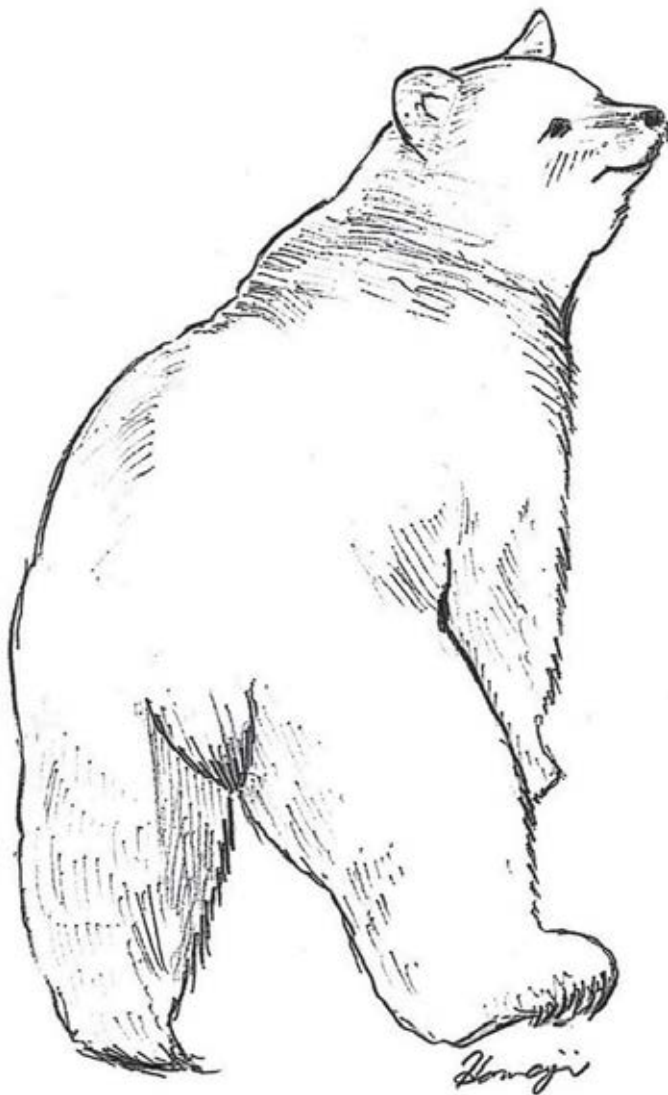
ここで、わたしの前に現れた「くま」が神様、あるいは神様の使いであると仮定すると、わたしは神様と一日を共に過ごしたことになる。神様はわたしに魚をくれたり、気を配ったりとあらゆる手でわたしに尽くしてくれる。その結果、神様と抱擁するまでに打ち解けるが、わたしは熊の神様という言葉については見当もつかない。これは、神様と共存しているように見える私たちが、神様の本質やその深部について理解が及んでいないことの隠喩ではないだろうか。

また、わたしはくま（神様）と打ち解けたのに対し、男性二人は打ち解けられなかったことは、神様についてそれぞれ感じ方が違うこと、つまりは宗教の多様性についても表現していると読み取ることもできる。これはあくまでもひとつの見解であり、読み手によって様々に「神様」を解釈できる。

作者・川上弘美氏はこの作品で数多くの賞を受賞している。このことから考えても、この作品はただ単純にわたしがくまと散歩するだけ



の話ではないとわかる。この作品を通じて考えられることは数多くあり、最大の謎はやはりタイトルを「神様」とした理由である。授業を展開していく中で、タイトルの謎について有意義な議論ができるよう、工夫していきたいものだ。



## 鏡（村上春樹）

田尻 愛里紗、佐々木 智美、村上 公崇、河合 遼太

## 一 作者と作品について

一九四九年一月二日、京都市伏見区に誕生。生まれてまもなく兵庫県西宮市に転居する。兵庫県立神戸高等学校卒業のち、早稲田大学第一文芸学部に入學する。二十二歳にして、大学の友人であった陽子氏と学生結婚をする。結婚に踏み切った理由は、同棲が嫌であったことと、自分だけの世界を持ちたいという願望があったことからだとする。二十五歳、国分寺にジャズ喫茶「ビーター・キャット」を開店する。その翌年に早稲田大学第一文芸学部を卒業する。在學七年。一九七九年、三十歳のときに、小説を書くことを思いつき、経営のかたわら執筆に没頭する。同年六月、『風の歌を聴け』で第二十二回群像新入文学賞を受賞、作家デビューを果たす。デビュー当初から平易で親しみやすい文章を心がけているという。リズムを重視しており、その背景にはかつてジャズ喫茶を経営していたことがあると語っている。独特な隠喩を巧みに操っていることも、村上春樹の作品の特徴とされている。主な著書に『ノルウェイの森』『ダンス・ダンス・ダンス』『スプラウトニクの恋人』などがある。

「鏡」は、『トレフル』一九八三年二月号に掲載され、短編小説集『カングルー日和』（平凡社）に収録された。一九九一年一月刊行の『村上春樹全作品 1979～1989』⑤（講談社）に収録される際、加筆がなされ

た。教科書に掲載されたものは、『村上春樹全作品 1979～1989』⑤による。

鏡という作品については、どうしてかは僕には想像もつかないのだが、国語の教科書に入れたという申し出が二件もあった。恥ずかしいのでお断りしたけれど、それはそれとして僕はどうも宿命的に鏡とか双子とかダブルとかにすぐく惹かれるみたいである。どうしてかはわからない。

（『村上春樹全作品 1979～1989』⑤付録「自作を語る」より）

## 二 叙述について

さつきからずっとみんなの体験談を聞いてるとね、そういったタイプの話にはいくつかのパターンがあるんじゃないかって気がするんだよ。

「さつきから」と言う言葉により、冒頭にも関わらず過去にあったことを示し、読者の興味を惹いている。「ずっと」と言うことで時間の長さを示し、少なくとも「みんな」が四、五人はいることを暗に示し



ている。「〜とね」や「〜だよ」と言う語尾により、改まった場ではなく、「みんな」がある程度知り合っている仲であることがわかる。「〜じゃないか」と言う言葉はこれを語っている人物が「みんな」に対してやや上から目線であることを思わせる。この考察に対し、上から目線ではないのではないかとという意見をいただいたが、後に語り手が自分の生きた時代の説明や聞き手に対して「十八、十九の頃なんてまったく怖いもの知らずだもんね。」と語っていることからこの語り手は周りの聞き手よりも年上であることがわかる。そのため上から目線であると書いたが、この文だけでは確かに語り手と読み手の年齢差などはわからないため、指摘のように推量でとることも出来る。「〜気がする」という言葉は語調を柔らかくし、意見を明晰していないような印象を与えるが、それにより却って反論を許さない雰囲気を作り出している。

まずひとつはこちらに生の世界があつて、あちらに死の世界があつて、それが何かの力によってどこかでクロスするっていうタイプの話だね。「まず」と言う言葉により、これからいくつか例示するうちのひとつを挙げるということを示している。「こちら」「あちら」と言う言葉により、この語り手は生と死を区別して考えていることがわかる。「〜だね」という文末は聞き手に対して教えているような印象を与える。また芝居じみた言い回しになる。

たとえば幽霊とか、そういうの。

前文の例を挙げ、聞き手側が理解しやすいようにしている。また、「そういうの」の前に読点を打っていることで聞き手の注目を集めている。

それからもうひとつは三次元的な常識を超えたある種の現象や能力が存在するっていうことだね。

「それから」と言う言葉はその前の話題に対して、これからさらに付け加えていくという効果を持つ。「三次元的な」というのは自分たちが実際に生きている現実のことを示しているが、次元の違う話をしてることを意識させるためにこのような言い方をしているのだと思われる。「ある種の現象や能力」というのは前の「常識を超えた」を受けており、自分たちでは理解できないような印象を持たせている。

で、そういったのを総合してみるとさ、みんなどちらか一方の分野だけを集中して経験しているような気がするんだな。

「で」と言う言葉はそこまでの話を一度まとめるという合図になる。「みんな」と冒頭と同じ言葉を使うことで語り手が話を聞いた結果そう感じているということを示している。「総合」「気がする」を使用することで自分の意見に対する反論を止めている。

つまりさ、幽霊を見ている人はしばしば幽霊は見るんだけど、虫の知らせを感じることはまずないみたいだし、虫の知らせをよく体験する人は幽霊ってみないんだね。

「つまりさ」と言う言葉は前文の説明を始める合図になる。「見ている」「しばしば」により一度だけ幽霊を見たのではなく、何度か、もしくは日常的に幽霊を見ることを示している。「みたい」と言うことで自分の経験からの推測ではなく、あくまで他人から聞いた話をまとめたということを表している。また「幽霊」や「虫の知らせ」を何度も書

いているのは「三次元的な常識を超えたもの」を読者が想像しやすくする効果を持つていると言える。更に、この文ではないが、「超能力」や「予知」も同じような効果を持つていると言える。

何となくそういう感じがするんだ。

自分の考えに確証はないが、自分がそう感じていることを示している。また確証はなくとも強く感じていることを示している。

それから、もちろんどちらの分野にも適さないって人もいる。

「もちろん」はそれ以降の言葉に対する反論を許さず、自分の意見を主張する効果を持つている。「適さない」とあることから、語り手はそれまでの類の話は資質によるものだと考えていることがわかる。

僕はもう三十何年生きているけれど、幽霊なんて一度も見たことがない。

「もう」とあることから、語り手は自分が生きてきた年月を長いと感じており、また、「幽霊なんて」と言っているため、幽霊の存在に対して否定的であることがわかる。

二人の友だちと一緒にエレベーターに乗っていて、彼らが幽霊を見ていながら、僕はまったく気づかなかつたというところもある。

前文を受けて、自分が幽霊や虫の知らせと言った特異な現象に関わったことがないことを更に強調している。またそういう幽霊などの特異な現象に対して否定的であることも示されている。

我々三人きりだった。

それまでの聞き手に対して語りかけるような口調から、ただ事実を述べるような口調に変化させることで三人以外には誰もいなかったことを訴えている。

それにその二人もわざわざ僕をかつぐようなタイプの友だちじゃないんだ。

「それに」とあることから前文までのエレベーターの中には自分たち三人しか乗っていないかったことを聞き手及び読者に意識させている。また「わざわざ」と言う言葉は語り手の友人二人が実際に幽霊を見ており、語り手をだまそうとする人物ではないことを認識させる手助けになっている。「ないんだ」という言葉で終わらせることでその話題をここで終わらせるといふ合図になる。

まあそれはそれですごく気味の悪い体験だったけど、それにしても僕が幽霊を見てないということに代わりはない。

「まあ」や「それはそれで」とあることからこれから話すことにそれほどほどの重要性を置いていないことがわかる。「それにしても」と言う言葉でこれから話す内容に対し、注目を集めている。

なんというか、実に散文的な人生だよな。

「なんというか」でそれまで自分が語った内容を整理し、まとめようとしていることがわかる。また、「散文的な人生」とあることから、語り手は幽霊や超能力を特異なものとして見ており、それに関わっていない自分は平凡なものであるとまとめている。「散文的」とは詩情に

乏しく面白味のない様子を指す。また、「だよな」は「だよ」や「なんだよな」などに対し、自分の主張だけでなく、相手への確認のような意味を持っている。

でも僕にも一度だけ、たったの一度だけ、心の底から怖いと思ったことがある。

「にも」とあることでそれまでに自分以外の人が自分と同じような体験をしたことを示している。また「一度だけ」を繰り返すことにより、自分が心の底から怖いと思ったのはその一回だけであること、またその一回が非常に印象に残っていることがわかる。「心の底から」とつけたことによりその体験が自分にとって恐怖するものであったことを印象付け、またそれまであまり強い語を使わなかったこともあり、その話に対して読者の興味を引いている。

口に出すことさえ怖かったんだ。

前文の「これまで誰にも話したことはない」の理由説明になっており、「さえ」とつけることでそれほど怖かったということにより印象付けている。また「話す」ではなく、「口に出す」となっていることから順序立てた話として誰かに話すことだけでなく、ふと自分で言うだけでもだめなのではないかという語り手の心情が読み取れ、その出来事がよほど語り手にとって恐怖を感じるものであったということがわかる。

口に出しちゃうとまた同じことが起こるんじゃないかって気がしてね、だからずっと黙ってた。

「口に出すと同じ事が起こる」というのは語り手の第六感にあたるのではないかというように思われるが、ここでの第六感はいくまで何となく感じているだけであって語り手の言う「虫の知らせ」とは別物に扱われている。ここでの「黙る」は「口に出す」に対する「黙っている」であるため、単に人に話さないというだけでなく、より厳密に秘密にしていたという意味合いを持つ。

でも今夜はみんなが順番にそれぞれ怖い体験談を聞かせてくれたわけだし、主人である僕が最後に何も話さずに場を閉じるというわけにもいかない。

「でも」とあり、この話はあくまで黙っていたいものだが、しぶしぶ話そうという意思が読み取れる。「それぞれ」とあることから、その場にいる「みんな」全員が怖い体験談を話し、またその内容が違ったものであることがわかる。「くれた」と言う言葉から語り手が「みんな」に対してある程度の感謝の気持ちを持っていることがわかる。「主人である僕」とあり、この「怖い体験談」を話し合う場を作った、もしくは作り出す際の中心役であることがわかる。また、「主人」を「しゅじん」ではなく、「ホスト」と読ませることにより、単にその家の持ち主ということだけでなく、その場を作り出した人、もしくはその一人であるということが読み取れる。「最後に」からもうすでにその場にいる語り手以外の人物は全員話し終えており、語り手がトリを務める立ち位置の人物であることがわかる。「場を閉じる」ということからこの話し合いは突発的に行われたものではなく、事前に取り決めがなされ、準備をした結果開かれたものであるということが読み取れる。「できない」ではなく「わけにはいかない」とあることから、語り手の能力不

足で行えないのではなく、あくまで「何も話さず場を閉じる」ことが道理に反しているためにできないということがわかる。

いや、いいよ、拍手はよしてくれよ。

前文とこの文の間に「拍手」という相手を歓迎する意味合いの行為がなされていることがわかり、この語り手が話すということがその場にいる他の人たちにとって実質的にせよ、形式的にせよ、歓迎されることであることがわかる。また拍手は自分一人以外に人がいない状態で行うことではないため、語り手以外のその他大勢がいることを読者に改めて認識させる効果がある。

そんな大した話でもないんだからさ。

「そんな」とあることからその場にいる聞き手が期待するほどの話ではないが、ある程度の価値を持つ話であることが分かる。文末に「さ」と入れることで語調を柔らかくし、今から自分のする話の価値をぼやかしている。

前にも言ったように幽霊も出てこないし、超能力もない。

「前にも言ったように」は、三段落前に言った事を指している。「〜ないし、〜もない」と書くことで、そういった常識を超えた経験が一切出てこないという事を示している。また、「前にも言ったように」は、正式な書き言葉であるのに対して、「〜し」は話し言葉。

僕が思っているほど怖い話じゃなくて、なんだということになっちゃうかもしれない。

「僕が思っているほど」は、二段落前より、「心の底から怖いと思」うほどだとわかる。「なんだ」は、「みんな」の落胆する気持ちを代弁する言葉。あまり期待をしないで欲しいという思いの表れ。

ま、それはそれでいい。

「ま」は、「まあ」と同じ意味で使われ、ここでは「とにかく」と同義。話し言葉の「ま」を使うことで主人公の話に臨場感を持たせている。また、「まあ」ではなく、「ま」と短くすることで、後を引きずらず、すっぱりと話を区切る印象を受ける。「それはそれでいい」から、「みんな」がどう思おうと良いという姿勢が伺える。

とにかく話すよ。

「とにかく」から、細かい事はおいておいて、他に移ろうとしている。前置きが長くなってしまったと感じたのか。

僕が高校を出たのは六〇年代末の例の一連の紛争の頃でね、なにかといえれば体制打破という時代だった。

「例の」から、口にはつきり出さずとも、共通の認識としてある事がわかる。また、口に出すことが憚られる、あまりよくない出来事であると推測できる。「僕が」と、主語を自分に限定し、「〜という時代だった」と言うことで、主人公は「みんな」よりも上の年齢であると推測できる。

僕もまあそんな波に呑み込まれた一人で、大学に進むことを拒否して、何年間か肉体労働をしながら日本中をさまよってたんだ。

この「まあ」は、少しためらいを含んでいる。言いつらい、あまり自慢できない過去か。また、「波に呑み込まれた一人」という表現から、紛争は大きな時代の流れだったことがわかる。「何年間か」ということは、数年後にはそういった生活をやめることになったのだろう。

そういうのが正しい生き方だと思ってた。

「〜ってた」から、今はそれが正しい生き方だと思っていないことがわかる。また、「正しい生き方」という表現から、当時の若い「僕」は、強い信念を持ってこの生き方を貫き通そうとしていたと思われる。

ま、若気のいたりというかね。

この「ま」は、総括する表現か。「若気のいたり」からは、もう主人公は若くないという事と、無分別だった昔の自分を懐かしむ気持ち、少し恥ずかしく思う気持ちが感じ取れる。「というかね」という語尾からも、言い方を迷う気恥ずかしさが感じられる。

それが正しかったとか間違っていたとかじゃなくて、もう一度人生をやりなおすとしても、たぶん同じことをやっているだろうね。

それほど今の「僕」にとってはかけがえのない時間だったという事か。「若気のいたり」と言いつつも、後悔はしていない様子が伺える。

そういうもんだよ。

詳しく説明することを放棄し、「みんな」に理解されなくてもいいという姿勢が伺える。これはそういった「僕」のような経験が「みんな」に無いからであり、「僕」はやはり「みんな」よりも数年かそれ以上上

であると想定できる。

新潟の小さな町のある中学校さ。

「新潟の」とわざわざ言うところから、主人公たちが居るのは新潟ではないとわかる。また、それに続く「小さな町」「ある中学校」から、誰からも注目されないような辺境の場所にある、小さな中学校という印象を受ける。

昼間は用務員室で寝かせてもらってさ、夜中になってから全校舎を二回チェックすればいいだけだからね。

「〜してさ、〜するだけ」というように、「さ」が入ることによって、一拍置いたようになる。口に出してみても「さ」で一拍置いた方が言いやすいことから、口調を整える意図か。また、一拍置くことによつて、「〜して、〜するだけ」というよりも、昼間と夜中の時間帯の区別が一文の中で明確化するのではないか。

夜中に一人きりというのは悪くなかったね。

「よかったね」ではなく、「悪くなかった」から、そこまでの喜びを見いだしていない。そこまで楽しくないが、人目を気にせず自由に過ごせてよかったと感じている。

いや、ちっとも怖くなんてないさ。

前文に誰からの質問もないのに、「いや」と否定しているのは、「みんな」の気持ちを先に汲みとって言った言葉だと推測できる。読者の気持ちの代弁もあるだろう。または文章中にない所で「みんな」との

やり取りがあつたと考えるべきか。

だって十八、十九の頃なんてまったく怖いもの知らずだもんね。

「くだもんね」から、「みんな」に同意を求めていると考えられる。

「みんな」は、十八、十九か、それより上。「放浪の二年めの秋」などで、「僕」は十九歳のころだと推測できる。

君たちは中学校の夜警なんてしたことないだろうから手順を一応説明しておく、見回りは午後の九時と午前の三時に一回ずつやるんだ。

「君たち」は、「中学校の夜警なんてしたことない」という言葉から、「僕」とは違った人生を歩む若者か。高校卒業後そのまま大学に入学生た者とも考えられる。

それに音楽室とか裁縫室とか美術室、それに職員室やら校長室なんかがある。

「くやらくなんかがある」という表現から、それ以外の倉庫や空き教室と言った施設も色々あるのだろうと推測できる。

それだけをざっと見回るわけさ。

「ざっと」と「ざっと」を比べてみると、「ざっと見回る」は、素早く見ている印象だが、「ざっと」は、全体を適当に見るという意味を含むように思う。それだけ「僕」にとっては楽な仕事だったという事だろう。

見回るチェック・ポイントは二十くらいあって、歩いてひとつひとつ

それを確かめ、ボールペンでOKサインを用紙に書き込むんだ。

「チェック・ポイント」「ボールペン」「OKサイン」などのカタカナが多く入っている。こうしたカタカナを多用することで、場の雰囲気や和らげる効果を狙ったのではないか。

職員室——OK、実験室——OK、てぐあいだね。

「——」を「OK」の前にいれることで、見回りのポイントに来て、確かめてから書き込んでいる様子が伺える。

もちろん用務員室に寝転んだままOK、OKって書きちゃうこともできる。

ここでは前文と違い、「——」が無いので、ささっと連続して書き込んでいる様子が想像できる。また、「寝転んだまま」という表現から、座ることもせず、我が家のようにくつろぎきっている様子が伺える。

相手が素人なら、たとえ向こうが日本刀の真剣持ってたって別に怖かかったさ。

前述の「だって十八、十九の頃なんてまったく怖いもの知らずだもんね。」と繋がる。「たとえくだって」から、どんな相手でもひるまない姿勢が伺える。また、この「くさ」は、自分の主張の念押し。本当に怖いもの知らずだったことを伝えようとしている。強い青年の印象を受ける。自慢げにもとれる。

その頃はね。

当時と現在の差があることがわかる。今はどうなのだろうと思わせる。



今なら一目散に逃げるよ、もちろん。

「一目散」から、なりふり構わず、すぐに逃げようとする行為を想像できる。若いころのどっしりと構えた印象とは対照的に、少し滑稽な印象を受ける。また、最後に「もちろん」を持つことで、「もちろん」が強調され、より怖いもの知らずさが薄れている。少しおどけた印象も受ける。

夕方ごろからやけに蚊が多くてね。

この一文に限ったことではないが、「〜ね」という語尾を用いるなど、聞き手を意識した、語りかけるような文章である。秋も半ばの十月であるにも関わらず、「やけに」蚊が多く、普段とは違う印象を「僕」は感じている。「やけに」は、度を越して程度がはなはましいという意味であるため、「僕」が蚊に対して不快感を抱いていることも推測できる。

それで一晩中ばたんばたんさ。

擬音語の動詞化。夜を通して仕切り戸があらわれて音をたてるほどに、外は風が強かったのだということが分かる。ただあらわれているだけでなく、ばたんばたんを音をたてているのだということ強調している。

僕は用務室に戻って目覚まし時計を三時にあわせてぐっすり眠った。

風は強く、むし暑くて蚊も多いが、それでも「ぐっすり」眠れるほどに、学校におかしな様子はなにもないことが分かる。直前の「変わったことはなにもない」や、その前の「何もかもちゃんとするべき場

所にあった」という一文からも同じことが分かり、この段落ではとにかく校内に異常がないことを説明している。

三時に時計のベルが鳴った時、僕はなんだかすごく変な気がした。

前段落冒頭の「九時に見回った時には何も起こらなかった。」と対比的である。「なんだか」「気がした」という部分から、自分でもよく分かっているが、何かしらの違和感を覚えている。

体が起きようとする僕の意志を押しとどめているような感じさ。

起きようとする「僕」と、その「体」が異なるものであるような表現をしている。

気のせいと言われればそれまでだけど、うまく体に馴染まない。

違和感を覚えているものの、何によるものなのかが分からないので、自分の考えに確信を持たずにいる。

風はますます強くなって、空気はますます湿っぽくなっていった。

「ますます」という表現を繰り返すことで強調し、少しずつ状況が変化していることが推測される。

戸はひどく混乱した人間が首を振ったり肯いたりするみたいな感じではたんばたん開いたり閉じたりしていた。

音をたてて揺れる戸に、不安を感じる「僕」の心情が表わされている？（肯定、否定が何を表わしているのか分からない。）

なんだか変なたとえだけども、その時は本当にそう感じたんだ。

「その時は」とあることから、この体験談を話している今は、当時とは違う考えを持っているのかもしれないと推測される。

ほんの時たま雲が切れても、すぐにまたまっ暗になってしまおう。

「くしても、……してしまおう」という口調から、そうなるのを厭っていることが推測される。ただ暗いのではなく、「まっ暗」であり、懐中電灯で照らしながら見回りをしている。

その夜はいつもより急ぎ足で廊下を歩いた。

九段落で「夜中に学校で一人きりというのは悪くなかった」「ちっとも怖くなんてないさ」と言っているの、暗い校内が怖いのではないのだから。しかし、懐中電灯で照らさなければならぬほどにまっ暗であり、歩きづらはずだが、「僕」はいつもより急ぎ足で用務員室へ戻ろうとしている。暗闇ではない別のものに不安、もしくは恐怖を感じている。

そしてそちらにぱっと懐中電灯の光を投げかけた。

前文で木刀を握りなおしたことや、何かが見えた方に向きななおったこと、そして明かりを「ぱっと」「投げかけた」という表現から、「何か」を恐れまいとする「僕」の様子が見て取れる。

つまり——鏡さ。

「——」というようにためること、体験談を聞いている人たちの注意を引いていることが分かる。題名にも用いられている「鏡」が、

ここで初めて出てくる。キーワードとなるだろう。

僕はほっとすると同時に馬鹿馬鹿しくなった。

暗闇で見えたなにかが鏡に映った自分の姿だと気付き、誰かがいたわけではないと安心した。前文の「木刀を握りなおして」という描写や、「幽霊なんて一度も見たことがない」と言っていることから、「僕」はおそらく幽霊がいるなどとは考えていない。怪奇現象が起こるということも予想してはいないと思われる。鏡に映った自分の姿に驚いたということが「馬鹿馬鹿しく」思えたのだろう。

それで鏡の前に立ったまま懐中電灯を下に置き、ポケットから煙草を出して火をつけた。

「馬鹿馬鹿しくなった」ことから、くだらないことで驚いてしまった自分をごまかすために、煙草を吸っている。学校の中で煙草を吸うのは見回りとしてふさわしい行為ではないように思えるが、ただ自分の姿をじっと見るよりは、片手間に煙草を吸う方が不自然でない。物語の中で煙草の存在が出てくるのはここが初めてである。

煙草を吸うためには一旦手が空く必要がある。なので、懐中電灯を下に置くのである。

窓からほんの少しだけ街灯の光が入ってきて、その光は鏡の中にも及んでいた。

一階の長い廊下は真っ暗であるとの記述がある。学校の玄関は暗闇の中にあり、「僕」も懐中電灯を使って歩いてはいたはずである。しかしここで唐突に「街灯の光」が差し込んでくる。街灯の光は、太陽や月

のように雲などにさえぎられたり、時間によって差し込む角度が変わったりはしない。よって、ここでいきなり光が差し込んでくるのは少し不自然であると思える。もしかすると、ここで差し込んでくる光も、これ以降の怪奇現象と一連のものなのかもしれない。

煙草を三回くらいふかしたあとで、急に奇妙なことに気付いた。

「急に」という言葉を持つてくることで、これから始まる奇妙なことについての興味を読者に持たせるようにしている。

つまり、鏡の中の像は僕じゃないんだ。

「つまり」という結論を導き出す語を使っているが、その後の文章は抽象的である。前文で引いた興味を持続させることに成功している。

いや、違うな、正確に言えばもちろんそれは僕なんだ。

「違うな」と口語で否定の言葉を入れることで、語りの臨場感を増すと共に、「僕」が説明に困っていること、説明しづらいと思っていることをうかがわせる。

でもその時ただひとつ僕に理解できたことは、相手が心の底から僕を憎んでいるってことだった。

「鏡の中の像は僕じゃない」と気付いた「僕」だが、なぜそう違うと感じたのかはうまく説明できずにいる。しかし、「でも」と逆接の接続詞で始めた一文だけは理解できたと言う。

まるでまっ暗な海に浮かんだ固い氷山のような憎しみだった。

比喩表現を使うことで、「憎しみ」のイメージをより鮮明なものにしている。村上春樹の作品は比喩表現が豊かであることが特徴の一つとして挙げられるが、この作品では全体的に装飾的な文章は控えめであり、特徴的な比喩表現はそれほど見られない。それによって、ここで使用される比喩表現がより印象的なものとなっている。

だが、なぜ鏡の中の「僕」が「僕」を憎んでいるのかは明らかにされない。理由が明らかにならないことで、より恐怖感がおおられる。

我々は同じようにお互いの姿を眺めていた。

「我々」とは「僕」と「鏡の中の像」のことを指す。「同じように」とあることから、この時点では鏡の中の像は、身体の動きとしてはまだ何も動き出していない。

「憎しみ」を理解したということは「僕」と「鏡の中の像」に表情などの違いがあったのではないかという指摘があったが、「憎しみ」を「僕」がどのような手段で感知したのかということについての描写は何もないため、両者の間で明確に表情が違ったのかどうかはあずかり知ることが出来ないのではないかと考える。

やがて奴の方の手が動き出した。

「やがて」とあることから、金縛りにあったように動かなかった時間がしばらくあったことが伺える。「奴」という呼び方から、鏡の中の像を「僕」が完全に『別の存在として認識し出したことがわかる。

右手の指先がゆっくりと顎に触れ、それから少しずつ、まるで虫みた

いに顔を這い上がっていた。

鏡の中の手がゆっくりと動いていく状況を細かく描写している。「まるで虫みたいに」や「這い上がって」という文から、得体のしれない気味の悪さや、自分の身体が自分ではないような感覚が印象付けられる。

気が付くと僕も同じことをしていた。

ゆっくりと手が動いていく状況を、「僕」は鏡の中の現象としてとらえていたのだということがわかる。この時点でようやく「僕」は、行動の支配権が自分ではなくあちら側に移ろうとしていることに気付く。

まるで僕の方が鏡の中の像であるみたいになさ。

「まるで」「みたいに」のここでの意味は、「ちょうど」や「あたかも」のような例示の副詞である。「僕」と「鏡の中の像」の立場が反転しつつあることを示している。

つまり奴の方が僕を支配しようとしていたんだね。

「僕の方が鏡の中の像であるみたいに」という前の文章をさらに言い換えている。「僕」という主体性を持った人間が、鏡の中の像と言う見た目だけが同じ、得体のしれないものにとつてかわられるという恐怖を感じている。

それにもかかわらず、現在の「僕」の語り口は、前文の「みたいにさ」と同様、「ね」で終わる軽いものである。この時の恐怖をもう気にはしていないように思える口調ではあるが、そうではないことが後々わかってくる。

僕はその時、最後の力を振り絞って大声を出した。

「最後の力」とあることから、「僕」がこの時点でほとんど「鏡の中の像」に支配されつつあったことがわかる。体の動きは支配されつつあったのであろう。ところで、「鏡」に映るものは外見と、身体の動きだけである。声は鏡には映らない。そこから、鏡の支配から逃れるためには声を出すしかなかったことが納得できる。

それから僕は鏡に向かって木刀を思い切り投げつけた。

右手は鏡の像が動かしていたことからわかる通り何も持っていない状況であつたため、おそらく木刀は左手に持つか左のわきにはさんだりなどしていたのではないか。木刀で鏡を叩き割るのではなく、「思い切り投げつけた」とあることから「僕」の焦りが伝わってくる。また、鏡と僕との間には距離があるのでないかということも考えられる。

僕は後も見ずに走って部屋に駆けこみ、ドアに鍵をかけて布団をかぶった。

「部屋」は用務員室のことであろう。「後も見ずに」という表現から「僕」がかなり怯えていたことがわかる。「鏡」から抜け出したもう一人の自分が追ってくるかもしれないという思いが拭えなかったのだろう。

プールの仕切り戸の音は夜明け前まで続いた。

「夜明け前まで続いた」ということがわかる、ということとは、「僕」が一晚中眠れなかったことを示している。

こういう話の結末ってわかると思うんだけど、もちろん鏡なんてはじめからなかったよ。

「こういう…わかると思うんだけど」という話し方から、わざとあつけなく、何でもないように話している様子が伺える。「こういう話」というのは、僕が冒頭に話していた「怖い話」の類型パターンでは大方このようなオチである、というニュアンスが含まれているのである。

「もちろん」と大前提があるように話している。ある種の「怖い話」の類型パターンの延長線上にあるものであるとして、不自然な鏡がそもそも存在しなかったのだということをすんなり納得させようとしている。

そんなのもともなかったんだよ。

短い文章でもう一度鏡がなかったことを繰り返している。「そんなの」という言い方には少々投げやりな響きが感じられる。

というわけで、僕は幽霊なんて見なかった。

「というわけで」という言い方で、「僕」がこの話を締めくくろうとしていることがわかる。しかし、「僕」はこの奇妙な話を披露してなお、「幽霊なんて見なかった」と主張している。「僕」は「鏡の中の像」を幽霊だとは認識していない。

僕が見たのは——ただの僕自身さ。

「——」を使うことで、「僕」の発言の最中に少し間があったような

臨場感を感じることが出来る。

でも僕はあの夜味わった恐怖だけはいまだに忘れることができないでいるんだ。

「恐怖だけ」の「だけ」という言葉で印象付けが行われている。

「いまだに忘れることができないでいる」という表現の「できないでいる」という部分、とりわけ「いる」という現在形を使用していることで、その時の恐怖がいまだに「僕」の中で消えないものであること、未だにその恐怖を抱えたままであることが伺える。

人間にとって、自分自身以上に怖いものがこの世にあるだろうか？

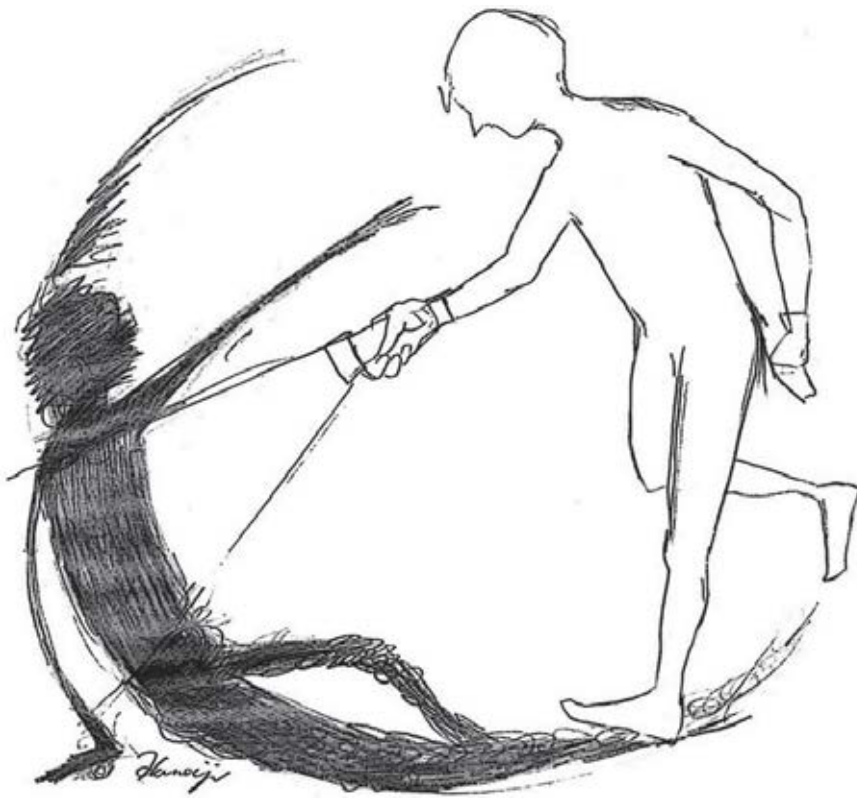
ね。

「僕」は幽霊を信じていない。超能力も持っていないと思っている。幽霊や不思議なものへの恐怖心は持っていない。「僕」にとつての恐怖は、「鏡」が突如現れたり、それが実際には存在していなかったことがわかったりするという奇妙な現象に対してのものではない。「鏡」の中に現れた自分自身、そしてそこから見取ってしまった自分自身への「憎しみ」に対しての恐怖なのである。

「あるだろうか」という文は、疑問形にはなっているが、「僕」の中ではすでに答えの出ているものである。「自分自身以上に怖いものはこの世にはない」という確信が「僕」にはあるのだ。会に参加する作中の人々に対してだけでなく、読者にも問いかけてきている。

ところで君たちはこの家に鏡が一枚もないことに気づいたかな。

「ところで」と「僕」は唐突に話題を変える。この「怖い体験談」



を語る会は「僕」の家で開催されている。「鏡」の体験により、自分自身の姿を映し出すことに恐怖を感じてしまった「僕」は、十年以上前から「鏡を見る」という行為そのものをすっぱりやめてしまったのである。あっさりとした、冗談めかした書き方ではあるが、それと相反するような「生活から鏡を排除する」という行為の特異さから、「僕」の感じた恐怖の大きさがうかがい知れる。

### 三 考察

#### (一) 特異な空間

この作品中で、「僕」が「心の底から怖い」体験をするのは、中学校の夜警をした時である。その時の「僕」のいた場所、時間、表現等に着目して、「僕」が自分自身に遭遇する際の、特異な空間を形作っているものについて考察する。

まず、プールの仕切り戸について。このプールの仕切り戸は、「僕」が午前三時の見回りに出る場面で「ひどく混乱した人間が首を振ったり肯(うなず)いたりするみたい」に、「すごく不規則」に「うん、うん、いや、うん、いや、いや、いや……」といったように開閉している。また、「僕」が自分自身に遭遇した後、夜が明けるのを待つまでもなく登場し、ここでも「うん、うん、いや、うん、いや、いや、いや……」と首を振っている。「すごく不規則」と前に記述しているにも関わらず、同じ「うん」「いや」という言葉の連続を取り入れたのには、特異な空間をその中に作り出すという意図があったからだと考える。実際、この文章は、「僕」が自分自身に会うという特異な体験をする前後に出てきている。また、このプールの仕切り戸の開閉する音は、その他の場面では「ばたんばたん」という表現がされており、この首を振る表現がされているのはこの二文だけである。

次に、街灯について。見回りの途中で鏡を発見した場面に「窓からほんの少しだけ街灯の光が入ってきて、その光は鏡の中にも及んでいた。」とある。しかし、この文章は前述にあることと全く矛盾している。前述に「もちろんまっ暗だよ。」「月が出ていれば少しは明かりが入っ

てくるけど、そうじゃなきゃまるで何も見えない。「もちろん月なんて出ていない」「ほんの時たま雲が切れても、すぐにまたまっ暗になってしまう。」とあるように、この日は台風が近く、懐中電灯が無ければ何も見えないくらいまっ暗だった。この暗さを五文にも渡って説明しているにもかかわらず、実は初めから街灯の光が鏡に及んでいたとは考えにくい。この街灯も、鏡と同様に、本当は無かったものとして捉えられるのではないか。特異な空間を作るものの一つだと言える。

最後に、場所について。「僕」が鏡の中の自分自身と遭遇する場所は玄関であり、出入口。つまり内と外の狭間である。夜警をした中学校という場も、教師と生徒、大人と子どもとの狭間にあり、場所は境界を意識して設定されたのではないかと考えられる。また、本作品中で重要なキーポイントとなる鏡も、「僕」と「僕以外の僕」が出会ったように、境界としての役割を果たすと考えられる。この物語が「鏡」という題になっていることも含め、この作品は境界を意識した、特異な空間を作り出すものになっていると言える。

## (二)鏡が映しだしていたもの

まず、ここでの「鏡」の映し出すものの意味について。「鏡」が、「それは僕がそうあるべきではない形での僕」を映し出していたという事から、この作品中の「鏡」は、反対の物を映し出すものとして捉えられているという見方がある。一方で、外見は「僕」と同じため、ただ反対のものを映し出すと決めるのはどうかという見方もある。両方の立場をとって、外見は同じだが、内側は相反するものとして映し出す役割を持つという見方もあった。「鏡」がどう映しているか、グループ内でも意見が分かれた。また、鏡を生と死の境界として、見えていた

のは死した自分だとする意見もあった。しかし我々は、「僕」が死へ恐怖を覚えたというよりも、取って代わられること、自己のアイデンティティを失うことに恐怖を覚えていたのではないかと考える。

では、「僕」の様子について振り返りながら考察していく。「僕」は鏡を見ながら煙草を三回ほどふかした後で、急に、「それは僕がそうあるべきではない形での僕なんだ。」と感じ、そして鏡の中の「僕」からは、「相手が心の底から僕を憎んでいるってこと」だけを理解することが出来た。その後、その鏡の中の「僕」に支配されそうになる。

まず、「そうあるべきではない形での僕」とは何か。作品中で、「僕」が生きたのは六〇年代末の学生運動による紛争の盛んな時代であり、「僕」もまたその波に呑み込まれ、「そういうのが正しい生き方だと思つた。」一人だったとある。実際に肉体労働をしながら日本中をさまよひ、正しいと思う生き方をしていることから、「僕」の考えるそうあるべき形の僕とは、体制を打破しようとする「僕」の現在の生き方であると推測できる。つまり、鏡に現れた「そうあるべきではない形での僕」とは、「現体制の中で生きようとする僕」ととらえられる。

では、「相手が心の底から僕を憎んでいる」と「僕」が感じたとはどういうことか。

ここで、「僕」が鏡の中に見たのは、「僕以外の僕」である。しかし、私たちは、実際その「僕以外の僕」が存在したという視点からではなく、「僕」が僕以外の人間に見えたのはなぜかという視点から考察した。私たちは、「僕」の自分自身に対する憎しみが、鏡の中の像となって表れたのではないかと考える。

「僕」が反体制派の動きをしていたのは、「波に呑み込まれた」とあるように、流行にのつた故の行動である。だから、「僕」は正しいと思

う生き方にむかって直進することに、心の奥底で少なからず疑問をもっていたはずだ。しかしその生き方を変えることもなく突き進んでいったがために、自分への疑問はふくらんでいった。そしてこの特異な空間の中で、ついにその自分に対する疑問が、自分の正反対の生き方をする鏡の中の「僕」となって、憎しみを持って眼前に現れたのではないか。

そして、その鏡の中の「僕」に支配されるという事は、現在の自分にとつてかわられるという事だ。それは自身のアイデンティティを失うという事を意味する。「僕」は、その恐怖から鏡を割って逃げ、三〇代になってからも、その体験が忘れられず、家に鏡を置けないのではないか。一方で、家の中が鏡だらけで、その中の自分と話しているのではないかというゾツとする意見も出た。

また、鏡を生と死の境界として、見えていたのは死した自分だとする意見もあった。しかし、冒頭で「何かの力によつてクロスするつていうタイプの話」を「僕」はしないと前置きしていることから、これは生死の境界ではないと考える。「僕」が死へ恐怖を覚えたというよりも、取つて代わられること、自己のアイデンティティを失うことに恐怖を覚えていたのではないか。



## みどりのゆび (吉本ばなな)

金 伽耶、松岡 柊人、宮本 あゆみ、吉田 美優、和田 睦美

一 作者と作品について

よしもとばなな(本名、吉本真秀子(まほこ))は東京都文京区出身。

文京区立第八中学校、東京都立板橋高等学校、日本大学芸術学部文芸学科卒。一九八七年、卒業制作の「ムーンライト・シヤドウ」が芸術学部長賞を受賞する。同年十一月には、第6回海燕新人文芸賞受賞作品の「キツチン」(八九年に映画化)でデビューし、『うたかた/サンクチュアリ』とともに芸術選奨新人賞を受賞する。また単行本『キツチン』に収録されている「ムーンライト・シヤドウ」で第十六回泉鏡花賞、『TUGUMI—つぐみ—』で第二回 山本周五郎賞を受賞する。父は批評家・詩人の吉本隆明。姉は漫画家のハルノ宵子。

「ばなな」というペンネームは、アルバイト先の喫茶店で見たバナナの赤く巨大な花に惹かれて付けたのだという。外国人にとってもこの「BANANA」という名前はなじみやすく、後に海外でも多くの読者を獲得する一因となる。

作家になろうと思ったのは五歳くらいの時、絵がうまい姉に影響されて漫画家になりたい時期もあったようだが、姉には勝てないと思い「それなら私は文章だ」と自然に思うようになったという。作品傾向としては、死について扱うものが多い。「みどりのゆび」は短編集「体は全部知っている(文藝春秋、二〇〇〇年)」に収録されている十三編

の中の一つ。

二 叙述について

育ちすぎて、気づいたら木のようになり、道に大きくはみ出し、さらに気色悪い形をした真つ赤な花まで咲かせていた。

「気づいたら」とあるので、アロエは家族から顧みられることなく放置されていたことがわかる。また「道に大きくはみ出し」の後の「さらに」に続く「気色悪い真つ赤な花」という記述から、語り手はアロエに対してあまり良い印象を持っていないように見受けられる。「さらに」「悪いことに」と省略してあるようにも思われる。

その時のことをよく覚えている。生まれ育った家の小さなテーブルを父と妹と私は囲んでいた。いつもの夕方が始まるうとしていた。

「その時」とは「家の前の道路にアロエがはみ出して困ったね」という話題が出た去年の冬のことである。



二日酔いの父がそこに突っ伏して寝ていることもあったし、中学生で初めて失恋した妹がワインをあおり、酔っ払っていすからずり落ちて頭を打ったこともあった。

「突っ伏して」とはテーブルの上で腕を曲げて枕のようにし、そこに頭をのせて寝ていたのだろうと想像される。さらに「寝ていた」ではなく「寝ている」という状態の継続を思わせる表現から、二日酔いの父がテーブルに突っ伏して寝る、ということは一度限りではなく度々あったと推察される。また、妹が「ワインをあおり」の「あおり」という表現から、初めての失恋で傷ついた妹がやけ酒としてワインを飲んだのだと思われる。妹は未成年にもかかわらずワインを飲んだのは、前述の二日酔いの父の姿を妹も目撃しており、それを真似たのかもしれない。

あの小さい四角が家族の象徴だった。

「小さい四角」とは生まれ育った家の小さなテーブルのことで、家族が集まって食事をしたりテレビを見たりする一家団欒の場所であったため、「家族の象徴」と表現したのである。

生臭く、生ぬるく、柔らかく温かい場所だった。

前文に続く文で、小さなテーブルについて述べられた文である。「生臭く」というのは二日酔いの父や妹が失恋の傷心からやけ酒としてワインをあおったりといったような、家族が羞恥を忘れありのままの感情や姿をむき出しにできる場所、ということであらわした表現だろう。

「生ぬるく、柔らかく温かい」というのは家族の一家団欒だけでなく、

前述の父や妹の一見だらしない場面にも小さなテーブルは寄り添っていてくれた。それを表現したものと考えられる。また、「生ぬるく」という表現は、必ずしもイメージではなく、客観的な表現をしている。病院というところは、玄関から入った瞬間には居心地が悪くもぞもぞして早く帰りたいと思うが、しばらくいると慣れる。

「病院というところは」という部分から、主人公は病院という場所を自分が生きている世界と差別化し、そして「居心地が悪くもぞもぞして早く帰りたい」と思うことから、病院の中の世界をよく思っていないことが分かる。

交差点で一斉に押し寄せてくる車たちや、永久に生きると思い込んでいく人々の声の大きさを、色の洪水に驚く。

「一斉に押し寄せてくる」とあり、主人公が病院から出て、車に対して強い圧迫感を感じていることが分かる。「永久に生きると思い込んでいる」ということから、この時目にした人々を死に近づいているおばあちゃんと差別化し、「思い込んでいる」から、人々を卑下している感じも読み取れる。また、「色の洪水に驚く」のは、なぜだろうか、おそらく、病院が白色を中心として構成されているため、いろんな色が目に入ってしまったためである。

生命の発散する濃いにおいはもう、あちらの世界ではただただ押し付けがましい毒々しいとがったにおいになってしまう。

死後の世界を「あちらの世界」と抽象的に表現とすることで、主人公はおばあちゃんが死ぬかもしれないことを受け止めきれない様子が

読み取れる。おいが「ただただ押し付けがましい」ということから、あちらの世界では生きていることが必要のないことであり、「もう」という表現は、強調を表している。さらに、そのおいが「毒々しいとがった」においになるといふ部分は、おいをこの話によく出てくる「植物」になぞらえて表現している。

太陽の下に出ると、弱っている人が発散する死のにおいは雪みたくにすぐに溶けてしまうが、そのかすかなにおいは麝香みたいに、遠くからでもかきわけることができる。

「太陽の下」とは人々が生きている世界である、生の世界を表す。「発散する」といふ部分から、ここでも人を植物になぞらえて表現していることが読み取れる。また、「雪みたくにすぐにとけてしまう」といふことから、生の世界では死のにおいはとても存在していけるものではないことが分かる。「死のにおい」とは、世間一般に対して異質なものである、という比喩である。

弱った同胞を人は恐怖する。

「同胞」とは生の世界にいる人のことを指す。その同じ世界に生きている人が弱っていることによって自分自身も死を感じてしまうため、恐怖を感じる。

どちらも慣れてしまえば同じことだといふのに。

「どちらも」といふのは、死の世界の中の生命の発するにおいと、生の世界の死のにおいを指す。「同じこと」といふのは、それらは慣れてしまえばなんら他と変わらない普通のことだといふことを表現して

いる。これは自分が病院という世界に慣れたという経験に根差した考えだと予想できる。また、最後の「のに」といふ表現から、主人公が、それぞれがおいを嫌っていることに対して共感できないことが読み取れる。

「うちの鉢植えたちは元気かしら？」

鉢植えに対して「元気」といふ表現を使っていることから、おばあちゃんが植物を命あるものとして、大切にしていたことが分かる。

それは妹が産まれるまでは両親が共働きでずっと預けられていたから、どうしようもないほどおばあちゃん子になってしまった私を感じた幻なのかもしれない。

「それ」とは、植物がおばあちゃんを狂おしく求めている場面を指す。幻なの「かもしれないなかった」ことから、主人公自身もはっきり分らないでいるが、おばあちゃんを愛するあまりに、植物たちの様子をおばあちゃんに結び付けて感じてしまっている。

打ち捨てられた気持ちの植物たちと私は似ていた。

自分が植物の世話をしなかったという過去から、祖母の気持ちが自分から離れていく様子が容易に感じることができたということが予想される。

いつも自分のことよりもおまえたちや私を気にしてくれた人が、やっと自分のことだけ考える時が来たんだよ、と私は水やりをしながら自分を納得させようとしていた。

「おまえたちや私」というのは、植物たちと自分を指していて、「おまえたち」という表現から、これは植物に話しかけながら水やりしている場面であることが分かるが、最後に「自分を納得させようとしていた」とあることから、植物に対して同情することでおばあちゃんの死の事実を紛らわせ、自分に言い聞かせるようにして、納得しようとしている。

人間がずっと繰り返してきた営みに参加している自分。

「人間がずっと参加してきた営み」とは、誰かが死ぬところを看取り、また自分が死んで看取られる側になっていくということである。

それを奇妙に遠くから眺める気持ち。

「それ」とは先述の営みのことを指す。おばあちゃんの死を当たり前の営みだと受け止めようとしている自分がいる一方で、その死を受け止めきれず、この営みを客観視している自分もいることを表している。また、どちらも名詞で文が終わっており、この2つの文は対になっていることが分かる。

ただし私はホステスではなく、父の経営しているバーのバーテンダーだったのだが、いくら説明しても祖母にとつては同じことのようにだった。

「ただし」から、私が読み手に対して誤解を生まないようにしている。「父の経営している」とあるのでバーはまだ経営中だということがわかる。また、「いくら」があることから、私がどれだけ懇切丁寧に祖母に説明してもわかってくれず、あきらめをにじませていることがうかがえる。

時間ができるとしてそういうことね。

時間ができたのは祖母である。「時間ができる」、つまりせわしない日常を送っていた生活から一変し、入院することで余裕ある時間ができたことを示す。また、「そういうこと」というのは時間に余裕ができたからこそ視点が変わり、これまで苦手であったシクラメンがいいものに見えてきた。つまり時間ができれば余裕ができ、余裕ができれば違った視点を持つことができるということである。

そうやって今まで嫌いだったすべてを好きになってしまつてから初めて行くところがあるのだろう、と思うのはせつなかった。

「そうやって」とは祖母は入院することで時間に余裕ができ、苦手だったシクラメンも好きになる、といった一連の流れのことである。「初めていくところ」とは死後の世界のことであり、「あるのだろう」とあるので祖母の死期を私が予想していることがわかる。また、「せつなかった」とあるのは、その前の祖母のセリフである、「あつちではシクラメンも育てられる自信がついたわ」、で祖母がすでに生きることをあきらめていることに対しての私の心情である。

祖母は夢うつつでまるでだれかのことを聞き取るかのように、少しずつ、そう言った。

「夢うつつ」とは、夢か現実かはっきりしない状態、であり、祖母の状態があまりよくないことを示している。「まるで」、とあるので違いがわからないほど何かに類似しているさまを示し、だれかのことばというのは祖母がつぶやいていることからアロエであると推測できる。

「少しずつ」の後に句点があることから私自身も祖母と同じように少しずつ話していることがわかる。

のどが詰まったようになって、うまく言葉が出なかった。

「のどが詰まったようになって」とは実際には何も詰まっていはいない。実際は言おうと思ったが、なんと表現したらいいかわからなかった。「うまく言葉が出なかった」とあるので私自身は言葉にしようと思っただけ結局は出せなかったということがわかる。

これは一人の人が生きてきたあたりまえの足跡で、悲しくも苦しくもない、どちらかと言えば幸せなものなのだという気がしてきた。

「これは」とは祖母の家に残るものや祖母のにおい、植物のことである。「一人」とはここでは祖母のことであり、「あたりまえの足跡」とは、これまで生きてきた、つまり人生を歩んできた証を意味し、その証とは祖母の家に残るものや祖母のにおい、植物たちのことである。「どちらかと言えば」とあるので、祖母の家に残るものたちが悲しくて苦しいものではなく、それとは反対の幸せなものであるということに私自身あまり納得がいかないことが読み取れる。「気がしてきた」とあるので、だんだんとそうなってきたことがわかる。

擬人化して「ありがとう」と言っていると言いたいところだったがそんなものではなくて、ただひたすら生きてあちこちに根をはり、葉を広げていた。

「擬人化して『ありがとう』と言っている」から、アロエが自分に對して感謝されるに値することを言いたいという自負の念がうかがえる。

る。ここでは、私にはまだ祖母が言及していた私の感性が育ち切っていないこともわかる。「そんなもの」、があることからよくある表現では表すことができず、また、一般化したくないといった私の思いが込められている。「ただひたすらに生きて」とあるのでアロエは植物であるからただ生き、「あちこちに根をはり」からアロエの生きることに對しての必死さが伝わってくる。

私はいつか死ぬ時、一人でも、小さな部屋でもいいから、あんなで清潔な部屋を遺したいと思った。

「あんな清潔な部屋」とは、死んだ祖母が遺した部屋のこと。祖母のようにたくさんの植物を遺したいという意味ではなく、自分の生きた証を遺したいという意味。

愛された植物たちが存在する、あの夜の祖母の部屋が私の頭を離れなかった。

「あの夜」とは私が祖母の部屋を訪れた夜のこと。「愛されている」ではなく「愛された」という言葉が使われているのは、祖母が死んだから。「頭を離れなかった」という表現から、忘れたくてもなかなか忘れられない様子がうかがえる。

冬のいやみなほどにオレンジな西日に激しく照らされて、私は目を細めてあたりを見回した。

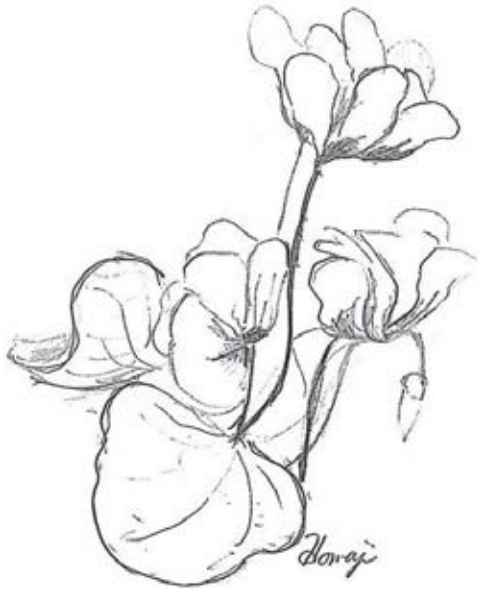
「いやみなほど」という言葉から、不快に感じているのではないかと予想できる。不快に感じるほど西日が照っていたのではないか。「照らされて」ということは、私に向かって日の光がさしている。「激しく」

や「目を細めて」という表現からそれほど西日が強く照っていることが考えられる。「見た」ではなく「見回した」という言葉が使われているので、私は首を動かしきよきよと周りを見たということ。

そうか、こうやってつながりができていくのか、もうアロエは私にとっでどこで見ても見るたびに温かいものや優しいものにつながっていく。

「そうか」という言葉から私はこのとき、その後には続く「こうやって……」の文の内容を理解し納得したと考えられる。「もう」という言葉によって、今までは「どこで見ても見るたびに温かいものや優しいものにつながっていく」存在ではなかったアロエが、今はそのような存在へと変わったということ。「温かいものや優しいもの」は〈生命・エネルギー〉もしくは〈祖母・家族〉と考えられる。〈生命・エネルギー〉と予測する理由は少し前の文でアロエが「生きている喜びを伝えようとしていた」と表記されているから。

〈祖母・家族〉と予測する理由は、祖母の言葉がきっかけでアロエを植え替えたことや、アロエから思い出される家族とのエピソードがあるから。



### 三 考察

#### (一) 物語の構成について

現在 冬

電車を降りて宿に向かう途中、私は誰かの気配を感じた。

過去 去年の冬・その時・その夕方

アロエの話が出る

祖母の末期癌が判明

ある日

祖母を見舞い、祖母の鉢植えに水をやる私

そんな生活にも慣れたある午後

祖母がシクラメンの話をする

春 その夕方

祖母がアロエの言葉を伝え、私はアロエを

植え替える。(祖母の死、葬式)

私は花屋になる勉強を始める。

現在 たまの休日(冬)

私を感じたのは、アロエの愛情だった。

#### (二) 物語のタイトルについて

植物を育てる力のことを「みどりのゆび」と言い、この物語の内容をストレートに表現しているように思う。元々は植物に特別な縁のなかった主人公が、祖母の死をきっかけに植物との関わりや植物に対する気持ちを自覚し、みどりのゆびの才能を自分のものにする。祖母の

もつ「みどりのゆび」が祖母の亡き後、主人公へと受け継がれているようにも思われる。それは主人公に将来の進むべき道を示し、人生をも変えてしまうものであった。

作者のペンネームがバナナという植物からとられているところから見ても、作者自身が植物に対して何か特別な感情をもっていて、それがこの作品に顕著に表れているのだと考えられる。それも花という華美な部分だけに関心があるわけではないということが、今回アロエというあまり愛想のない、むしろ少し毒々しい植物が取り上げられていることから考えられる。

余談であるが、植物を育てるのが苦手な人の手を「ちやいろのゆび」というらしい。

### (三) 私とアロエの関係について

主人公は自宅のアロエを放置していることを心苦しく思いながらも日常生活には支障なく暮らしていた。心のどこかでは妹のせいであって自分には責任のないことだと思っていたかもしれない。真っ赤な花を気色悪がったりと、到底アロエのことを大切にしていたようには思えない。しかし、植物を特別に愛していた祖母が亡くなったことで主人公は植物との関わり方を気付かされる。植物は動かないものである。人間が働きかけない限りは人間と植物は単一個体同士としてそれぞれの世界から切り離されてしまう。同じ舞台上に立つには人間側からの働きが必要不可欠なのであることに気付いた主人公はうちに帰ってすぐにアロエを掘り起し日のよく当たる場所に植え替えた。たったそれだけのことで、今まで心に引っかかっていた気持ちが一掃と溶けて軽くなり、アロエとの距離が急にと近くなった。自宅のアロエのみならず、

どこにいるアロエとも友達になることができた。アロエのことが好きになることができたのだ。それに加え、アロエから感謝の念やの愛情も感じるようになった。

物語のはじめと終わりでアロエとの関係は大きく変わった。喧嘩して、仲直りする、ということに近いものをこの作品の中で、人間と植物の間でも感じるこたかできた。

### (四) 主人公の人柄・家族について

主人公は素直で家族思いで、感受性が豊かであり、アロエの移植をめんどくさく思ったりと人並みな活動力に見えながらも、店を大きく改装させるなどという場面や一人で旅をするという場面では決断ができて行動力があるということが読み取れる。精神的なもの、植物にも感情があることを信じるなどということからは無邪気であるようにも思える。姉妹ともに結婚しているが、共に子供に関する描写がないことから二十代後半から三十代ではないかと推測される。

この物語のキーパーソンとなる祖母以外にも、家族に関する描写が度々あり、シーンにあたたかみを感じることから家族仲が非常によいように思う。特に妹は天真爛漫な性格で、この物語も妹がアロエを流りに乗って買ってきたことから始まったりと、主人公に様々な影響を与えている。父が二日酔いになったり、妹がワインで酔っぱらったりと、アルコールにはあまり強くない家系かもしれない。お酒に関する描写は日常生活の場面によりリアリティをもたらしていると考えられる。

祖母のお見舞いに毎日(祖母の意識がなくなっても)かわるがわる行く場面は、祖母が主人公の家族から本当に愛されていることが

わかる。それほど愛していた祖母が愛した植物を、主人公も同じように愛したのだろう。この物語は主人公の祖母への愛が、祖母の亡き後、植物へと移行していく様子を描いたものであると考えた。



## おわりに

山里 一成

今回行った教材研究では、作品の成立や作者についてはもちろん、一文から読み取れることを、各グループで深めていった。対象とした教材は誰もが知っているような教材から、記憶が少し曖昧な教材まで様々であったが、教材研究という視点から改めて文章を解釈していくと多くの発見が得られた。

その一つの要因として、意見交流が挙げられる。教材研究というと、個人で作品の分析を行うことが今まで多かったように思う。また校種によって、実際の教育現場において教材の研究を行う時間も確保することが難しくなっていくだろう。そんな中複数人で意見の交流を行い、教材の研究を行ったことは多くの気づきをもたらしてくれた。

例えば、『大造じいさんとがん』の「ガンの頭領らしい」「いかにも頭領らしい」という二ヶ所の「らしい」の解釈がそうだった。一文読みを進めていく上で「らしい」などの言葉は、当然検討の対象となるのだが、私一人で解釈を進めていただけでは「ふさわしい」という意味に解釈するにとどまってしまっていた。もちろん伝聞などの意味も検討してはいたのだが、私の主観が先行してしまい伝聞の可能性を示す根拠を探すことを怠ってしまったのである。そんなとき、グループのメンバーや授業の受講者との話し合いの中で、私自身から見るとより客観的な意見が出ることで多くの気づきにつながっていった。

ある作品を百人が読んで百人ともが同じ解釈になることはない。それは読み手の注目する点、性格や人生経験、あるいは必要と感ぜず読み飛ばしてしまうということも関係してくるだろう。様々な要因があり、それぞれの解釈が生まれていく。それは当然のことである。大切なのはそれぞれの意見を共有すること、自分の意見とは違う意見を聞くこと、そしてそれをおもしろいと思えることだと今回の教材研究を通じて感じた。

教育現場において、教科書に掲載されている文学作品に対して一つの共通した解釈を求めざるを得ないことが多々あるだろう。実際的な問題として、例えば、教員がテストを作成しなければならぬことや、受験、教えるように定められていることなど、挙げればきりがなし、解釈を統一せざるを得ない状況があることはもちろん分かる。

しかし、そんな中でもそれぞれの解釈を大切にしていきたい。解釈を統一するだけではなく、解釈の多様さに触れていく経験を大事にしたい。そのように本授業を通じて感じた。

子どもから大人まで誰しも、読書をするにはあるだろう。それが絵本であったり、SF小説であったり、文学作品であったり、はたまたライト



2013 年度担当者



2014 年度担当者

ノベルであるかもしれない。読書離れとは言われながらも、個人で好きな本を読むというのを多くの人間が楽しんでいるように思う。しかし、複数の人間が同じ作品を読む機会というのは学校教育現場以外の場所ではなかなかない。そんな貴重な時間に解釈の違いを楽しむ経験を是非してほしいと思う。

本書を手にとっていたいた方々が様々な解釈に触れ、楽しみ、また役立てていただけたことがあれば幸いである。最後に本書の発案者であり、全ての研究を監修してくださった寺田守先生に感謝の意を捧げる。

# 執筆者

浅野真実  
有川梨沙  
池田由季乃  
石川奈緒美  
伊藤直毅  
井上小夜  
井上智香  
居林奈津実  
今中祐希  
上田慎也  
梅本航希  
大橋実華  
岡崎隆祥  
尾白いくみ  
小幡千尋  
表里美  
梶隼一郎  
亀井華  
河合遼太  
河南希  
金伽耶

栗村隆太郎  
紺谷篤  
佐々木智美  
里見凌佑  
椎葉一勲  
島本明日香  
白井沙也加  
高宮奈巳  
田尻愛里紗  
寺田守  
鄧立新  
堂前汐里  
中口喬碩  
西岡笑美  
野田千鶴  
初田美紀  
波部真亜子  
濱地桃歌  
林禎之  
伴太貴  
船越香織

細川智樹  
松岡柊人  
宮川恵実子  
宮坂綾乃  
宮本あゆみ  
村上公崇  
元川姿耶子  
森本美乃里  
山内貴弘  
山里一成  
山根夕佳  
山本賢史  
吉川美那子  
吉田衣織  
吉田紘士  
吉田美優  
若杉良  
和田睦美  
渡部彬

文学教材の解釈 二〇一四

編著 寺田 守

発行 二〇一四年九月一日 初版 発行

発行者 寺田 守

発行所 京都教育大学国語教育研究会

〒六二一―八五二二 京都市伏見区深草藤森町一

京都教育大学教育学部 国語教育研究室

電話 〇七五―六四四―八二三五

メール [mterada@kyokyo-u.ac.jp](mailto:mterada@kyokyo-u.ac.jp)

印刷・製本 株式会社 田中プリント